

論考

特集 アーカイブの中の「在日」

歴史・記憶・文化・ナラティブの継承に向けて

アーカイブとしての「在日韓人歴史資料館」—その成り立ちと現在
場所の記憶が未来の光源となる—大阪コリアタウン歴史資料館の試み—
朝鮮大学校朝鮮問題研究センター付属在日朝鮮人関係資料室について
出会いの場を残し、発信する—ウトロ平和祈念館

伊地知紀子

李成市

伊地知紀子

金哲秀

全ウンフィ、孫片田晶

投稿論文

李良枝「除籍謄本」論——「ほんやり」とズレる「私」——

在日朝鮮舞踊にみられる「民族性」の所在

—『朝鮮民族舞踊基本』（1958）「剣舞」（コンム）に見る「伝統」的要素

文熙喆

朴景蘭

研究ノート

韓国文化関連科目の学習効果に関する一考察

—大学における PBL 型授業の実践報告を通して—

北京朝鮮族コミュニティの朝鮮族高齢者への福祉的機能

金智英

南玉瓊

資料紹介

サハリン朝鮮人とソヴィエト社会（1945 - 1991 年）（上）

ユリア・ディン著

宋恵媛・天野尚樹訳

キルチャビ

歴史認識の壁は厚く—植民地主義とヘイト・スピーチの根絶—

文光喜

書評

中戸祐夫・森類臣『北朝鮮の対外関係』

朴一『在日という病—生きづらさの当事者研究』

三村光弘

金友子

論考

特集 アーカイブの中の「在日」

歴史・記憶・文化・ナラティブの継承に向けて	伊地知紀子	1
アーカイブとしての「在日韓人歴史資料館」—その成り立ちと現在	李成市	3
場所の記憶が未来の光源となる—大阪コリアタウン歴史資料館の試み—	伊地知紀子	13
朝鮮大学校朝鮮問題研究センター付属在日朝鮮人関係資料室について	金哲秀	18
出会いの場を残し、発信する—ウトロ平和祈念館	全ウンフィ、孫片田晶	28

投稿論文

李良枝「除籍謄本」論——「ほんやり」とズレる「私」——	文熙喆	41
在日朝鮮舞踊にみられる「民族性」の所在 —『朝鮮民族舞踊基本』（1958）「剣舞」（コンム）に見る「伝統」的要素	朴景蘭	55

研究ノート

韓国文化関連科目の学習効果に関する一考察 —大学におけるPBL型授業の実践報告を通して—	金智英	75
北京朝鮮族コミュニティの朝鮮族高齢者への福祉的機能	南玉瓊	88

資料紹介

サハリン朝鮮人とソヴィエト社会（1945－1991年）（上）	ユリア・ディン著 宋恵媛・天野尚樹訳	105
---	--------------------	-----

キルチャビ

歴史認識の壁は厚く—植民地主義とヘイト・スピーチの根絶—	文光喜	122
------------------------------------	-----	-----

書評

中戸祐夫・森類臣編著『北朝鮮の対外関係』	三村光弘	128
朴一『在日という病—生きづらさの当事者研究』	金友子	131
国際高麗学会日本支部 2023 年度学会活動		135
投稿規定・執筆規定		138
編集後記		142

特集

歴史・記憶・文化・ナラティブの継承に向けて



伊地知紀子

本特集は、国際高麗学会日本支部 2023 年度大会でのシンポジウムの報告をベースに、各登壇者から寄稿いただいた。本シンポジウムを企画した背景には、次のような問いがある。近年、英文ジャーナルや国際学会では、ローマ字で「Zainichi」と表記するだけで「在日コリアン」を意味する。在日外国人という表現からすれば、日本には多様な外国国籍の住民がいるが、漢字語で日本において「在日」といえば、いつの間にか「在日コリアン」を指すようになってきている。英語表記の現状は、その流れをそのまま継承しているようにみえる。では、そうであるとして『『在日』とは誰を指すのか?』という問いに対しては、もはや国籍ではなく「コリアン・ルーツ」を有し、かつ自身がアイデンティファイすることが当人であることを示すという認識が次第に広がっているといってもよいだろう。こうしたなか、今回のシンポジウムを開催することにした。それは、在日コリアンに該当する人の属性が時代を経るなかで多様化している現状にあって、自身につながる歴史に触れるにあたり、改めて「在日コリアン史」を捉え直す時期なのではないかという問いが生じたからである。

21 世紀に入り、日本国内や韓国の多数の地域で在日コリアン資料館が開設されている。現在、日本国内には在日コリアンに関する資料館が各地に存在する。2005 年に在日韓人歴史資料館、2006 年に渡来人歴史館、2022 年にウトロ平和祈念館が開館し、2023 年には大阪コリアタウン歴史資料館が開館した。また、大学内に設置された研究機関お

よび資料室として、日本では朝鮮大学校に在日朝鮮人関係資料室（2012 年）、大阪市立大学に大阪コリアン研究プラットフォーム（2020 年）、韓国では済州大学校に在日済州人センター（2011 年）、青巖大学校には在日コリアン研究所（2013 年）が開設されている。

在日コリアンの歴史を、植民地時期を起点とするならば、おおよそ 1 世紀が過ぎたこの時期になぜ、開設に至ったのか、また、何を設立の目的とし、どのような内容を素材として収集し、分類・選定して展示し、何を見せようとしているのか。これらの問いを相互に検証することで、アーカイブの中の「在日」の位置づけを多角的に検討し、在日コリアンの歴史・記憶・文化・ナラティブの次世代への継承可能性について展望したい。本シンポジウムのために参集くださった報告者が関わっている資料館・記念館は、いずれも在日コリアンに関する場であり、対象とする内容からして非常に動態的（ダイナミック）にならざるを得ない側面を有している。なぜなら、「過去の遺物」展示ではなく（もちろん一部そうした展示も含むだろうが）、「現在進行形」の存在を対象とするからである。

本シンポジウム「アーカイブの中の『在日』」では、在日韓人歴史資料館・館長の李成市さん、朝鮮大学校朝鮮問題研究センター・センター長の金哲秀さん、ウトロ平和祈念館展示運営部会の全ウソフィさんと孫片田晶さん、大阪コリアタウン歴史資料館・副館長の私が登壇し、各施設の設立経

緯、収集資料、展示方法、現在の課題についての報告がなされた。韓国・青巖大學校 在日コリアン研究所・所長の金仁徳さん、大阪コリアタウン歴史資料館・副理事長の朴一さんにコメンテーターをお願いした。日本各地で設立された各施設の関係者が一同に会し、個々が抱える課題や展望を相

互参照しながら経験を共有し、歴史・記憶・文化・ナラティブの次世代について今後のあり様を共に模索する場の開催は、これまでになかった試みである。当日のシンポジウムでの議論を踏まえた論考については、本特集とした。ご一読いただければ幸いである。

特集

アーカイブとしての 「在日韓人歴史資料館」 —その成り立ちと現在



李成市

はじめに

このたびのシンポジウム「アーカイブの中の『在日』」が開催されるに至った直接の契機は、米国のドラマ『パチンコ』の国際的な反響によるものであった。主催者のシンポジウム開催目的の中で表明されているとおり、米国から発信されたドラマが国際的に話題になり、英語圏を中心に、世界的な広がりの中で在日コリアンの歴史や文化が注目されるようになったことは軽視できない。日本の学術では何事においても国際的な契機の重要性は言うまでもないことであるが、「在日」の社会や文化についても例外でないことを再確認した¹⁾。

ひるがえってみるに、日本国内や韓国の複数の地域で在日コリアンのアーカイブ（資料の収集、保存、管理、展示）を目的として資料館が開設されたのは、2000年代に入ってからである。在日韓人歴史資料館でも、その歴史の起点を、実質的に日本による朝鮮支配政策が顕著になる乙巳条約に求めている。そのような時期から、およそ1世紀を経て、歴史資料館の開設がめざされ、開館に至ったという経緯があった。このたびのシンポジウムを契機に、改めて在日コリアンのアーカイブという文脈の中で、在日韓人歴史資料館開設の経緯や、その意義を主体的に問い直したいと考えている。

また、このたびのシンポジウムでは、その設立の目的は何か、資料の収集、保存のみならず、それらの何を展示し、何を見せたいのかという問題

を含めて、設立過程を公開し、公論化することを目的としていた。さらに、こうした問いを相互に検証することで、アーカイブの中に位置づけられる「在日」を多角的に検討し、在日コリアンの歴史・記憶・文化・ナラティブを、何をどのように次世代へ継承していくかについて展望していくという主題は、時宜にかなったことと受け止めている。

本稿では、在日韓人歴史資料館を事例に、シンポジウムにおける報告内容に基づいて、このたびの特集の主題に可能な限り応答したいと考えている。

一 開設に至る経緯

在日韓人歴史資料館の開設に至る経緯については、その設立のために主導的に活躍された姜徳相氏（初代館長）の文書が残されている²⁾。いわば資料館設立のマニフェストとも言うべき文書に記された開設の趣旨を要約すれば、おおよそ以下の5点に整理できる。

1. 在日の歴史の節目となる時期を、乙巳条約の締結を一つの歴史的起点とすれば、在日100年の歴史となり、解放後、60年という機会に、「汎在日同胞的な歴史資料館」の開設をめざす。
2. 二世から三世、四世の世代と在日のアイデン

ティティの大きな変化に応じて、在日の歴史を直視し、自らの歴史認識を深め、今後の在日同胞が生きていく心の糧とし希望のもてる将来を展望しなければならない。

3. 在日同胞社会の歴史認識を啓発してくれる総合的な施設が不在のなかにあつて、在日の歴史、社会、文化の全般にわたる資料（文献・映像・生活用具等々）を収集し、体系的に整理・編纂して、それを保存、公開、展示することで、在日の歴史を広く知らしめ、共に考える場が求められる。
4. 散逸を免れた資料を収集し、その意思を継承しつつ、それを発展させて歴史資料館を開設することによって、若い世代に遺産として残したい。
5. 資料館は、在日するすべての人々（「汎在日的」）と、日本人・アジア各地の人々との相互理解をはかるために役立つことを願う。

これらの5点について若干の補足をしてみたい。第一点目に、なぜ2005年の開設がめざされたかについては、在日コリアンの形成史の起点である乙巳条約（1905年）から100年、解放後60年を迎える2005年を節目として、設立がめざされたところ。ただし、その開設時期をめぐって、設立に主導的な役割を果たした姜徳相氏の公的な文書での言明があるものの、それ以前より、姜徳相氏と近い関係にあった在日朝鮮人研究の第一人者・朴慶植氏による在日同胞史資料館設立の議論があったことが伝えられている³⁾。また一方で、シンポジウム当日には朴一氏自身による在日本大韓民国民団中央本部（民団）への働きかけがあったとの逸話が同氏によって披露されるなど、資料館の開設の実現に至る過程は曖昧なところも残されている。具体的な史料⁴⁾に基づいて今後明らかにする必要がある。

いずれにしても、『(仮) 在日コリアン歴史資料館 調査委員会ニュース』が刊行される以前より数年の準備期間があり、目標とする2005年11月の開設がめざされたのである。

第二点目に、設立の時期にも関わることであるが、この当時に在日社会における二世から三世、四世代への世代交代の進行に伴う、在日のアイデンティティの大きな変化が強く意識されている。こうした在日の歴史を直視して「自らの歴史認識を深め、今後の在日同胞が生きていく心の糧とし希望のもてる将来を展望」することが如何に切実であるかが強調されている。

第三点目に、これまで在日社会にアーカイブが不在であった点が喚起され、在日の歴史、社会、文化の全般にわたる資料を収集し体系的に整理・編纂して、それを保存、公開、展示することによって、在日の歴史を啓発し広く知らしめる場の必要性が訴えかけられている。

第四点目に、第二点目にもかかわるが、資料館は、次世代に遺産として継承するに足るものとしなければならないと強調されていたことである。

第五点目に、資料館は、政治的な立場を越えて全ての在日（「汎在日同胞」）⁵⁾の人々は勿論のこと、さらに、「日本人・アジア各地の人々との相互理解をはかるために役立つ」ことがめざされている。資料館の利用者は、在日社会を前提にしながらも、広く日本社会、国際社会にも開かれたものにしたいという大きな目標が設定されていたことを伺い知ることができる。

以上の設立の経緯は、あくまでも、資料館開設に主導的な役割を果たした姜徳相氏の調査委員会委員長としての見解に基づいている。いずれにしても、『(仮) 在日コリアン歴史資料館 調査委員会ニュース』が刊行される以前より、数年の準備期間があり⁶⁾、2005年11月の開設を迎えることができた。

本稿の課題の視点から最も重要なことは、在日韓人歴史資料館は、設立の目的を、「今後の在日同胞が生きていく心の糧とし、希望のもてる将来を展望」するために、「日本への渡航事情、在日の生活状況、労働運動、民族運動、文化芸術運動など全般にわたる資料（文献・映像・生活用具等々）を収集し、体系的に整理・編纂し、それを保存、公開、展示して、在日同胞の正しい歴史を広く知ら

しめ、ともに考える場」を設けることが提唱されていたという事実である。準備段階より、在日コリアンのアーカイブ（資料の収集、保存、管理、展示）の設立が明確に目指されていたのである。

二 開館後の歩み

資料館は2025年11月をもって開設20周年を迎える。この間、資料館がめざしてきたのは、設立のマニフェストに記されていたとおり、在日の歴史・文化の全般にわたる資料を収集し、体系的に整理・編纂し、それを保存、公開、展示していくことにあった。

館内の組織としては、資料館の予算や運営全般を管掌する理事会が設けられ、そのもとに、資料館の日常業務は、館長、事務長、職員若干名で運営されてきた（その後、事務長職は置かず、職員の改廃があったが、基本的な組織構成に大きな変化はない）。

常設展示は、準部段階で収集された資料に基づき、調査委員会の議論を経て、20のテーマに分けて展示された。具体的な内容は次節で述べるが、その展示内容を解説した冊子『100年のあかし』（2005年11月）を開館と同時に刊行した。その後、同冊子は、2010年11月と2020年7月に2回増補、改訂された（全28頁）。また、韓国語版（「100년의 역사」2020年7月、全28頁）、英語版（「100 Years of History」2019年4月、全28頁）を各々刊行した。これは資料館への来館者の要望に基づくものであり、この間の資料館が多様な文化的な背景をもつ人々にも待望されてきたあかしでもある。

2005年の開館に伴い展示資料の寄贈等もあって増加し、常設展示が充実するにつれて、2007年6月には常設展示室リニューアルオープンをはたした。これを契機に、地方にける展示が理事会で提案され、2008年9月に開設3周年記念『大阪特別展』（大阪人権博物館）を開催し、翌年（2009年12月）には、開設4周年記念『名古屋特別展』（名古屋博物館）を開催した。さらに、2010年4月

には、開設5周年記念『福岡特別展』（福岡市博物館）の開催を実現させた。

資料館のリニューアルと地方での展示の開催を契機に、資料館の展示内容を広く書籍として刊行することが提起され、展示図録『写真で見える在日コリアンの100年』（明石書店、2008年12月）を刊行した。ここには、資料館の展示に即した100年の歴史を語るとともに、「展示品」等の写真700点を収めている。図録の反響は大きく、2010年12月には、2刷を刊行することになった。

このような当館における新たな展開は、韓国における海外同胞に対する認識の高まりもあって、2012年8月には、開設7周年記念「ソウル特別展 列島のなかのアリラン」（ソウル歴史博物館企画展示室）がソウル歴史博物館と東北アジア歴史財団との共催で開催された（2012年8月10日～10月7日）。韓国での展示の反響は大きくメディアにも大きく取り上げられ、関連シンポジウムも盛大に開催された。

2017年3月に、資料館の設立に多大な役割を果たしてこられた姜徳相館長が療養のため退任し、その後任に李成市が就任して今日に至っている。

三 展示の概要

1) 常設展示

常設展示は、大きくは、＜植民地期＞、＜解放後＞、＜生活・文化＞の三つの展示構成からなっている。また、二つの時代の展示は、在日の歴史の変遷を可視化するために、各時代を特徴づける局面を18のテーマに分けて通史的に展示している。最後に、在日の生活・文化を「受け継がれる風俗」「家族の肖像」を第3室で展示している。それを示せば下記のとおりである。

第1展示室 「1905年以降の在日の歴史」

・日本への渡航／・2・8独立宣言／・関東大震災の受難／・社会・労働・独立運動／・強制連行／・皇国臣民化教育の狂気

第2展示室 「解放後の在日の歴史」

・解放の喜び・帰国／・民族の誇りをもって／・
奪われた言葉を子どもたちに／・管理と弾圧／・
分断と戦争／・北帰行／・差別撤廃への叫び／・
人差し指の自由を／・活躍する人々

第3展示室 「在日の生活と文化」

・生き抜くために／・解放前の暮らし／・失業と
貧困、どん底の暮らし／・受け継がれる風俗／・
家族の肖像

上記の展示は、同時代の遺品を中心に、写真、図
版と共にパネル解説を付して、各時代の様相に対
する理解を深められるように努めている。これら
の展示については、当館のホームページにおいて
「資料館ガイド」、「展示品解説」で各々掲げており、
それらは、日本語、韓国語、英語の各国語で閲覧
できるようになっている。

2) 企画展示

在日韓人歴史資料館では、常設展示を補完すべ
く、企画展示室において時宜にかなった企画展を
これまで21回開催してきた。それらの展示の理解
を深めるために、随時、主題に即した関連セミナー
あるいは、シンポジウム、講演会等を開催してき
た（それらの開催を伴った展示には※を付した）。
具体的な内容はホームページにポスターや内容を
公開している。第1回から第19回までの企画展を
示せば下記のとおりである。

第1回 「それは在日留学生からはじまった－
2・8宣言から3・1独立運動へ」

2006年2月7日～3月7日 ※

第2回 「1世たちの戦争－韓国・朝鮮人元BC
級戦犯者問題－」

2007年5月27日～12月27日 ※

第3回 連続写真展 「在日・日本で老いて」

2008年1月5日～6月28日 ※

第4回 「芥川賞候補4回・金鶴泳を知っていま
すか」2008年7月3日～9月27日（協力：
群馬県立土屋文明記念文学館）※

第5回 「差別と闘った詩人、画家、評論家・呉

林俊展」2009年9月3日～12月3日 ※

第6回 「1円訴訟－名前はチョエ チャン
ホァ・人権獲得運動と崔昌華牧師」

2010年5月11日～8月21日 ※

第7回 「関東大震災時の朝鮮人虐殺と国家・民
衆」2010年9月1日～12月25日 ※

第8回 「林えいだい写真展・軍艦島－朝鮮人強
制連行の記憶」2011年10月4日～12月24日
（協力：林えいだい）※

第9回 「関東大震災から90年、清算されない
過去－写真・絵・本からみる朝鮮人虐殺」

2013年8月31日～12月28日 ※

第10回 「置き去りされた朝鮮人『慰安婦』」

2014年3月1日～3月29日 ※

第11回 「安世鴻写真展」重重－中国に残され
た朝鮮人日本軍「慰安婦」

2014年5月10日～6月14日 ※

開館10周年記念企画展「呉炳学 望百記念展－
海峡をつなぐ民族の色」

2015年1月13日～7月18日 ※

第12回 写真家 裴昭・舞踊家 金順子『慰霊の
旅・鎮魂の舞』2015年8月1日～10月3日
※

開館10周年記念企画展「寄贈品展－ガラクタの
なかの宝」2015年10月～2016年4月末

第13回 <呉徳洙監督をしのぶ写真展> 映画
の舞台裏で 2016年7月2日～8月6日 ※

第14回 「日本における韓国独立運動と日本
人」2016年9月29日～10月28日（共同主
催：独立記念館）※

第15回 「趙根在が撮ったハンセン病の同胞た
ち」2016年11月29日～2017年2月25日
（協力：国立ハンセン病資料館）※

第16回 「朴慶植没後20年 ぷらすまいなす±
私の青春」2018年2月10日～5月26日（協
力：滋賀県立大学 朴慶植文庫）※

第17回 2・8独立宣言、3・1独立運動100周
年記念「2・8独立運動と3・1運動」

2019年2月2日～8月31日（共同主催：独
立記念館）※

第 18 回 「貧困と差別が生んだ『帰国事業』」

2019 年 11 月 2 日～2020 年 3 月 7 日 ※

第 19 回 「関東大震災 100 周年記念特別企画展

1923-2023 歴史の証言者たち」2023 年 9 月 1 日
～現在開催中 ※

3) 図書室

開設の趣旨に従って、資料館では当初よりアーカイブの一環として、①在日に関わる図書、雑誌、②映画・テレビ番組等の映像資料、③自伝、個人出版の図書、同郷会の機関紙、地域のミニコミ誌、証言等の録音テープの収集がめざされていた。開館以来、在日同胞からの多くの寄贈もあって、それらは年々充実していき、国内外からの利用も増加している。

これまでに当館に所蔵されている図書、雑誌等は下記のとおりである。

総資料点数（蔵書等含む）	：3 万点以上
・常設展示室展示・保管資料	：1 千 500 点以上
・蔵書（単行本・雑誌）	：2 万冊以上
・自叙伝関係	：500 冊以上
・映像・音声資料	：1 千点以上

なお、上記の常設展示室展示資料および保管資料、さらに蔵書に含まれる貴重図書については、2021 年 10 月より、在外同胞財団（現・在外同胞庁）の支援を受けて在日韓人歴史資料館所蔵資料デジタル化事業（3 か年）を開始し、その事業は現在も進行中である。将来は、ホームページでの閲覧が可能になるだけでなく、所蔵資料のデジタル化の汎用性は広く、在外機関と共有を可能にするなど、その活用を促進する方途については検討中である。

とりわけ、コロナ渦を契機に、国際的に「デジタル・ミュージアム」、あるいは「デジタル・ヒューマニティーズ」といった名称のもとにデジタル資料の利用による研究が国際的にも活発化している。第 4 節の「特色ある活動」でも言及するように、当館でも直接的な来館が制限されたコロナ渦における教訓から、「常設展示」において言及した

とおり、ホームページを活用し、インターネットや SNS を通じて、当館所蔵資料の学術的な価値を国際的に共有するべく発信に努めている。さらに制作中の所蔵資料目録やデータベースの公開を検討している。

四 特色ある活動

1) 土曜セミナー

設立当初より、資料館における講座の開設が構想されていた。開設翌年の 2006 年 3 月より、資料館のセミナー室において、毎月第 1 土曜日にセミナーを開催し、在日の歴史展示に関わる講演を始め、広く朝鮮近現代史、日本との関係史、朝鮮文化史の講演を続けてきた。

土曜セミナー開始以降、コロナ渦直前（2020 年 2 月）までに、セミナーは 125 回を数える。開館 10 周年には、それまで資料館で開催された土曜セミナーの中から 5 つの主題を選び、講演録『朝鮮近現代史から日本を問う』（2015 年 4 月、145 頁）を刊行した。

さらに、58 回（2012 年開催）から 101 回（2017 年開催）までの土曜セミナーの中から 5 つの主題を選び、多岐にわたるテーマを通して韓日近現代史の全体像を提示することを目的とした講演録『朝鮮近現代史から日本を問う II』（2018 年 11 月、132 頁）を刊行した。

2) シンポジウム

当館では、土曜セミナーの他にも、開設後の節目の年ごとに、シンポジウムを開催し、国内外の研究者、専門家を招聘して、在日同胞をとりまく状況や歴史的な画期に関わる問題、時事的な問題等を積極的に取り上げてきた。それらのシンポジウムの成果は、展示（企画展）や出版に反映させることに努めてきた。これまで開催した当館主催のシンポジウムは下記の通りである。

・第二回歴史映像シンポジウム「映画で語る韓日関係の深層」2010 年 6 月 19 日（共同開催：

東北アジア歴史財団)

- ・開設5周年 大阪シンポジウム「在日コリアンの未来予想図」2010年10月16日
- ・開設5周年記念 東京シンポジウム「韓日歴史認識の違い」2010年11月13日
- ・第三回歴史映像シンポジウム「映画で語る韓日関係の深層Ⅱ－同化政策と創氏改名」

2011年6月11日（共同開催：東北アジア歴史財団）

- ・シンポジウム「激動の時代を生き抜いた在日同胞の生き方と夢」2012年8月10日 ソウル市立博物館
- ・土曜セミナー100回記念・開館11周年記念シンポジウム
「在日韓人歴史資料館のいま、そしてこれから」2016年12月3日
- ・「朴慶植没後20周年記念シンポジウム」

2018年2月10日

- ・2・8独立宣言、3・1独立運動100周年記念シンポジウム「東アジアにおける2・8独立宣言の意義」2019年2月2日
- ・シンポジウム「在日の歴史を再考する－記憶と記録をみつめて」2023年7月22日
- ・関東大震災100周年記念シンポジウム
「何が市民を虐殺に駆り立てたのか－関東大震災の悲劇を共有し語り継ぐために－」

2023年9月2日

- ・フォーラム「在日韓人歴史資料館、その未来を拓く展示」2023年12月23日（早稲田大学韓国学研究所との共催）

上掲したシンポジウムの中でも、当館がめざすシンポジウムの性格をよく示しているのは、2019年2月2日に開催された「2・8独立宣言、3・1独立運動100周年記念シンポジウム－東アジアにおける2・8独立宣言の意義」である。

周知のとおり、二・八独立宣言は、当時日本で学んでいた留学生たちが国際的に訴えかけた独立運動であり、三・一独立運動の先駆けとなった。当日のシンポジウムは、二・八独立宣言に至る過程

を精査して、担い手たちの活動を、国籍・民族を超えたネットワークの視点から捉えなおし、その歴史的な意義を一国の枠組みに止まらず、東アジアという空間に位置付けようとするものであった。四か国語の独立宣言文に込められた当時の歴史的な背景に焦点を当て、東京から発信された運動の具体的な様相を明らかにするものでもあった。

ひるがえってみるに、アーカイブは、資料の収集、展示、保存が主たる役割として期待されているが、それに止まらず、所蔵する資料そのものに対する研究によって、資料がもつ価値を高め、新たな歴史研究、歴史認識に寄与することもまたアーカイブの可能性として期待されている。そのようなアーカイブの役割と機能を実践したものとして、当館の特色ある活動として特筆したい。

また、こうしたアーカイブの在り方の実践的な成果として、当日のシンポジウムは、日本と韓国で各々出版することによって（『東アジアのなかの二・八独立宣言－若者たちの出会いと夢』明石書店、2020年、三仁出版社、2023年）、資料館のアーカイブとしての成果を発信することに努めた。

3) 資料の調査と発信

2023年は、関東大震災100周年記念を迎えるにあたり、日本のみならず、国際的にも関東大震災における朝鮮人虐殺に対する修正主義的な動きが顕著になっている近年の風潮が問題視された。こうした状況にあって、当館としては、たんに記念シンポジウムを開催するだけでなく、資料館としての役割をはたすべく、事前に朝鮮人虐殺に関する研究成果を解りやすく解説するために「ポッドキャスト 在日韓人歴史資料館ラジオ」をホームページに開設して、この間、虐殺事件の諸資料を検討してきた渡辺延志氏（ジャーナリスト）に、対談形式で関東大震災を歴史的に捉える視点を提示してもらった。そのプログラムは以下の7回である。

「100周年の関東大震災を考える ―はじめに― 新たな歴史認識のために」

「なぜ当時日本に朝鮮人がいたのか―日清戦争、義和団事件、日露戦争から韓国併合へ」

「通説に納得できない」

「自警団とは何か―本当に自発的に生まれたのか」

「在郷軍人は国外で何をしたのか―東学農民戦争を考える」

「孤立した存在ではなかった震災での虐殺事件」
「終わりに―改めて振り返る関東大震災」

<https://open.spotify.com/show/40EGB27jmsvyjmoAlkEnoU>

そのような問題提起を行ったうえで、2023年9月2日に関東大震災100周年記念シンポジウム「何が市民を虐殺に駆り立てたのか―関東大震災の悲劇を共有し語り継ぐために」を開催した。シンポジウムは4時間以上に及ぶものであったが、40年間にわたって新たな資料の発見に努めた後藤周氏や、本格的な新聞記事の史料批判を試み、さらには新たな公文書を発見した渡辺延志氏の研究成果を中心に開催した。当日は虐殺事件に関する学術的な成果が多く、ドラマ『パチンコ』の制作代表者（スー・ヒュー氏）の講演や、韓国、日本の学界で活躍する歴史研究者の総合討論での新たな問題提起などがあったこともあり、YouTubeチャンネルを開設して、関東大震災100周年記念シンポジウムの映像記録を配信している（全8回）。

こうした資料館におけるポッドキャストやYouTubeチャンネルの開設については、若干の説明が必要である。資料館の設立に伴って、姜徳相氏は、『調査委員会ニュース』創刊号の「資料館のイメージと資料構成」の中で、すでに20年前において「整備ができればインターネットを通じて史料がどこからでもみられるように工夫したい」、「また、在日の歴史についての質問に回答し、講座等も開設を考えています」と指摘していたからである。

渡辺延志氏の関東大震災虐殺事件に関する諸研究は、まさに2019年2月におけるハーバード大学ラムザイヤー教授のケンブリッジ大学出版部への投稿論文に関わって、海外からの問い合わせに

える過程での研究成果であった。

また、関東大震災記念シンポジウムの準備過程で明らかにされた虐殺事件に関する公文書（熊谷聯隊区司令部「関東地方震災関係業務詳報」大正十二年十二月十五日）については、2023年12月25日の『毎日新聞』で広く伝えられたが、それらの資料についてはホームページで詳細な解説を掲載している。

そもそもアーカイブとして、専門的な研究成果に基づいた信頼に足る情報の提供は、重要な責務であろう。当館では、今後もアーカイブとしての機能を前提に、シンポジウム、セミナー等でそれらの成果を公開し展示に反映させていくことを目指している。

五 今後の課題

当館のアーカイブとして抱えている問題点から述べれば、以下の通りである。まず第一に、「収蔵資料の保存・管理」の問題である。開設されてより収蔵資料は年々増加しているものの、収蔵資料の目録が整備されていない。国内外からの問い合わせも多くなっており、外部からの要望に応えるためにも、検索・閲覧可能な目録の作成を急ぐことが大きな課題となっている。

第二に、アーキビストの不在である。開館以来、姜徳相館長に依存し続けたことにもよるが、学芸員資格を備えたアーキビストは十数年間、一人で担われてきた。アーカイブとしての機能の維持とさらなる発展のためには、学芸員や研究を担当する職員が求められる。

第三に、研究に基づく展示の改善である。すでに、いくつかの事例をもって具体的に指摘したことではあるが、資料館としての展示は、研究成果の裏づけが求められ、そのような研究成果に基づいてこそ、信頼するにたる意義ある展示になるであろう。それゆえ、既存の収蔵資料および寄贈資料に対する研究と、その成果に基づく展示という循環を生み出すことが求められていると考えてい

る。

第四に、財政基盤の検討である。当館は開設以来、在外同胞財団（現・在外同胞庁）からの予算にはほぼ全面的に依存している。勿論、寄付金や会員制度によって会員の皆さんの会費等の支援はあるものの、全体予算から見れば限られている。館内施設の充実や、専門家による運営を充実させるためには、今後、財政基盤を整える方途を本格的に検討する必要がある。

最後に、展示施設として抱えている問題点を述べる。第一に、展示室の問題である。所蔵資料は年々、増加しているが、展示スペースが不足しており、展示の更新が困難になっている。20周年を契機にしたリニューアルを検討中であるが、抜本的な改善が求められる。

第二に、資料保存に適した照明・温湿度管理設備の不備である。現在は、一般的な空調設備しかなく、展示物の保存に適した管理設備が備わっているとは言いがたい状況にある。小規模の資料館ではあるが、その所蔵資料は貴重な遺品が含まれており、それらの管理維持もまたアーカイブの重要な使命である。

第三に、バリアフリー対応である。建物の構造上、展示室のある2階にエレベーターが止まらず、高齢者や車椅子の方の場合、スタッフの補助のもと階段から展示室に案内せざるを得ない。より多くの観覧者を迎えることができる開かれた資料館にしていくためにも方途を検討している。

第四に、資料館が抱えている最大の問題でもあるが、保管スペースが十分に確保されていない点である。資料館、博物館にとって、「収蔵スペース」は、いわば生命線である。その確保は、マンパワーと同様に喫緊の課題となっている。

第五に、展示における言語の問題である。開設以来、日本語・韓国語の表記に努めてきたが、それ以外の話者への対応についても利用者からの要請がある。とりわけ、英語圏からの要望は少なくない。近年、英文サイトや英文冊子を作り、展示室にも壁パネルの英語キャプションを配置し、可能な限り英語話者に対応できるようにはなったも

の、万全とは言えない状況にある。

おわりに

本稿をまとめるにあたり、資料館のマニフェストに設立の目的として掲げられている次世代に何を継承するのかという問題について、その方向性について述べておきたい。

まずは、アーカイブとして、「在日」の歴史・記憶・文化を、誰のために、どのように伝えていくのかという問題である。冒頭で設立の趣旨に関わって言及したように、資料館は、20世紀初頭以来、百年以上に及ぶ日本での「生の営み」に関わる資料の収集と展示、保管に努めてきた。在日の歴史や文化を未来に残していくうえで、世代交代の進行が強く意識されていた。

21世紀に入り、在日を取り巻く環境が激変している中で、在日の環境の多様性と重層性を踏まえると、これが必ずしも日本国内の問題に関わるだけでないことを意識せざるをえない。それゆえ、資料館は、ただ在日のための資料館に止まることなく、現代の世界のあり方を視野に収めなければならないと考えている。実際に、世界各地から訪れる来館者は、自分たちの体験と重ね合わせながら、展示を観覧し、その都度、館員は説明を求められることがしばしばある。

資料館設立の趣旨には、「この資料館が在日するすべての人々と日本人・アジア各地の人々との相互理解をはかるために役立つことを願っています」とあることを紹介したが、今や、それだけに止まらず、世界のあらゆるマイノリティに向けて、生き生きとした共感の場となることが求められているといえるであろう。

ここ数年は、少なからず米国の日系人や、ロシアからのコリア系住民の来館者を迎えるようになった。そのような来館者を念頭に置くことは、資料館の「次世代」への継承を構想することと無縁ではないであろう。つまりは、在日の歴史は、近代日本と朝鮮の関係に大きく拘束されながらも、

世代交代を経る過程で、独自の歴史的な存在者であると同時に、地球上の様々な地域で、多くの人々が共有する問題をも抱えている事実が益々明らかになっているからである。資料館を観覧する人々が広がることによって、その収集する資料にも新たな光が当たるであろうし、展示についても、これまで以上に多様で、重層的な文脈が求められるだろう。

在日の世代の変化について話を戻せば、世代交代と共に、在日を取り巻く環境の変化にともなうアイデンティティも大きく変容している。そのような次世代の現実への認識や、未来に向けての願望は多様である。そうした彼らに「自らの在日の歴史認識を深め、それを今後の在日同胞が生きていく心の糧とし、希望のもてる将来を展望」するようなビジョンを深めていくことが緊要である。こうした問題もまた、上述したように、日本国内のみならず、国際的な文脈から見た方向性を意識せざるを得ない。

このような課題に関わって、注目されるのは、次のような指摘である。

祖国は非常に遠い記憶となっている。特に、第一言語をもはや話さなくなっている第二・第三世代の場合はその傾向が強い。しかし記憶は構築されるものであり、祖国は、郷愁を抱く移民の第三世代（もはや自分たちの親や祖父母が求めた統合を求めている）の場合、記憶上の想像のコミュニティ構築の中で、一層リアルなものとなっている。その結果、グローバル化への抵抗や初期の近代化の波への抵抗を基礎にしながら、新しいコミュニティなアイデンティティが興隆する可能性がある⁷⁾。

このたびのシンポジウムは米国で制作されたドラマ『パチンコ』が大きな契機となっていた。日本においてはディーテールに関わる様々な批判があるものの、これまで日本において、『パチンコ』の原作の小説や、それに基づいたドラマのような「良質な物語」はあっただろうか。自問せざるを得ない。「在日」の歴史と文化の独自性と普遍性を国際

的な文脈の中で、いかにして在日の環境の多様性と重層性に関わった「物語」（ナラティブ）を創出するのかが問われている。資料館は、「在日」の過去の歴史を照らすだけでなく、未来への展望を語らずして成り立たない。ジェラード・デランティに倣って、「エスニシティがトランスナショナル・コミュニティに類似したものを生み出すためには、もっとグローバルに組織された言説が必要である」という指摘は在日韓人歴史資料館にとっても重要な示唆を与えるものと受け止めている。

注

- 1) ドラマ『パチンコ』と在日史についての所感は、李成市「『パチンコ』第1シーズンの歴史考証の諮問団に参加して」（玄武岩他編『グローバルな物語の時代と歴史表象『PACHINKO パチンコ』が紡ぐ植民地主義の記憶』（2023年12月、青弓社）で私見を述べた。
- 2) 『調査委員会ニュース』（創刊号、2004年3月25日）に掲載された「（仮）在日コリアン歴史資料館の開設について」と題して姜徳相調査委員会委員長は、次のように記している。

在日コリアンの歴史を考えると、1905年乙巳条約の締結を一つの歴史的起点とすることが出来ます。そして1945年は、わが民族が解放を迎えるとともに、在日同胞としての新たな歩みが始まった年でした。きたる2005年は、在日100年の歴史、解放後60年の節目として迎えなければなりません。

その間、在日落地成根といいますが、在日二世から三世、四世の世代と在日のアイデンティティも大きく変わっています。在日100年を迎えて在日同胞が、自ら歩んできた歴史を振り返り、祖父母の背中を直視して自らの在日の歴史認識を深め、それを今後の在日同胞が生きていく心の糧とし、希望のもてる将来を展望していかなければなりません。

しかし現在、在日同胞社会の正しい歴史認識を啓発してくれる総合的な施設がないばかりか、その歴史資料さえも十分に収集されていません。日本への渡航事情、在日の生活状況、労働運動、民族運動、文化芸術運動など全般にわたる資料（文献・映像・生活用具等々）を収集し、体系的に整理・編纂し、それを保存、公開、展示して、在日同胞の正しい歴史を広く知らしめ、ともに考える場としての歴史資料館の設立が強く望まれています。

時間の経過が歴史の足跡を風化させているのが冷酷な現実です。(この間)在日同胞の世代交代も進み、その時代を知る人も限られ、事実を記録することもままならなくなってきておりますし、貴重な資料等も散逸の憂き目にさらされている状況からして、今が最後の機会といってもよいでしょう。

これまでも幾多の心ある人々がその必要性を訴え、貴重な努力を重ねてまいりました。幸いにして先覚たちの努力により、散逸を免れた資料も数多くあり、私たちはその幸運を享受することに感謝しなければなりません。しかし、先覚たちの貴重な努力も個別の範囲を超えることはできませんでしたし、恒久的なものとなり得ていないことも事実であります。私たちは、先覚たちの意思を継承しつつ、それを発展させて「(仮)在日コリアン歴史資料館」を開設し、若い世代に遺産として残していこうではありませんか。

同時に、この資料館が在日するすべての人々と日本人・アジア各地の人々との相互理解をはかるために役立つことを願っています。

米国に在米同胞資料館、中国には在中同胞資料館があると聞いています。その歴史性からも在日同胞の歴史資料館があっても当然であり、その条件、力量からして十分に可能なことでもあります。そして何よりもそれを望む声は大きく、歴史的な節目という千載一遇のこの機会に、汎在日同胞的な歴史資料館の開設を願い、広く呼び掛けるものであります。

- 3) 朴慶植氏が「在日同胞歴史資料館」設立の構想をもっていたことは、崔碩義「在日同胞歴史資料館」のことなど」(『在日朝鮮人研究』29、1999年10月)に詳述されている。それは朴慶植氏の急逝(98年2月)によって頓挫したものの、資料館を設立しようという構想は、朴慶植氏が自分の蔵書と、長年にわたって収集してきた膨大な資料を整理して保存し、広く公開したいという考えから出発したという。94年頃に始まり、95年7、12月に朴慶植氏を中心となり、東京神田の韓国YMCAで、意見交換会有り、その席で在日同胞歴史資料館設立

準備委員会が発足した。準備委員長、事務局長、朴慶植氏を始めとする8人の委員の名前が伝えられている。資料館内容は、「在日同胞の歩んできた正しい歴史認識のために」「日本への渡航事情、日本での生活状況、労働運動、民族運動、文化芸術運動などの全般にわたる資料を、8・15解放以前、以後に分けて収集し、展示する」となっており、姜徳相氏の「在日韓人歴史資料館」の構想とほとんど重なる。そこでは、展示のほかに「在日同胞史の編纂も重要な課題」として掲げられており、2000年の開館が目指されていた。設立運動が実質的に行われたのは、96年からまる2年間であり、『在日同胞歴史資料館設立準備委員会 会報』が創刊号から5号まで刊行されている(96年9月5号97年12月)。

- 4) 姜徳相氏は詳細な日記を残しており、それらは現在、東農記念事業会姜徳相資料センター(ソウル)に保管されている。
- 5) 「汎在日同胞」であることをめざすために、資料館の名称には種々議論があったようである。当初は、「調査委員会ニュース」に掲げられていたとおり、暫定的に「(仮)在日コリアン歴史資料館」となっていた。しかしながら、最終的には、「在日韓人」となった。「韓人」とした一つの根拠として、解放以前の海外同胞たちに用いられた「韓人」が参照されたとのことである。実際に、朝鮮半島から離散した僑民の大半は中国、米国などにおいて「韓人」を自称していた。むしろ「朝鮮」は日本の支配が及ぶ地域に顕著であったという傾向がある。
- 6) 資料館の設立に当たっては、在日の歴史研究者・文化人である姜徳相氏、朴一氏、呉徳洙氏、李達完氏は当初より重要な役割を果たした。さらに、樋口雄一氏、外村大氏、高柳俊男氏、宮本正明氏、河かおる氏など諸氏の献身的な尽力があった。また、民団側では、歴代団長を務めた金宰淑(2000年3月-2006年2月)、鄭進(2006年9月-2012年2月)両氏を始めとする人々の絶大な支援があったことが伝えられている。
- 7) ジェラード・デランティ『コミュニティ グローバル化と社会理論の変容』(山之内靖訳、NTT出版) COMMUNITY Gerard Delanty 2003。

特集

場所の記憶が未来の 光源となる

—大阪コリアタウン歴史 資料館の試み—



伊地知紀子（大阪公立大学）

1. 「在日コリアン史」への問い

現在、日本に在住する住民の国籍あるいはルーツは多様化しており「在日外国人」「在日ブラジル人」「在日ベトナム人」といった表記も用いられるようになってはいるが、日本において「在日」といえば、いつの間にか「在日コリアン」を指すようになってきている。近年、英文ジャーナルや国際学会では、ローマ字による「Zainichi」という表記は在日コリアンを指す。この「在日コリアン」に該当する人は誰なのかについては、長い議論の歴史がある。国籍、本籍地、在住歴、在留資格、アイデンティティなど、時代とともにその規定条件の候補数は増えてきた。

これには理由がある。時代や社会の変化と調査研究が進むにつれ、解放前に渡日した人だけではなく、解放後に再渡日あるいは初渡日する人の存在や婚姻を契機に來日した人が対象化されるようになってきた。私自身も、在日済州人の生活史調査を継続しているが、これまで約 100 名の人にインタビューする中で、半数近くは解放後に密航で渡日しており、済州 4・3 の影響による移動は珍しくなかった。既存研究では、オールドカマー・ニューカマーといった表現が盛んに用いられた時期もあるが、この表現すら最近では再検討を迫られている。さらに、長年、在日コリアンを規定する指標となってきた特別永住者数は減少する一方である。日本の在日外国籍者数について法務省の統

計によれば、2022 年 12 月末現在「韓国・朝鮮」籍者数は 436,670 人であり、そのうち歴史的経緯を有する特別永住者は 285,459 人である。

在日コリアンを規定する根拠として国籍を取り上げる場合、日本国籍であるコリアン・ルーツの人びとはどのように位置付けられてきたのだろうか。私が、学部卒業論文で在日コリアンの帰化をテーマに書いたときに、帰化をした方々が、自分たちは民族団体から受け入れられない、と当時言っていた。今では、日本国籍の在日コリアンであることを明示し、社会的発信をしている人がいろんな場面で活躍している。大学の授業では、韓流ブームもあり、学生の中で、自分にコリアン・ルーツがあることを最近気づいたと嬉しそうに話しに来る人もいる。もちろん、否定的な感じでそっとコメントカードに書いてくる人もいる。加えて、近年ではミックスルーツと呼ばれる人も着目されるようになってきた。親や祖父母世代の一人がコリアン・ルーツ、あるいはこれらの世代の人自身がすでにミックス・ルーツという若い世代が生まれてきている。こうした最近の若者を見ると、自分のルーツについて知ろうとすると、民族団体や組織とかに入ると人間関係や組織活動が煩わしいようである。ただ、一人でルーツ探しをしようすると、適当な場所がない。そこで、誰にも断らず、扉さえ開ければ自分に関わる書籍を読める場所を市中に広げたいという思いもあり、「大阪コリアタウン歴史資料館」を開きたいと考え、2021 年の春から準備を開始した。

実は、大阪コリアタウンにはすでに「班家食工房」という文化施設が、2003年に開設されている。徳山物産創業者である洪呂杓さんが建設したものだ。1990年代に入り、かつて朝鮮市場と呼ばれていた御幸森商店街は通りを整備し、新たなスタートを切った。2000年代には日韓ワールドカップの開催や韓流ブームが生まれ、来客数が徐々に増えていた。その中に、社会見学や修学旅行でやって来る小中高の子どもたちが加わるようになってきた。雨の中、公園で傘を差しながら先生の説明を聞く子どもたちの姿を見て、洪呂杓さんは私財を投じて日韓文化交流施設として「班家食工房」を開いたのである。洪呂杓さんの長男である洪性翊さんは、父親の遺志を引き継ぎ、また自身が画家であることから在日コリアン美術館構想も持っておられた。そこで、準備を始めた大阪市立大学関係者とともに、2021年5月に洪性翊さんに資料館構想を相談した。

ちょうどこの頃、大阪コリアタウンでは様々な取り組みが展開しようとしていた。御幸森小学校が2021年3月に閉校されることになり、跡地活用事業として「いくのコーライズパーク」が同年始動することになっていた。また、同年、御幸森商店街を構成していた3商店街が統合され「一般社団法人 大阪コリアタウン」として新たなスタートを切った。いずれも、生活市場である大阪コリアタウンが、韓流の影響を受け観光スポットとなるなか、地域に関連するミュージアムの必要性が話題になっていた。これら各方面からの構想や展望が重なり、2022年6月に一般社団法人大阪コリアタウン歴史資料館を設立し、民間からの寄付のみで2023年4月29日開館に漕ぎつけた。

2. 地域史と歴史の主体

2-1. 歴史像の型を再考する

本特集に登場する博物館・資料館・資料室では、それぞれの場で異なる観点から「在日コリアン史」の一端を展示している。以前から、渡日1世代目

が私財を投げ打ち在日コリアンの関する図書室や文庫などが開設されていたが、2000年代に入り、これらに在日コリアンに関する施設が、より幅広い支援により各地で開かれるようになってきた。日本による朝鮮の植民地支配により在日コリアンの歴史が積み重ねられ、一定の言説になるまでいかに時間がかかったかを示すといえるだろう。その間にも、在日コリアンのありようは多様化しており、こうした状況を踏まえた展示を構想する必要がある。そこで、立ち止まり考えてみたいことがある。今、「在日コリアンの歴史」は誰にとってどのような歴史としてあるのか、ということだ。

「在日コリアン史」を学ぶための書籍類は数多く出版され、近年はインターネット上でのサイトや動画も作成されてきている。博物館や資料館・資料室はこうした一部である。それぞれの場で提示される「在日コリアンの歴史」には互いに異なる点もあれば、共通する内容もある。この共通点について、あえてまとめてみると、次のような点を指摘できるのではないかと。①日本社会の差別・抑圧を受けてきた歴史、②差別・抑圧と闘った人びとの歴史、③男性中心の歴史。ただ、これらは「在日コリアンの歴史」の特有なものではなく、マイノリティの歴史に共通した点でもある。こうした「抵抗の歴史」に対して、後ほど加わる点として④民衆の歴史、⑤女性の歴史が定番だといえる。

このように歴史は、次第に厚みのあるものとして定型化されていくことは常である。ただ、「在日コリアン史」を展示するにあたり、いつの時代のどのような在日コリアンの姿を抽出するのかという点は課題となる。大阪は「在日コリアンの歴史」を象徴する地域である。地域史という観点から、「在阪コリアンの歴史」と銘打って構成するにしても、上位枠組みとなる「在日コリアンの歴史」を構成してきた①②③の要素は入り込まざるを得ない。もちろん、④⑤についても取り入れる必要がある。これらのポイントを押さえ、大阪コリアタウンという地域に焦点を絞って時代を追いながら構成すれば、地域の実像に沿った形で歴史は再現できるのだろうか。

そんなことはない。構想を練るなかで、幾つもの壁が生じる。大阪コリアタウンは、かつて朝鮮市場と呼ばれた商店街が時代の変化の中で現在の名称となったエリアである。しかし、この地域で1926年に初の市場として開設された鶴橋公設市場は日本人の市場であり、朝鮮人たちが商売を始めた場所は裏の路地であった。その後の変遷を経て今に至るが、大阪コリアタウンでは日本人の店舗も存在する。この大阪コリアタウンを含む旧猪飼野地域、さらに在日コリアンの最多居住地域である生野区の住民は、数の順から述べると日本人、在日コリアンであり、時代を経てルーツはさらに多様化している。大阪コリアタウンでは、現在、在日コリアンと日本人だけが商店を開いているのではなく、中国朝鮮族のキムチ屋もある。そこで働いている人びとには、近年渡日したベトナム人もいる。また、解放後の韓国から来た人びとの渡日時期もさまざまである。時代とともに社会が変化するがゆえに、こうした住民像の多様化は当然といえる。そこを、コリアタウンがなぜ存在するのかを知らない観光客が闊歩する一大観光地となった現在がある。

そこで、大阪コリアタウン歴史資料館では、大阪コリアタウンが位置する猪飼野エリアに焦点を当て、過去から現在に至る変化を展示内容に反映できるよう工夫することにした。そこで検討課題となるのが、誰の歴史として描くのかという点である。大阪コリアタウン歴史資料館の場合、展示の内容のかなりの部分については同時代者として生きてきた地域の人びとが、自身の記憶と共に観る。その多くは、在日コリアンと日本人である。在日コリアンの視点に立った場合、先に述べた①②③④⑤のポイントを、大阪の地域史とともに構成を検討することが必要だ。同時に、在阪コリアンが在日コリアンを代表する存在といえるのかを、改めて考察していく作業も今後の課題となる。加えて前述したように、在日コリアンという存在自身が、時代の変化とともに多様化している。日本社会からの過酷な差別と抑圧を、身をもって経験してきた世代があり、そのなかでも状況打開のた

めに闘ってきた体験を有する人びとと、これらを共有しない人びとが同居するのが実情である。

2-2. 地域史という視点

在日朝鮮人について、大阪の地域史のなかで論述する際、参照すべき表記として「在阪朝鮮人」がある。大阪に在住する朝鮮人を指す用語であるが、在日朝鮮人と冠した論述の調査研究対象が大阪であっても、表題には「在日朝鮮人」が用いられる傾向が続いている。私もその一人である。大阪の歴史を記述する文章の中で、在阪朝鮮人という表記が頻出するのは、1920年代、朝鮮半島および済州島（以下、朝鮮地域）からの来阪者が急増した時期であった。この時期、在阪朝鮮人は「社会問題」と看做された上で、社会調査の対象とされた。当時、日本の中で朝鮮人が最も多く居住していた大阪での調査データは、現在に至るまで多くの調査研究に引用されている。

地域史の中で在日朝鮮人をどのように記述するのかという課題は、地域住民をどのように捉えるのか、という点と向き合うことを伴う。地域の歴史主体への問いである。地域の歴史を築き存在は、「日本人」だけなのだろうか。こうした素朴な問いに立つことによって、見えてくる風景は異なってくるといえるだろう（伊地知 2023）。

名称が示すとおり、この資料館は大阪にあるコリアタウンの歴史を学ぶ場として開くことを目的とした。それゆえ、かつて猪飼野という地域名であったこの地の歴史をとおして、現在の姿への道筋を展示する構成を目指すことにした。そこで、2022年8月に企画チームを立ち上げ、展示の具体的な内容について検討を始めることになった。私自身は、長年、在日コリアンの歴史と生活について、大阪を中心に学んできたことから、ある程度資料についての見通しを持っているつもりだった。ところが、猪飼野の地域史という視点に立った時、古代まで遡り、そこから改めて立ち上がる歴史像の知識が全く不足している事実に向き合うことになった。そこをしっかりと埋めてくださったのが、猪飼野保存会の足代健二郎さんである。企

画チームを構成するときに、生野で生まれ育った在日コリアンと日本人に入っただくことを基本と考えた。足代さんに、企画チームへの参加をお願いしに行ったとき、資料館の展示構想をご相談したところ、「ちょっと待っていてください」とある部屋に入っていかれた。資料部屋だ。そこから、幾つもの貴重資料を出してくださった。企画チームの中で、「猪飼野は湿地帯だといわれている」という発言が出れば、「いや、それは一部なんです」とおっしゃり、「ちょっと家に資料を取りに行ってきますから、待っていてください」と出ていかれ、しばらくすると幾つもの貴重資料を手に戻って来られる。足代さんのご自宅は、資料館から徒歩三分くらいの距離だ。開館まで、そして開館後のミーティングでも、足代さんに何度往復いただいているか数え切れない。

こうしたやり取りの中、次第に展示構成の輪郭が見えてきたのだが、猪飼野の地域史という観点から最も参考になったのは、上田正昭監修・猪飼野の歴史と文化を考える会『ニッポン猪飼野ものがたり』である。足代さんと小林義孝さんが中心になって編まれた本書は、猪飼野を学ぶにあたって、重要な参考図書として目を通していたが、資料館の展示を考えるという別の視点から改めて読むと、いかに貴重な存在となるのか再認識したのである。『ニッポン猪飼野ものがたり』の「総論——猪飼野とは——本書の目論見」には、次のように本書の狙いが記されている。

在日コリアンが集住する以前、連綿とつながる太古からの歴史が猪飼野には刻まれている。この歴史を引き継いできた人々が「猪飼野」の伝統を形作る。そして大都市大阪に隣接したこの地域には、大阪の発展とともにそれを担うための役割が付される。平野川の改修と農地を宅地に転換する事業の実施はこの地の歴史を更新したのである。農地が比較的低所得者の居住地に転換し、さらに済州島を中心とする「植民地」から流入した人々がこの地に集まる。これが現在の「猪飼野」の直

接的な出発となる。

近代の「猪飼野」が辿った個性的な歴史は、猪飼野に住む人々、外部から猪飼野を見る人々、さらにそのそれぞれの個人史と猪飼野との関わりの中で多様な「猪飼野」像を生み出した。ここに猪飼野の歴史の重み、歴史と文化の多様性、さらにその「豊かさ」の根源がある。またそこには「日本」そのものを逆に照射する力がある。このような猪飼野のほんの一部でも表現できれば——これが本書の目論見である（小林・足代 2011：64-65）。

本書は、古代から現代に至る猪飼野の姿を多面的に描き出す、画期的な地域史の書籍として編まれている。通底する視座は、住民から見た地域像、住民にとっての地域像であり、地域史記述の新たなスタイルへの挑戦といえる。地域を生きてきた住民それぞれの視点からみる猪飼野がある。地域を複眼的に見ることにより、出来事的重要性にも違いが存在するという素朴な事実を認識することにつながる。一つの地域で生きてきた人びとにとっての時代区分への認識のズレ、就業構造における相違、日常生活の実感などを、具体的な場面から資料として切り取り構成することを試みている。そうすることによって、展示を制作する側も自分自身の認識枠組みを問い直す契機となる。

ローカリティに視点を置くことによって、これまで「大文字の歴史」として形成されてきた在日コリアン史を再検討していく契機にもつながると考える。そうした意味では、大阪コリアタウン歴史資料館の展示構成は、在日コリアンに関連するものとしては参照するモデルのない挑戦になるのかもしれない。

3. 何をどのように伝承するのか

在日コリアンの存在は、これまで多様であったし、現在さらに多様化している。一方、在日コリアンの中でも社会的発言をできる立場に立てる人

は限られてきた。中心にいたのは、やはり男性であった。私が生活史調査をしてきた経験から振り返ると、語り手は大概、お父さんの話をする。「お母さんはどの地域出身ですか」と聞いても、語り手は知らない場合が珍しくない。生活に関わっている人間は多様であるはずだ。こうした語り方に何度も出会ってきたので、在日のストーリーは、かなり定型化されてきた部分があるのではないかと考えている。父親が在日コリアンで母親が日本人である場合と、父親が日本人で母親が在日コリアンである場合、子ども世代は、民族運動組織の中でどう位置づけられたのだろうか。今の時代は、こういった文化的な制約を乗り越える、SNSのようなメディアツールもたくさんあり、時代も社会も生育環境も多様化しているがゆえに、従来とは異なる在日言説が複数生まれているだろう。

大阪コリアタウン歴史資料館では、多様な次世代が生まれるなか、対抗的歴史に陥らず、また差別／抵抗、国家／個人、日本／在日、非日常／日常、男／女といった二項並列に定位しない歴史展示を目指したいと考えている。例えば、在日コリアンと日本人、それぞれの地域史が並列にあるわけではなく、同じエリアにしながら、互いに交わらない部分と交差する部分がある。今後は、なぜこれらの相違が生じたのかを、地域史を辿りながら具体的に検討することになるだろう。

また、どのように伝承するのかという点については、観覧者にとってできるだけ壁（距離感）を生まない方向性を模索したい。コリアンと日本人の双方を親とする子や孫世代、またさらに多様なルーツをもつ次世代が多数生まれ育つなか、これらの人びとがいずれか一方の立場にとって展示を

見ることが望ましい観覧であるとは必ずしもいえない。例えば、在日コリアンと日本人の親を持つ場合、マジョリティ社会である日本社会優先の世界観・社会観・人間観を身につけて育つ可能性は高い。そこで、先に提示したような差別とこれへの抵抗の歴史、自分に繋がる言語や文化の歴史、ジェンダーに配慮した歴史を学ぶことで、マイノリティの側の歴史観に立つという選択は可能である。しかし、日本社会 vs 在日社会という構図をそのまま一人の人間が抱え込んだ場合、自身の中で相互の対話の回路はどのように開かれるだろうか。韓国人と在日コリアンの親を持つ場合では、また異なる様相で問いが立ち現れるだろう。地域史という立脚点から構成するにしても、観る側に教え込む（啓蒙する）のではない展示はいかに可能だろうか。各現場の工夫から相互に学び合えるのではないだろうか。

博物館・資料館・資料室は、書籍とは異なり、修正がその都度に可能な場である。この点を活かすためには、視点を固定せず時代や社会の変化を踏まえながら、継承に値する内容を精査し伝承する努力が必要となる。大阪コリアタウン歴史資料館は、地域史という観点から未だ十分伝承されていない内容を組み入れ、来館者を新たな思考へと誘う展示構成に向けてこれからも変身をし続けていくことを心したい。

参考文献

- 伊地知紀子（2023）「大阪地域史研究と在日朝鮮人―「在阪朝鮮人史」を「住民史」に接続する」『ヒストリア』300号、pp.271-291.
- 上田正昭監修・猪飼野の歴史と文化を考える会（2011）『ニッポン猪飼野ものがたり』明石書店。

特集

朝鮮大学校朝鮮問題研究センター付属在日朝鮮人関係資料室について



金哲秀（朝鮮大学校朝鮮問題研究センター長）

本報告では、朝鮮大学校朝鮮問題研究センター付属在日朝鮮人関係資料室（以下、「資料室」）開設の経緯、所蔵資料の整理状況や概要を説明し、最後に「資料室」が抱えている課題について述べてみたい。

1. 「在日朝鮮人関係資料室」開設の経緯と目的

（1）経緯

朝鮮大学校には、「資料室」開設以前から、様々な経緯で集まってきた在日朝鮮人関係資料が数多く存在した。それらを保管してきたのは、主に大学図書館である。当校が所有する膨大な量の在日朝鮮人関係資料が散逸をまぬがれ今日まで保存され続けてきたのは、歴代の図書館長をはじめ図書館職員たちの労によるところが大きい。しかし図書館に保存されていた頃は、これらの資料をとて一般に公開できるような状況ではなかった。資料の保存場所が定まらず、数回にわたって場所を移動したこともあって、長年資料が箱詰にされたまま放置されていた。また資料目録の作成も何度か試みたようだが完成には至らなかったという。

このように資料保存環境が整っていない状況下で、資料の劣化、分散、紛失を防ぎ、一般に広く利用できるように環境を整備していくことは、本校における長年の懸案事項となってきたし、内外の研究者、教育関係者からも大きな期待と関心が

寄せられていた。

本校では、これらの資料が在日朝鮮人の歴史を研究するうえで貴重な1次史料であるということ、さらには在日朝鮮人運動を開拓してきた在日同胞1世、2世の血と汗の結晶であり、本校だけが所有する貴重な財産であるという認識にもとづき、2009年4月「資料室」の設立準備に着手した。その後、3年間の準備期間を経て、2012年7月7日、「資料室」を開設することとなった。

（2）目的

「資料室」の開設目的は、在日朝鮮人関係の資料を収集、保存、公開することによって、在日朝鮮人関係の研究ならびに教育に資することにある。将来的には、事業内容を在日朝鮮人の史資料の収集、保存、管理、電算化、展示、調査及び研究にまで拡大し、在日朝鮮人に関する総合的な研究拠点を構築することにある。

2. 所蔵資料について

（1）「資料室」開設当初に収蔵された資料（以下、「開設時資料」）

a. 資料の入手経路

「資料館」開設時に収蔵された資料件数は、在日朝鮮人関係の文書、パンフレット・ミニコミ誌、新聞・雑誌、ビラ、単行本、写真など11,233件にのぼる。



これらの具体的入手経路は、書類不備のためはつきりと分かるものは少ないが、現在分かっている入手経緯は次の通りである。

第1に、大学創校（1956年4月10日）以来、本校図書館が独自に収集・保存し、蓄積してきた資料である。その中には朝鮮大学校に統合された「朝鮮中央師範専門学校」（1953年10月開校）から引き継いだ資料も含まれている。

第2に、かつて本校の付属研究所として存在した「民族教育研究所」¹⁾ から移転された資料である。資料の種類としては、主に民族教育に関する資料である。

第3に、朝鮮大学校の各部署で生産・保管していた資料や写真類のうち、「資料室」開設とともに移されたものがある。

第4に、元民族団体活動家個人が所有し、のちに本人や遺族から寄贈された資料である。代表的なものとしては朝鮮大学校学長、朝鮮総聯第1副議長などを歴任された李珍珪氏や、元在日本朝鮮仏教徒協会会長柳宗黙師が所蔵していたものである。

第5に、布施辰治弁護士が所有していた朝鮮関係の資料のうち、遺族²⁾ が本校に寄贈した資料である。「朝鮮人事件F氏取扱記録等、朝鮮大学寄贈用目録、1965年7月作成」という表題の目録とともに、1965年4月と7月の2回に分けて寄贈された。

資料室内部



b. 整理状況

資料整理は、図書館職員と数十名の本校教員たちの惜しみない努力によって進められた。

作業は、まず段ボール箱にして約150箱分の資料を内容別に分類したうえで、各々資料に関する資料情報をExcelファイル形式で整理した。資料情報の項目は、①分類番号、②資料番号、③大分類、④中分類、⑤小分類1、⑥小分類2、⑦体裁、⑧タイトル、⑨著者名、⑩内容、⑪綴方、⑫形式、⑬発行元（出版社）、⑭発行年月、⑮総ページ数、⑯判型、⑰定価、⑱注記、⑲寄贈名、⑳国番の20項目である。

データ入力が完了した資料は、保存用の中性紙封筒に収め、「資料室」書庫に配架されている。ちなみに「資料室」には約10万件の資料を配架することができる書庫と閲覧室を設けている。

また、資料目録検索システムを構築し、利用者の利便性の向上を図っている。

c. 資料分類

資料の分類は、所蔵資料の特色を考慮し、「資料室」が独自に行った。

大分類は、「A一般」、「B教育」、「C教科書」、「D朝鮮大学校」、「E布施辰治関係資料」の5種に分類した。

大分類の下位には小分類をもうけ内容別に細かく分類している。

「A一般」には、教育関係を除く在日朝鮮人に関する全分野の資料が含まれている。分類項目は、01

労作、02 会議・方針、03 組織・宣伝、04 権利、05 文化体育、06 統一、07 対外、08 青年、09 留学生、10 女性、11 科学、12 出版報道、13 商工、14 宗教、15 祖国、16 南朝鮮、17 写真、18 その他の18種である。

「B 教育」は、民族教育、朝鮮学校に関する資料である。分類項目は 01 教育方針、02 教育権利、03 教育内容、04 教育研究、05 写真、06 その他の6種である。

「C 教科書」は、解放直後から 90 年代まで朝鮮学校で使用されていた 20 余教科の教科書と副読本などである。分類項目は 01 国語、02 文学、03 漢文、04 朝鮮史、05 世界史、06 地理、07 社会、08 革命歴史、09 数学、10 理科、11 生物、12 植物、13 化学、14 物理、15 製図、16 日本語、17 英語、18 ロシア語、19 音楽、20 美術、21 保健体育、22 家庭、23 情報、24 夏休み宿題帳、25 少年団経験、26 教授要綱、27 教育経験、28 その他の28種である。

「D 朝鮮大学校」は、創立当時から今日まで生産された朝鮮大学校関係資料である。ここには「朝鮮中央師範専門学校」時代の資料も若干含まれている。分類項目は、01 沿革、02 祖国配慮（祖国からの支援）、03 教育方針、04 行政、05 行事、06 教育内容、07 科学研究、08 博物館、09 大学宣伝、10 学生生活、11 卒業生、12 権利擁護、13 国際交流、14 統一、15 写真、16 その他の16種である。

「E 布施辰治関係資料」は、内容別に大雑把な分類になっている。

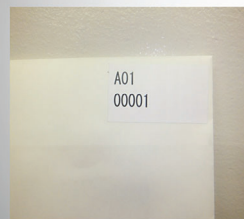
d. 資料番号

大分類の資料番号は、「分類用のアルファベット」+「小分類番号」+「5 ケタの整理番号」で構成されている。例えば「A 一般」、「01 労作」の最初の資料は、「A01 - 00001」という資料番号が付いている。

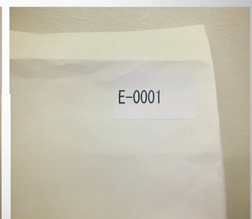
「E 布施辰治関係資料」は、「E」+「4 ケタの整理番号」（例：「E - 0001」）になっている。

資料番号

A～D資料



E資料(布施資料)



e. 所蔵資料件数

■発行時期別資料件数

所蔵資料の中には発行日が不明な資料がたくさんあるため、発行時期別の正確な資料件数を割り出すのは難しい。

「資料室」では、資料を「朝聯（在日本朝鮮人聯盟）」、「民戦（在日朝鮮統一民主戦線）」、「総聯（在日本朝鮮人総聯合会）」、「その他の民族団体」、「日本人団体」、「国際団体」、「解放前」と分類してある。各団体別資料件数をみると、「朝聯（1945～50年）」394件、「民戦（1951年～55年5月）」580件、「総聯（55年5月～）」7,183件、「その他の民族団体」629件、「日本人団体」561件、「国際団体」5件、「解放前」51件である。

資料件数が最も多い総聯期の資料は、1955年の総聯結成から60年代にかけて作成された資料が大多数を占めている。

■分類別資料件数

大分類「A 一般」の資料は3,226件、全資料に占める割合28.7%、「B 教育」4,016件、35.8%、「C 教科書」826件、7.4%、「D 朝鮮大学校」1,144件、10.2%、「E 布施辰治関係資料」2,011件、17.9%となっている。

小分類の資料件数は、表1の通りである。

(表 1) 分類別資料件数

大分類	小分類
A 一般 (3,226 件)	1. 労作 36 件、2. 会議・方針 426 件、3. 組織・宣伝 584 件、4. 権利 487 件、5. 文化体育 201 件、6. 統一 211 件、7. 対外 135 件、8. 青年 158 件、9. 留学生 73 件、10. 女性 43 件、11. 科学 175 件、12. 出版報道 139 件、13. 商工 62 件、14. 宗教 4 件、15. 祖国 209 件、16. 南朝鮮 122 件、17. 写真 3 件、18. その他 258 件
B 教育 (4,016 件)	1. 教育方針 994 件、2. 教育権利 512 件、3. 教育内容 368 件、4. 教育研究 1036 件、5. 写真 16 件、6. その他 980 件
C 教科書 (826 件)	1. 国語 193 件、2. 文学 4 件、3. 漢文 5 件、4. 朝鮮史 33 件、5. 世界史 12 件、6. 地理 64 件、7. 社会 67 件、8. 革命歴史 36 件、9. 数学 79 件、10. 理科 36 件、11. 生物 16 件、12. 植物 1 件、13. 化学 17 件、14. 物理 20 件、15. 製図 2 件、16. 日本語 57 件、17. 英語 28 件、18. ロシア語 3 件、19. 音楽 51 件、20. 美術 46 件、21. 保健体育 14 件、22. 家庭 6 件、23. 情報 1 件、24. 夏休み宿題帳 7 件、25. 少年団経験 2 件、26. 教授要綱 2 件、27. 教育経験 4 件、28. その他 13 件
D 朝鮮大学校 (1,144 件)	1. 沿革 101 件、2. 祖国配慮（祖国からの支援）31 件、3. 教育方針 37 件、4. 行政 186 件、5. 行事 166 件、6. 教育内容 47 件、7. 科学研究 64 件、8. 博物館 7 件、9. 大学宣伝 57 件、10. 学生生活 27 件、11. 卒業生 10 件、12. 権利擁護 238 件、13. 国際交流 60 件、14. 統一 6 件、15. 写真 166 件、16. その他 54 件
E 布施辰洵関係資料 (2,011 件)	306 タイトル

(表 2) 「A 一般」の小分類と内容

小分類	内 容
「労作」	金日成主席、金正日総書記が発表した報告、演説、談話、書簡、論文などである。資料として目新しいものは特にない。
「会議・方針」	諸団体の全体大会、中央委員会、地方協議会、定期大会、その他の様々な大会、集会関連の報告書、決定書、方針書、演説文、年間総括書、財政決算および予算案関係書類などの資料である。
「組織・宣伝」	各団体の中央常任委員会と専門部局である組織局、宣伝局から発せられた指令・通達文や学習、講演、談話資料などがあり、組織内部でのみ利用され、一般に公開されていない文書が多い。ほとんどの資料が総聯期のものである。
「権利」	在日朝鮮人の権利擁護に関わる資料である。
「文化体育」	在日朝鮮人の文化団体や体育団体関係の資料、文化領域での様々な活動や体育活動に関する資料、各種文化祭、公演、運動会プログラムなどがある。
「統一」	祖国統一運動、韓国の民主化運動支援に関する資料である。声明書、決議文、アピール文、抗議文、講演資料、宣伝資料が多い。
「対外」	朝・日連帯、国際交流に関する資料と、日朝協会をはじめ日本人の連帯組織が発行した文書、雑誌、図書などがある。
「青年」	青年諸団体が発行した会議録、機関紙・誌、宣伝資料などがある。
「留学生」	留学生団体発行の方針書、機関紙・誌、論文集などがある。
「女性」	女性同盟、女性運動に関する資料であるが、件数は多くない。
「科学」	主に科学者団体や研究所が発行した資料、論文集、研究誌、科学研究員・会員名簿などである。
「出版報道」	主に朝聯、民戦期に発行された新聞、雑誌、解放新聞社・朝鮮民報社の運営方針などである。
「商工」	民戦、総聯の社会経済部や商工人団体、信用組合、貿易関係の資料である。
「宗教」	「8・15 解放慶祝大会 在日本同胞訪問団派遣準備委員会趣旨書」など 4 件のみ。
「祖国」	朝鮮民主主義人民共和国に関する資料や、共和国で発行された資料である。分類が不適切なものが多い。
「南朝鮮」	韓国に関する資料や、韓国で発行された新聞・雑誌、韓・日関係に関わる資料がある。
「写真」	特になし。
「その他」	この項目には、ほかの項目に当てはまる資料がかなり存在する。

(表 3) 「B 教育」の小分類と内容

小分類	内 容
「教育方針」	中央組織から出された教育方針をはじめ、各地の朝鮮学校で作成した年間事業計画書や事業総括報告書が多数を占めている。
「教育権利」	民族教育権擁護運動に関する資料であり、内容別にみると外国人学校法案反対闘争、朝鮮大学校認可獲得運動に関する資料がたくさんある。
「教育内容」	朝鮮学校のカリキュラム、使用教科書一覧、学校案内、学生募集要項、作文集、学校新聞・通信などである。
「教育研究」	各地域で行われた教育研究大会、教育方法研究会の報告集、教育実践に関わる個別論文があり、時期的には 50 ～ 60 年代のものが多く。
「その他」	この分類項目には、各種名簿類（学父兄、生徒、同窓会）や、各地の学校、学級、同窓会、少年団、自治会などが発行した機関紙などが多く含まれている。「B 教育」のなかでも分量が多いが、他の項目に分類できる資料が沢山ある。例えば「教育方針」に分類されるべき「事業計画書」や「事業総括報告書」なども含まれている。

f. 分類別資料内容

■ 「A 一般」

「A 一般」は民族教育関係を除いた在日朝鮮人関係の資料である。小分類 18 項目のうち「会議・方針」（426 件）、「組織・宣伝」（584 件）、「権利」（487 件）に関する資料が多く、この 3 項目だけで「A 一般」に分類された資料の約半数を占めている。（表 2）

■ 「B 教育」

「B 教育」の小分類別資料件数は、「教育研究」が 1,036 件と最も多く、続いて「教育方針」994 件、「その他」980 件、「教育権利」512 件、「教育内容」368 件、「写真」16 件となっている。作成時期としては、50 ～ 60 年代にかけて生産されたものが多い。（表 3）

■ 「C 教科書」

「C 教科書」には、解放直後から 90 年代まで朝鮮学校で使用されていた 23 教科の教科書がある。民族教育の創成期に作成された教科書や副読本などもある。

■ 「D 朝鮮大学校」

「D 朝鮮大学校」は、大学の日誌、各年度事業総括報告書及び計画書、カリキュラム、大学行事、学生生活、国際交流に関する資料など、そのほとん

どが朝鮮大学校内部で作成された資料である。その他にも朝鮮大学校認可獲得闘争に関するパンフレット・ビラ・書籍類、学生の生活、教職員の活動、大学行事などを撮った写真アルバムが多数ある。

■ 「E 布施辰治関係資料」

「E 布施辰治関係資料」は、布施弁護士が手がけた事件・裁判に関する資料である。朝鮮植民地期のもものでは、朴烈・金子文子大逆事件、金祉燮事件（二重橋爆弾事件）、米騒動関連ノートなどがある。

解放後の資料では、1946 年 12 月事件、寄居事件（1947 年 7 月）、深川事件（1949 年 4 月）、平騒擾事件（1949 年 6 月）、三鷹事件（1949 年 7 月）、松川事件（1949 年 8 月）、朝聯解散・財産関係文書（1949 年 9 月）、民青解散関係（1949 年 9 月）、台東会館事件（1950 年 3 月）、学同事件（1950 年 5 月）、都立朝鮮中高級学校弾圧事件（1951 年 3 月）、メーデー事件・枝川事件（1952 年 5 月）、岩村吉松（許吉松）「スパイ」事件（1951 年）、朴春琴訴追関係文書、酒税法違反事件などがある。

(2) 「資料室」開設後に入手した資料（以下、「追加資料」）

a. 「追加資料」の内容と入手経路

「資料室」が開設された後に寄贈された「追加資

料」には文書資料と映像資料がある。

文書資料には、「在日本朝鮮文学芸術家同盟（文芸同）」が所有していた資料、清水澄子氏（元参議院議員）、金守珍氏（元朝鮮総聯中央教育局長）、李沂碩氏（元朝鮮総聯副議長）、洪祥進氏（元朝鮮人強制連行真相調査団朝鮮人側中央本部事務局長）、呂運珪氏（元総聯映画製作所長）が所有していた資料がある。文芸同資料は同団体が事務所を移転する際に寄贈されたものであり、個人の資料は遺族から寄贈されたものである。



追加資料

新たに追加された映像資料は、「朝聯ニュース」（3、6、7、8、9の一部、10、11、13号）、「民戦ニュース」（1号）、「総聯時報」（1～124号）である。いずれも総聯映画製作所から入手した。

b. 整理状況

「開設時資料」の整理で指摘された問題点を改善する目的で「追加資料」から整理方法を変更した。

「開設時資料」のように書架分類法で整理すると、主題を確定し適切な分類項目を付与するための資料解析に時間を要し、内容についてある程度の専門知識を持った人材を常に配置しなければならない。また2つ以上の主題を持つ資料の場合、適切な分類項目を付与できなければ検索不可能になる恐れが生じるとともに、類似する主題をもつ資料が分散してしまう可能性もある。

その他にも史料のコンテキストが失われ、出所が分からなくなるといった問題もあった。例えば李珍珪氏の資料は、「李珍珪資料」としてまとめて保存するのではなく、主題別に細かく分類してしまったため、どの資料が「李珍珪資料」なのか分からなくなってしまった。また資料目録も作成されなかったために、今となっては復元することすら不可能である。

このような問題点を改善するため、資料の出所に基づく整理方法に切り替え、目録作成においては国際標準アーカイブ記述である ISAD (G) 規則を適用することにした。

現在、「在日本朝鮮文学芸術家同盟」関連文書、清水澄子資料、呂運珪資料の整理がほぼ完了している。

(3) 所蔵資料の特色

「資料室」が所蔵している資料の特色は、第1に、祖国解放直後から今日まで在日朝鮮人の権利擁護と祖国統一を実現するための運動を中心となって進めてきた朝聯、民戦、総聯の中央及び各級組織（本部、支部、分会）と、その傘下団体、事業体などが発行した内部資料が多いことである。内部資料とは、大会、会議での報告書・決定書、財政報

告及び予算案、指令・通達文、事業要綱、統計資料や、活動家用の学習資料、学習提講、資料集、大衆啓発用の講義案、講演提講、談話資料、解説資料類のことである。これらは当然のことながら、各団体の内部でのみ閲覧、利用され、ほとんどの文書が一般に公開されることはなかったものである。

第2の特色は、所蔵資料の半数以上が民族教育関係の資料であるということである。該当する資料件数は、「B 教育」(4,016 件)、「C 教科書」(826 件)、「D 朝鮮大学校」(1,144 件)で、合計すると5,986 件、所蔵資料の53.4%を占める。①朝鮮学校の方針、内容、研究、権利に関する資料、②解放直後から朝鮮学校で使用されてきた教科書、③朝鮮大学校で作成された資料などがたくさん保存されている。各地で作成された手作りの作文集や学校新聞・学校通信なども多く所蔵されている。

第3の特色は、布施辰治弁護士が関わった朝鮮人関係事件の文書が原資料で保存されていることである。「明治大学図書館」でもマイクロフィルムで布施辰治資料を閲覧できるが、これは朝鮮大学校の資料をもとに作成されたものである³⁾。

3. 資料の公開と検索方法

(1) 資料の公開

「資料室」は所蔵資料を広く公開し多くの人に利用してもらうことを原則に運営している。しかし

諸事情から、まだ公開できない資料もある。非公開にしているのは、個人のプライバシーに関わるものや、資料発行団体の諸事情により制限されているものである。また「追加資料」は現在公開していないが、準備が整えば漸次公開する予定である。

(2) 資料の検索方法

文書資料は「在日朝鮮人関係資料室全資料データ」台帳(3分冊)か「文書資料検索システム」で検索することができる。動画資料は「動画検索・閲覧システム」で検索・視聴が可能である。

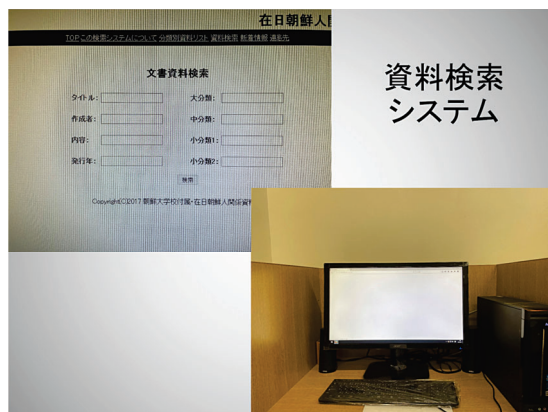
台帳は「資料室」でのみ閲覧可能となっている。また文書・動画の検索システムも「資料室」に備え付けてあるパソコンでのみ利用可能である。

4. 「資料室」設立の意義

「資料室」設立の意義は第1に、在日朝鮮人の資料を系統的に収集、保存する施設がつくられたことである。現在、日本国内はもとより海外においても在日朝鮮人史研究のための史資料を系統的に所蔵している施設はどこにもない。「資料室」開設後、「追加資料」以外にも、たくさんの方から自宅に保管してあった資料や写真などを寄贈していただいたし、資料に関する様々な情報も提供していただいた。在日朝鮮人関係資料の受け皿ができたことで、資料の廃棄や散逸を少しでも防げるようになったと思っている。

「資料室」設立の意義は第2に、今まで在日朝鮮人研究で利用されてこなかった(利用できなかった)在日朝鮮人側の資料が利用できるようになったことである。

解放後の在日朝鮮人史に関する具体的史料を使った実証的な研究が始まるのは1970年代からであり、代表的なのは1976年に在日朝鮮人運動史研究会を発足して始められた朴慶植氏たちの研究である。1990年代以降はそれまでの研究を前提に、研究が細分化していき、国立国会図書館憲政資料



室所蔵の GHQ/SCAP 文書や外務省外交史料館の公開文書をもとに、GHQ や日本政府が「在日朝鮮人問題」をどのように見ていたのかという研究が進んだ。近年では、各地方の公文書館が所蔵している行政文書を手掛かりに、当時の状況をより正確に突き止めていく研究も行われるようになった。

しかし従来の在日朝鮮人史研究では、当事者の意識や主張を捨象して「在日朝鮮人問題」の歴史として認識する、いわゆる「在日朝鮮人問題」史観の問題性が指摘されていた⁴⁾。この「在日朝鮮人問題」史観を克服するためには、主体であるところの在日朝鮮人自身がどのようなことを考え、何を行ってきたのか、具体的な諸問題に直面するなかで、それがどのように変化したのかを把握しなければならない。それを明らかにするうえで「資料室」が所持している、在日朝鮮人自身が生産した 1 次資料は大変重要だといえる。

5. 今後の課題

1 つ目の課題は、所蔵資料の価値や意義を明らかにしていくことである。資料を骨董品のように所持しているということではなく、その資料が具体的にどういった意味があり、いかに大事か、またそのことによって何が明らかにできるのかを示していくことが重要だと考える。また、所蔵資料をもとにした研究、討論を深め、在日朝鮮人に関する歴史像を豊かにして行くことが求められている。そのためにも今後「資料室」では所蔵する史資料をもとに「史料研究会」を重ね、その成果を朝鮮大学校の『学報』に発表していきたいと考えている。

2 つ目の課題は、継続的に史資料を収集していくことである。資料収集と関連して大事なものは、資料の所在情報をつかんでおくことだ。また資料収集対象を拡大していくことも課題である。現在所蔵している資料は主に解放後のものであるが、解放前の在日朝鮮人の生活や運動にかかわる資料

や、関東大震災時朝鮮人大虐殺、強制連行関連の資料も集めていかなければならない。さらに、運動経験者からのヒヤリング、一般の在日同胞のように特に文書にならないような人たちの体験談も聞き取っていく考えである。

3 つ目の課題は、資料の経年劣化に対する対策である。そのために「資料室」で進めているのが、資料のデジタル化である。また一部の資料に関しては『資料集』の刊行も考えている。

4 つ目の課題は、オンライン検索システムの構築である。現在「資料室」でのみ利用可能となっている資料検索システムを、今後は学内外で利用できるようにすることが課題である。将来はデジタル・アーカイブを創設して、いつでもどこでも資料を検索し、閲覧できるようにしたいと考えている。

5 つ目の課題は、「資料室」の維持、管理に必要な財政の確保である。現在は在日同胞たちの援助をうけながら大学が自律的に運営をしているが、資料の収集・保管やデジタル化のための予算は十分とはいえない。今後は自律的運営を原則としながらも、より広範な支援を受けられるよう努力していきたい。

6 つ目の課題は、各地に散在している資料館同士が連携を図り資料収集や交流を促進していくことである。現在、在日朝鮮人関係の資料を所蔵している施設が散在している。例えば朝鮮総聯中央本部にある「在日朝鮮人歴史研究所」には、約 1 万 7 千点の資料があり、また元活動家 90 人からのヒヤリング資料もある⁵⁾。滋賀県立大学の朴慶植文庫には整理されている分だけでも 2 万 6 千点の資料が所蔵されているという。

これらの資料館が相互に交流することで、所蔵する資料の情報や、その資料をどう扱うのか、またどう保存していくのかなど、互いの関心事を話し合える場をつくりたい。また行政文書の公開などにおいても連携していくことは可能だと思う。さらには南北朝鮮や中国にある資料館をはじめ各国の資料館との連携も視野にいれていきたい。

2012 年、朝鮮大学校で「資料室」開設記念シン

朝鮮大学校朝鮮問題研究センター付属「在日朝鮮人関係資料室」利用案内

◆利用資格者

1. 朝鮮大学校の教職員、学生
2. 朝鮮大学校の卒業生
3. 一般の方（資料室長が認めた者）

◆利用手続き

- ①利用資格者3に該当する一般の方は、事前に所属の大学図書館または公共図書館を通じて閲覧申請（利用目的、利用日時など記入）を行う。利用可否については後日、資料室より図書館に回答する。
- ②利用時に、身分証の提示と所属する大学図書館または公共図書館の「紹介状」を資料室に提出する。

◆開館時間および休業日

平日 9:30～12:00、13:00～17:00／土曜日 9:30～12:00

休館日 当大学の年間日程で定めた休日に準ずる。（日祝日の他に休日があるので必ず確認を）

＊なお、専従職員がいないので、開館日、利用時間範囲であっても利用できないこともある。

◆閲覧およびコピー

- ・資料の閲覧は閲覧室のみとなっており、貸し出しはしない。
- ・コピーは「資料室」職員が行う。（著作権法の範囲内で複写は可能。資料の状態によっては認められない場合もある）なお、資料の撮影などは原則お断りしている。

◆問い合わせ先（朝鮮問題研究センター付属「在日朝鮮人関係資料室」）

〒187 - 8560 東京都小平市小川町1 - 700

✉ アドレス kucks@korea-u.ac.jp

FAX 042 - 346 - 0405（直通）

TEL 042 - 346 - 0414（直通）／042 - 341 - 1331（大学代表）

ポジウムを行った際、このようなシンポジウムを継続して行っていくことが大事だという意見を多くいただいた。あれから11年、遅きに失した感はあるが、ようやくこのような会合（国際高麗学会日本支部・立命館大学コリア研究センター共催シンポジウム「アーカイブの中の「在日」」）が実現したことは、大変意義深いことだと考える。今回のような会合を一過性で終わらせるのではなく、これからも在日朝鮮人関係資料に関する情報交換や連携を深めることを目的とした「協議体」のようなものを立ち上げてはどうかということを提案して報告を終わりたい。

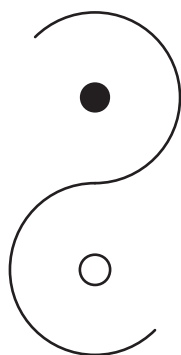
注

- 1) 同研究所は「朝鮮問題研究センター」内の「民族教育研究室」に改編された。
- 2) 石巻文化センター所蔵・布施辰治資料研究準備会編『布施辰治 植民地関係資料集 Vol.1 - 朝鮮編 -』（2002年）には、布施辰治弁護士のご長男である布施柑治氏が寄贈されたと記されている。
- 3) 朝鮮大学校図書館と布施辰治の母校である明治大学図書館とが提携し、当校所蔵の資料を明治大学図書館がマイクロフィルム化したものである。しかしすべての資料を撮影したのではなく、当校が所蔵している306タイトル資料のうち、131タイトルの資料のみを撮影した。ちなみに「明治大学図書館」では、「朝鮮大学校所蔵 布施辰治弁護士関係資料」（全27巻、11,506コマ）、「朝鮮大学校所蔵 布施辰治弁護士関係資料：米騒動関連」（全7巻、5,186コマ）というタイトルで検索することができる。

- 4) 鄭榮桓 (2013) 「在日朝鮮人史研究とアーカイブズ
ー解放後史を中心にー」『朝鮮大学校 学報』
No.23、朝鮮大学校 2013 年、p35.
- 5) 『朝鮮大学校 学報』 No.23、朝鮮大学校 2013 年、
p41.

特集

出会いの場を残し、 発信する —ウトロ平和祈念館



全ウンファイ
孫片田晶

キーワード：ウトロ地区、多文化共生、コミュニティ・ミュージアム、京都府南部地域、社会運動

1. はじめに

京都府宇治市の一画にあるウトロ地区は、戦時中の軍事飛行場の建設に集められた朝鮮人労働者の飯場（共同宿舎）がその起源となっている在日朝鮮人集落である。1980年代末に起きた土地の権利の問題のために、ウトロの人々は長年の苦労を重ねてやっとの思いで築いた生活を否定され、地上げにより立退きを迫られた。それ以来、社会に在日朝鮮人の歴史を問うてきたまちである。

2022年4月30日、このウトロのまちに「ウトロ平和祈念館」が開館した。祈念館前のちょっとした広場には住民と支援者に加えて、当時在大阪韓国総領事の趙成烈や宇治市長の松村淳子のほか、総連と民団の京都府本部と京都府山城広域振興局の代表者など自治体レベルの関係者が参列し、互いの言語でウトロに同館が設立される「国際的」「民間交流」の「多文化共生」の意義を語った。幕の裏では、背景様々なボランティアスタッフが式典の準備に奔走していた。複数のマスコミに囲まれた当時の様子を、毎日新聞では「在日の歴史伝えるウトロ平和祈念館開館—日本人とコリアン交流の場に」とまとめている¹⁾。

ウトロ平和祈念館（以下、UPM）は一般財団法人

人ウトロ民間基金財団（以下、民間基金財団）が運営する民間施設として、在日朝鮮人住民の歴史を地域レベルにおいて伝え、市民間交流を促すという二つの目標を掲げているコミュニティ・ミュージアムである。その展示運営では地域住民としての在日朝鮮人に焦点を当て、生活の場で培われた多文化共生の経験を記録すると同時に、ともに出会う場の保存と創出に取り組んでいる。

以下では、UPMの現状を設立過程と展示構成から検討した上で（2章）、在日朝鮮人の歴史化の視点としていかなる多文化共生の発信が図られているかをその課題点とともに検討する（3章）。続いてウトロの女性たちをテーマとした第2回企画展示を紹介したい（4章）。「ウトロに生きる・ウトロに出会う」をテーマに掲げて出発したUPMは、開館から2年経つ現在、実際に日々様々な人々が集い、つながりが生まれる出会いの場となっている。

2. ウトロ平和祈念館の設立過程

（1）設立背景と経緯

UPMはウトロ住民とその支援者による居住権運動の一環として計画され、居住の問題が一段落した後の新たな課題となっている。本節では背景として、ウトロ地区の歴史とその居住権運動の取り組みにおけるUPM設立の経緯を詳説する。全体の時間軸に関しては表1を参照いただきたい。

ウトロ地区は、戦時中に着工した京都飛行場建設計画を由来とする。敗戦に伴う建設中止により失業した朝鮮人労働者およびその親族が現場に残され、その飯場跡を中心に朝鮮人のコミュニティが形成された。終戦後、都心部を中心に広範囲に形成されたいわゆるバラック街の一種である。当時の住宅難を背景に、自助の住居として生まれたそれらは、戦後復興期の都市再建の中で「不法占拠」として名付けられ、各地で消滅していったが²⁾、ウトロは周辺の市街地化以後も終戦以降の状態が存続した。その帰結として、上下水道などの住環境インフラの未整備の中で住民の生活が継続される一方、土地所有権は建設計画を管理していた国策会社の資産を移した民間会社から1962年に(株)日産車体に帰属された。

しかし、状況はバブル期に急変する。地価高騰と土地の横行がピークに達していたその時期に土地が日産車体から転売され、1989年2月、新地権者のペーパーカンパニーがウトロ住民に対して立ち退きと土地の明け渡しを求める民事裁判を起こした。最終的に68世帯69人が提訴されたこの問題に対して、住民は日本人市民を中心とする支

援者（以下、支援者と記す）とともに居住権確保のための運動に取り組んでいく。支援者は1980年代半ばからウトロ地区の水道未整備に関して行政に異議申立てを行っていた。

ウトロ地区を在日朝鮮人の歴史を残す場とするアイデアは、裁判が最高裁上告棄却として終了し、運動が危機の局面を迎えた2000年以降に浮かび上がった。後述するように、運動の過程で在日である自分史を語り、在日の文化的シンボルを身につけて発信する住民が増えていた。そのような中、住民と支援者は「ふるさと」であり「みんな『私』だと知っている」「離れたら私は私でなくなる」といった住民や家族を超えたコミュニティとしての重要性を認識し³⁾、強制立ち退きに対する国際人権法上の「居住の権利」に立脚して、住民をまちづくりの主体とする住環境整備事業の適用を解決案として練り上げた〔斎藤 2022〕。

上記のアイデアは、2005年以降、韓国市民との連帯運動の中で一機に具体化される。オフラインとオンラインの両方で進められた韓国での支援の中で、ある市民ブロガーが平和ミュージアム建立を提案した。それがオンライン上で広まり、市民

表1 ウトロ地区と平和祈念館に関する年表

1941	京都飛行場建設のために日本国際航空工業株式会社が設立
1943 頃	京都飛行場建設に労働者宿舎（飯場）が形成
1945	敗戦により建設中止・GHQによる既存施設の接收
1949	国策会社の資産を新法人に移す
1953	新法人と日産グループ連携（1962年に吸収合併）
1986	ウトロに水道敷設を要望する同胞の会と市民の会発足
1989	新地主が立ち退きと明け渡しを求めて住民提訴／「ウトロを守る会」発足
2000	最高裁判所の上告棄却による住民側の敗訴確定
2002	ウトロまちづくりのスローガン「われら、住んで闘う！」を表明
2005	韓国の在外同胞支援団体 KIN がウトロ支援を始める。連絡会「ウトロ国際対策会議」結成
2007	韓国政府と国交省が住環境整備に対する支援を決定
2012	住民コミュニティ持続のための定例茶話会「ウトロ喫茶」が始まる
2015	宇治市による住環境改善事業が始まる
2018	市営住宅1期棟に住民入居、両国の市民運動で平和祈念館建設準備のスタート
2022	ウトロ平和祈念館開館

によるウトロ支援策に盛り込まれた。2007年11月、オンライン上の輿論を追い風に韓国政府がウトロ地区の土地購入金額の一部支援を決定すると、購入予定地における代替共同住宅建設を骨子とする住環境改善事業が国土交通省・京都府・宇治市の同意を得て見込まれる運びとなった。また、2010年1月にはそれまでの市民募金による平和ミュージアムの併設が居住権運動のアウトプットとして提案され、日韓両方の支援者からなる民間基金財団が設立された⁴⁾。

建設案が現実的に動き出したのは住環境改善事業で代替の公営住宅が竣工され、住民の入居が始まった2018年である。日韓の支援者は、居住権運動の延長線上としてその出資と運営にかかわる役割をそれぞれ担っていった。

韓国側の支援団体 KIN（地球村同胞連帯）ではそれまでのウトロ支援連絡会の「ウトロ国際会議」（2005～2012年）をもとに「ウトロ歴史館のための市民の会」を結成し、建立のハード面の支援に取り組んだ。ソウル市の非営利民間団体公益活動支援事業を受け「日本内最後の朝鮮人集落ウトロの歴史保存と韓日市民の歴史教育のためのデジタルアーカイブ構築」を始めると同時に、韓国の市民社会と連携して UPM 建立の市民輿論を喚起するための募金キャンペーン「忘れないよ、ウトロ」⁵⁾を実施した。これらの成果により2018年末には韓国政府の「3・1運動および大韓民国臨時政府樹立100周年記念事業」を受け概ねの建設費用を調達した。

日本側の支援団体「ウトロを守る会」とウトロ地区内の民族団体である総聯系の南山城同胞生活センターでは2018年6月、民間財団内に建設準備委員会を発足して建設計画から展示運営に至るソフト面の実現に拍車をかけていった。準備段階で特に大きな役割を果たしたのは、地区の公営住宅化と集会所の解体を見越して2012年から定期開催している「ウトロ喫茶」と UPM ボランティアの取り組みである。

ウトロ喫茶は、住民どうし、そして住民と支援者間のコミュニティを保つ目的で始まったが、そ

の生活と運動の歴史化では住民の声を展示に反映する窓口としても活用された。さらに、ボランティアを核とする運営の仕組みをつくり、まずは地元を中心に参加を呼びかけた。支援の裾を「社会運動」から「地域活動」へと広げたのである。これは単なる増員ではなく、ボランティアスタッフの日々の市民活動やそこで培っている人的ネットワークにつながるきっかけにもなっている。アイデアそのものも、自主運営の仕方を模索する中で、他県の市民ミュージアムから学んだものである。

このように、地域から韓国の市民社会に至る重層的な市民ネットワークのかかわりの上で、UPM は2022年4月30日の開館日を迎えた。4月30日から5月5日までの5日間進められたオープンイベント「ウトロウィーク」には、ボランティア約160人がかかわり、全国から約2200人が訪れた。2024年2月17日現在の入場者数は約23000人である（いずれも延べ人数）。

（2）生活と運動の歴史をいかに保存するか

先述の通り、UPM は在日朝鮮人であり地域住民であるウトロの人々の歴史を記録・展示し、なおかつ、住民どうしと支援者、支援者どうしの出会いや連帯を図る場として開館した、住民／市民運動の継続中のプロジェクトである。支援者側はこの点を強く認識し、UPM のスローガンを「ウトロに生きる・ウトロに出会う」とした。以下では、上記の目標がいかに具現されているかに焦点を当て、UPM の施設として仕組みと常設展の展示の構成を設立過程にあった議論を交えて詳述する。

①施設の仕組みと現状

UPM は約840㎡の敷地に、3階建ての建物（床面積約150㎡）とその南方の長方形に広がる外部スペースで構成されている。建物の2階と3階が展示用、1階と屋上部は共用施設である。外部スペースは多目的で、平素は駐車場と外部展示施設が設けられ、時には1階とつなげて交流スペースとして使用される。1階の多目的ホールは、それまでのウトロ地区集会所の機能を受け継ぎ、「ウト

ロに出会う」を充実させている。事務所、会議や学習会などができる小さなホール、そしてキッチンは「ウトロ喫茶」の新たな会場として、住民や支援者、ビジターが交わる休憩スペースとして、新設した図書コーナーとともに在日朝鮮人やマイノリティ、市民活動に出会う場としての機能を持たせている。

このような施設をまわしていくのは上述したUPM 設立準備以降のボランティアスタッフである。居住権運動の支援者 12 人に周辺地域に住む 3 人が加わった運営部会スタッフを中心に、性別や年齢、ルーツ、民族的アイデンティティなど、背景様々なボランティアがシフト制で柔軟に施設運営にかかわっている。登録者や実働数の変動が大きいため正確な数字の把握は困難であるが、2024 年 2 月 17 日現在の登録者は約 160 人で、月ごとのボランティア数は約 35 人である⁶⁾。

UPM スタッフ 30 人を対象に実施したアンケートでは、スタッフの年齢やルーツは様々で、朝鮮へのルーツは共通する属性ではない。居住地域で見ると、40%が地元のウトロ地区付近から参加しており、大阪府からの参加も目立っている。職業は主婦、大学の教職員や学生、公共団体職員あるいはその退職者など、従来の市民運動の担い手に多い職業がみられ、73%がボランティアからカンパなどの別の社会貢献活動を並行していた。

表 2 UPM スタッフの属性に関する調査結果

年齢	～10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代～
単位 (%)	3	13	10	20	13	23	17
アイデンティティ	単位 (%)		地域（居住地）			単位 (%)	
日本人	67		ウトロ内			0	
「在日」	17		ウトロ近郊			40	
上記以外	13		上記以外の京都府			27	
複数回答	13		大阪府			33	
関わり始めた時期							単位 (人)
～1990	～1995	～2000	～2005	～2010	～2015	～2020	2021～
3	3	0	2	1	1	2	18

* 筆者によるアンケート調査から（調査期間：2023年3月16日～4月30日）。紙面とオンライン（forms）を併用した。回答者数は30人で、うち運営部会スタッフが9人、ボランティアスタッフが21人であった。

ボランティア制度にも窺えるように、UPM 運営の仕組みとして重要なのが地元から国際レベルに至る多様な市民ネットワークとの連携である。教育、人権、環境などの様々なテーマで活動している支援者が互いにつながり、その複層的なネットワークが外部講演や見学案内を通じてさらに広がっている。なかでも「川崎市青丘社ふれあい館」との交流会や地域の中学・高校との連携は、生きたコミュニティの歴史を共有することで、自主的な「住民」どうしのつながりを創出する動きとして評価できる⁷⁾。

②展示構成の特徴と限界

以上のように、UPM はウトロ地区の在日朝鮮人コミュニティの記録だけでなく、その日本社会における存続を目指している。このような視点は展示構成にも大きく投影された。UPM の背景様々な支援者たちは、ウトロの経験を日本社会に残し、生きたものとして継承できる展示内容を、対話を重ねて考えていった。具体的には、在日朝鮮人のことを知らない中高生にもわかりやすい、生活と運動の歴史を表現することが目標となった。

そのため、常設展はウトロ地区の形成から現在までのストーリーを軸に構成されている。全体を4つのチャプターに分けて1～2章が居住権運動以前、3～4章がそれ以降を扱っている。

1章ではウトロ地区形成の背景を日本帝国の植民地支配から解説し、2章でもウトロ地区での民族教育や生業、生活上の困難などを扱いながら、背景として在日朝鮮人の民族教育と就職差別の問題を紹介している。全体のストーリーは、在日朝鮮人がおかれた多様な社会的構造の中で、住民1世が中心となって築いた家族やコミュニティに焦点を当てている。図1は、厳しい環境の中でも住民どうしが助け合って生活する様子を象徴している。

3～4章では、1989年からUPM 設立前までの長年のたたかいを扱っている。住民と様々な支援者との出会いや運動の境界を越えた広がり、その中での住民側の変化に焦点を当て、住民が地区内か

ら地域、日本社会、海外へ自らを発信していく過程、支援者が自らの問題としてウトロ地区に向き合う過程、住環境改善事業後も持続するコミュニティの様子を豊富な写真資料と当時の住民の一言を添えて伝えている。膨大なストーリーの締めくくりは、住民と支援者の壁いっぱいの笑顔のコラージュである。

来館者は、展示の入り口に示された「在日朝鮮人の厳しい歴史の中、『われらここに住んで、ここでたたかう』と最後まで貫き通した住民たち、その住民たちに寄り添い懸命に支えた市民の運動の記録」をなぞっていき「顔上げて前向いて歩きや」というメッセージで観覧を終える。

以上のように、常設展の展示構成は在日朝鮮人の民俗的な特徴やそれらを伝える実物展示より、エスニック・マイノリティのストーリーの伝達を中心に構成されている。そのストーリーは、身の

回りの他者の存在を社会構造的に想像すること、なおかつ、当事者や支援者を問わずそれに向き合ってともに助けあっていくことへのエンパワーメントを図っている。

このような構成は、現在の運営部会を構成する従来からの支援者の議論と、住民との意見聴取を重ねてつくられた。一方、全体のストーリーでは「苦しい状況にあり、立ち向かう1世」という特定の集団像が浮かび上がり、それぞれの立場や葛藤など、生身の人間としての住民の多様かつ豊富な生活像に注目されにくい側面もある⁸⁾。住民の生活像とかかわる実物展示として外部展示施設の飯場などがあるが、それが伝える生活像は上記の1世像に重なる。このような展示の内容と歴史の継承課題について、その制作に関わった人々の思いにもふれながら、次章でより詳しく見ていくことにしたい。

3. 社会の財産としてのウトロの闘いの継承（常設展示）

（1）ウトロの人々の格闘の歴史を継承していくこと

先述のとおり、展示内容の制作には南山城同胞生活センター専従職員と「ウトロを守る会」の結成（1989年）当初からのメンバーや筆者らのように十数年前からのメンバーなど約10人が参加した。在日朝鮮人関係の活動家、1級建築士、歴史・社会・居住福祉の研究者などが含まれている。各人の時間的制約や闘病などによる参加の困難があり、また、草案の執筆は一部のメンバーが担ったけれども、その「たたき台」を出発点にできるかぎり全参加者で思いを話し合いながら具体化された。

このチームのメンバーは、ウトロに関わる運動や活動の過程を共にする中で、お互いの声を聞きあってきた間柄であった。そのため、展示で何を伝えたいかということについて既に基本的な問題意識や思いを共有していた。また細部のすり合わせのベースとなる、互いの関わりや背景への知識



図1 井戸端でおしゃべりするオモニたち
ウトロ平和祈念館提供

も有していた。したがって、困難はむしろ、これまでの講話や案内では経験豊富なメンバーがその時々聞き手や文脈に応じて伝える内容や伝え方を組み立ててきたのに対して、今回は固定された展示の形で、しかも日本社会の一般的な認識状況を広く想定して表現しなければならないという点にあったように思われる。こうしたミュージアムでの展示の制作については全員が素人であった。

そうした中でウトロの人々と運動の足跡の数々の物語を取捨選択しつつ縮約して提示内容を固めていく作業が行われた。ときに細部においては見解が食い違い、最後は「誰々さんがそう考えるならもうそれで行こう」というような決着のつけ方をしたこともあったが、会議の場は、これまでウトロに深くまた日常的に関わってきたメンバーたちの思いを中心に、展示に込めるべきと考える内容の深い一致や重なり合いが確かめられる場となったと感じられる。それは、第一に、ウトロの人々が戦前から継続する抑圧的な構造の下で、力強く豊かに生きてきたこと、そのコミュニティの暖かさを力としながら、土地問題という更なる困難に見舞われても「住んで闘」い抜いたこと、こうしたウトロ住民の奮闘をそのまま多くの人に伝えたいということだった。また、第二のテーマとして、現在に続く連帯と支援の輪の力強い広がり、つまり、30 数年にわたる闘いを住民とともに歩んだ中核的な支援者の存在をはじめ、土地問題の不正義を見過ごせないと行動した日本、韓国、またその他の地も含む多くの人々とウトロ住民の連帯と支援の歩みを伝えたいということだった。

第一の内容について述べると、ここでのウトロ住民とは、政府や企業など社会ぐるみの大きな不正義に対して屈せぬ意思をもって抵抗した人々であり、その姿が尊敬や熱い共感を呼ぶような人々であるが、同時にごく普通の、身近な生活者であるような人々たちである。このようなウトロの人々の頑張りを多くの人に伝えることは、見る人が日本社会の歴史としての在日の歴史への認識を問い直す契機となるべきであり、また同時に、それぞれの人が今現在生きている中でぶつかる困難や悩

みとの関係でも何か勇気をもってもらえることになるかもしれないと考えられた。

そもそも戦前の飯場にルーツを持つウトロの人々は、戦後の厳しい時代に自らの手で築き、人によっては40年以上もそこで助け合って生きてきた、そのような地から立退きを迫られたのである。そのウトロの人々、とりわけ先行の世代に言い尽くせぬ苦勞をさせたのは、植民地時代から継続する日本社会の差別と排除の構造であった。そのためにこの集落・コミュニティは一層重要なものだった。ウトロの人々の歩みを現在展示することは、強制立ち退きは正当だったのか、日本社会はそれで良かったのかと、見る人々にもういちど問いかける行為である。

過去のウトロの運動では人々が住民の人柄や言葉、生活にふれるということが大きな役割を果たしてきた。支援者は、社会の人々がウトロを見に来て住民の話を聞けば、それだけでもう本当に多くのことが伝わるということを確認していたし、実際にそうした無数のフィールドワークが支援の輪を広げた。ただし、UPMは立派な建物はあったとしても、数々のフィールドワークで来訪者を迎えた高齢の住民の多くが亡くなってしまった後で、また、ウトロの生活の困難と力を語ってきた家々や街並みが解体され更地になっていく中で、こうした役割を果たさなくてはならない⁹⁾。

このような思いから、展示では、植民地期の歴史についての最低限の内容に続いて、戦後の住民の暮らしの章や運動の章において、住民の顔写真と吹き出し形式での語りの紹介をはじめ、住民の日々の生活の様子が伝わる記述や具体的な行動の記録が多数配置されている。UPMの展示の稀有な特徴として、このようにウトロ住民の個々人の姿が時には実名入りで登場している。これはウトロの土地を守る運動を担う中で、個々のウトロの人々が市民聴衆の前に立ち名を名のり自らの思いやライフヒストリーを語り、主張と交流をしてきた蓄積によるものである。後述の京都の「女のフェスティバル」での活動にあるように、聞き手からの応答を信じて「身をさらして」語ってきた住民

の足跡が、UPM でのこのような展示を可能にした。

展示の完成後には、過去の運動を担った住民たちが自分や友人の写真の前に立ち、じっと眺めたり感想を口にしたりしていた。その後も住民が館内案内に加わる機会にはそうした様子が見られる。また、彼女ら・彼らは1階ホールで来館者たちちょっとした会話をしたり、頼まれて住民として話をすることもあるし、講演・ガイドをする者が講話をしている横に当人たちが居合わせることもある。彼女たちが面映ゆげな様子で、あるいはユーモアを交えながら、来館者の前に立つことは、過去の運動で社会に向かって自らの思いを訴えた経験の延長にある。もちろんこうした交流がいつもあるわけではないが、常設展示だけからでも、個々の住民の姿や語りの存在感は大きいようである。ウトロの住民として格闘した人々の誇りや力強さが、それを取り巻いていた社会の不当性を含めて、展示を見る人々に受け止められ、鮮明な印象を残していることが、多くの感想に感じられる。

その一方で、過去の運動の刊行物などで多くの住民によって語られている事柄であっても、UPMの展示には十分に落とし込めなかったことも多い。そのひとつが、土地問題に限らない戦後の日本社会の一般的な社会状況・社会構造としての差別・抑圧の厳しさの歴史であり、また、その中で労働をはじめとする個々の住民の生活の奮闘の様々な様相やそうした立場を生きてきた者（在日朝鮮人）としての思索を経て生まれた思いや言葉などである。

「ウトロを守る会」の機関紙「ウトロニュース」には、土地問題に直面した住民の思いとして、「〔飯場の屋根に〕 コールタールを塗って雨露をしのいだ。朝鮮人差別の中で働いて働いてやっとひと息つけると思ったらこの地上げだ。侵略戦争の張本人である日本政府を相手に補償を求める裁判はできないのか?」といった声が様々に拾われ発信されている〔「ウトロニュース」no.3, 89年6月〕。法廷での意見陳述で述べられたように、ウトロはそこで生まれ育った人々にとって両親・祖父母世代

の「血と汗と涙のしみついた」土地であった。だからこそ立退きが不当であると訴えたのである〔no.2, 89年5月〕。裁判の敗訴の後の高齢女性たちの座談会では「お父さんお母さんの苦労も見ているだけに、金もうけのための地上げ屋に味方する判決が出て残念で残念で涙が止まらなかった」と語られている。結婚などを期にウトロにやって来た人々も同じであり、「小さい時から差別されて、一生懸命働いて生き抜いてきたんやもん。意地張って生きてきたから根性だけは負けへんよ」というように、日本社会で生きてきた人生があった〔no.32, 97年4月, no.34, 98年3月〕。

つまり、ウトロの人々にとって土地問題は最大の苦難であったが、日本社会の問題はその前からずっとあったのである。「地上げ屋のトラックが来たかて、怖いことはありません。いやってひどく苦労してきたわけやから、そんな簡単にいきません」という「ウトロのオモニ」の語りがあるように、立退きへの抵抗もそうした連続性の中にあった。ウトロの人々は男性も女性も必死で働いてきた日々の生活や労働について過去の運動の過程で語り、こうした連続性を表現してきていた。当時の比較的若い世代の住民が在日としての自身の経験やウトロのまちの意味を日本社会に伝えようと記した文章を見ても、差別の中を生きてくる中でその人が培った考えが語られている〔ウトロ町内会・守る会制作のパンフレット「MESSAGES from ウトロ」1990年〕。

このように、ウトロの人々が単に居住の危機に見舞われた人々としてではなく、在日として日本社会に対して声をあげたということ¹⁰⁾の意味や、その日本社会の構造的な不正義がどのようにつくられ多くの日本人と関わっていたのかといったことについては、展示で十分に主題化されているとは言えず、多分に見る人の問題意識にゆだねられている。このことは在日朝鮮人についての表現が、現在もなお日本社会の一般的な言説空間に大きく規定されるほかないという現状の一面であると言える。ウトロの人々の生身の人間としての多様かつ豊かな生活と主体の姿の背景には日本社会の歴

史的な条件があったが、そのことが忘れられがちな社会の現状があるため、展示に表現、伝達することも制約を受けざるを得ないのである。来館者の感想の中にまれに制作側の意図とは大きく異なる歴史認識がみられることがあるが、そこにはウトロの歴史というよりも日本社会と在日の歴史についての社会構造的な理解の欠落が読みとれる。

だが同時に、このような現状があるからこそ、ウトロの歴史が在日のアーカイブとして担うべき重要な領域があるとも言える。たとえばアメリカ社会においては、公民権運動やブラック・パワー運動等々が豊かに記録継承されてきた中で抵抗者であり普通の人々でもあるような多様な主体の足跡が語られ学ばれる環境が成立しやすい。しかし、これまでの日本社会と在日の歴史においては、ウトロの人々が語り、社会に問いかけたような在日の頑張りや闘いをこの社会の歴史であり財産として認識することは容易ではない。UPMの挑戦は、在日のアーカイブのひとつとしてこのような現状を変えていくことにあるのではないだろうか。

常設展示の限りあるスペースに盛り込めなかったことの中で、展示制作チームの間でしばしば話題となっていたことのひとつが、ウトロの女性たちの活躍であった。「なんといってもウトロのパワーの源はオモニ達」と言われてきたように、パレードの先頭でも、縁の下でも、ウトロの運動の重要な担い手は女性たちであった。このことは常設展示の写真からも明らかであり、見る人には女性たちの葛藤や喜びも含めて、写真から伝わるものも多いと考えられる。しかし、彼女たちの冒険はもっとスペースをとって共有されるべきという思いから、第二回企画展「われら奏で闘う——女たちの農楽(농악)」が制作された。これについて次章で述べたい。

(2) 連帯と支援の核となった担い手の像について

ウトロの歴史はウトロ住民の歴史であるとともに、連帯の歴史、草の根の人々による支援の力の記録としても継承されるべきであるという意見は展示の準備段階で様々に聞かれた。実際この意図

は多くの写真や解説文に反映されているが、以下の2つの点で展示には限界もあることも述べたい。

ひとつは、日本人市民が発足させた「ウトロを守る会」の人々のこと、守る会と住民の深い関わりについての言及が多くはないため、その歴史の継承は口話ガイドに依存する形になっている。これは守る会の先輩メンバーたちが守る会についての言及はとにかく小さくしてウトロの住民について多くを伝えたいと考えたことや、制作時点で「連帯」(出会い、つながり、ともに闘い歩むこと)を明確な展示のテーマとして位置づけられていなかったためである。しかし、現在そして今後の日本社会が、たとえば「多文化共生」という言葉で、構造的な不正義の緩和を、草の根の多くの人々の関与の中で目指していこうとするのであれば、ウトロの連帯の歴史は財産となるはずである。

守る会の前身やその前身の活動の背景には1970年代以降の日本社会の市民運動がようやく実際の在日の生活、そしてその背景にある日本人と日本社会の構造的な問題に出会っていく過程があった。そうした中で守る会の人々はウトロの人々に出会い、民族に限らない階層やジェンダーなどの重層的な差異も含めた互いの立ち位置の違いや接合のされ方についての多くの気づきの中で関わりが築かれ、それがその後のウトロの運動を支える力となった[全2022]。「越境的な連帯」という言葉は、ある人々が社会の中で自らの抱える痛み、怒り、また変革の意思を言葉や行動で世界へ送り出し、それが誰かに受け取られ、「人びとのあいだで想いの共鳴と連鎖が起こり、新たな関係や主体性が生み出されていく」過程を指すという[大野・小杉・松井2022: 6]。守る会とウトロ住民の関わりはこうした言葉にふさわしい結び付きと変革の力をもっていた。

この連帯は、単に運動の数々の成果を生み出すものであっただけでなく、お互いに学び変わっていくという関係性であった。守る会代表の田川明子さん(現UPM館長)がよく語ってきたように、守る会の人々はウトロの人から多くのことを学

び、自分の日本人としての社会的位置に向き合っていた[全 2022; 中村 2022]。ウトロの人にもまた出会いを通して大きく変わったという。ウトロ農楽隊のリーダーであった洪貞子さんは、京都の女性運動グループが好き好きに企画を持ち寄る祭典「あなたがつくる女のフェスティバル」でウトロ女性たちが力強い問題提起を行った後の感想として、「実は2～3年前まではこんなことを言える私ではなかったんです。まわりに対してすごく消極的であったと思うんです」と振り返り、土地の問題に迫られて多くの日本人の個々人と出会いともに行動してきた中で自分が大きく変わったことについての思いを語っている[no.9, 90年4月]。「私自身にとって、この出会いというのは、自分の人生感、あるいはものの見方、受け止め方、そういう価値観を大きく変えるきっかけとなりました」と表現している[洪 1992: 148]。

このフェスティバルへ出て行き、日本人の聴衆の前で自分の来歴や思いを語ることが当初躊躇していた女性たちの背中を押したのが、洪さんの「偏見があるならあるで、差別があるならあるで、そこに身を晒していかないことには、互いに分かり合えないんじゃない？」という発言であったことはウトロですずっと記憶されている。本当に多くの場所にとともに出かけいき語り合った守る会とウトロ住民の関わりは、ウトロの人々が社会に向かって語るときその声が聞かれると信じることができる大事な契機となった。そこからもっと広い社会へ届く動きがつくられていったのであり、ごくあたりまえの小さな出会いが持つ力を伝える事例と言える。

展示では必ずしもこうした物語が共有されていない。しかし、関連するニーズをもってUPMを訪れる来館者には、鮮明に受け取られるメッセージがあるようである。初期の感想の中で、先述のような歴史の学びに様々な言及してくれた多くの感想も嬉しいものだったが、「自分は在日三世ですが、勇気が湧いてきました。またそれと同時に、韓国人と日本人の連帯も可能で、それにも勇気がわきました！！」と書いた在日の青年や、「在日の彼

と結婚が決まり、彼のルーツや大切にしたいことを一緒に学ぶため来館しました。私の日本の家族ともまた来たいです！」と書いた日本人の女性の声などが、筆者らにとって格別に嬉しかった。

最後に、連帯と支援の核となった担い手像についての展示の限界の2点目として、民族団体の活動の重要性がほとんど語られていないことがある。ウトロの人々にとって地区内にある民族団体(南山城同胞生活センター)の建物はまちの広場の風景である。その担い手と住民の間に築かれてきた関係は土地問題の以前からコミュニティのまちづくりに関わってきたし、土地問題が起こってからの長い運動の間ずっと重要なものであった。2000年代以降の韓国市民社会との連帯や土地買取のための国内の支援活動など土地問題の解決に至る動きにおいてはとりわけ重要な役割を果たした。こうした民族団体の先輩から後輩へ引き継がれてきた日常の活動や組織運動の力を語らずには、本来のウトロの運動を語ることはできない。

しかしながら、日本社会の言説空間の中ではこうした民族団体の活動の社会的意義が語られ理解されることが難しい現状がある。そして、それはUPM建設のもう一つの軸となった韓国社会においても容易ではない。こうした一筋縄ではいかない現状から、UPMでは、ウトロの運動を支えてきた民族団体の活動が、相手と言葉を選びながらわずかに語られる事柄になってしまっている。この困難のおおもとには、そもそも社会で在日の歴史について学び論じていくための言葉が貧しいという現状がある。今後の課題としてUPMならではの日常の中で語る言葉を探していきたい。

4. ウトロを守った女性たちの農楽隊(第2回企画展)

女性たちの思いと行動を伝える企画展示をできれば複数回シリーズで行いたいという構想の中で、まずはウトロ農楽隊の企画展(2023年5月～2024年2月)がつくられた。他の面々は運営の仕

事で忙しいことから、その内容の制作は筆者ら2人に託された。以下、展示の文面を引用しながらこの企画展を簡単に紹介したい。展示の入り口でウトロ農楽隊は次のように紹介される。

ウトロの農楽は、女性たちが土地を守ろうとする闘いの中で培った、自分達の“声”です。ときには大通りを進むデモ隊の先頭に立って、ときにはウトロを知りたいと集まった人達の輪の真ん中で、思いを込めて演奏した農楽隊の姿に多くの人が心を揺さぶられました。

ウトロ農楽隊の結成は1990年頃、土地を守る闘いの集いやパレードのために楽器を持ち出したウトロ住民たちの中で練習チームがつくられた。ウトロ住民に限らない多様なメンバーの存在も欠かせないものだったが、ウトロ農楽隊の核にあったのは何ととってもウトロへ嫁いできた日本人の女性も含むウトロの女性どうしの結びつきだった。彼女たちは忙しく立ち働いた一日の後、夜の集会所に集まり、お互いに教わり学び、語らった。そして運動の数々の場に出ていく中で、道行く人々を振り返らせて聞いてもらいたいような「ウトロらしさ」を表現するチームと演奏をつくりあげた。その農楽は運動のデモやウトロ名物と言われた焼肉交流会の踊りの輪に多くの人を加わらせた出会

いと連帯の文化になった。また、ウトロの中にあるのは世代をつなぐ文化実践でもあった。企画展の目次は次のようになっている。

はじめに

1 忙しい毎日のなか練習を 農楽隊のはじまり

1-1 夜のウトロにチャンゴの音が聞こえる

1-2 この地を守るために

2 こころ揺さぶる音と思い 農楽隊の活躍

2-1 力強く、闘いの先頭に立った女性たち

2-2 農楽は、私達の声

2-3 生活と闘いの中から生まれ、世代をつなぐ ウトロの文化

3 集会はおまつりとなって

3-1 とともに食べる文化

3-2 多くの人を迎えた焼肉交流会

3-3 集会はオッケチュムになって おわりに

この企画展は、祈念館の開館を期に活動を再開した現・農楽隊メンバーへの聞き取りや座談会を行って準備をした（なかには運動の当時は家業などで忙しく参加できなかったが、この再開後に練習を始めて一員となった女性もいる）。農楽隊とい



図2 京都市四条通を進む1994年のウトロのパレード（ウトロ平和祈念館提供）

う特定の活動、そして女性たちという主体に焦点化することができたこの展示では、ウトロの女性たちがどのような生活の中で土地を守る運動を担っていたのか、そしてこの活動が女性たちにとってどのような意味をもっていたのかについて、その一端ではあるが、ひとり一人の言葉にふれて紹介することができた。準備のインタビューでは幾人かのメンバーに当時していた仕事のことも聞いた。年長の女性たちは、町工場やお茶摘み、飲食店、建設現場、清掃など、中学を出て以来多くの仕事をしてきていたし、家やコミュニティの中ではケア労働や家業を背負って一人前では済まない働きをしてきた。仕事の技量や気概、心持ちについても語ることをたくさん持っている。そうした女性たちの生活に加わった農楽隊の活動は、「年いってて、せんとこせんとこと思ったけど、してよかったと思った」と振り返られるものとなる。仲間存在と社会からの熱い反響を得て、それまであまり人前に立つことのなかった彼女たちのまなざしは、農楽とともに外へ、外へと広がっていった。

展示では農楽が女性たちにとって自分たちの歴史と想いを託し伝える“声”となったと解説した。たとえば、農楽隊の結成から5年ほどたった1994年に行われた京都の四条通りでのパレードの報告文で、当時のウトロ婦人会長・黄順禮さんが農楽のことを「私たちは自分自身のことを表現する『宝物』を手に入れました。……私たちは今、どこへでも出掛けて行ってウトロのこと、自分たちのことを肉声で訴えることができます」と記している。このようにウトロから発された声と、それを耳にして心を動かされ行動したいと思った多くの人との出会いがあり、両者が「ウトロの輪」を作っていた。

「多文化共生」という言葉が市民権を得て少し経つ。しかし、それ以前に存在してきた連帯、それも構造的な不正義に対して多くの人が向き合ったこうした運動の存在は、むしろ語られないことになっているのではないだろうか。そう言う私たち自身も、今回の企画展のために「ウトロを守る会」

のウトロニュースや様々な刊行物などを見ていく中で、数々の女性たちの座談会に生き生きと記録された声、多くの聞き書き、「あるオモニの一日」といった女性の一日の仕事と言葉の記録など、そばで行動をとともにしていた者達ならではの、ウトロの運動が残してくれていた豊かな記録の力をあらためて知った。

同企画展は「そんな集いの中では、農楽の音とともに、闘いはお祭りになっていきます」と締めくくられる。また、企画展の解説パンフでは、最近の農楽隊の練習風景が、「練習は掃除から始まる。BGMは…」といったまさに等身大の目線でユーモラスに紹介される。UPMの開館からしばらく経った現在、UPMの事務局長や、そしてUPMのボランティアとしてウトロの女性たちに出会い祈念館での日常を共に過ごし始めた若いメンバーなど農楽隊の新たな参加者が出てきている。現在は現在の文脈において、こうした日本人の新しいメンバーも多く時間をともにしながら、今後への「集い」が続けられていくように思われる。

5. おわりに

UPMでは、来館者の感想や属性などを尋ねるアンケートを実施している。来館者が1階ホールの席に座り、時間をとってこれに答えている様子がいつも見られる。ときにはホールでの講話や住民とボランティアの楽しいおしゃべりの声に少し邪魔されながらも、展示への感想を尋ねる質問に真剣に向き合ってくれている。

2024年2月末時点までの4000枚余りの回答集計によると、来館者の居住地は京都府内（約33%）やそれ以外の近畿（約46%）がやはり多いが、遠方からの来訪者が残りを占めており、実際にUPMのついでに京都観光という声を聞いたことがある。年齢は60代と70代以上で25%以上を占めるが、10代20代も約14%になる（この数字には学校の授業での訪問分は通常含まれていない）。民族的背景では単に日本と回答した人が83%を占め

る。

肝心の感想内容の分析は今後の課題なのだが、1階ホールには、ボランティアスタッフがこれほどピックアップした来館者の感想がたくさん張られており、そこからでも人々の視点の多様さや込められた思いを垣間見ることができる。

先述のとおり、UPMのテーマのひとつは、新たな人々がこの場を訪れ、ウトロのまちや人々に、そしてここを訪れた人々どうし、互いに出会う（「ウトロで出会う」）ことである。このような出会いの場としての実質を、UPMに関わっている者が最も感じるのは、2章で述べたようなUPMの運営を日々担っている多くのボランティアと住民の出会いであると思う。ウトロ住民の中で農楽隊メンバーを中心に、日常的に祈念館にやってくる人々とボランティアの人々は、よく同じテーブルで作業をしたり、コーヒーのついでによもやま話をしたりしている。そしてあつという間に仲良くなってしまった。こうした建物があり、同じテーブルに座ることが重要なかもしれない。このような風景を見ていて、ウトロの在日の物語、連帯の物語を引継いでいってくれる人がこの社会にたくさんいるのかもしれないと思うようになった。

昔の在日のクラスメイトのことがその後も時折思い浮かんでいたという高齢の女性もいれば、退職後も続けている夜勤のシフトの合間にボランティアをしにくる男性もいる。様々な大学や高校、ときにはかなり遠方から、インターネットなどでUPMを知って通い始めた若者たちもいて、それぞれの関わりがある。

また、ボランティア研修会では幅広い社会問題の勉強やフィールドワークが行われている。こうしたボランティアの力で運営されている空間に、学校の生徒たちの取り組みや、市民グループの学習会や、ひとりでふらっとやって来た人や家族連れなど様々な来館者が訪れる。出会いの場となった祈念館の今後を多くの人が楽しみにしている。

「うちの近くにもこんな施設があったらな」とふと思う。私たちが調べてきたウトロの歩みを考えると、この何気ない一瞬の願望が、これまでの（こ

れからも）奮闘が生み出した奇跡の一つなのではないかとも思う。

注

- 1) 『毎日新聞』(2022年5月1日)。同館の開館はNHK京都や関西テレビ、そして朝日新聞と毎日新聞の地方版で特集とされ、韓国でも連合ニュースやハンギョレ新聞などの大手メディアで報道されている。
- 2) 戦後のバラック街を研究する本岡拓哉 [2019] によると、戦後復興期にそれらの地区を問題化する中で不法占拠というフレームが登場した。関連した研究ではその歴史的文脈を考慮して「不法占拠」という用語が使われている。
- 3) 2002年2月24日、「われら、住んで闘う！団結集会」の宣言文「オモニの歌」より。
- 4) 平和ミュージアム構想は、KINが韓国5・18記念財団の「国内NGO支援事業」の助成を受けた「ウトロ歴史記念館建立のための国際ワークショップ」(2009)を経て日韓両サイドの運動で共有された。
- 5) 原題は「기억할게 우트로」(憶えているよ、ウトロ)である。このキャンペーンは「美しい財団」を主体に2018年7月から2020年1月まで進められた。主要な取り組みとして有名人による呼びかけや募金活動、特別展の開催、住民ワークショップ、収蔵庫の寄付などがある。
- 6) しかし、このような運営形態は事務局の役割をする運営部会スタッフに過剰な負担がかかりやすいため、今後の課題と言える。
- 7) 「川崎市青丘社ふれあい館」は在日朝鮮人のコミュニティにおける多文化共生の運動の拠点という点でUPMの先駆けの施設である。2023年6月25日には川崎の住民女性たちがUPMを訪問しており、このような住民どうしの交流会は継続予定である。さらに、UPMの開館以後、地元の中・高・大学生との交流も増えている。2022年秋からは京都府立城陽高校美術部員と立命館宇治高校の学生がそれぞれ美術やメディアを通じた交流活動に取り組んでおり、2023年9月には公立学校として初めて宇治市立宇治中学校の人権学習がウトロで開催された。同校はウトロ住民の通学校でもあり、その意味は大きい。
- 8) 後述するとおり、これには展示運営スタッフに民俗学や博物館展示の専門家がおらず、地区内の実物資料も不足している中でつくられたことも影響していると考えられる。
- 9) ウトロの土地のうち、民間の地権者が所有する区画では、もともと住民の家々が並んでいた場所に

今では更地が広がっている。家屋の撤去は以前からウトロの風景を塗り替えてきたが、2023年夏以降にも大きく進んだ結果、近年もフィールドワークで訪ねていた場所や放火跡も更地になってしまった。

- 10) 裁判敗訴を受けて、町内会声明や住民アピールでは、判決では「私共、在日の歴史的経緯はまったく考慮されていません」と述べて判決を批判し、政府・自治体など日本社会の「在日に対するあり方」を問い続けていくつもりであると宣言していた(「ウトロニュース」no.34)。

参考文献

- 大野光明・小杉亮子・松井隆志(2022)「越境と連帯の運動史—日本の『戦後』を捉え直す」大野光明・小杉亮子・松井隆志編『社会運動史研究4 越境と連帯』新曜社, 6-18.
- 斎藤正樹(2022)『ウトロ・強制立ち退きとの闘い(居住福祉新ブックレット)』東信堂.
- 全ウンフィ(2022)「地続きの朝鮮に出会う—ウトロ地区と向き合った京都府南部地域の市民運動の軌跡」大野光明・小杉亮子・松井隆志編『社会運動史研究4 越境と連帯』新曜社, 89-109.
- 中村一成(2022)『ウトロ ここで生き、ここで死ぬ』

三一書房.

洪貞子(1992)「私とウトロとの出会い—生きていかなくてもは」坂本秀夫ほか『生きることについて』枚方市・枚方市教育委員会, 121-170.

本岡拓哉(2019)『「不法」なる空間にいきる—占拠と立ち退きをめぐる戦後都市史』大月書店.

【韓国語資料】

- 대통령직속 3·1 운동 및 대한민국임시정부 수립 100주년 기념사업위원회(2018)『3·1 운동 및 대한민국임시정부 수립 100주년 기념사업 종합계획』.
- 아름다운재단 정책기획실 정책기획팀(2020年1月31日)「『기억할게우토로』 우토로 51 번지를 지켜낸 시민의 기록」아름다운재단ホームページ, (<https://beautifulfund.org/43189/>) 2024年2月18日閲覧.
- KIN(지구촌동포연대)(2018)「최종실적보고서—일본 내 마지막 조선인 마을 우토로의 역사보전과 한일 시민의 역사교육을 위한 디지털 아카이브 구축」『서울시 공익활동 지원사업 종합평가 결과 문서』서울특별시ホームページ, (<https://news.seoul.go.kr/gov/archives/542056?listPage=2>) 2024年2月18日閲覧.
- 5·18 기념재단(2009)『국내 지원사업 결과보고』.

論文

李良枝「除籍謄本」論

—— 「ほんやり」とズレる「私」 ——

文熙喆

日本語要旨

本稿では、在日朝鮮人作家李良枝の未完成のまま残された「除籍謄本」を、「私」という話者に現れる妄想と夢、そしてそれらが「私」という話者の現実と触れ合うところに焦点を当て、「私」を取り巻く言説分析を行うとともに、「私」が開いて行く「個」の地点を分析する。

「除籍謄本」は李良枝の作品の中でも、日本における在日朝鮮人に対する生政治的差別を最も直接的に描いている作品だといえよう。もはや朝鮮籍者ではないことをもってのみ自らが朝鮮人であることを証明できる書類としての除籍謄本は、作中の語り手である「私」の唯一の存在証明として描かれる。だが、「私」の矛盾した法的地位は、男女における差別的秩序における女性へと繋がり、さらに複層的に重なった諸秩序において棄却される「私」の危うさを示す。その状態が作中では「ほんやり」とすることとして提示されるが、「ほんやり」する「私」は、構成的外部として包摂／排除されると同時に、構成的外部において安堵する生の様態を示す。これこそが、秩序による意味づけの暴力からズレる瞬間なのである。

英語要旨

The literature of Lee Yang-ji (李良枝), a Zainichi Korean writer best known for her Akutakawa award-winning novel *Yu-hee* (由熙), possesses qualities that cannot be explained by means of macro discourse analysis alone. However, a large bulk of prior research up until

now has been conducted using macro discourse analysis. As a result, there is a current lack of discussion from a relatively textual analytical perspective.

In this paper, I will be analyzing “*Zyo-seki-tō-hon* (Certified Copy of Closed Family Register, 除籍謄本)” by Lee Yang-ji from textual analysis. It remains incomplete and was included in the full collection of Lee Yang-ji’s works published after her death. It has been the subject of much less study in comparison to other works by Lee. However, it is an essential work to study as it not only depicts the biopolitical discourse that surrounds the main character ‘I’, a Zainichi Korean woman, through the individual perspective of ‘I’ themselves, but in doing so it also opens new horizons.

As such, in this paper, in lieu of analysis of the discourse surrounding ‘I’, I would like to instead analyze the new horizons that ‘I’ opens. I will do this by focusing on the delusions and dreams of the speaker ‘I’, and the points where these delusions come in contact with the reality of ‘I’. In Chapter 1, we will outline previous studies and what we want to try in this paper.

This work takes place against the backdrop of a night spent in Jeonju by a Zainichi Korean woman who comes to Korea to study abroad. This is where the tomb of her ancestors, the progenitor of the Lee family, is located. The narrator of this work, ‘I’, decides to study in her *motherland*, quit the tax accountancy where she works, and part ways with the man she is living with, ‘Masao’. ‘I’ is a Zainichi Korean woman who has become a Japanese

citizen due to her parent's naturalization, but because she wants to receive a Korean language education at an institution only open to Korean compatriots, she must prove that she once was a compatriot. And so, when she goes to Korea to study, she brings with her a 'Certified Copy of Closed Family Register' (referred to as Closed Family Register) which proves that she once had a Chosun (Korean) family register. 'I' visits Jeonju, Jeollabuk-do, to visit her ancestors' graves before the semester begins. The story unfolds in the first person, told by the speaker 'I'.

In Chapter 2, we will look at the biopolitics surrounding a Zainichi Korean who is naturalized as a Japanese national revealed in the work, referring to previous studies. In addition, it will be confirmed that the living politics surrounding Koreans in Japan lead to the dimension of sexual violence in the work. The Closed Family Register, which is also the title of the work, is a document that symbolizes the contradictory identity of the protagonist, "I," and generally proves that the family register has been extinguished under Japan's family register law. The family register law, which applies to Japanese people, on the one hand, politicizes Japanese life from the moment they are born and works as a biopolitical function. On the other hand, it politicizes non-Japanese people as foreigners. "I," a Zainichi Korean who was naturalized by his father and whose Korean Family Register was extinguished, tries to escape rape by presenting a copy of this document when trying to prove that she is a Korean in front of the threat of rape in Korea. However, at the same time as proving that she was a Korean, this copy of the closed family register also reveals that she is not a Korean at the same time. This symbolizes the contradiction of my existence, and in the scene where the *Ichien gojissen* (一円五十銭, one yen fifty sen) is drawn, the contradiction of the exclusive community, not me, is rather drawn.

Furthermore, *Ichien gojissen* is referenced in the delusions of 'I', and makes connections to massacre and rape. the speaker 'I' visualizes, in the form of delusions,

the violence that is present in the discourse of oppression and discrimination. It is confirmed that cracks have formed in the symbolic system of order that surrounds 'I' through the depiction of the contradictory order and disharmonious state to which 'I' is left exposed by such violence. This system of order is a modern one of representation of women, by men who, through violence towards 'I', attempt to re-enter the disharmonious state of 'I' into the system as something 'inappropriate'.

In Chapters 3 and 4, Through 'Bonyari (being absent-minded)' depicted in the work, I examine the existence of 'I' in a contradictory order. Masao (正男 whose name can be interpreted as 'real man' or 'man of justice' and who was the man who once lived together before.) always describes 'I's symptom as a 'Depersonalization,' but 'I' only explains the symptoms calmly. 'Bonyari' is a symptom that occurs when 'I' cannot adapt to the symbolic order that forces it to become meaningful, and it means being unstable in a certain order. 'Bonyari' in the face of an overwhelming violent symbolic order represents a helpless individual at the constitutive outside, but at the same time, 'Bonyari' depicts a new form of life that does not harmonize well with the order. Such a moment painted in the work is not an escape from the order, but a moment that slips the order. This is a new form of life that appears only in words because the protagonist 'I' is in a 'bon-yari' state, and it exerts the power to expose the contradictory order.

キーワード：一円五十銭、李良枝、離人症、除籍
謄本

Keyword: Ichien gojissen, Lee Yangji, Depersonalization,
Certified copy of Closed Family Register

1. はじめに

在日朝鮮人作家李良枝は、デビュー作「ナビ・タリョン」(1982)から、「かずきめ」(1983)、「刻」(1985)が立て続けに芥川賞候補作となり、のちの

「由熙」(1988)ではついに第100回芥川賞を受賞する。華麗な経歴に伴い多くの読者と研究者に好まれてきた李良枝だが、必ずしも肯定的な評価を得たわけではなかった。

なかでも尹健次[2001]は、金達寿、金石範、金泰生、金時鐘、李恢成などの「第一世代ないしはそれに近い二世(前期二世)世代文学」[尹健次2001:265]とは異なる、「後期二世以降」を含む「第三世代作家」の一人として李良枝を取り上げる。尹は第三世代作家の特徴を、それ以前の世代とは異なり「作者の個の叫びから出発しながらも、それが『私』の世界に内閉し、『在日』および民族の課題に広がっていない」[尹健次2001:267]と批判的に論ずる。

だが、イ・ヨンスク[2007]はこの批判に対し、李良枝の作品は「在日」および民族の課題をも含みうると指摘する¹⁾。「彼女の文学を虚心に読む者にとっては、そこには、何度振り払いたたき殺してもよみがえり、おそいかかってくる『言葉』と『政治』という執拗で不死の怪物に対する、激しい恐怖の感覚が流れていることに気がつく」[イ・ヨンスク2007:82]。つまり、政治性を前面に出さずとも、自ずと溢れ出るというのだ。この自ずと現れる政治性なるものを、金熹我[2004]は〈文化〉から汲み上げる。金は、李良枝は「在日男性作家の作品において必ずといっていいほどに言及された政治的な立場」ではなく、「韓国の伝統〈文化〉」[金熹我2004:110-111]に祖国と民族意識を見出したのだとする。

しかし、金熹我の指摘に対し君島[2018]は、「これまでの李良枝作家論・作品論が前提としていた政治や文化といった二項対立的な枠組み」[君島2018:62]に沿った研究²⁾が行われてきた点を指摘する。君島は本稿で取り扱う「除籍謄本」(1982年頃執筆開始。未完結・生前未発表³⁾)を取り上げ、「単なる党派的対立に還元しえない政治的思想や帰化、言語、そして性をめぐる身体などの拮抗的な緊張」[君島2018:61-62]を読み解く。君島[2018]は、「帰化者」というポストコロニアルな法的主体の生産を、フーコーの言う生政治を用いて説明す

る。先行研究としての君島の研究は、従来の研究とは異なる観点から分析を行っており、本稿を進める上で重要な参照軸でもある。第2章では、君島の研究を参照しながら、「除籍謄本」における政治的言説について確認する。

君島が焦点を当てているのは、「帰化者」と位置付けられた語り手「私」を取り巻く権力網であり、法的秩序である。君島の研究は、今後の李良枝の作品を研究する上で大変有効な観点を有する。しかし、「除籍謄本」の語り手である「私」を取り巻く言説批判に注目したため、言説内部の「私」が「法に対する抵抗の場を構成する」[ジュディス・バトラー2021:142]ことについての分析はなされていない。第3章から第4章にかけては、このテキストに編まれた、生政治的暴力に翻弄されながらも、語り手である「私」が示す抵抗の場としての生の様態を読解することにする。この生の様態は、在日朝鮮人、もしくは李良枝その人にも回収されない、「除籍謄本」のテキストそのものが有する独創性でもある。本稿にて試みるこの分析は、今後の李良枝の作品を読解する上で、政治性や文化に沿った分析に留まらない読解を考える上での一つの試みでもある。

なお、本稿で李良枝によるテキストを直接引用する場合は、全文『李良枝全集』(講談社、1993)から用いることにし、韓国語原文からの引用は、全て筆者による翻訳とする。

2. 矛盾した記号、除籍謄本

「除籍謄本」は、「かずきめ」執筆中である1982年頃に書き始められ、未完成のまま残された作品である。『李良枝全集』(講談社、1993)に初めて収録され、『李良枝セレクション』(白水社、2022)にて再び収録されるが、李良枝生前に発表されることはなかった。未発表であり、構成や文章の多少の荒さが見当たるためだろうか、上述した君島[2018]の研究以外は、李良枝のその他の作品を取り上げる際に言及される程度にとどまっている。

本章では、「除籍謄本」に対する君島〔2018〕の議論を確認した上で、本稿における問題意識を明らかにする。

まず「除籍謄本」のあらすじから紹介しよう。「除籍謄本」は、全州での一晚を背景に、過去の回想と全州での出来事が、主人公「私」による一人称視点で語られる。留学のために韓国に渡って来た在日朝鮮人女性である語り手の「私」は、韓国へと「母国」留学を決心し、働いていた税理士事務所を辞め、当時同棲しており結婚を申し出ていた「正男」とも別れを告げる。「私」は父の手により日本へ帰化した「在日朝鮮人女性」であるが、「同胞」にのみ開かれた教育機関で朝鮮語教育を受けるには自らが在日朝鮮人であったことを証明する必要がある。籍を抜けたことを証明する除籍謄本が唯一、「私」が朝鮮人であることを証明する手段であったため、「私」は除籍謄本を持って韓国へ渡る。学期が始まる前、「私」は自らの先祖のお墓参りをするため全羅北道全州市を訪れる。先祖のお墓参りをした後、「私」はあるホテルに泊まることになるが、その晩、ホテルで働く若い男が「私」の寝ている部屋を訪れ、片手に刃物を持って「日本の女とやってみたかったんだ」〔李良枝 1993:568〕と「私」を襲う。「私」は「除籍謄本」を提示しようとするなど自らが「同胞」であることを必死に訴えるが、男はそれを受け止めず、「私」を襲う。襲われる瞬間、「私」は夢から目覚め、男による強かんが夢であったことを悟ることで物語は閉じられる。

「除籍謄本」における「私」は、いかなる状況に置かれているのだろうか。作品中に描かれる二つの場面にて、そのことを確認しよう。

「私」は、「君（＝「私」）が日本で生きにくい思いをしないですむ」〔李良枝 1993:565〕ことを計った父により日本籍者となっている。しかし、「私」は韓国に留学をするため、朝鮮人であったことを証明しなければいけない。「私」は係員の言う通りに帰化事情が記載される資料を求めるのだが、うまくいかず、結局父へ電話をかける。

「おとうさん、私が朝鮮人だってこと、どうしたら証明できるの」

「急に……どういうことだ」

「おとうさんとおかあさんが朝鮮人で、それで日本に帰化したんだっていう証明が必要なのよ」

「働いているところでそう言われたのか」

「冗談じゃないわ、朝鮮だって解ったらクビになっちゃうわよ、実は……もう辞めたんだけど……私、韓国に留学するつもりなの、それで、必要なの」

「留学？ ……」

「お金はある。おとうさんに迷惑かけないわ……かける筋合いじゃないもの……そんなことどうでもいいんだけど、ねえ、おとうさんその学校韓国人しか入れてくれないの、だから証明しなくちゃなんない」

「日本人で留学できるところに行けばいいじゃないか」

「ひどいこと言わないで、私は朝鮮人よ」

「……………」

「日本にいたって何も変わらないもの……」

「…」

「係の人がね……あのね……戸籍謄本を取り寄せれば解るって……でも……私の本籍、どうしてK区に変わってるの……いつの間にか私の承諾もなしに……おとうさんのすることは全部そう……ねえ、帰化と書いてある謄本はどこにあるの？」

「君が日本で生きにくい思いをしないですむように帰化したんだ、それに本籍を移せば帰化という文字がなくなる、だから移したんだ君の事を思ってしたことだ……兄妹もいないのだし……」

「…」

「除籍謄本をとればいいんだな、それは」

「……除籍謄本？」

「…」

父は日本に帰化し、娘の戸籍をキレイなものにするために本籍を移した。私は父の辿っ

た道を一枚いちまい皮を剥がしていくように逆に辿ろうとしている。

[李良枝 1993:564-565]

父にとって「朝鮮人」であることの「生きにくさ」は、「日本人」になることにより解消されると理解されている。しかし、紆余曲折を経て獲得した国籍と戸籍は、「私」にとっては「何も」変えることができず、元来朝鮮人であったという事実に加えて、国籍を変えた朝鮮人であるという事実が「私」の生の苦悩を加重する。

日本籍へ帰化した在日朝鮮人、いわゆる帰化者を捉えるには、その歴史的な文脈と法律的文脈を同時に捉えなければならない。つまり、植民地期から続く在日朝鮮人と戸籍の問題、そして、日本社会及び在日朝鮮人社会における帰化者をめぐる言説を同時に捉えてこそ、父が述べる「朝鮮人」であることによる「生きにくさ」と、「私」における「何も」変わらない状況が見てとれるのである。

君島[2018]は、植民地期における戸籍から帰化に至るまで、在日朝鮮人に対する歴史的差別及びその暴力性を指摘する。同じ臣民として位置付けられながらも、「朝鮮戸籍」者として、「内地戸籍」者とは区別されていた朝鮮人の法的地位は、解放以降（戦後）「外国人」へと変更される。父が経験した「在日朝鮮人としての「生きにくさ」は、上述したような植民地期を経て解放後に至るまでの「朝鮮籍者」という構成的外部[ジュディス・パトラー 2021]として排除/包摂される地位に置かれるが故の「生きにくさ」として理解できるだろう。父はその打開策として、帰化を決心したのである。

しかし、「私」において帰化は打開策として機能していない。日本社会における朝鮮人差別は依然としてある中、「帰化者は、日本国籍取得後もなお人種主義的に規定された『外国人』嫌悪」[君島 2018:66]にも晒されていた。さらに1950年代から運用され始める「外国人」に対して行われた帰化制度は、日本国家による恩恵的な性格及び同化融合策としての性格が強かったため、「単なる国籍取得といった権利の問題として」[君島 2018:65]説

明することは難しい。このような「過剰な国家への『忠誠』を誓わされた上でようやく『許可』される」[君島 2018:65] 帰化は、帰化を拒否する人々を生み出した。「帰化者が同胞社会から疎外されるということから、『帰化許可＝選別的な日本国籍の付与』が、在日朝鮮人社会の分断策として」[金英達 1990:174] 機能してしまう。在日朝鮮人社会において帰化者は「民族反逆者」[山村 1971:245]として扱われ、「『裏切り』意識にさいなまれ」[山村 1971:6] といった状況があった。「私」が「日本にいたって何も変わらない」とする所以は、これらの事情を考えた上で理解できる。

だが、このような文脈における帰化者としての「私」の事情は日本に限られることではなかった。構成的外部に置かれることは、関東大震災当時朝鮮人虐殺が行われた際に使われた「一円五十銭」へと繋がる。韓国に渡ってきた「私」は、宿泊する旅館で働く韓国の「若い男」によって性暴行される危機に陥る。

ドアを叩く音がする。朦朧とした頭でドアの外に立っている若い男を想像する。だが、身体がだるく、寝台に貼りついたようになった自分を起こすことができない。

あっと声をあげて私は首を上げた。男がドアを開け、入口に立ってじっと私を見ている。確かにあの若い男だ。男は右手に何かを持っている。だが私にはよく見えない。

「な、なんのご用ですか？」

男はにっと笑った。目も鋭く光る。

「オレは一度、日本の女とやってみたかったんだ」

「…」

「私、今日説明したでしょう、私はれっきとした朝鮮人なんです」

「…」

「黙れ、黙れ、同胞がその程度のウリマルでどうする、おい、ウリマルで一円五十銭と言ってみろ」

「イルウォンオシブチョン……ですか」

「そらみろ、日本人の発音だ」

[…]

「そうだ、私、除籍謄本持っています。あの旅行カバンの中に入っているの、コピーなんですけど取り出してお見せします。帰化したことや、両親の以前の韓国名や、それに済州島の住所もちゃんと載っています。私が韓国人だということ唯一証明できるんです」

[…]

「おい、オレをなめるなよ、そんな紙切れが何になる、おまえは日本人だ」

男は寝台の上に飛び上がり、ナイフをふり上げた。私は意識を失った。

[強調引用者、李良枝 1993:568-569]

一般的に「十円五十銭」「十五円五十銭」として語られるこのことばは、1923年9月1日に関東一帯に深刻な被害を齎したマグニチュード7.9の大地震が起こった後に用いられた。「一円五十銭」が、作品が描かれた1980年代、況してや現在にも威を振り得ている事実⁴⁾は、単に差別的である日本社会の問題には収まらない。そこには法的次元における国家権力が深く関与する。

君島[2018]は「除籍謄本」における「一円五十銭」を「関東大震災における呼びかけの変形だけではなく、寧ろ、国家が、個人に法的根拠として何をどのように書き込み、名乗らせ、あるいは名乗らせないかといった矛盾した名付けの根源的な暴力性」[君島 2018:76]だと説明する。君島の指摘のように「一円五十銭」には発音という文化的要素とともに、個人を位置付ける法律的根拠の核心的役割を果たす国籍が、同時に問題にされている点を見逃してはならないだろう。日本における在日朝鮮人としての、あるいは帰化者としての「生きにくさ」は、このようにして韓国においても続くのである。

もう一つ特記すべき点は、「一円五十銭」における虐殺への恐怖が、男性による強かんへの恐怖として描かれていることである。この点について君島[2018]は、植民地主義的かつ人種主義的言説

における法的主体に加わる「国家による主権的暴力を、女性を欲望する男性というそれ自体ヘロセクシズム的かつ植民地主義的な性的布置へと置換してこの効力を最大限に引き出して」[君島 2018:76]いると指摘し、これを「性=生政治的暴力」と述べる。

旅館の「男」は、「私」が同胞であるかどうか、強かんに対応しい女かどうかを決定する座についている（「おまえは日本人だ。」）「男」は文化的に、法律的に「私」を他者であると判決を下しているものであり、その論理とは駄々をこねる子どものそのように、基準や根拠などが無い。まず下された判決があり、理由はその後から上塗りされるだけだ。若い男にとっての「私」はつねにすでに「日本人」であり、それゆえ「私」のあらゆる努力は、そもそも構成的外部として包摂／排除されているが故に霧散する。

「私」が強かんから自由になることは、ない。当作品にて「私」の恐怖として可視化された暴力は、万が一「私」が若い男に同胞であること、「日本人」でないことが認められたとしても、いずれまた「私」を再び恐怖へと追い込むだろう。

「除籍謄本」における「一円五十銭」は、各々のナショナリズムが内包する排他性及び暴力性を、性暴力の次元にまで拡大させて表現すると同時に、「一円五十銭」を支える文化的／法的次元における存在規定のシステムの矛盾を描いている。そのため「私」の「イルウォンオシプチョン」は、最も容易く「私」を「日本人」として規定づける手助けをしてしまうのであり、「イルウォンオシプチョン」によって「私」は「日本人」であること以外の意味を許されない。発音と国籍により規定された排除すべきものとしての「私」にとって、除籍謄本は「紙切れ」以上の機能を果たさない。矛盾した形でしか自己定義し得ないことを表す除籍謄本は「紙切れ」として、その文面を見られることもなく廃棄される。ここには、排外的共同体の中では、如何なる弁明も無意味なものとしてのみ包摂されるという絶望的解釈が可能である。

君島[2018]は、「除籍謄本」は、「帰化をめぐ

る政治的社会的言説編成から離脱する強度を持ち得ているか」[君島 2018:79] に対する疑問を提示するとともに、「除籍謄本」が『私』の心身を矛盾体として産出し、絶えざる自己検閲と懲罰的暴力を駆動させていく身体論的政治としての帰化という国家の主権行為」を捉え直し、「国家による生政治的暴力を暴露し続けている」[君島 2018:78] 作品として、結論づける。君島の結論は、上述のような絶望的解釈と類似している。

しかしながら、男の「おい、オレをなめるなよ、そんな紙切れが何になる、おまえは日本人だ」[強調引用者、李良枝 1993:569] と「私」に言葉を発した時、日本にて在日朝鮮人として、あるいは帰化者として遇されてきた「私」を象徴する除籍謄本という法的文書は「紙切れ」と否定され、「私」は「日本人」になるのである。だとするならば、男の一喝は「紙切れ」としての無意味な除籍謄本にとどまるだけでなく、「私」を取り巻く言説の否定として、矛盾した法的秩序へ亀裂を入れる機能をも果たしうるのではないか。「除籍謄本」に見てとれる、このような亀裂の可能性こそが従来の研究においては注目されてこなかった点といえよう。第3章及び第4章にかけては、この亀裂と大きく関わる、作中の「ぼんやり」というキーワードを中心に分析する。

3. 離人症、もしくは現実喪失感

上述した「除籍謄本」における強かんの場面は、作品前半部に描かれる正男との「夜の行為」が行われる場面では異なる形で描かれている。「私」は夜の行為が疎ましくなり、ある夜「面倒なの」と正男に言うが、正男はそのことを聞き入れない。

正男が私のスカートのファスナを下げる。私は身をよじらせ、言葉にならない声を上げて拒絶した。正男は私の仕草を一種の媚と取り違え、得意気にワイシャツを脱ぎ始めた。苦痛なのでも正男を嫌いなのでもなく、ただ面

倒なのだ、と言う感情をどう伝えればよいのか、そう考えることさえ面倒になって私はされるまま身体を横たえていた。[...] 正男の頭髮が視界の隅で左右に揺れる。私はそれをぼんやり見ているだけだった。

[強調引用者、李良枝 1993:562]

正男の身振りは、作品の最後の場面にて描かれる「私」が日本人であるか否かを決定する若い男の姿とも重なる。正男は「夜の行為」が「正しい」か否かを決める決定権を握っており、正男によって「私」の拒絶は「媚」へと（再）定義されてしまう。決定権が奪われたままの「私」は、意味内容としての拒絶の感情を何らかの伝達手段を用いて伝えることを諦めてしまうが、その際揺れる正男の頭髮を「私はそれをぼんやりと見ているだけ」[強調引用者、李良枝 1993:562] である。この際の「ぼんやり」することは、作品の冒頭部にて「私」の「病気」として描かれる。

当時同棲していた正男は、常に「ぼんやり」している「私」の症状を「離人症」だと診断する。「自分が何者なのか、何を今やっているのか、やろうとしてるのか、わからなくなる病気」だとするが、それに対し「私」は疑問を抱きながらも「認めざるを得ない」[李良枝 1993:561] ののである。離人症研究で知られる臨床哲学者の木村敏は、離人症を「自我、時間、空間、事物などの全てに通じての『現実感の喪失』」[木村 1982:20] だと説明する。その際木村 [1982] は現象学的な立場から、離人症を「超個人的、普遍的性格」のものとして捉えようとする。なぜなら、離人症の「患者一人一人の一回きりの独自性は全く認められないか、認められてもごく副次的な付随的構造においてにすぎ」ず、「個人的な種々の事情は完全に払拭されている」[木村 1982:23] ためである。木村の議論についての考察は「除籍謄本」を読解する上でも参考に値する。

木村 [1982] が述べる離人症の超個人的、普遍的性格とは、自己にまつわる解釈である。「自分が存在しない」ことを離人症症状の典型的かつ特異

な体験とする木村は、デカルトが方法的懐疑を通して確認した、認識作用の根源的な主体としての「自我」を前提にしては「離人症を正しく理解するいっさいの手懸りは失われてしまう」[木村 1982:25]とする。では、「自我」とは如何なるものであろうか。木村はデカルトにおける認識作用の根源的主体としてのコギト（我思う）を「私にはそう見える、そう思われる」と捉える[木村・野家 2011:46]。その際の主体とは、木村が晩年に興味を示していた中動態的に確認できる自己である⁹⁾。木村は、リアリティとアクチュアリティを区別し、離人症患者は対象を知覚し確認しうるリアリティを失うのではなく、「感覚的に直接感じ取っている動き」、あるいは「動きとして、一種の運動感覚で捉えているもの」[木村・野家 2011:39]としてのアクチュアリティを失うのだと説明する。その際の自己こそ、主体的自己ではなく、出来事の起こる場所としての自己、つまり中動態的自己なのである。

要するに、「我思う」という際に、主体的に思考する「我」は、「我」というものとしてのみ捉えられるにもかかわらず、一般的には対象ではない認識の根源的主体と捉えられている。しかし、「『私』というのはむしろあとから、見えたり聞こえたりする『場』になって出てくる」[木村・野家 2011:43]。つまり離人症は、認識の根源的起源として主体を捉えるという思い込みから外れた際の症状なのである。それが故に木村にとって「離人症という症状は、人間が自分の自己を持っている以上、そのいわば裏返しとして、誰しものがこれに陥る可能性を持っているような、真の意味で普遍的な症状」[木村 1982:23]となる。すなわち離人症は、本来人間一般が陥る可能性のある状態を示しているのである。

この議論を用いて、「私」の「ぼんやり」することと深く関わる夢を考察してみよう。作品の序盤、「私」は当時同棲していた正男に、繰り返し見る「おかしな夢」を話す。夢の内容は、以下の通りである。

夢の中で私はある部屋の中に立っているの。部屋の中に、小山羊とも犬とも見分けのつかない黒い動物が……二匹だったかな、三匹かな……じっとしてるの、すると動物たちは部屋の中を歩き始めて、私、急に走り出して……動物を捕えようとするのよ。でもするりと手の中からいなくなって……捕えた感触さえないし、鳴き声もない……変だなんて思いながら、私、部屋中を走って息切れさえしてる。[…] 黒い動物がふっと飛んだかと思うと……見るとベランダの柵の向こうに飛び降りていくじゃない、あっ危ないって私、動物の尻尾を捕えようとするの、でも身体が今度は動かなくなってる。すると今度はじっとベランダを見ている私の後ろ姿を入口に立った私が見ているのよ。

[李良枝 1993:561]

「私」の夢における動物は、形も数もはっきりせず、感触さえない。それを「私」は捉えようとするが、息切れするだけである。黒い動物は、その存在は確認されるが、数量や形、触感などあらゆる面から対象化し得ず、物質的存在感もはっきりしない。この際の黒い動物は、捉え得ない主体としての「自己」として考えられる。動物を捉えようとしてはうずくまってしまう「私」は、非対象的な自己（＝黒い動物）を捉えられない離人症者とも見てとれるのであり、その様子を俯瞰的に眺めている視点は、木村の述べる「超個人的、普遍的性格」を捉えようとする視点として見ることもできるだろう。上述の解釈に基づくのであれば、木村の分析も、「私」の「ぼんやり」を「離人症」と診断する正男の判断もある程度正しいようにも思われる。しかし、「ぼんやり」を正男の言う通り離人症という症状として位置付ける前に、同じ症状を「ぼんやり」という言葉でもってのみ語る「私」にとっての「ぼんやり」が如何なるものであるか、テキストを通じて確認する必要がある。

「私」は、働いていた税理士事務所で電話が鳴っていても認識せず、電話が鳴っていることを指摘

されても「そのオトを聞き、どうしたらよいのか迷って」[李良枝 1993:562] いた。だが、正男が「離人症」と命名するのに対し、「私」はその状態を説明するにとどまる。「いつ頃からか机に広げた帳簿の細かい数字や伝票の束が、単なるモノにし見えなくなった。人の声も、自分の声すらも、声として自覚できず、オトとしてしか捉えられない時がある。」[李良枝 1993:562]

「私」が聞く「オト」は、「声」や「音」などとは対照的にカタカナで表記され、意味のない「オト」として捉えられる。それは、ある音が言語体系の中に位置付けられる際に必要な意味が抜けたままの、剥き出しの音である。「オト」は意味を具えないまま、ただそこにあるだけなのだ。つまり、正男が「離人症」と捉える「ほんやり」は、「私」にとっての「オト」がそうであったように、象徴秩序に溶け込めない（アクチュアリティを喪失した）「私」の滞りを意味する。だが、ここでは、意味を持たない「オト」が「音」以外の物質性として廃棄されるように、意味をとらえられない「私」の存在も「離人症」として廃棄され、秩序の構成的外部として包摂／排除されることに注意したい。

離人症だとされていた「ほんやり」は、意味づけの象徴秩序に上手く没入できない時の主体の状態を示す。本章冒頭に引用した正男による強引な「夜の行為」が終わった後、「私」は「声がとぎれ遠くに消えていく」[李良枝 1993:562] ことを感じ、働いている税理士事務所の話へと場面は移る。税理士事務所の税理士である高中は、社内にT子という愛人がおり、仕事は古参の平沼に任せたまふ頻繁にキーセン旅行に出る。T子はそのことを知っていながらも、嫉妬し「媚びて高中を睨」[李良枝 1993:562] むだけだ。転換された税理士事務所の場合にて「私」は奇妙な感覚に陥る。「ぶすっ、ぶすっ、と音をたてて私の背筋の辺りで何かが弾け始める。その弾ける何かを感じているうちはまだよかった。次第に私はその音を聞かなくなり、代わってほんやりすることが多くなっていった」[強調引用者、李良枝 1993:562-3]。

正男との性行為は高中の性売買行為へ、次に正男との性行為において「媚」として定義づけられてしまう「私」の性行為に対する拒絶はT子の「媚」へとつながり、これらの事柄があった後に聞こえる「音」の弾けは「ほんやり」することへとつながる。つまり、閉ざされた税理士事務所における意味体系との不調和は、正男が取り仕切る正男と「私」の間の意味体系の不調和と共鳴する。さらに、正男との間の「夜の行為」が韓国での強かんされる夢と繋がっていることから、韓国においても「私」は「ほんやり」するだろうことが予想される（詳しくは、第5章にて検討する）。

ところで、韓国にて「私」を強かんしようとする人物が「若い男」、もしくは「男」として一般名詞のように書かれている点、ならびに精神病理学という秩序に「私」の状態を「離人症」として記入する「正男」が、正しい、道理に適った男、という名前であることは意味深長である。

先ほどの正男との「夜の行為」の際、「私」が言葉には含まれない「声」と「身」の動きとをもって「身をよじらせ、言葉にならない声を上げて拒絶」するしかなかったことをもう一度思い起こしたい。

文化において「精神が男性的なものに、身体が女性的なものに結びつけられてきた」[ジュディス・バトラー 1999:37] ことは、多くの研究によって指摘されてきた。その際「女性的なもの」は、精神（あるいはロゴス）として表象される「男性」の理論の構成的外部として包摂／排除される。そして「女性的なもの」は、すべて男性的なものとして、「我有化（appropriated）」される⁶⁾。「私」が言葉（そしてその異名のロゴス）をもって拒絶しえないことは、「私」がロゴスという領域から外され、「言葉にならない声＝オト」しか持たない女性だったためであり、その際身体や「オト」を書き換えてしまうのは「正男」、正なる男なのである。象徴界の制約としての法（「性化された位置を受けよ＝身に帯びよ」[ジュディス・バトラー 2021:129]）が、セクシュアリティの抑圧と産出を同時に起こなうことを踏まえるなら、ここには

「私」を「帰化者」として記入する法との繋がりが見てとれる。

「除籍謄本」が秩序の担い手として暴力を振るう男性を描いたことは、ある意味必然の成り行きだった。正男は理性の担い手である男性として、「私」は二項対立的にその彼岸に置かれる身体、非理性を表象する女性として描かれる。韓国の若い男や正男からの性暴力は、理性が身体に加える暴力としても読み取れるのである。つまりここでは、「私」が象徴界において、身体をセックスの対象とされるだけでなく、非理性的なものとして意味づけられることをも表しているのである。

正男は理性の立場から、「私」の状態を病理として診断を下す。そして、診断を下すものと、されるものの立場の逆転が起ころうとすると、「男」は自ずと存在感を「露わ」にする。「私」が留学することを伝えと、正男は「[...] 全て決めてから打ち明けた私の態度を詰った。そのためか、男としての露わな感情が刺激されて正男の語気は想像以上に強かった」[李良枝 1993:566]。正男の強い語気と対照的な「私」の「ぼんやり」は、「離人症」として治療されるべき症状としてある。正男は、「アルバイトを辞めてからぼんやりが治ってきたと喜」[李良枝 1993:566] ぶのだ。

しかし、この「ぼんやり」は、男根ロゴス中心主義における二項対立的男女関係を暴露するにとどまらず、さらなる広がりを見せる。「私」は、主人＝奴隷の弁証法のもとで「女性的なもの」として描かれるに留まらない。「私」の「ぼんやり」は、男女の二項対立を温存するまま女性として記載されているのではなく、表象されるための必要条件をすり抜ける状態としてある。

「除籍謄本」において描かれる、男根ロゴス中心主義のもとでなされる男による女への性暴力は、除籍謄本が表す法的秩序と、「私」の「ぼんやり」を「離人症」と印づける象徴秩序とを繋ぐ。「私」は「除籍謄本」における、この三つの層位の秩序からズレるのであり、その様態が「ぼんやり」から見てとれるのである。

4. ぼんやり——逃れるもの

「ぼんやり」することは、税理士事務所でのアルバイトを辞めることで改善されたようだ。そのアルバイトとは、「駅に向かって機械的な自分の動作、今日まで同じ動作を繰り返」[李良枝 1993:563] すことを余儀なくされ、仕事は蔑ろにしたままキーセン旅行に行く高中税理士と、おそらくその浮気相手であるT子の関係が当たり前のように受容される場である。つまり、その場における秩序が与える意味体系に順応せざるを得ない場所として、税理士事務所はある。

「私」の「ぼんやり」は、症状の原因が明確に示されており、かつその原因を排除することで改善していることが窺われる。「私」はアルバイトを辞めることでいくらか「ぼんやり」が治っていたことは、意味をまとう「音」を押し付けるような場所から逃れてこそ可能であったのである。しかし、前章にて確認したように、税理士事務所と繋がる正男と韓国の男性による秩序化は依然として続くのであり、「私」の「ぼんやり」も完全には消えない。

父に向かって「私」が「日本にいたって何も変わらない」とする理由は、ここにある。以下の引用は、「私」が仕事を辞めた後、韓国への留学を打ち明けた際の正男と「私」の会話である。

「どうして、そんなに朝鮮人ということにこだわるんだい。君は日本人だよ、僕はそう思う。だってそうじゃないか、言葉だって、生活習慣だって……それに国籍だって……」

簡単に言い返す言葉は私の中にいくらかもあった。だが私は黙っていた。何かがそうさせるのだ。正男と過ごしてきた今日までの時間の積み重ねが私を黙らせるのだろうか、それとも背筋の辺りにある何かがそうさせるのだろうか、正男は怒鳴った。

「君はあんまり、自分中心に物を考えすぎるよ、僕は君にとって何なんだい。僕は君が何

人であろうとかまわない、目の前の君が好きなんだ」

この正男と私は二年近くも一緒に暮らしてきたんだとひと事のように考える。

「本当に好き？」

「……君は一体どうなんだ、僕をどう思っているんだ」

「……………」

「力まずに生きろよ。民族だの、国家だのって流行らないよ、今どき」

「私……、いろんなことひっくるめて、私……よ」

数日後、私は自分の荷物を母の家に運んだ。

〔強調引用者、李良枝 1993:566-567〕

上記の引用において、「正男と過ごしてきた今日までの時間の積み重ね」、あるいは「それとも背筋の辺りにある何か」という「私」を黙らせる原因についての思索は、「ぼんやり」させる秩序を表すものとして考えられる。前者は正男が取り仕切る、正男と「私」の間の秩序として読み取れるのであり、後者は税理士事務所で高中とT子の関係を眺めているにつれ、切れてしまう「私」の背筋を思わせる。「ぶすっ、ぶすっ、と音をたてて私の背筋の辺りで何かが弾け始める。〔…〕次第に私はその音を聞かなくなり、代わってぼんやりすることが多くなっていった」〔強調引用者、李良枝 1993:562-3〕。「背筋」は、それらの秩序において「私」を位置づけ続ける秩序の象徴として読み取れる。「背筋の周りの何か」を起点に、それが切れる前の「私」は秩序によって沈黙を強いられているのであり、「背筋の周りの何か」が切れた後は、「私」は「ぼんやり」とするのである。

上記の引用からは、アルバイトを終えた後も「私」は正男との関係において「ぼんやり」が続くであろうことが確認できる。のみならず「ぼんやり」することは、「民族だの、国家だの」という問題と密かに繋がっていることをも確認できるだろう。それらのことが集約的に現れる場面こそが、韓国の旅館にて「イルウォンオシブチョン」と問わ

れ、強かんの危機に陥るあの夢として描かれるのだ。以下はその夢から覚めた後の、作品結部である。

じりじりと耳をこする音がする。薄く目を開けてみる。鏡台の椅子が見え、首を回すと寝台と床のすき間が見えた。背中に鈍痛が走る。寝台からころげ落ちたのだ。じりじりとまだ耳をこする音がする。はっとして上半身を起こした。顔を押しつけて眠っていたので右腕は感覚がない。つけ放しだったテレビの画面は白黒の雨を降らせてじりじりと鳴り続けていた。夢だったのか、と思いながらテレビのスイッチを切る。背中をさすりながら立ち上がる。鉄格子の間に手を入れて窓を開けると、空は白み始めていた。ふいに自分の後ろ姿が臉に浮かんだ。ベランダを飛び降りていった黒い動物を捕えきれずに私はうずくまっていた。

(了)

〔強調引用者、李良枝 1993:569 - 570〕

夢から覚め、若い男による強かんが夢であったことを悟るこのひとつの段落をもって作品は完結する。引用の最後に描かれる臉に浮かんだ自分の後ろ姿を見ている「私」は、作品の冒頭で描かれる夢において、動物を捕えられずじっとベランダを見つめている「私」を後ろから見ていたもう一人の「私」と重なる。つまり、作品の結部の「私」は、作品冒頭に描かれる「ぼんやり」するきっかけとなった夢と重なっているのであり、「黒い動物」を捕えられず、檻のような柵で守られた部屋に取り残された「私」の「ぼんやり」は今後も続くであろうことが予想される。

ここまでの「ぼんやり」についてまとめたい。最終段落にて繰り返し登場する「じりじり」は、ものが焼ける音などを表す擬音語であると同時に、動きの強度は強くなくとも確実に何かが動いていることを指す際に用いられる擬態語でもある。また「じりじり」は、テレビの画面で「白黒の雨」を

降らせるが故の音であることが判明するが、耳もとを擦る「音」は、電話が鳴っている「オト」とも対照的な「音」として捉えることもできる。その際、電話が鳴る「オト」は、電話を取ることを意味する「音」として固定された意味体系には含まれない。雑音としてのテレビの「白黒の雨」を降らす「じりじり」とした「オト」が、ここでは「音」として認識されているのだ。それは「私」の身体を強張らせ、誤った意味内容を伴い妄想へと導く「ドアを叩く音」[李良枝 1993:559,568] や、「男の声」[李良枝 1993:567] でもない。それは「夢だったのか」と「私」を安心させる「音」だ。「私」は、「オト」を雑音という負の形で秩序化するのではなく、一般的には雑音として意味が与えられない「オト」を、「音」として捉える。

だが、テレビの雑音が「私」を安堵させる「音」となるのは、その特殊な状況においてのみであり、それ自体安定した秩序を構築しうるものではない。不安定な状態にて「オト」を「音」として捉えた「私」は、象徴秩序内では再び「ほんやり」するほかない。

しかし、除籍謄本に象徴される「私」の矛盾した状態、つまり「ほんやり」とした状態により意味づけられることへの恐怖に怯えるのではなく、秩序の内部にて生じる「ほんやり」することが内包する異なる可能性としての生のあり方が「ほんやり」から垣間みられるのではないか。呆然とすること、曖昧であること、気が抜けた様の表現としての「ほんやり」は、固定した意味体系（言語や理性）から一時的に包摂されない瞬間を表す。「私」は秩序から放擲されると同時に、そこからズレるのであり、ここにこそ木村のいう中動的な様相が確認できるのである。テレビを切った後の「私」は、背中を摩っている。税理士事務所「背筋の周りの何か」が切れて「ほんやり」してしまった後であるかのように。だが、「私」は、「私」を「少しびくっと」させた「鉄格子」に守られた檻のような旅館の部屋にいることを考慮するならば、「私」を黙らせる「背筋の周りの何か」は、切れる前の状態にあると言いうるだろう。しかし、自ら

を安心させる「じりじり」とした「音」を捉え得たのは、その部屋においてである。「私」は「鉄格子」で守られた秩序から出られない。そのことは、税理士事務所から、正男との関係から抜け出し韓国へ渡ってきた「私」が依然として法的秩序の内部にあり、今後もそこから出ることがないことを暗示しているのかもしれない。

だが、「じりじり」とした「音」は、まさに「鉄格子」で守られた内部において聞き取られているのだ。秩序の外部へはみ出るのではなく、秩序においてその位置を少しズラすのである。場としての「私」において、秩序からズレることは、秩序内において「ほんやり」させられるがゆえに現れる生の様態なのであり、さらには矛盾した秩序を暴露する勢いをも有するのである。

即ち、秩序において宙吊りにされる「ほんやり」によって開示されるこの瞬間こそが、「私」の存在を規定する除籍謄本が「紙切れ」になってしまう瞬間なのだ。これこそ秩序内において意味化される恐れに晒されながらも、「私」という場が広がる瞬間なのである。

5. 結論

本稿では「除籍謄本」を、「私」が「私」を位置付ける秩序から「ほんやり」とズレる点に注目して読解してきた。君島[2018]の議論を参照しながら、除籍謄本が具える、「私」を規定し制約する生政治的な法的秩序を確認し、その秩序がさらに男根ロゴス中心主義という秩序、さらには意味体系という象徴秩序ともつながる点を確認した。「私」は、これらの諸層において、構成的外部として包摂／排除される。

しかし、「私」はその状態にとどまらず、そこからズレる様態を見せているのだ。本稿で最も注目した「私」の「ほんやり」することは、「離人症」として類型化され、意味づけられるのではなく、「ほんやり」することによって秩序からズレることを意味する。この生の様態に対する分析こそが、李

良枝文学に対する従来の研究において見逃されてきた、「除籍謄本」を特徴づける重要な要素である。以上のように、在日朝鮮人を取り巻く言説批判に加え、本稿において提示できた「私」が開いてみせる生の様態は、その他の李良枝の作品を読解する際にも有効となるだろう。

ただし、君島 [2018] も指摘するように⁷⁾、「除籍謄本」が未完成でありかつ未発表の作品である点には、十分注意を払わなければならない。「(了)」として話は締めくくられるものの、拾われていない伏線らしきものや、作家の書き込みすら残されており、最初期に書かれたにもかかわらず、李良枝生前にはこの作品が日の目を見ることはなかった。

なぜ出されなかったのであろうか。「除籍謄本」にて現れる生の様態が、テキストとして読者の目に触れた際には、秩序による意味化の暴力を露わにするという効果を生み出すことは本稿にて確認したが、「私」の「ぼんやり」することは、テキストの中に限った場合は、「私」の逸脱的なすり抜けに過ぎないとの批判も可能である⁸⁾。つまり、またしも雑音としてまとめられるだろう「じりじり」とした音や、「離人症」として読み上げられるだろう「ぼんやり」は、「私」を規定する秩序そのものを変えるには至らないのかもしれない。「私」は、未だ「鉄格子」に囲まれたホテルの部屋の中にいる。しかし、「除籍謄本」が描かれる際に、すでに取り組んでいた作品である「かずきめ」(1983)においては、その点がある程度克服されているとも考えられる。本稿における「除籍謄本」における限界と照らし合わせて、「かずきめ」及び、その後の李良枝の作品を考察することは、今後の課題としたい。

注

- 1) イ・ヨンスクは、李良枝の作品における「ウリ (= 我々)」という表現と李良枝の作品に描かれる「シボレート」を言語学的に論じた。尹の李良枝批判に言及するイは、李良枝の文学を「日本と韓国というふたつの鏡に挟まれて苦悩する〈在日〉及び民族」のすがたをもっとも誠実に、そして克明に

描いた」[イ・ヨンスク 2007:82] と評価する。

- 2) 例えば渡辺 [2006] は、李良枝の作品全般にアイデンティティーポリティクスの克服の様相を見てとり、岡野 [1997] は、李良枝先行研究の中では稀なフェミニズムの観点から「由熙」を考察し、「性」「民族」「国家」の問題を捉えたひとつの新しい小道を作っている作品だと評価する。上田 [2000] は同じく「由熙」に、日韓両言語には還元できない「新たな『ことば』」を見出す。鄭百秀 [2013] は母国と母国語、両方の言語イデオロギーを揺るがす作品として「由熙」を評価する。
- 3) 全集には「あにこぜ」と「刻」の間である 1983 年末から翌年の初め頃にかけて執筆されていたとされている。だが『石の聲 完成版』に収録された講談社の編集者との手紙 (1982 年 11 月 8 日) の中で、「除籍謄本」は「かずきめ」執筆途中に書き始めたものであると李良枝自身が語っている。李良枝は 1982 年 11 月に「ナビ・タリョン」を『群像』にて発表し、1983 年 4 月に 2 作目の「かずきめ」を同雑誌に発表している。したがって「除籍謄本」は第 2 作目あたりの、最初期の作品と位置付けられる。
- 4) 柳美里 [2020] は、李龍徳『あなたが私を竹倉で突き殺す前に』(河出書房新社、2020) の出版記念対談において、関東大震災時のシボレートに対する「緊張と恐怖は、身体的な体験、記憶」が、在日韓国・朝鮮人の中で伝承されていると述べる。
- 5) 木村は中動態について次のように説明する。「能動態が他者に向けられているのに対して、中動態は自分自身に向けられる。だから中動態はしばしば『自らを～する』という再帰動詞のかたちを取る。ということは、[...] デカルトのコギトすなわち『私が見ていると私に思われる』videre videor の中には、自分というノエシスの主体が同じく自分というノエマの客体を (ある意味で) 感じ取っているという中動態的な構造が認められる [...]。『主体の二重性』と言い表せるこの構造こそ、分裂症の (現在の言い方で言えば統合失調症の) 最大の特徴なのである」[木村 2017:43]。
- 6) Luce Irigaray, 1985, *Speculum of The Other Woman*, Cornell university press. を参照。特に当著書における「Any Theory of the “Subject” Has Always Been Appropriated by the “Masculine”」を参照。
- 7) 君島は、「除籍謄本」が草稿であったことに細心の注意が必要な理由として、「既出作とは異なり、国家の書記言語である除籍謄本が題である点や内容の若干の荒さからも、帰化をめぐる政治的社会的言説編成から離脱する強度を持ち得ているかは注意を要する」[君島 2018:79] と指摘する。
- 8) ジュディス・バトラーは、不安定な地位に置かれ

るものが、安定を求めて行う「同一化《幻想》」の失敗は「法に対する抵抗の場を構成する」[ジュディス・バトラー 2021:142]とする。しかし、その際の失敗の抵抗としての可能性は、法の構造自体を変えられるものではなく想像界において行われる抵抗であり、象徴界の構造を変えることが出来ないと指摘する。

参考文献

日本語文献

- ・李良枝 (1993)『李良枝全集』講談社。
- ・李良枝 (2023)『石の聲 完全版』講談社文芸文庫。
- ・イ・ヨンスク (2007)『異邦の記憶』晶文社。
- ・上田敦子 (2000)「〈文字〉という「ことば」—李良枝『由熙』をめぐって—」『日本近代文学』第62集、pp.128-143。
- ・遠藤正敬 (2013)『戸籍と国籍の近現代史: 民族・血統・日本人』明石書店。
- ・岡野幸江 (1997)「『言葉』への懷疑 李良枝 (イヤンジ)『由熙』の世界 (特集 ジェンダーの探求—二一世紀をめざして)」『社会文学』11号、pp.83-92。
- ・君島朋幸 (2018)「李良枝『除籍謄本』論」『文化 / 批評』第9号、pp.61-82。
- ・金燠我 (2004)『在日朝鮮人女性文学論』作品社。
- ・木村敏 (1978)『自覚の精神病理 自分ということ』紀伊國屋書店
- ・木村敏 (2013)「離人症」『精神医学を広げる 日本の名著論文選集』中山書店、pp.189-230。
- ・木村敏 (2017)「「こと」としての生と死」『医学哲学 医学倫理』第35巻、pp.42-48。
- ・木村敏・野家啓一 (2011)『空間と時間の病理——臨床哲学の諸相』化合出版。
- ・姜徳相 (2020)『〈新装版〉関東大震災』新幹社。
- ・ジュディス・バトラー (1999) 著、竹村和子訳『ジェンダー・トラブル フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社。
- ・ジュディス・バトラー (2021) 著、佐藤嘉幸、竹村和子、越智博美ほか訳『問題 = 物質となる身体——「セックス」の言説的境界について』以文社。
- ・鄭百秀 (2013)「ディアスポラの祖国語 李良枝「由熙」(特集 世界文学に見る故郷)『櫻美林世界文学』9号、pp.3-22。
- ・寺下浩徳 (2007)「李良枝『由熙』再論 つけられたいくつもの名前をめぐって」『次世代) 人文社会研究』3号、pp.451-462。
- ・尹健次 (2001)『「在日」を考える』平凡社。

韓国語文献

- ・渡辺直紀 (2006)「관계의 불안 속에서 헤메는 < 삶 > - 이양지 (1955-92) 소설의 작품 세계 -」『日本研究』제6집, pp.259-281。

英語文献

- ・Luce Irigaray, 1985, *Speculum of The Other Woman*, Cornell university press.

参考資料

- ・「『あなたが私を竹槍で突き殺す前に』 完結記念対談 柳美里×李龍徳「未来への苛烈な祈り」」Web 河出、2020年3月20日、<https://web.kawade.co.jp/bungei/3432/> (最終アクセス: 2023年8月29日)

論文

在日朝鮮舞踊にみられる「民族性」の所在 —『朝鮮民族舞踊基本』（1958）「剣舞」（コンム）に見る「伝統」的要素—

朴景蘭（お茶の水女子大学博士後期課程）

1. はじめに

朝鮮半島は政治的な事情により北の朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）と南の大韓民国（以下、韓国）に分かれており、それが南北の人々の往来や交流を制限してきた。そして、民族色の強い伝統的な文化である舞踊も、北と南はあまり交わることなく、別々に舞踊の在り方を発展させることになった。

筆者は東京韓国学校で韓国舞踊教師として15年間、韓国舞踊と伝統音楽を教えてきた。また、それと並行し、韓国の舞踊月刊誌である『MOMM』の記者として日本で舞踊に関する情報を折々取材してきた。その一環として、在日朝鮮舞踊家第1世代である任秋子（イムチュザ 1945-2019 以下任）氏の「チュムハンギル」（춤 한길 2017年7月16日大田区民ホールアプリコ）の特別講演およびその練習場に足を運んだことがある。朝鮮半島のチョグリを身に包み、優れた身体能力を備えた踊り手たちが民族的なリズムに乗り、絶えず微笑みながら楽しげに踊るのを目にした。これは明らかに韓国舞踊とは異なる性質の舞い方であった。朝鮮舞踊と韓国舞踊との違いは、筆者だけではなく、どちらかの舞踊を知る者なら直感的に容易に捉えられるものなのである。その一方で、在日朝鮮舞踊の関係者の中には、南と北の伝統を必ずしも別のものとは考えず、韓国舞踊と朝鮮舞踊は同じルーツを持っているという人もいる。

後述するように、在日朝鮮舞踊は崔承喜（チェスンヒ 1911-1969 以下崔）の舞踊を模範とし、それを継承する形で実践されてきた。筆者は、崔が体系化した朝鮮舞踊に、崔の前から朝鮮半島にあると考えられる要素がどのように組み込まれたかを調査することにした。特に、古い要素に着眼すべく、朝鮮半島でとりわけ長く踊られてきた、「剣舞」（カウルチュム（칼춤）とも称するが、以下コンム）を取り上げる。

「剣舞」に関する資料としては、崔本人が1946年に北朝鮮へ渡ってから執筆した『朝鮮民族舞踊基本』（以下教本）（1958）があり、そこで「剣舞」の基本動作に関する記述を見ることができる。その他にも、崔が創作した舞踊劇「沙道城（サドソン）物語」の映像記録もある。ただし、後者はわずか50秒ほどの動画で、そこから得られる情報は限定的である。そこで、崔の教本（1958）を本研究の主たる資料とし、教本から読み取れる基本動作を在日舞踊家の協力を得て復元することで、分析を推し進めることにした。

まず、崔承喜が北朝鮮に渡り朝鮮民族舞踊を作り上げた経緯を辿り、教本（1958）を参照し、韓国舞踊の原理と照らし合わせ、崔が朝鮮の「伝統」と称される要素をいかに「剣舞」に組み込んでいったのかを検討する。同時に、南北の異なりが確認できると共に、在日朝鮮舞踊家が朝鮮舞踊をいかに表現しているかが如実に浮かび上がると考えられる。

(1) 問題提起

a. 金海今の見解

朝鮮舞踊と韓国舞踊の比較を行った先行研究としては、金海今〔キムヘクム 2012〕の『朝鮮民族舞踊基本』と太極構造の基本¹⁾チュム(踊り)の性格と訓練体系研究」があげられる。「朝鮮民族舞踊基本」と、韓国舞踊の基本動作に基づいた「太極構造の基本チュム(踊り)」の各基本動作に現れる呼吸と技法などに関する比較を行った研究で、金海今〔2012〕は、朝鮮舞踊と韓国舞踊の(太極構造の基本チュム)の呼吸法は類似しており、技法においても、表現の様式においても、共通の特徴が見られるとしている。鄭炳浩〔1993〕は、韓国舞踊の特性を、「静」(정)・「中」(중)・「動」(동)に形容することが出来るとした。特に、韓国舞踊は、呼吸と伴う身体を以って表現するものであり、息を吸う「吸気」(들숨)、息を「止め」(멈춤)(日本語でいうところの「溜める」動作をさす)、それから、息を吐く「呼気」(날숨)という呼吸法を用いる。その呼吸に伴う身体技法としては、「結び」形(맺음형)・「オルム」形(어름형)(李七女〔2005〕は「オルム」形について「あやす」と訳している。他にも「オルギ」(어르기)、「オルダ」(어르다)などの動詞型に表記する場合もあるが、ここでは「オルム」・「解く」形(풀음형)の3つの技法が現れる。

金海今〔2012:88〕は朝鮮舞踊にも、韓国舞踊の特性とされる「静」・「中」・「動」の構成が現れ、身体技法においても韓国舞踊の「結び」形・「オルム」形・「解く」形と共通性が見られたとした。さらに、呼吸法においては、韓国舞踊の呼吸法でいう「止め」は、朝鮮舞踊では「停止」呼吸として現れ、韓国舞踊の「吸気」(들숨)は、朝鮮舞踊においては「引き上げ呼吸」に、また、韓国舞踊の「呼気」(날숨)は、朝鮮舞踊の「引き下げ呼吸」に見られたとした。加えて、朝鮮舞踊の場合、「전주르기」・「ジョンジュルギ」という呼吸が存在しており、それは、身体を左右に揺する動作を遂行する呼吸を指し、韓国舞踊の「어름、オルム」形に通

ずる〔金海今 2012:88,158,201〕と記述している。

しかし、北朝鮮の文献では「ジョンジュルギ」動作と「オルム」動作は個々の別途の動作として分類されており、「ジョンジュルギ」動作は「オルム」より律動感があり、揺れが大きく、身体の揺れが目視できる動作でうねりが伴うとし、そのうねりの大きさは大・中・小に区分できると概念づけている。また、「オルム」の場合は肩の微細な動きとして微細な内向的性格を窺わせる微細な揺れとして現れると記されている。両者とも朝鮮舞踊の民族的な魅力を感じさせる洒落た要素である点では共通しているが、以上の事を踏まえると、「ジョンジュルギ」動作が韓国舞踊の身体技法「オルム」型と相通ずるという金〔2012〕の考えには、疑問が生じる。なぜなら、金海今〔2012〕の説に従えば、朝鮮舞踊と韓国舞踊はより類似したものとして現れると考えるからである。金の解説によれば、北と南の違いが明示されないままになる。

(2) 研究方法及び研究目的

崔の教本と、韓国で踊られている「剣舞」に関する資料や、韓国舞踊の原理に関する文献及び、北朝鮮の舞踊用語を調べるために北朝鮮の文献を参考にする。そうすることで、教本に示された「剣舞」の構成や動作の形が読み取れる。また、それらを南側の民俗舞踊の動作と比較し、南側が「原理的」と考えている要素の有無を検討する。また、崔の教本の「剣舞」の基本動作を解き、在日舞踊家による復元動作の映像記録を参考することで、身体技法と表現様式が確認できると考えられる。このような分析過程で、崔が「剣舞」の動作を形成する際に拠り所としたものが何であったのかが浮き彫りにされ、崔が「伝統的」と考えた要素を抽出することができよう。加えて、再現者と、在日韓国舞踊家(朝鮮舞踊から韓国舞踊に転向を経験し、両者の違いの見解を提供できる舞踊家)に動作に関する証言を参考にする。

本研究では、崔の教本の「剣舞」の基本動作の記述から、崔の伝統的要素が「剣舞」にいかに関わりこまれているか検討し、崔にとっての「伝統」を

明らかにすることで、今日における朝鮮舞踊と韓国舞踊の違いを理解するための有力な手掛かりを提供し、在日朝鮮舞踊家の実践的な「剣舞」の動作がどのように表現されているかを確認する。そうすることで、朝鮮舞踊と韓国舞踊の異同を改めて見つめ、何がその違いを生み出していくのかを明らかにしていく。その過程で「伝統的」または「民族的」と見なせる要素を発見することを目的とする。

2. 北朝鮮で民族舞踊の生成

(1) 崔承喜の「剣舞」(1934) に対する意図

崔承喜は1926年に渡日し、石井漠（イシイバク 1886 - 1962）のもとで現代的な西洋の舞踊を学び始めた。1934年に日本青年館ではじめて発表会を開いたが、その際、朝鮮的な要素を組み入れた作品を披露した。1942年にも日本青年館における長期独舞公演を行ったが、その第一部で朝鮮舞踊の基本を発表し、その時のプログラムに『剣舞』（初演1934）という作品の意図について崔自身の見解や思いを綴っている。以下はその文章の一部である。

「朝鮮古来の剣舞は、新羅時代的美将「黄昌」の英雄的行為を称えるために創られたことに起因するが、後世において妓生²⁾により継承され、その原型を失い、剣の動かし方を主とする、繊弱な動きに変わっていった。それをその原型に戻さんがために新しく創作した踊りである」[高嶋1981:46]。

「後世において妓生により継承され、その原型を失い、剣の動かし方を主とする、繊弱な動きに変わっていった」という記述からもわかるように、近代に見られる韓国の舞踊の多くは妓生らによって演じられた踊りであった。崔が生まれた1911年当時、妓生らは社会的身分が低く、人間らしい尊厳に満ちた生活を営むことが出来なかったと言われる。そのため、妓生らの踊りには悲しさや辛さの表現が多分に見られた。そして、妓生らの踊りの

流れを汲む今日の韓国舞踊は「恨み」の舞踊だとさえ言われている[李七女 2005:48]。

ところが、崔の解釈によれば、妓生らの踊りの流れを汲む「剣舞」は、原型の喪失を意味した。『自叙伝』（1936）でも語られているように、崔は朝鮮（朝鮮半島）の舞踊を再建したいと考えていたため、「剣舞」の原型を復活させつつ自分流に創作しようとしていた。そして、崔が採用した道は、力強い「剣舞」の創造であったと考えられる。現存する崔の「剣舞」（1934）の写真を見ると、現在韓国で見られる「剣舞」とは異なり、男性的な王冠とズボンをまとい、凛々しさを表現し、逞しく力強いポーズをとっている崔が確認できる。

(2) 崔承喜による朝鮮民族舞踊の台頭

1946年に、北朝鮮にわたった崔は、平議で金日成の民主主義文化建設に参加することとなり、国から財政支援を受け、崔承喜舞踊研究所を開設した。当時、北朝鮮は民族舞踊を人民の嗜好に合わせた形で発展させ、舞踊指導を国の政策に組み入れる方針を打ち出していた。民族舞踊とは、人民の生活感情と情緒風習、ひいては民族的特性を反映する芸術であり、民族的な教養としての力を有すると考えていた。崔は、この時期から舞踊劇、民族舞踊の基本と諸道具を持った舞踊基本動作などを執筆し多数の作品を創り始める。特に、教本の執筆にあたっては、民族舞踊遺産を発掘すべく研究を積み重ねていく。『朝鮮民族舞踊基本』（1958）はそのような崔の研究成果をまとめたもので、ここに朝鮮半島の舞踊において初めて舞踊が体系化され、舞譜化された記録が登場することになる[白香珠 2005:59-60]。また、崔は、大規模な舞踊劇を創るためには民族楽器の改造が必要であると判断し、民族楽器を西洋のオーケストラのように編成した。こうして、この時期に北朝鮮民族音楽が誕生したといっても過言ではない[金賛汀 2002:249-250]。ここで注目すべきことは、舞踊に伴う朝鮮民族音楽伴奏として、3弦6角（大琴・横笛（2）・奚琴・杖鼓・太鼓）だけではなく西洋楽器も加えられたとみられる点である。

以上のように、北朝鮮の場合、国の政策が契機となり、古い素材を発掘しながらも新たな形式を加えていく営みが急速に推し進められたと見られる。

(3) 在日朝鮮人と朝鮮民族舞踊

白香珠 [2005:79] によると、1953 年に韓国戦争の休戦協定が結ばれ、北朝鮮は社会主義国家として本格的に始動し、金日成体制が確立されていく。その一方で、日本には、第二次世界大戦中やそれ以前に日本に連れて来られた朝鮮半島出身者たちがいた。彼らは朝鮮人としての民族性を抹殺する政策によって弾圧を受けていたため、次世代の言語教育のために学校を設立することになった。1950 年代後半になると、在日の朝鮮半島出身者たちにも北朝鮮と韓国との違いが意識されるようになる。そして、北朝鮮の教育方針に従う総連の傘下に存する朝鮮学校と、韓国式の教育を重視する民団の傘下に位置する韓国学校とが設立されるようになった。それぞれの学校では言語教育はもちろん舞踊教育も始まった。朴貞順 [2000, 2012] によると、在日 1 世の頃には先祖代々に受けつづけた民族の魂や、民族固有のリズムや動きに対する記憶が鮮明であったが、時代の変化と共に、「民族性」は希薄になっていったため、在日朝鮮学校では「民族性」を高揚させるために民族文化や伝統の体现を重視した。特に、民族情緒と色彩が含まれている民族舞踊教育は民族的矜持と自負心を高める手段であるとした。その中でも朝鮮学校の民族舞踊教育に対して朴貞順 [2012:4] は「民族性がとりわけ著しく反映された我が民族舞踊は、資本主義日本の地で民族の固有の伝統と風習を守っている在日同胞たちの民族性を養うために大きな役割をしている」と述べた。

在日朝鮮学校では、民族的特性が反映されている舞踊が、小学校から大学まで「小組」(ソゾ) 部活動を通して指導されている。その基本練習として、「舞踊基礎動作」、「朝鮮舞踊基本」の訓練から、多様な民俗舞踊の練習や、朝鮮のリズムに合わせる演習が段階を組んで指導されている。幼少期か

ら朝鮮舞踊の魅力や面白みを身体に叩き込むことで「朝鮮の香り」を忘れないようにするという [朴貞順 2000:36, 37]。

朝鮮学校の舞踊教育について注目すべきことがある。1960 年の初め、北朝鮮から日本の新潟港に帰国船 (日本から北朝鮮に帰る船) で入港できるようになったことである。その船には北朝鮮の舞踊指導者らが乗っていたため (北朝鮮の舞踊指導者らは船から降りることはできなかった)、日本に停泊している間、総連傘下の在日朝鮮芸術団 (現、金剛山歌劇団の前身) の舞踊指導員であった任秋子 (イムチュザ 1945-2019) らは、その船に乗り、船の中で北朝鮮の舞踊指導者らから北朝鮮の舞踊を教わりはじめた [朴景蘭 2021:103]。1962 年には『朝鮮民族舞踊基本』(1958) の中の基礎といえる「立舞」(이쁘춤) が、北朝鮮科学映画撮影所で撮影され、その映像が日本に送られた。その動画をもとに任秋子らは、朝鮮学校の「小組」(ソゾ) 活動を通して舞踊を教えることになった。この任秋子らの活動は、北朝鮮から伝えられた民族舞踊が直接伝授される機会として重要な意義を持っていた。なお、在日朝鮮学校で民族舞踊という言葉が用いられたといっても日本で朝鮮民族舞踊を演じている人々がみんな北朝鮮の国籍を所持しているとは限らない。

在日朝鮮人は、被支配国の日本で、訪ねたこともない北朝鮮を祖国としながら、総連傘下の朝鮮学校やプロの芸術団体を通して北朝鮮の民族文化を継承している。

次の章では崔が北朝鮮で朝鮮舞踊を体系化した教本の記述から、現在韓国に見られる「剣舞」の構造や動作の原理を調査する。また、教本の「剣舞」の動きがどのように表現されているかを在日朝鮮舞踊家の実践動作から確認し、南と北の動きの違いはどのように生まれたのかについて考察する。

3. 北朝鮮における教本に残された「剣舞」 - 『朝鮮民族舞踊基本』(1958)を中心に -

(1) 「剣舞」の由来

韓国での「剣舞」の由来は、新羅時代(BC57-935)まで遡る。黄倡郎(ファンチャンラン)がカルチュム(갈춤)を踊りながら百済の王を殺し、彼も殺されたが、新羅の人は黄倡郎を偲ぶため、彼の顔を模したお面をつくり、そのお面を被って剣を持ち踊ったことから由来するとしている。北朝鮮の『朝鮮民俗舞踊』[1991:105]を参考にすると、「剣舞」について韓国と同様に黄倡郎(ファンチャンラン)が踊ったとし、力強く、実践の戦い手法を用いる踊りとしている。

現在韓国で見られる「剣舞」の構造は、朝鮮時代(1392-1897)後期、宮中での祝宴の際に、妓生によって踊られている宴会の模様を描いた『呈才舞図忽記』(ジョンゼムドホルギ 1893-1901)に記録されている[イムスジョン 2006:18-20]。そこには「筵風臺」(ヨンブンデ 円形を周りながら回転する動作)や隊列を組んでいる様子、舞進舞退(前方に進み、後方に後退する)、また、「弄剣」(ノンコム 座位動作)が描かれている。一方、朝鮮通信使が嶺南左道を通った時、『史行日記』(サヘンイルキ)で任守幹(イムスガン 1965-1721)が地方の清松(チョンソン)妓生が踊った「剣舞」を観て残した記録を見ると、双剣を投げ、また片手で受け取る武術的な描写[ヤンジソン, カンインスク 2019:492,495]があり、宮中で踊っていた「剣舞」とその形態が異なっていた可能性が高い。

専門の舞踊家、妓生によって官庁で踊られていた「剣舞」は、1909年に官妓制度と地方の「教坊」(注2)参照)が廃止になった後、その代わりとして機能していた妓生組合の券番(クオンボン)を通じて伝承されることになる。このように「券番」で踊られた舞踊が韓国伝統舞踊に大きく関わり[許娟姫 2008]、「剣舞」は、比較的新しい時代に創作されたものと小林[2015:45]が述べているように、それぞれの地域で踊られた原型を保持しつ

つ新たに創作され、継承されている。

崔が「剣舞」を観察したと推測される時期はおそらく、近代に入って「券番」(クオンボン)という制限された空間的要因によって動作や構造が改められた「剣舞」である可能性が高い。そのため、崔は、「剣舞」の本来が持つ逞しさや凛々しい動きを自分の作品に取り入れようとしていたと推察する。

(2) 復元作業の流れ及び教本の動作解説:

a. 崔の「剣舞」(1958)に関する現況および復元作業の流れ

復元作業³⁾に携わった「剣舞」の再現者である朝鮮舞踊家、兪景姫(ユキョンヒ以下兪氏)氏は、日本で生まれ、小学生時代の1985年から高校まで朝鮮学校の「小組」活動を通して朝鮮舞踊を学んだ。後に、神奈川県に在日芸術のプロの団体「歌舞団」で活動するが、その数年前の1997年には北朝鮮で「剣舞」の研修を受けていた。兪氏は、朝鮮民族舞踊家第1世、任秋子(イムチュザ 1945-2019)から舞踊を学んでおり、兪氏の動きには日本に伝わった最初(当時)の朝鮮民族舞踊が反映されていると考えられる。

他方、朝鮮大学の舞踊指導者である朴貞順(パクジョンスン以下朴氏)は「剣舞」の教本とそれに付随する文献資料の提供、及び「剣舞」の伴奏曲の録音を担当するとともに、再現動作の全体監修を行った。また、在日韓国舞踊家、辛錦玉(シンクンオク以下辛氏)氏は、小学校から高校まで朝鮮学校で朝鮮舞踊を学び、プロの団体である、金剛山歌劇団で朝鮮舞踊を踊っていたが、現在は韓国舞踊に転向し、2000年度から在日韓国舞踊家として活動している。再現動作はともかく実践を通して韓国舞踊の例や証言を参考にした。

再現前の予備作業として、2020年3月に兪景姫(ユキョンヒ)氏に『朝鮮民族舞踊基本』(1958)の中の「剣舞」の復元作業を依頼し、承諾を得た。その後、朴貞順(パクジョンスン)氏に、「剣舞」の復元動作における全体監修を依頼し、こちらも承諾を得た。

実践作業の段取りは以下の通りである。まず、2020年6月から、兪氏、朴氏、筆者それぞれが教本に記された動作を読み解く作業を行い、動作の確認は、コロナ禍であったため、Zoomを利用して行った。

教本の中の「剣舞」の解説では、予備動作で足の各形の位置や身体の方角を番号と共に図示している。上半身の予備動作でも腕の位置に対する番号と図が詳細に説明されており、基本動作においても、剣を握む姿勢が番号と図と共に詳しく示されている。「剣舞」の動作を再現するためには、足の各形に付された番号や、空間的方向、腕の各形に付された番号を理解し、説明通りに動きを繋げることが必要で、まずは各足や腕の位置を身につけることが最初のステップだった。再現者兪氏と

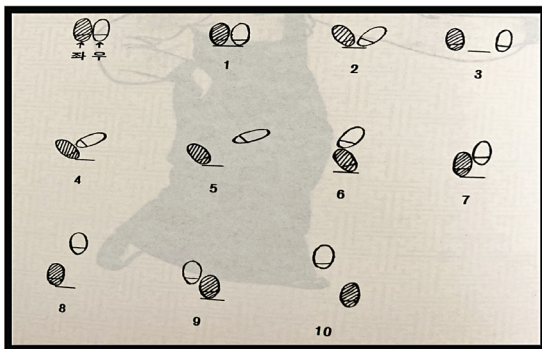
アドバイザー朴氏は、動作をすらすらと素早く解き、「剣舞」の全体動作や構成を再現することに成功した。

実践作業の過程での記録映像作業は3の段階にわたり撮影を行った。(撮影場所:お茶の水女子大学内の文教館)

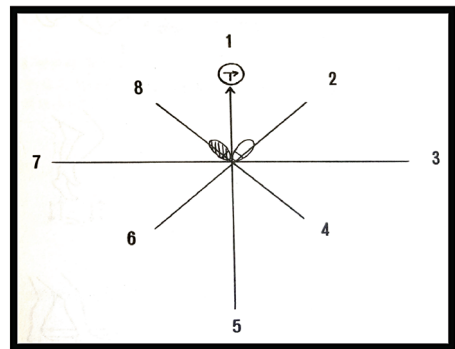
再現の手順は以下の通りであった。

第1段階(2020年7月11日)では、兪氏の実演を録画した。伴奏曲には、現在基本練習で使用している「タリョンチャンダン」を採用した。(2020年7月26日)その後、朴氏が映像を視聴し、兪氏の実演が教本で示された舞踊に準じたものかを判断し、パフォーマンスの適合性について助言した。

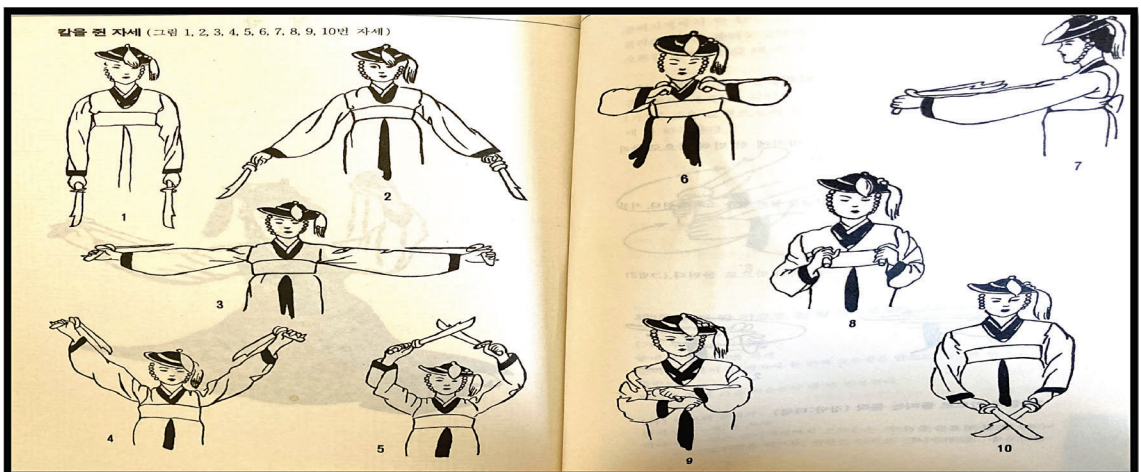
第2段階(2020年8月26日)では、第1段階で朴氏から受けた助言に基づき再現作業を行っ



<図1>「足の位置」(教本 p.10)



<図2>「体の方向」(教本 p.11)



<図3>「剣を握む姿勢」(教本 p.208-209)

た。崔の教本の後半には「剣舞」の朝鮮民族舞踊伴奏曲に関する指示があり、その記述に従い、朝鮮音楽家（匿名希望）に笛で演奏された、8分の12拍子、8小節の短い旋律、「遅いタリョンチャンダン」を採用した。その旋律に、崔が提示した4小節の「遅いタリョンチャンダン」を朴貞順（パクジョンスン）氏が杖鼓で伴奏に加えた。

第3段階（2020年9月10日）では、朝鮮音楽家が笛で演奏した旋律だけで実践を行った。

b. 教本で記した動作の構成

教本で示された「剣舞」の動作は37動作で構成されている。剣を握む姿勢が図と共に10種、予備動作が5種、その他の付随的な動作が紹介されている。韓国で踊られている「剣舞」の作品の構造は、座位動作、立位動作、回転動作に区分されている。崔の場合も同様の大きな区別をしているが、それだけにとどまらず、そこから詳細な動作を考案しており、動作の難易度も高く、動作の種類も多種多様だった。立位動作は19種、座位動作は8種提示され、回転動作においても10種の動作が解説されていた。ただし、「剣舞」を踊るためには、教本の「立舞」（이쁘춤입춤）の基本動作に説明されている体の方向、腕の位置と足の方向を番号で示しており、腕や身体の方、足の位置の番号をもあらかじめ把握しておく必要がある。

(3) 教本の「剣舞」の動作説明と先行研究の記述に見られる類似性

a. 崔の「剣舞」の再現動作と共通の動作

教本の「剣舞」の復元作業後、崔の再現動作をYouTubeで検索した。崔の「剣舞」の基本動作と、現在韓国で踊られている「剣舞」（映像を見る限りでは）とはそれほど類似性が見られない。その中で崔の再現動作「第1動作：剣を外側に回す動作」-（1）動作、両腕を開き外側に回す（모뎀로歩き・머물러걷기）」の動作と類似している動画を発見した。それは韓スンオク（1932-2023）流『剣舞』の作品を実践した梁承美（ヤンスンミ以下梁）『剣舞』

の動画記録だった。両者とも腕を胴体の横に伸ばし、比較的肘を曲げずに剣を手首で回しながら、屈伸をし、腕を上下に垂直的に揺する動きが崔の動作と類似している。また、梁（2020）との質疑応答で、梁（2020）が韓スンオク（1932-2023）に学んだ「咸興（ハムフン、北部地域）剣舞」は、ほかの「剣舞」のように振り払う動作より、（剣）を回す動作が多数ある」と証言している。実際、韓国で見られる『剣舞』では剣を振り払う動作が大半であるが、梁承美『剣舞』と崔の「剣舞」では剣を回す動作が主であることも共通していた。梁は、自分の師匠であった韓スンオクが、後で北から越南してから自分流の『剣舞』を創ったと証言している（梁 2020）。彼女によると、韓が北朝鮮で舞踊を学ぶ時に、崔承喜の舞踊研究所で張紅心⁴⁾（チャンホンシム 1924-1994）に「咸興（ハムフン）剣舞」を学んだという。つまり、崔は北朝鮮の北部地域（以下、北部地域）に残されていた「剣舞」を拾い集めていた可能性がある。その他は以下の2つの項目を上げ調査している。

b. 教本と先行研究の記述からみる韓国の伝統的な「剣舞」との類似性

剣を回す時における手の使い方

韓国の先行研究である、イムスジョン [2006] とノスチョル [2008] には、崔の教本で示した「剣舞」の基本動作における剣を回す時の注意点と、手を伸ばす方法において、類似した記述が見られた。崔の教本の予備動作、第1動作の（剣を）外側に回す動作の説明に、剣を回す際に「※肘を曲げずに手首で回す。刃を横にして腕に擦れるように回す」（p.210）という記述がある。イムスジョン [2006:210-235] では『平壤（ピョンヤン）剣舞』と『海州（ヘジュ）剣舞』は「腕（肘）をまげずに剣を手首で回す」、「剣を回す際には肘（腕）を曲げないのが特徴」という内容があり、他地域には見られない、北部（北朝鮮）地域の「剣舞」の特色であると記述した。また、ノスチョル [2008:271] は『咸興（ハンフン）剣舞』では「剣は手首（호수）で回す」という記述からも、北部

地域では剣を回す際には腕を伸ばして剣を回していることがわかる。

筵風擡（ヨンブンデ연풍대）に関する描写

韓国で踊られている「剣舞」の構造の中には、作品の最後に片足を交代して跳びながら円の周りを回転する動作である 筵風擡（ヨンブンデ）動作と共通した説明が見られる。崔の教本には、韓国舞踊の動作線として用いられる筵風擡という用語は使用されていないが、似たような円形周りの回転を、多様な腕の角度に加えた単純な動作から複雑で技術を要する動作まで 10 種の動作が解説されている。それに対して、韓国の「剣舞」の筵風擡は、剣を振り払うと同時に片足を地面におき、もう片足で若干飛びながら半座りの状態にし、体幹をのけぞりながら立ち上がると同時に剣を振る、この動作を繰り返しながら回転を行う動作である。崔の「剣舞」での筵風擡に比べるとシンプルな動作である。

一方で、崔の場合は、筵風擡を行う時に、地面を打つ動作の描写がある。これに関して、イムスジョン [2006:225-226] が示した、筵風擡を行う時に、『平壤剣舞』と『海州剣舞』の北部（北朝鮮）地域の「剣舞」の特徴として剣で地面を打つ動作に関する描写は、崔の教本の記述と共通していることが確認された。イムスジョン [2006] は、このように剣で地面を打つ動作は、他地域には見られない、北部地域の「剣舞」の特色であるとしている。又、ノスチョル [2008] も『咸興剣舞』の動作の特徴として、両剣で地面を突いたりする動作があると記述しており、これは他地域の「剣舞」からは窺えない動作であるとした。このような点からも、崔の教本の「剣舞」では、北部地域で行う動作の特徴が窺えると言える。

c. 教本の「剣舞」の記述から見る韓国舞踊の原理の共通の要素

動作における足の形と腕の姿勢

崔の教本では、足を踏み出す際の手と足の位置、足の形と姿勢が番号として記入されている。番号

ごとの姿勢を解いてみると、韓国舞踊の特徴として現れるいわゆる腕の形である「仁怒姿八」（インノサパル）と「比丁比八」⁵⁾（ビジョンビパル）、足の形である「足定八丁」（ゾクジョンパルジョン）が確認できる。足を運んで移動する際は「八」、「丁」の形にし、腕の形態を「八」、「ノ」、「丁」にしている [金恩漢 2009]。各姿勢に対しての詳細を説明すると、足の場合は両足の踵をくっつけ、つま先を外側に開く状態が「八」、つま先をずらし立った状態が「丁」である。腕の場合は肩を中心軸に、上または下に 45 度開き伸ばす対称姿勢の「八」、肩を軸に片手は上に 45 度開き伸ばす、もう片方は肩より下位置を逆対称にする「ノ」、また片手を水平に伸ばし、もう片方は下に伸ばす「丁」の状態を基本にしている。

崔の教本で、空間の中で移動をする時に、各姿勢は示された番号に沿って動く「足定八丁」、つまり、足の形を「八」、「丁」の形にして動いていることの確認が取れる。腕のポーズにも番号が記入されており、腕を「八」の字にあげたり、「ノ」、「丁」の字に腕を上げたりする「比丁比八」が確認できる [金恩漢 2009]。

歩き方

崔の教本では、動作の説明において、「モムロ歩き」（一度留まる歩き・머물러걷기・北朝鮮用語）という歩き方の説明があった。しゃがみながら右足を踏み出し、左足を引き寄せ右足の横に揃え、両足の膝を曲げてから即座に膝を伸ばし、今度は同じ動作を左足から始める。このような歩き方を繰り返すのがモムロ歩きである。韓国舞踊でもこの記述と同様の歩き方が存在するが、モムロ歩きとは称しない。

また、崔の教本では「普通歩き」の説明がある。これは、右足から始め、剣を外側に回すと共に、3 歩を普通に歩いてから両足を揃え屈伸をし、このように進んだ後に、後方にも剣を回すと共に左足から右足、左足を交代に変え普通に後退する動作を示す。このような動作は、韓国舞踊の構成原理である、前に三歩進むと後ろに三歩下がるという

「三進三退」(サンジンサンテ)と通じ合っている。このように、崔の教本の動作説明を解くと、伝統的な動きの要素に基づいた動作であることが窺える。

d. 実践で見られる韓国舞踊の要素との相違点

上で述べた通り、崔の教本では腕と足の形や、歩き形に韓国舞踊的要素が見られる。ここでは再現動作での実践において朝鮮舞踊でしゃがんでから膝を伸ばす時の重心移動とポーズの取り方、そして足の運び方について確認し、韓国舞踊との相違点について検証する。

しゃがんでから膝を伸ばす時の重心移動とポーズの取り方

崔の教本の第1-3動作は、右足を(左方向)斜め前方に、左足を後方に出したもので、両足を若干広げ身体の重心を低くし、<図4>で見えるように、(1) 重心を後方の左足から前方の右足へと移していくものである。その後、体幹の重心の移動では右足に重心を乗せると、そこで1拍息を「溜め」となり、次の瞬間、(2) 一気に右足を軸に膝を伸ばす動作に繋がっていく。まるでバレエのエファセ・デリエール・アラベスク⁶⁾のポーズにも見える。むしろその動作は堂々としており、力強く見えた。このような動作は地面に重みを置く韓国舞踊に比べ、動作を上昇させる傾向がある。再現者の身体は背筋がまっすぐ伸されており、上半身を崩すことはなく、腕の形も直線的であった。コキョンヒ[2015:185]が韓国舞踊について指摘したように、韓国舞踊がスピード感ある動きより、ゆっくりした動きになりかねない理由は、膝の屈伸によって片腕が上がると、自然に他の腕は下がり、指先まで静かに、軽く下の方に垂らし微細に回すためである。また、韓国舞踊では、「結ぶ」形から「オルム」形を通して「解く」形までの重心移動を伴う動きが一連の動作になっており、次の動作への移動が程よく、さりげない感じで行われるため、それほど大きなインパクトはない。崔の再現で見られたこのポーズに対して、在日韓国舞踊家である

辛錦玉氏の証言によると、韓国舞踊では斜線向きに一気に起き上がり、力を込めて四肢を外側にまっすぐに伸ばしポーズをとることはないとのことだった。

足の運び方と踏み方

ここでは、前方で片足を軸にしていた場合の、後方の足を前方に運ぶ足の運び方に注目する。韓国舞踊では一般的に、後方にあった左足を前方に持ってくる際は、軸足である右足により近く、踵にすれるように通過させ、前方に持ってくるのが自然である。崔の再現動作<図5>では、(1) 後方の片足を延ばし、後方から前方に足の運ぶ際に、バレエのステップ、ロン(円)・ドゥ・ジャンプ(脚)アテール=地面についての意味のように(バレエではつま先を地面につけたまま半円形になぞるように行う)、主に足裏を床につけて軸足を中心としている。(2) コンパスのごとく脚で円を描くように旋回させながら、(3) - (4) 地面の近くでアン・デッダン(後ろから前に足を移動する)のように足を前方に移動させていることが分かる。つまり、足を上げずに足を地面から離さず移動させていることである。在日韓国舞踊家である辛氏によると、韓国舞踊の場合は、後方にあった片足の膝を曲げ持ち上げて(90度以下にし)、その状態を維持しながら空中で半円を描くようにして大きく旋回させ、前方に進むとのことだった。

(1)

(2)



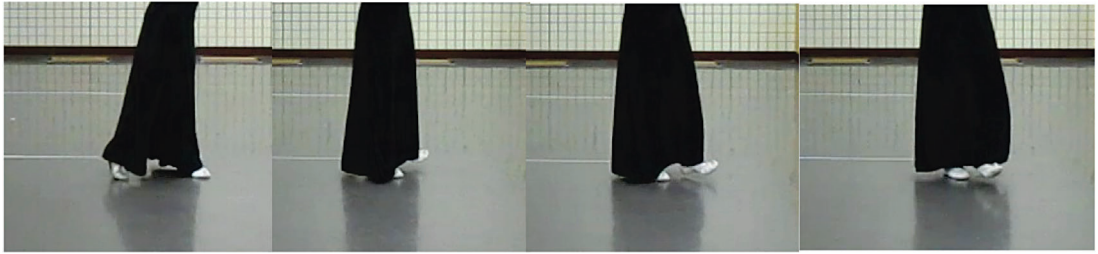
<図4>「しゃがんでから膝を伸ばす時の重心移動とポーズの取り方」(教本 p.215)

(1)

(2)

(3)

(4)



＜図 5＞「足の運び方：教本 1-3 右足に重心を置き、後方の左足を前方に移動」（教本 p.215）

また、韓国では足の踏み方を「バルディディム」（발디딤）といい、強く踵から真ん中を通過し、つま先まで丁寧に通す踏むものである。つまり、つま先まで意識しながら 3 段階にかけて踏むため、足の運び方は直線的でスピードがある動きになりくい。それに比べて、崔の再現では、韓国舞踊の足を 3 段階にかけて踏むのではなく、2 段階にかけて踏んでいるようであった。そのような足の踏み方では、動きを素早くさせることが容易であろう。

再現動作からは、後方にある足を前方に移動させる運び方や足踏みにおいても、韓国舞踊の踏み方と足を移動させる方法に相違点が見られた。言い換えれば、崔の「剣舞」は韓国の伝統的な要素を基に構築されているが、その身体の技法は、主に西洋的な表現に依拠している可能性が高いと言える。

e. 指導語である「ジョンジュルギ」の動作の形と韓国舞踊の美的概念である「興」⁷⁾（フン）、「モツ」⁸⁾（モ）の表現での身体構造の関連性

崔の教本で「ジョンジュルギ」の動作の用語解説

崔の教本の第 7 動作で示された、座位の姿勢で地面を打つ動作において、「※体は上下にジョンジュルギをする（몸을 아래위로 전주른다）」という指導文がある。現在、韓国舞踊で用いる語彙ではないが、辞書で調べると、「ジョンジュルダ」（전주르다）は動詞で、る（르）不規則活用をする。動作を進行し、次の動作に力を加え込めるため間をおく；一休みする；呼吸を整えるという意味であ

り、北朝鮮語として表示されている。

北朝鮮のリマンスン著『朝鮮舞踊用語解説』（1985）の文献では「ジョンジュルギ」（전주르기）について以下のように詳細に説明されている。

「体の重心を片足から次の足に置き換える際に遂行される朝鮮舞踊の動作である。主に、片足を踏み出した状態で遂行される「ジョンジュルギ」は前に出した足の方向に沿って、前後または左右に体の中心を交互に動かしながらジョンジュルギのようになるが、足を伸ばしたり、曲げた状態で行う場合と、足を曲げて座ったり、伸ばしたり、起き上がりながら行う場合がある。このような動作は体の重心が移動する度に若干足の屈伸とそれが含まれた状態の動きを伴うことにより、まるで全身が軽いうねりに乗って揺られているような律動感が感じられる。律動が柔らかく、揃っており粘り強いジョンジュルギは、下半身動作の柔軟性を改善する訓練技法であり、舞踊創作実践においても我が舞踊の民族的な興味と色彩を高める補助的な飾りつけ（洒落）の動作として効果的に利用されている。ジョンジュルギは体の重心が移動する動きの揺れに幅の大きさの程度によって、大きくジョンジュルギ、小さくジョンジュルギ、細かくジョンジュルギとして区分する。」（注：筆者訳）

また、「オルム」（어름）については、

「オルギ」（얼리기）「あやすように上半身を若干揺らす、チレ動作（飾り洒落）を意味する。朝鮮舞踊の内向的性格と含蓄性の律動の特徴を表す動作の一つである。大きく動く動作に比べ、一定にそろえた上半身の小さな、わずかな動きが遂行さ

れるのが特徴である。「オルギ」はその律動が独特な動きと情緒は、朝鮮女性の情緒的内面世界を繊細に表現する要素の一つである。この動作は前後または左右方向に進行する。」(注：筆者訳)

明らかに、このような説明では「ジョンジュルギ」動作は「オルム」動作より律動感があり、揺れが大きいとされている。一方、「オルム」の場合は微細な内向的性格を窺わせる微細な揺れが特徴として現れる。両者とも朝鮮舞踊の民族的な魅力を感じさせる洒落た要素である点で共通しており、両動作は類似しているようでありながらも、異なる動作として描写されている。

崔の教本において「ジョンジュルギ」動作の形と韓国舞踊の構造と「オルム」形

朝鮮舞踊と韓国舞踊の比較を行った研究では、金海今[キムヘクム 2012]『『朝鮮民族舞踊基本』と太極構造の基本チュム(踊り)の性格と訓練体系研究』がある。金海今[2012:88,158]は、朝鮮舞踊と韓国舞踊の(太極構造の基本チュム)の呼吸法は類似しており、技法においても表現の様式においても共通の特徴が見られるとした。

鄭炳浩[1993]は韓国舞踊の構造について、動作の最小単位である動作素⁹⁾があり、動作素は3つの基本パターンによって組み合わせられるとしている。それは、「結ぶ」形(맺음형)・「オルム」形(어름형)・「解く」形(풀음형)である。そして、韓国舞踊は、「静」(정)的・「中」(중)的・「動」(동)的に形容することが出来るとした。鄭[1993]は沈黙の静けさの中に力動的な動きがあり、ここで言う動きは息、呼吸が伴い、停止することなく持続的に働くことを意味する。

最初、「静」的動作では身体の内側にエネルギーを集約し、感情を「結ぶ」形(맺음형)の身体技法が現れ、息を「止め」(멈춤)状態で(日本語でいうところの「溜める」動作をさす)行う。次に「中」間では息を「吸気」状態でいき、「静」と「動」を繋ぐ、動作と動作を連結する役割をする。この時、身体技法として「オルム」形(어름형)(李七女[2005]は「オルム」形について「あやす」と

訳しているがここでは「オルム」を通過する「オルム」動作は「中」、(動作と動作の中間で)で行い息を溜めて、結んだときに起きる緊張状態を柔らかげて解きほぐし、感情をしずめ、結んでほどく動作を調節する役割を担い[鄭炳浩 1993]このような特性から身体表現を創り出しているとした。最後には息を吐く「呼気」状態で、動きの幅が大きく、積もった感情を「解く」形(풀음형)の「動的動作によって、構成されているとした。このように、身体技法である「結ぶ」(맺음)・「オルム」(어름)・「解く」(풀음)に属するそれぞれの動作に、呼吸法である「止め」(멈춤)・「吸気」(들숨)・「呼気」(날숨)に屈伸が伴い、そこで伴奏にあわせられることで初めて韓国舞踊に成立することになる。つまり、韓国舞踊の基本原理は、結んでは解いて、解いては結ぶ身体技法が、呼吸と共に有機的な関係を持っていると言える。

金海今[2012]は、上記で記述したように、朝鮮舞踊も、韓国舞踊と同じように「静」・「中」・「動」的に形容され、身体の技法においても「結ぶ」形・「オルム」形・「解く」形との共通性が見られたとした。さらに、呼吸法においては、韓国舞踊の呼吸法でいう「止め」は、朝鮮舞踊では「停止」(정지)呼吸として現れ、韓国舞踊の「吸気」(들숨)状態においては、朝鮮舞踊では「引き上げ呼吸」(끌어올리는호흡)が行われ、また、韓国舞踊での「呼気」(날숨)状態では、朝鮮舞踊の「引き下げ呼吸」(끌어내리는호흡)が見られたとした。加えて、朝鮮舞踊の場合、「전주르기、ジョンジュルギ呼吸」が存在し、それは韓国舞踊でいう「オルム」を意味し、「ジョンジュルギ」動作を行う際に、身体を左右に揺する動作を遂行する呼吸を指し、韓国の「オルム」(어름)形に通ずる[金 2012:201]と指摘した。そこで金[2012]は、「オルム」形について、身体の重心を左右、前後へ移動しながら膝を曲げるなど、座る動作を行う場合に用いられ、息を吸った状態で一定の動作の中に内包された身体の揺れとして表現されている。その揺れは両足の位置と方向によって前後・左右に現れる。「オルム」技法は内在している感情をより

含蓄された感情として表し、微細な動きとして拡張させると記述している。この解説からは、身体の重心の移動によって現れる揺れを指しているようでありながら、内在的な感情が外に向けて微細に表現しようとする動作としても読み取れる。一方、イヨンヒ [2015:145] は「オルム」動作は、「肩踊り」(오케춤)とも呼ばれ、「肩踊り」から発信される波動を意味するが、心の中で動揺するような感情の「揺れ」状態を指す場合もある。

イヨンヒ [2015] の視点から考えられるのは、北朝鮮文献で言われている、「オルム」の概念に近い。

では、金海今 [2012] が言う朝鮮舞踊の「ジョンジュルギ」動作において、韓国舞踊の技法の「オルム」形と類似しているという指摘には疑問が残る。もしそうであるなら、どうして南と北の動きは異なる動きとしてみえるのだろうか。

そのため、ジョンジュルギの動作を調べる必要がある。

崔の教本全体においては「ジョンジュルギ」の指導語が13か所に使われているが、「オルム」あるいは「オルギ」(어르기)に関する指示語は示されていない。

「剣舞」で示した座位の「ジョンジュルギ」動作を確認するために、再現映像も併せて調査すると共に、教本で示された3つの「ジョンジュルギ」のパターンを確認する。

① 立位での「ジョンジュルギをする」(前後歩き)では、まず右足を右前方に出し、若干膝を曲げ、左足は右足よりも左前方に出し、深く膝を曲げて重心移動を行う。次に、右足は先に出していた右足の位置に戻し、膝を曲げ、前方に押ししたり後方に引いたりする。この動作を繰り返すと揺れが生じ、うねりが発生する。

② 立位から半座りにし、半座りから立位にする間でジョンジュルミョ(전주르며)起き上がる(ジョンジュルギをしながら起き上がる)。この動作では、始発点から終着点まで辿る間に軸を動かし、8の字(\$字)を描く。脚を肩幅に開き、起き上がるため、片足に重心を置き8の字(\$字)を描くようにしながらもう一方の足から他の足に重

心を移し、起き上がる。

③ 「剣舞」で示された座位で「上下にジョンジュルギ」は、座位の姿勢であるため、体幹を上下に引き上げたり引き下げたりし、重心を上下に移動する動作である。

上記の3つの姿勢から考えられるのは、「ジョンジュルギ」は体幹の重心移動を伴う動作であり、特に上記の①と②の動作を行う時は、足を伸ばし、曲げた状態で行う場合と、足を曲げ半座りから起き上がる場合がある。③「剣舞」で示したように座位の姿勢で行う場合もある。いずれにしても「ジョンジュルギ」動作を行う時には呼吸を伴い、溜めた息を引き上げ・引き下げ、あるいは、前方に押して後方に引く呼吸、または、左右に移動する際に息を吸い・吐くような、身体の重心移動が見られる動作だと思われる。おそらく、一回で終わらせるものではなく、繰り返すことによりうねりを生じさせる。

教本の説明には息の仕方までは書かれておらず把握が難しいが、崔の教本の中の「剣舞」で説明された「ジョンジュルギ」動作を再現映像で確認した。<図6>の崔の「剣舞」動作7-2では、(1)座位(両膝を跪く)の姿勢で体幹を前倒しにし、(2)右膝の前で右剣の柄で地面を打ってから、(3)刃を内側にし(左側へ)地面を打つ。(4)-(5)上げたところで右腕を上下に揺する。このように上下に揺する場合(教本では「上下に「ジョンジュルギ」をする」と示されている)、再現者は右腕を上から下の方に下し、重心を移動していることが分かる。しかも、<図>(4)-(5)でわかるように、腕を上から下に下す場合、腕を下の方までじっくり下さないで、途中で次の動作に移動していたため、動作に若干途切れが見られた。例えば、韓国舞踊では、腕を揺する場合、まずは下から上の方方向に移動させるのが自然であり、次の動作に移動するためには動作が途切れないようにさりげなくつなぐものである。

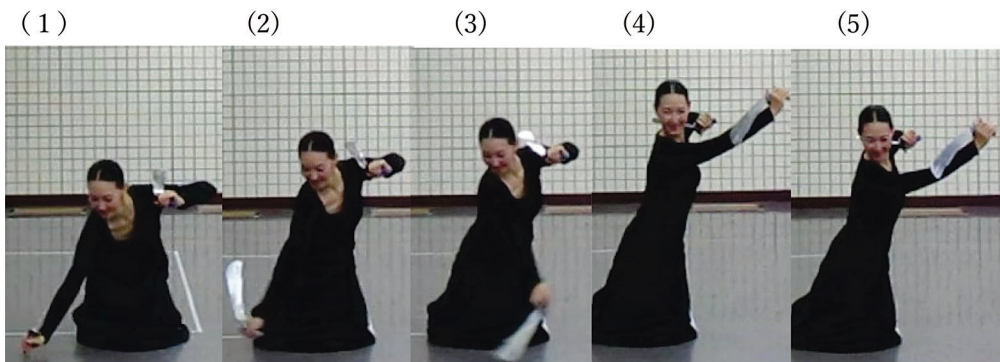
7-3の再現動作<図7>では、(1)座位(両膝を跪く)の姿勢で上半身を前倒し、息を吐き、(柄)剣で地面を打って(2)すぐに息を吸い、両剣の先

を内側に力強く地面を打ちはらいながら(3)上半身を上げ(4)それから息を吐き胴体を下げ、(1)から(3)まで繰り返すと、上下の重心移動が見られる動作である。この動作においても、地面に時間をかけ息を吐くより、息を吸っている状態が長く感じる。というのは、(1)の動作から次の動作に力を加え臀部を上げて胴体も高くしているため、体幹の位置の差が明確に見える。

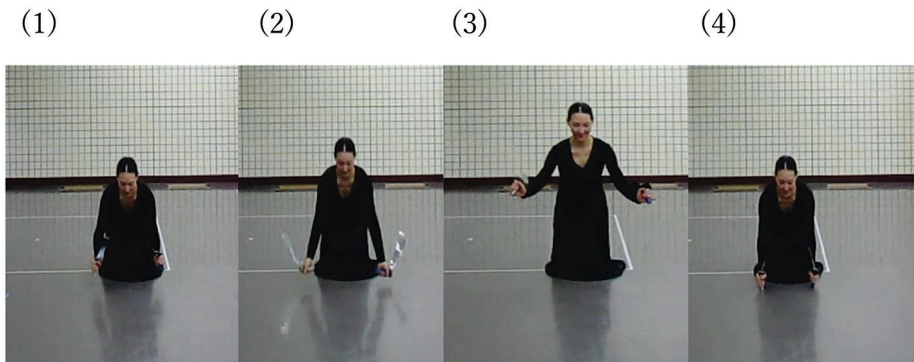
また、7-4の動作<図8>では、(1)両膝を跪いて息を吐き、(左から右へと移動する)(2)息を吸うと共に、胴体と剣を持った両腕はその反動で上がる(3)若干左方向へ移動しながら息を吐き、両剣の柄で地面を打つ(4)息を吸うと共に、胴体と剣を持った両腕はその反動で上がる(5)若干右方向へ移動しながら息を吐き、剣で地面を打つ(6)息を吸うと両手は上がる(7)-(8)両腕を右方向に移動するため、力を込めて一気に上げる。このように地面を3回打つ毎に、その反動で剣を持っ

た腕と体幹は地面から上がり、繰り返すことで体幹は上下に揺れ、揺れが生じる。

再現者の姿勢は背筋を伸ばしているため、小さな放物線のような線が現れ、ポーズとポーズが造形的に見える。この動作を行う際に、息の使い方について再現者に伺ったところ、息を吐いてから、息を休止しているわけではなく、「掴んで」いる状態から息を吐いたと答えた。そのため、金海今[2012]が朝鮮舞踊の呼吸について「停止呼吸」を用いるという言葉はもう一度改める必要がある。再現「剣舞」において見られた「ジョンジュルギ」動作は、膝をまずく座った状態で臀部と体幹を上下に体の重心を移動させる動作である。このような動作は体の重心が移動する度に、若干上半身が足の屈伸のように、上下に軽く揺れる律動感がある。これは北朝鮮でいう「オルム」技法、つまり肩の動きを主とする、つかの間に現れる微細な動作とは異なるものであった。むしろ、「ジョンジュ



<図6>「7-2 体を上下にジョンジュルギ」(教本 p.225)



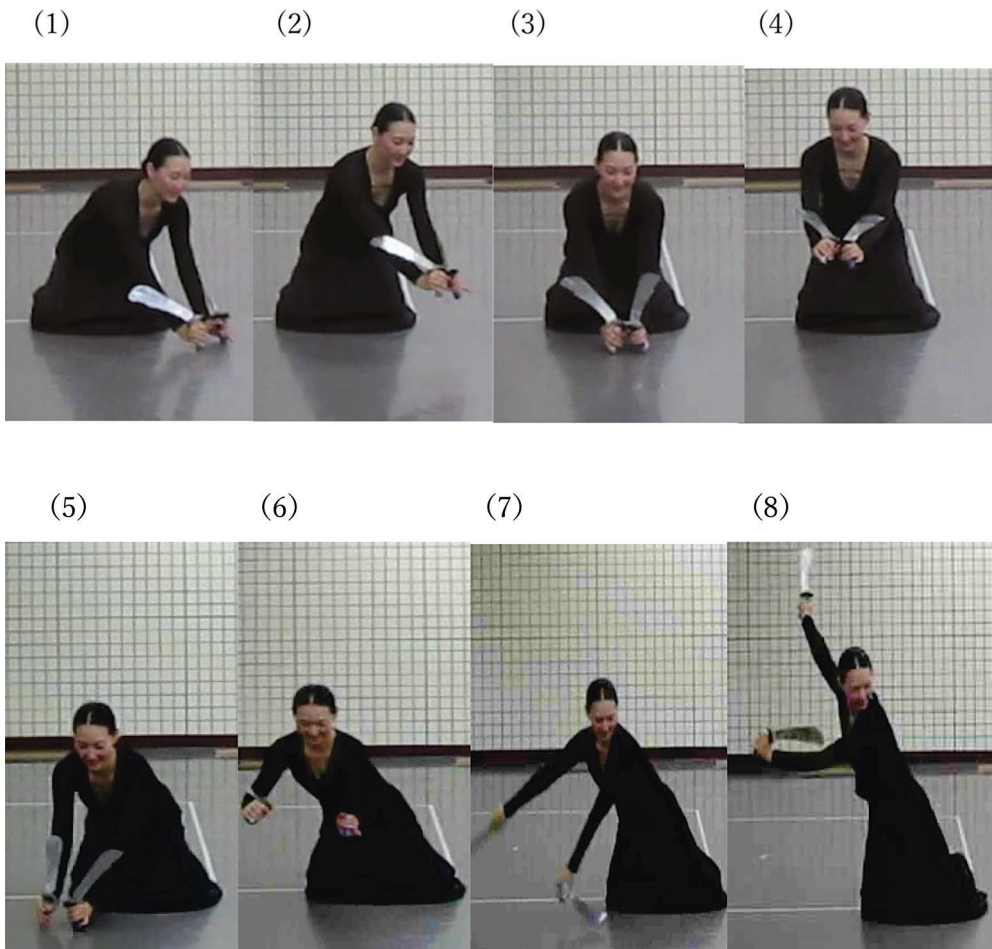
<図7>「7-3 体を上下にジョンジュルギ」(教本 p.226)

ルギ」動作は「オルム」より幅のある動作であり、動きを強調するために繰り返えされインパクトを与える動作であると言える。

共に、朝鮮舞踊における「オルム」動作の有無について、再現者の兪氏と、在日韓国舞踊家の辛氏に質疑をした。再現者の兪氏は、朝鮮舞踊を学ぶ時に「オルム」という用語は聞いたこともなければ、学んだこともないが、「ジョンジュルギ」の動作は基本動作で練習をした覚えがあると証言している。また、在日韓国舞踊家の辛氏も、朝鮮舞踊を学んだ頃、「オルム」についての見識はないとし、「ジョンジュルギ」は何となく理解していると述べている。

以上の事から考えられるのは、崔の「剣舞」の動作構成は、韓国舞踊の動作構成と同様に「結ん

てから「解く」、また「解く」から「結ぶ」に至っていると思われる。韓国民俗舞踊の構造について、鄭炳浩 [1993:210-214] は「結ぶ」は、踊りの進行において、導入部分と終結部を担う役割をし、「静」的な「陰」の状態である。「解く型」は、緊張感を解くもので感情を発散させる働きであり、動作表出的要素は「陽」的で、物理的要素は「動」的な状態であるとした。一方、崔の「剣舞」の再現動作では、「結び」から「解く」までの動作の間、「中」間で行う「オルム」形の「肩踊り」は見られなく、動作の同線が大きく、直線的で「動」的に見られた。その理由として考えられるのは、姿勢、つまり背筋が伸ばされており、四肢の動きも直線的に現われ、また、「結ぶ」から「解く」までの間に、胴体と共に腕を急いで上げ・下げが行われていた



< 図 8> 「7-4 体を上下にジョンジュルギ」(教本 p.226)

ことであろう。これは朝鮮舞踊と韓国舞踊の相違を決める要因とも考えられる。南も北の踊りでも息の仕方を確認することは難しいが、腕の動きは息と共に動くため、腕の動きを観察することで呼吸の状態がある程度まで把握できるからである。

次は崔の「ジョンジュルギ」動作と韓国舞踊を特徴づける美的表現の視点から論じていく。

崔の「ジョンジュルギ」動作の形と韓国舞踊の美的概念「モッ」(뒹)と「興」(흥)

金恩漢 [2002:4, 12] は、「興に乗って肩舞が自然に溢れ出す」、原語は「흥이 나면 어깨춤이 절로 난다」という表現を言及しながら、以下のことを述べている。「(この表現は) 楽しい音楽を聴いたり、良いことがあったりした時に体の中から嬉しく感じる気持ちが、肩のグットグット(筆者訳: 肩を上下に動かす)するような動きが自然に表れるという意味で、韓国舞踊では体の中から感じ取れる楽・喜・興の感情が無意識に踊りとして自然に表現される」。このように、韓国舞踊は「モッ」(뒹)と「興」(흥)の踊りであると言われている。

近代に見られる多くの韓国舞踊は妓生らによって踊られていた踊りともいえる。当時妓生らは社会に偏見や差別に直面し、人間的な尊厳を持った生活を営むことはなかった。そのため、妓生らの踊りには悲しさや辛さの表現が多分に見られた。つまり、韓国舞踊は「恨み」の舞踊だと言われてきた [李七女 2005:48]。そのため、韓国の動きには控えられた動作が用いられている。特に肩で踊る動作を「オルム」と表現し、感情の起伏を調節することが「韓国民族の「興」と「もっ」の基」であるとした [パクミヨン 2017:152]。

李七女 [1995, 2005] は『僧舞』を通して「興」が生じる時の身体構造を分析し、「恨み」や「嘆き」などの韓国人の独特の感情が「神明」という対極に位置するものに転じるところに「興」があると述べている。また、李七女 [1995] は「興」が生じる時に身体構造を以下のように分析した。「僧舞」の第5～7チャンダンを挙げており、第5チャ

ンダンでは座って伏し、第6～7チャンダンでは身体が最も低い位置となりながらも、動作は力強く大きい。その後、上半身を引き上げ、立ち上がり始める。立つ際には身体を前方に押ししたり、後方に引き寄せたりして(ここまでは「ジョジュルギ」動作と言える)、その後「オケチュム(肩)を踊り」、ここで演者と観客は「興」に満ちる」[李七女 1995]とした。「オケチュム(肩)を踊り」という描写は、「オルム」を意味していると解釈できる。「オケチュム(肩)を踊り」「興」を起す際は、気分が高まった喜びであったり、気分を静める悲しみであったりする両面性を持つ大切な動作要素であり、「中」的動作の性質に通ずるものであるとした [李七女 2005:50, 51]。上記で記述したように、イヨンヒ [2015] も上半身のわずかな動きだけを「オルム」とみなし、「オケチュム(肩)踊り」と称し、「興」と関係性が高いと述べている。ただし、崔の教本で示された「ジョンジュルギ」動作も「オルム」の動作も、「結ぶ」動作を「解く」動作の間で行われる。

李七女 [1995] によれば、楽しさや面白さ、時空間に変化をもたらそうとする場合、「静」的動作から始め、「オッパク」(弱起)、シンコペーションで踊り、一定のリズムを破る状態が起こるとされる。通常、チャンダンは「強弱」で始まるのが一般的であるが「弱強」から始まる、「オッパク」とは、「変わった拍子」や「切り替えた拍子」のことをいい、ある動作との繋ぎとして踊ることを意味する。日本でいう「間を取る」という時に用いる「間」の概念に近い意味を含んでいるとしている [李七女 2005]。「間」というのはおそらく途中で起こり、ここで「興」が生じるとみられる。韓国舞踊の醍醐味といえる「オッパク」を演じるには、膝の屈伸と呼吸が重要な役割を果たし、呼吸法の工夫によって踊り手は味わい深く、個性的な舞踊表現に達することができる。

崔の「剣舞」の再現では、伴奏曲で「オッパク」の表示はなかったが、白香珠 [2005:109] によれば、北朝鮮では宮中舞踊と宗教舞踊は封建統治の階級向けに創られた舞踊でありと認識されてお

り、その系統のリズム（カラク）は一部を除いて根本的には受け入れられないとされている。このためだろうか、崔の「剣舞」の再現者である劉氏はこれまでチャンダンで踊った経験がなかったため、再現作業の2段階目に行った、旋律にチャンダンの伴奏に合わせて踊るのが非常に難しかったと証言している。また、再現者は一貫して微笑む顔で動作の再現に挑んでいた。そのため、朝鮮の情緒や演者個々の内面を表すものとは異なる。韓国舞踊における表情はそれほど表面的に現れることなく、一貫して笑顔を作ることもない。

鄭柄浩 [2001:16] よれば、「崔承喜の韓国チュム（踊り）は「興」から「モッ」に移行した所に技巧の核心があり、繊細な動作はなく、活発に力溢れ、力動的に展開されるとした。伝統的な韓国チュムには典型化されたチュムサウィ（動作）があるが、崔承喜が踊る韓国チュムにはそのようなチュムサウィが少なく、そのかわり叙情的動作や気まぐれなコミック動作、楽天的で風刺的表現動作が現れた」とした。崔の「剣舞」と李七女 [1995, 2005] が示した『僧舞』は性格も伴奏曲も異なり、「興」が出るまでの精神的背景までは調べるのが難しい。しかし、崔が「剣舞」で示した記述と再現における「ジョンジュルギ」動作では、朝鮮の動作を取り入れた座位の姿勢で重心を上下に移動させる際、息を吐き地面に時間をかけるのではなく、息を引き上げ（吸う）ながら胴体を高く上げることを繰り返すことで揺れが生じ、動作の高さがぐっさり現れた。北では、ひとつひとつのポーズが重要視され、一方で南ではポーズとポーズの間の連続性が強調される傾向がある。

崔は、韓国舞踊で「興」が現れる「中」間で行う微細な身体構造としての動き「オルム」より、むしろ動作の間を繋げながら重心を移動させることで線がくっきり表れる「ジョンジュルギ」動作を通して、「モッ」、（モッはフンより洒落た趣きを表す）で朝鮮の興趣の美を表現しようとしたと考えられる。朝鮮舞踊にはこのような要素が含まれていたため、韓国舞踊とは異なる動きとして視覚的に際立ったものとなった。このことは鄭柄浩

[2001] の、崔の舞踊が「興」から「モッ」に移行しているという指摘からも裏付けられるものである。

4. 結論

朝鮮半島での舞踊技法は、古くから口頭や身体を通して、師から弟子へと個別に伝承されていたが、北朝鮮に渡った崔承喜によって初めて『朝鮮民族舞踊基本』（1958）が執筆された。この書は、民族舞踊の遺産を発掘し、収集し、整理することを目的としたもので、舞踊における動作が図と言語で詳細に描写され、小道具の扱いまでが細かく記述されている。筆者は、朝鮮舞踊と韓国舞踊の同異を探るためにこの教本で崔が示した記述に焦点を当てて調査を行った。

教本に記述されている「剣舞」の基本動作の構造は、現在韓国で踊られている「剣舞」と同様に座位の姿勢、立位の姿勢、回転動作といった大まかな構成要素として見られている。上述したように、崔の動作に対する解説と韓国の先行研究の記述から、崔の動きは北地域の『咸興（ハムフン）剣舞』を始め、北朝鮮地域の『平壤剣舞』、『海州剣舞』と共通点が見られ、北朝鮮地域の「剣舞」の動きの特徴を反映した可能性が高い。崔は、当時残されていた動作を「剣舞」に取り入れつつ、シンプルな動きから付随する細かい動作まで考案して作ったため、現在韓国で踊られている「剣舞」の動作とは大きく異なると考えられる。

また、崔の「剣舞」の動作の記述には、韓国舞踊の動作の原理である歩き形、腕の形、足を運ぶ様式や動作の構成要素が見られた。一方で、足踏みにおいては、3段階にかけて足を踏む韓国舞踊の足の踏む方より素早く運ぶという特徴がある。また、ポーズの取り方や後方の足を前方に移動させる際には、バレエ的な要素も見受けられる。動作自体は伝統的な動きの原理に基づきながらも、バレエ的な技法が結合されているため、このような動作をなすために身体的な鍛錬を基盤とした西

洋的な技術が必要となる。

一方、教本の中の、韓国舞踊では使われてない舞踊用語「ジョンジュルギ」の動作に関する韓国の先行研究において、金海今〔2012〕は「ジョンジュルギ」動作の「ジョンジュルギ」呼吸が韓国舞踊の「オルム」の呼吸法と身体技法が似通っていると指摘しているが、これに同意するのは難しい。北朝鮮での用語解説からすると明らかなように、「ジョンジュルギ」動作は「オルム」動作より律動感があり、揺れが大きく、一方で「オルム」の場合は微細な内向的性格を窺わせる微細な揺れとして現れる。両者とも朝鮮舞踊の民族的な魅力を感じさせる洒落た要素である点では共通している。「剣舞」の再現で行った、「ジョンジュルギ」の動作では、座位の姿勢で息を伴う胴体と腕が共に上下に重心を移動するものであった。韓国舞踊では、「結ぶ」の「陰」の状態から「解く」の「陽」の状態まで一連の動きが次の動作への移動する場合、程よく、さりげない感じで行われるため、それほど大きなインパクトはない。しかし、崔の再現では、地面に近く動きをじっくり溜めるよりは、動作線がぐっつきりと直線的で現れ、動作が上昇する傾向がある。また、胴体と腕が急いで上げ下げが見られた。胴体と腕の上げ下げを繰り返すことによって、揺れが現れ律動感が感じられる。北では、ひとつひとつのポーズが大切にされ、南ではポーズとポーズの間の連続性が重要視されると言える。朝鮮舞踊にはこのような要素が含まれていたため、韓国舞踊とは異なる動きとして目視されたと考えられる。

又、韓国舞踊の特徴といえる美的概念で用いる「興」や「モツ」を引き起こす際に表す身体表現の「肩踊り」や「オルム」を崔は使用していないことが分かった。朝鮮民族舞踊には中間的な役割を果たす微細な身体構造としての「オルム」より、むしろ動作の間を繋げながら重心を移動させる際に大きな揺れとして外的に現れる「ジョンジュルギ」動作を通して、朝鮮の興趣の美を浮かび上がらせようとした可能性が強い。このことは鄭柄浩〔2001〕の、崔の舞踊が「興」から「モツ」に移行

しているという指摘からも裏付けられているように、在日で踊られている朝鮮民族舞踊動作の身体における表現の様式は韓国舞踊とそれほど変わらないにしても、息の仕方や身体の動かし方は明らかに異なるものとなったのであろう。つまり、南と北の基本動作は同様であっても呼吸の仕方と身体の動かし方によって異質に感じられるのである。

崔はなぜこのように表現しようとしていたのだろうか。先に述べたように、近代に見られる多くの韓国舞踊は、妓生らによって踊られていた踊りともいえる。妓生らの踊りの流れを汲む今日の韓国舞踊は「恨み」の舞踊だとさえ言われている。崔は妓生らの「剣舞」を取り入れつつも、「恨み」よりは力強く、本来「剣舞」が持つ凛々しい動作を表現しようとしていた可能性が高い。

伝統を語る際、ナショナリズム¹⁰⁾の文脈を考慮せざるを得ないことも多い〔渡邊 2007:31〕。一方、在日朝鮮舞踊家1世代である任秋子は、自分の最後の公演のパンプレットで語ったように、日本で生まれ、崔承喜に憧れて朝鮮舞踊を始め、日帝統治下の経験から民族の大切さが身に染みていたと思われる。朝鮮舞踊は彼女の夢であり、人生の源泉になったと記している。このような考えから、任秋子は後輩や教え子に、朝鮮学校を通して北朝鮮の民族舞踊を教えていた。「剣舞」の動作を再現する際には、足の各形に付された番号や空間的方向、腕の各形に付された番号まで把握して、説明通りに動きを繋ぐことで一連の動作になるため、まずは各足や腕の位置を身につける必要があった。そのため、再現者兪氏とアドバイザー朴氏は、動作をすらすらと素早く解き、「剣舞」の全体動作や構成を再現することに成功した。朝鮮舞踊家である兪氏は、基礎として足の各形に付された番号や空間的方向、腕の各形に付された番号の感覚が根付いているため、素早く動作を理解し、自然に動くことが出来た。朝鮮民族舞踊の基礎の体系化を行うために執筆された崔の教本は、完成されてからおおよそ70年が過ぎた今でも、在日朝鮮舞踊の教本としての役割を果たしている。筆者は韓国でその

ような形の舞踊を学んだことがないため、一つの動作を解くのに時間もかかった。崔の「剣舞」の基本動作は、朝鮮舞踊家兪氏や朴氏によって動作を解かれた形となり、在日朝鮮舞踊家らが朝鮮舞踊を「ウリチュム」（我が踊り）としている根拠がまさにここにあるといえよう。崔が日本で、朝鮮民族を掲げ、朝鮮の舞踊を披露していたように、今の在日の朝鮮舞踊の踊り手たちは「民族的」な居場所を北朝鮮の舞踊に求めているに違いない。

現在の韓国舞踊において「伝統」と称するものの多くは近代に入ってから韓成俊¹¹⁾（ハンソンジュン 1874-1942）によって作り上げられたものである。韓成俊の作品は、タイトルだけを見るとあたかも古くから存在した作品のように感じさせるが、実は韓のオリジナル創作作品である。この点は崔承喜のそれと本質的に同質なものと言えるのではないであろうか。韓成俊が新たな要素を取り入れ、その新たな要素が韓成俊の中に蓄積されていた古い要素と結びついた結果、「伝統」の新たな展開を可能にしたとするなら、崔の朝鮮舞踊も近代に入ってから実際に創り出され、再構築された伝統であると言えるのである。

朝鮮半島の舞踊は近代に入り再構築されたことは、韓国や北朝鮮の両方にとって変わらない事実であるため、それぞれの舞踊に対して視野を広げ、「共同体意識に基づいた伝統文化を通しての一体感を高めるのが望ましい」[沈雨晟 2001:33, 76]。

引き続き在日朝鮮舞踊に見られる「剣舞」の基本動作の分析と共に、「剣舞」を含めその他の作品についてその傾向を追求めることを今度の課題とする。

凡例：

1948 年大韓民国政府が樹立する以前は、南側・北側も「朝鮮」と称していたため、当時の南側と北側のどちらも「朝鮮」と記載する。また、当時の舞踊や踊りを指す場合も朝鮮舞踊とする。しかし、現在、北の舞踊をも朝鮮舞踊と称しているため、あらかじめ、前後の文脈の確認が必要となる。ただし、ここでは原文表記に倣ってその都度、表

記が入れ替わる可能性があることをことわっておく。

謝辞

崔承喜の『朝鮮民族舞踊基本』（1958）の「剣舞」の復元という膨大で難解な作業の依頼を快く引き受けてくださった在日舞踊家、兪景姫氏と、在日朝鮮舞踊指導者、朴貞順氏に心よりお礼を申し上げます。お陰様で崔承喜の「剣舞」の全体動作や構成を再現することができました。共に、在日韓国舞踊家として活動している辛錦玉氏にも心より感謝申し上げます。

注

- 1) 韓国伝統舞踊の基本動作と技法、呼吸に基づいて、現代的技法に構成された基本舞踊である。（林鶴旋流踊り）
- 2) 新羅時代（576）に作られた源花（ウォンファ制度）にその根源がある。源花とは、新羅時代に国政を担う人材の育成を任せられた女性のことである。後に男性花郎（ファラン）に変わった。九世紀の高麗時代、減じた百済の流民を奴隷にし、色気のある女性は顔に化粧させ、いわゆる妓生と呼ばれる職務を与えた上、歌や踊りを修練させた。これが女楽（ヨラク）の始まりであり、この女楽を教える機関が教坊（キョパン）で、教坊で教えられた踊りや歌は韓国伝統芸術として伝承されている。この教坊は朝鮮時代の末期に入ってから（日本の植民化）日本語表記として券番（妓生組合）と呼ばれるようになった。今日における妓生という言葉の解釈として、歌と踊りで人を喜ばせる職業を持つ女性と記されている。
- 3) お茶の水女子大学倫理審査の承認を得て進めている。（2020 年 7 月 -9 月）実践はお茶の水女子大学文芸館で行われ、再現映像は筆者独占のものとなっている。
- 4) 咸興で生まれ、「咸興（ハムフン）券番」に入門し舞踊を学び、後に「剣舞」を崔承喜研究所で教えていた。メールでの質疑応答（2020 年 9 月 24-10 月 19 日）。
- 5) 弓を引く際に足を広げ、斜めに反らし、丁字八の字を舞踊動作として用い、足を完全に地面に踏むという意味も含む。韓国舞踊の足の動きの原理として、「八」、「丁」の形にする。
- 6) 右足で立ち、左足は後ろに上げて（つけて）、右手は前、左手は横に出したポーズ。エファセ・デリエールと同じ。

- 7) 心が楽しく、好ましい状態にあるときに起こる情緒。民俗芸能はもちろん人々の生活現場に至るまで幅広く使われている言葉。観客と演者がその場で感じる楽しさ、面白さを言う。「興」は、「恨む」(ハン・悲しみや辛さ)をやわらげ神明(シンミョン・神と人間が一体になる)まで導かせる中和的役割を果たすものである。「興」を解明することは韓国民族舞踊の身体観と世界観を究明することにもなる。
- 8) 韓国舞踊、特に民俗舞踊は「モツ」(뭉)「興」の踊りであり、踊りを鑑賞・上演する時に、「興」が出る、「モツ」があり、「モツ」は洒落、粋、風流、風雅、趣、新味、妙味などを意味し、民俗芸能はもちろん人々の生活現場に至るまで幅広く使われている言葉である。
- 9) いわゆる動きの最小単位で、手首、肘、腕全体を動かす腕の動作と膝折り、踵の足全体の動き、首の動きに区分され、それらを関節の動きに基づいて細分したもの。
- 10) 第一的には政治的な単位と民族的な単位とが一致しなければならないと主張する1つの政治的原理である。「国民主義」、「民族主義」、「国家主義」と訳し、国家とそこに住む民族的単位とは一致しなければいけない。
- 11) 民俗舞踊の教師として京城券番で教えていた。韓は巫俗音楽に詳しく、巫女舞の『王の舞』に心酔し研究しながら、朝鮮時代、純宗の前では歌や楽器の演奏をしていたが、後には、宮中舞踊のまたは民俗舞踊の要素を内包する創作するようになる。おそらく、韓自身の動きは民俗的要素が動きの基盤にし、その上、宮廷的な要素を取り入れた創作作品、『剣舞』、『太平舞』、『サルプリ』、『僧舞』など多数作り上げ、『京機剣舞』(キョンギコム)を整理した。

参考文献

- アン・ハッチソン・ゲスト、ティナ・カラン (2015) 『ダンスの言語—動きを読む・書く・表現する』, 大修館書店.
- 李七女 (1995) 「『僧舞』(スンム)における「興」(フン)の研究」舞踊学 17号, p.25-32.
- 李七女 (2005) 「舞踊における『興』の美学的研究: 李梅芳流の湖南僧舞を中心に」文教大学国際学紀要 第15巻2号.
- 金恩漢 (2002) 「崔承喜舞踊基本の構造分析—変容と継承の視点から—」比較舞踊学会学術機関誌 8 (1), p.1-12.
- 金賛汀 (2002) 『炎は闇の彼方に伝説の舞姫・崔承喜』日本放送出版協会.
- 小林尚弥 (2015) 「アジア舞踊表現における共通言語の

- 発見 - 日本舞踊と韓国伝統舞踊における研究基盤としてのまとめ-」日本大学校芸術学部紀要, p.45.
- 鄭炳浩 (1993) 『韓国の民俗舞踊』白帝社, pp. 210-214.
- 高嶋雄三郎 (1981) 『崔承喜』むくげ, pp. 46, 121.
- 許娵姫 (2008) 「韓国券番 (1908-1942) における妓姓 (キセン) 教育—妓姓教育の内容と舞踊教育」20 舞踊学 巻31号, p.59.
- 博調増子 (1993) 『日本舞踊の間にについて』(伝統芸術の美学) (総説) 山野研究紀要 1 (1), p. 53-60
- 渡邊秀司 (2007) 「『創造』する伝統について」佛大社会学 (31).

韓国語文献

- 고경희 (2012) 「한국춤의 미적범주, 맛과 멋」 한국콘텐츠학회논문지 12 Vol. 12 No. 5, p.185.
- 김해금 (2006) 「조선민족무용기본과 태극구조의 기본춤의 성격과 훈련체계 연구」 성균관대학교박사학위 논문, pp.88,128,130
- 노수철 (2008) 「장흥심의 생계를 통한 작품연구 - 검무를 중심으로」 동양예술, 통권 제 13 호, pp.249-278.
- 리만순 (1985) 『무용용어해설』 북한: 예술교육출판사, p.219.
- 박경란 (2021) 「재일동포사회에 있어서의 민족무용교육의 현황」 무용역사기록학회 제 60 호, p.103.
- 박경란 (2023) 「검무 (1934) 로 보는 최승희 무용의 '전통성」 국제고려학회 제 19 호
- 박미영 (2017) 「문화심리학적 관점에서 본 한국무용의 한恨과 신명神明 연구」 한국무용교육학회, Vol.28. No.1.
- 박정순 (2000) 「재일조선학생들의 민족성교양과 민족무용교육」 북한: 주체 89 문학예술종합출판사, p.26.
- 박정순 (2012) 「재일조선민족인들속에서 민족무용을 통한 민족성 교양에 대한 연구」 2.16 북한: 예술출판사.
- 박종성 (1991) 『조선민속무용』 북한: 문예출판사.
- 백향주 (2005) 「최승희 조선민족무용기본의 형성과 변화」 한국예술종합학교 예술전문사과정.
- 성경린 (1979) 『한국전통무용』 일지사, p.9.
- 양중승 (2015) 「한국전통협회 창립의의 그리고 전통춤의 새로운 인식, 범위, 역할」 『전통춤의 흐름과 전승 현장』, 민속원, p.46.
- 양지성 강인숙 (2019) 「영남사도통신사 교방춤에 나타나는 문화예술의 특징」 『한국콘텐츠학회논문지』 제 19 권 제 4 호, p.492, 495.
- 이용희 (2015) 「진도북춤의 동작소 분석」 한국무용교육협회. Vol.26 No.2.
- 임수정 (2006) 「한국 여기검무의 예술적형식과 지역특성 연구」 용인대학교 박사학위 논문.

雑誌

한국춤평론가협회 (2001) 발간 ‘춤 저널」[정병호 교수 추모 특집: 한국 근대무용의 선구자, 崔承喜의 예술과 생애] 故 정병호 _ 중앙대 명예교수 (현, 한국춤 비평연구회) 제 16 호.

최해리 (2011) 「한국 전통춤의 이해 연구」DANCE POST KOREA.

인터뷰

生前任秋子氏とのインタビュー 川崎総連会館 (2017 年

06 月 20 日)

書面上の質疑応答

梁承美氏に韓スン옥流『劍舞』を問う (2020 年 9 月 24 日 -10 月 19 日)

ネット資料

「ジョンジュルギ」に関するネット辞書情報

<https://afreedictionary.com/korean-japanese/%EC%A0%84%EC%A3%BC%EB%A5%B4%EB%8B%A4>
(検索日: 20230817)

研究ノート

韓国文化関連科目の学習効果に関する一考察 —大学における PBL 型授業の実践報告を通して—

金智英（神戸松蔭女子学院大学）

キーワード：プロジェクト型学習，主体的な学び¹⁾，異文化理解

Keyword：project-based learning, self-directed learning, intercultural understanding

1. はじめに

現在、日本の大学などの高等教育機関において韓国に関連する科目の設置が増えてきている。4年制大学における韓国語科目の設置は、2000年当時は263校であったが〔国際文化フォーラム2005:29〕、2020年には466校に上る〔高等教育局大学振興課大学改革推進室の調査資料2023〕。この間の変化を2013年までの統計資料〔朴珍希2016:21〕でより詳しく見ると、2000年から約10年間に増加の傾向がもっとも顕著で、それ以降はなだらかな増加、又は現状維持の状態であることが見て取れる。今回筆者が調べた結果からも、2010年以降460～470校台の状態が維持されてきたことが分かった²⁾。以上のような傾向から、日本の大学における韓国語教育は一時的なブームを超えて第二外国語科目として安定的に運営される局面に入っているように見られる。

日本の大学生が韓国に対して持つイメージを調査した生越〔2019〕によると、韓国語学習の動機として韓国人や韓国文化への関心が主な学習動機になっている。その中でも、特にサブカルチャーへの関心が学習動機であるとの回答は2003年の

調査に比べておよそ2.5倍に増しており、韓国のイメージ形成にもっとも影響を与える要素として挙げられていた〔生越2019:31〕。ただ、このような韓国大衆文化への関心がそのまま韓国に対する理解を深めているとは言い難い。日本の多くの若者が情報源としている各種検索エンジンやSNSには、韓国に対する玉石混交する情報が溢れており、韓国の社会と文化に対する理解を深められるものではない。むしろ、日本と韓国の間には、インターネットを情報源とした表層的な理解や誤認識による葛藤も、やはりインターネットを通して度々目にすることができる。誤解による葛藤や反目を避けるためにも、特に日韓の若者においては互いの社会と文化に対する相対的観点と理解する態度を身につけることが重要な課題となる。日本の大学においても、韓国語教育の安定した運営とともに、韓国の社会と文化について学ぶ科目をさらに補強、拡充することが望まれる。

このような認識の下、本稿は、韓国の社会と文化の理解を目的とした授業の実践報告を通して授業効果を分析し、当授業の意義と課題を明らかにすることを目的としている。特に、当授業がPBL型授業として行われていることで得られる学習効果について考察していくことにする。

2. 先行研究

(1) 日本の大学における韓国の社会・文化教育に関する研究

日本の大学において韓国の社会や文化を教授内容とする授業には、多様な側面を網羅的に学ぶ場合と特定の出来事や事象について学ぶ場合などがあるが、いずれにしても講義の形式をとることが多い。また、その中には授業内容に韓国語学習が含まれる場合も少なくない。

韓国で出版された『韓国文化教育論』では韓国の文化教育の内容を＜日常文化＞＜芸術文化＞＜文学＞＜歴史＞に分け、それぞれの項目をさらに細分化して提示している〔カンスンヘ他 2010〕。また、韓国語教育の一部として文化学習を組み入れることを想定した上で、学習目標の構文に文化関連用語を用いる方法を例示するものもある〔イソンヒ 2015〕。文化項目の学習展開に関する研究として、例えば、イムキョンスン〔2015〕では初級、中級、上級韓国語の能力に合わせて各段階別に適切な文化教育項目が設定されている。このようなアプローチは、韓国語教育の一部として行われる文化教育において珍しくなく、前掲の『韓国文化教育論』においても同様の分類方法に従った文化項目が紹介されている。具体的には、初級では食生活や伝統家屋、家族関係や食事のマナー等の基本礼節、伝統音楽などを、中級では初級で取り上げた内容の補足の他に政治や経済、教育制度、価値観などを、上級ではこれまでの内容の補足の他に民主化過程や社会の諸問題、教育熱などを学習する、などといった展開である〔カンスンヘ他 2010:218-226〕。他に、韓国語教育と韓国文化教育に対する関係性を考察した先行研究も多く、金菊姫〔2020:104-109〕に詳しくレビューされている。

日本国内の研究において、大学における韓国の社会や文化教育に関する研究は、日韓翻訳の授業の題材として韓国文化を取り上げた授業の分析〔文吉英, 朱炫妹 2022〕、日韓合同の語学学習を兼ねた異文化理解の授業報告〔金珉秀, 村上 2019〕、

韓国語学習を組み入れたフィールドワーク授業分析〔ベジュンソプ 2023〕、韓国語テキストに含まれる文化項目を調査し、授業への適用を報告したもの〔全美順 2004〕など、韓国語教育を伴う授業を対象とする場合が多い。韓国の社会と文化の学習を目的とする授業を取り上げた研究は、映像資料を活用した授業の実践報告〔任炫樹 2016〕、韓国文学作品の日本語訳を用いた授業の実践報告〔山田 2011〕などが見つかる程度で、筆者のリサーチ能力の限界もあるだろうが、それ以外の資料は見つからなかった。

特に、以降本稿で取り上げるような、日本の大学で韓国の社会や文化学習を PBL 型授業として行う場合に関しては、資料や研究も見つけにくい。韓国語教育に関する優れた研究実績と同様、韓国の社会や文化を如何に教え、学習するか、教育の現場におけるノウハウを共有する実践報告や関連分野の研究の蓄積が必要であると考えられる。

(2) PBL 型授業に関する研究と本研究との関連

アクティブ・ラーニングの手法で、略字で表される PBL は「問題解決型学習 (problem-based learning)」と「プロジェクト型学習 (project-based learning)」の二つの場合があるが、筆者は後者のプロジェクト型学習を取り入れた授業を行っている。PBL に関する研究は幅広く、実践報告も多くなされている。その中で、ここでは、異文化理解を学習目標とする PBL 型授業の実践報告と、PBL 型授業の設計や評価に関する研究を取り上げ、本研究で参考にした部分を示す。

永田〔2019〕は、COIL³⁾を用いた PBL 型授業の実践報告を行っており、アンケート調査結果から「様々な社会問題の理解を深めることで、多角的な視点から考えられるようになった」といった回答に触れ〔永田 2019:51〕、＜主体性＞の獲得として評価している。

他に、留学生と日本人学生が合同で行う PBL 型多文化共修授業の実践報告を行なった金井他〔2015:56〕は、意思疎通の困難さを経験しながら学生たちが「文化的背景の違いや考え方の違いを

理解しようとする姿勢」を身につけたと評価し、＜多文化コンピデンス＞という用語で表現している。アンケート調査実施に関連する記述は見当たらず、グループ活動中の態度やプレゼンテーション資料を通した評価と見られる。

PBL型授業における評価方法とそのための授業計画に関する研究は多く、例えば綿密な授業デザインを紹介している広石〔2017〕、石井他〔2018〕などがある。これらの研究でも、やはり共通して活動の各段階におけるポートフォリオの作成、そして振り返りシートの重要性が強調されており、参考になる。

一方、PBL型授業の運営に関する研究には、プロジェクト計画の段階から学生主導で進められるものを想定した授業が多い。しかし、筆者の担当する授業では、プロジェクトの計画と調査対象、成果物の形式などを教員が関わっており、先行研究とは条件が異なる部分もある。

先行研究で報告されている学習効果を参考にすると、PBL型授業を通して韓国の社会や文化を学ぶ場合にも同様の主体性や積極的姿勢の獲得を期待できる。以降、筆者が担当したPBL型授業の実践報告と学生たちの振り返りレポートを分析しながら、PBL型授業で韓国の社会と文化を学ぶ意義について考えていく。

3. 実践報告

(1) 授業目標

筆者が担当している「演習A」⁴⁾はPBL型授業として行われている複数の授業の中の一つとして位置づけられるが、その複数の授業に共通して設定された到達目標を次に示す。

1. グローバルな視点で幅広い人文課題について学ぶことに主眼を置き、その実態や背景を包括的に理解することができる。

2. グローバルな視点で幅広い人文課題について自分の視野や問題意識を持ち、学習を深化させる

とともに、課題遂行に向けて工夫することができる。

3. 体験的な学習⁵⁾・調査学習を行い、協調することができる。

知識の習得とともに、思考力や問題意識、体験的な学習など、学びの＜体得＞が期待されていることが分かる。

「演習A」では、韓国の文化と社会を深く理解することを目標に、特定の社会現象を調査対象として取り上げ、プロジェクト活動を行った。前掲の授業目標を、改めて「演習A」のテーマと活動に合わせて具体的に示すと、次のように表現できる（グループ活動に関する箇所は省く）。

1. 現代韓国の社会と文化現象について学び、韓国への理解を深める。

2. 活動に主体的に取り組み、韓国の社会と文化に対する客観的観点を身につける。

3. 韓国関連の情報収集を適切に行い、調査内容を理解して説明できる。

授業目標として、韓国の社会や文化に関する知識を得るとともに、韓国を眺める客観的な観点を体得することに重きを置いて表現したが、特に＜客観的な観点＞とその＜体得＞に「演習A」の意義があると考えている。

「演習A」の調査対象は教員があらかじめ、学生がアクセスしない（しにくい）と思われる事象から選んで設定している。冒頭でも触れたように、日本の大学生が韓国に対して関心を持つ際、その対象は偏りやすい傾向にある。それは、筆者が過去に行ったアンケートの結果からも確認することができる。表1は、大学2年生20名を対象に、選択肢から調査してみたい項目を2つ選ぶようにした結果である。

教員が提示した9つの分野から2つ選ぶようにしているが、＜音楽＞＜食文化＞＜ドラマ＞に回答が集中しており、＜文学＞＜社会＞に至っては希望者がいない。昨今の韓国関連コンテンツの流

行から容易に予想できる結果で、学生の属性や社会情勢に影響される部分を勘案しても、概ね同様の傾向が「演習 A」においても見られると考えられる。韓国のサブカルチャーに対する学生たちの関心を学習のきっかけとしつつ、韓国の社会と文化をより幅広く、深く理解できるようにするために、調査対象の選定を教員が行うことにしている。

また、調査や資料作成に関しても特段の注意と指導を行った。前掲の「演習 A」の授業目標の 3 番目に「韓国関連の情報収集を適切に行い、調査内容を理解して説明できる」としたが、これはインターネットを利用した調査活動を想定した項目である。先のアンケート調査では、他に「グループ活動の中で得意とする作業」を 2 つ選択するようにしたが、次のような結果となっている。

全体的に取りまとめる作業を苦手とする傾向が見られる中、特に大多数の学生がインターネットからの情報収集が得意であると認識していることに注目したい。インターネットから情報を得る場合、その特性から偏った意見に触れやすく、また十分な根拠を持たない情報を手にする可能性が高

い。特に昨今の日韓関係を考えると、その利用においてさらに慎重になる必要がある。「演習 A」でも、主な調査対象が韓国関連の事柄であることから、インターネットを利用して情報を得る際に、その情報の出典等を確認するように確認とリマインドを繰り返し行っている。

(2) 研究対象と活動

a. 受講生の属性

「演習 A」の受講生はほとんどが基礎レベル以上の韓国語能力を持っているが、韓国語を利用して検索し、韓国語の資料を読み解く能力を有する学生は 1 名のみである。

ほとんどの受講生が韓国の社会や文化に対する基礎知識、近現代の主な出来事を学んでいるので、朝鮮半島に関する基本知識を講義する手順を省略し、具体的な研究テーマについて調査する活動に取り掛かることができた。

調査と発表は複数グループに分かれて行ったが、最終プレゼンテーションの内容 (4 グループ) が確定されるまで何度かグループのメンバーを変

表 1 アンケート結果①：希望する調査対象

食文化	音楽	ドラマ	映画	文学	漫画	社会	伝統文化	韓国語
11	12	8	4	0	2	0	3	1

表 2 アンケート結果②：得意なことを 2 つ選ぶ

ネット 検索	傾聴	話し合い	PPT 作成	意見 提供	提出物 デザイン	資料 整理	活動 記録	文章 作成
14	10	9	5	4	3	1	1	0

表 3 「演習 A」の受講生の基本情報

人数	韓国語能力* (初・中・上)	韓国社会 (文化) に 関する基礎知識**	関心事***
10 名 (3 年生 9 名・ 4 年生 1 名)	初級レベル 5 名 中級レベル 4 名 上級レベル 1 名	有 9 名 無 1 名	韓国ドラマ 4 名 k-pop 3 名 韓国の社会 2 名 不明 1 名

*初級 / 中級 / 上級：それぞれハングル能力検定試験 5 級 / 4 級 / 2 級程度に合格可能レベル
(全員が受講している韓国語科目の成績をもとに筆者が判断)

**韓国の社会や文化に関する講義科目の受講歴から判断

***過去の演習科目においてそれぞれが発表した項目

えたので、ほとんどの学生がすべてのグループの調査項目に関わっている。

b. 「演習 A」の研究対象と活動の概略

「演習 A」の研究対象は〈現代韓国社会と女性〉である。すでに触れている通り、韓国に対する学生たちの関心事が偏りやすい現状を踏まえ、学生自らアクセスしにくい事柄でありながら身近な問題でもある「社会（問題）」と「女性」について考えていくことにした⁶⁾。

活動は、教員が設定した調査対象についてグループで調査・発表を複数回行うことを基本内容としている。毎回の発表では質疑応答と意見交換を行いながら議論を深め、必要内容を補足して成果物（PPT 資料）を作成し、グループごとに最終プレゼンテーションをする、といった流れである。

韓国国内の情報が必要な場合は、韓国の検索エンジンや韓国メディアのサイトからハングルのキーワードを用いて検索し、自動翻訳機を通して日本語で訳す作業を行った。誤訳やそれによる思い違いは教員がチェックし、修正や補足を行うように指導している。

(3) 授業構成とプロジェクト

「演習 A」は全 15 回の授業で、次のような内容で構成されている。

研究対象の「女性」と「社会問題」について探究できる題材に、me too 運動をテーマとした韓国のドキュメンタリー映画を取り上げて、最終プレゼンテーションを同映画の上映後に、そのまま映画館で行う、といったプロジェクトを計画した⁷⁾。

a. プロジェクトに入るまで

本格的に調査を始める前に、3 回目までの授業ではジェンダー 이슈を取り上げて考える時間を設けた。その際、特に次の二点に注意している。

まず、自己主導型学習の習慣を身につけていくことである。例えば、今回のプロジェクトを遂行していくためには「ジェンダー」「me too」などといった用語とその概念、関連 이슈を理解する必要がある。毎回の発表の際、発表者に担当した調査内容を再度自分の言葉で言い表すように促しているが、その過程で曖昧になっている部分を浮き彫りにすることで、「調べた内容」と「知り得た内容」に気づくように誘導した（理解の足りない内容に関しては、各発表の後、教員が補足解説を行っている）。このようなやり取りの中で、発表資料を読み込む際に自らの理解度を内省し、新たな課題を見つけられるようになっていくと考えられる⁸⁾。

次に、異なる意見を自由に言える雰囲気作りである。体験的学習は気づきの上に成り立つもので

表 4 授業構成（全 15 回）

授業回	活動形態	主な活動	具体的な内容
1～3	個別	ガイダンス 関連用語・概念の確認	映画紹介と最終プレゼンテーションの形式確認 ジェンダー、ジェンダー感受性
4～10	グループ	調査とクラス内発表（毎回、発表と意見交換）	・欧米における me too 関連 이슈 ・韓国における me too 関連 이슈
11～12		成果物（PPT）最終確認 プレゼンテーション練習	資料の出典、用語使用、内容のまとめ方を再確認 各グループのプレゼンター選び
13		プレゼンテーション	グループ別（4 つ）プレゼンテーション 参加者全員、個別コメント発表
14～15	個別	振り返り	・プレゼンテーションの振り返り ・「演習 A」における活動の振り返り

あると考えるが、そのためには互いの「観点や感覚が尊重されている」ことを認識できることが重要である。そこで、コメントシートの共有を活用した。意見が分かれやすい「問い」を教員が提示し、それに対する全員の「コメント」を匿名で共有したが、その際、全ての意見に対して教員からは何らかの評価をしないで意見のポイントを読み取るまとめ方を例示した⁹⁾。

b. プロジェクト活動の展開

4 回目の授業からグループでいくつかの調査項目を分担して本格的な活動を開始した。映画に取り上げられた me too 運動関連事案等の社会的な背景について、毎回の授業で各グループの調査結果を発表し、クラス全体で意見交換する活動を行っている。最終的には、話し合いを通して4つの事案（教育機関 A、特定個人 B、芸術関連分野 C、特定個人 D）についてプレゼンテーションすることになった。

既述のように、調査項目の設定は教員が行っているが、調査を進めていく中で、それぞれが疑問に思う部分について積極的に調査項目を追加している。例えば、教育機関 A の事案における学びの際、当該機関の現状と生徒や保護者がどのような思いでいるのかを知りたいといった意見が受講生から出された。それを受け、次に教育機関 A を担当するグループでさらに調査項目を追加し、補足調査を行なっている。図 1 から、教員が設定した調査項目（中央の楕円形）から担当グループの学生たちによる追加項目（6つの四角形）が派生した様子を確認できる。

成果物をまとめる段階では、個別の意見と事実の区分、適切で正確な用語使用、事実関係が判明していない出来事に対するまとめ方に注意するように指導しながら、教員も資料の確認を行なった。映画館での最終プレゼンテーションの後、授業内でプロジェクトを振り返るレポートを作成する時間を設け、それまでの活動を総括した。次章では、

表 5 最終成果物の内容選定までの流れ

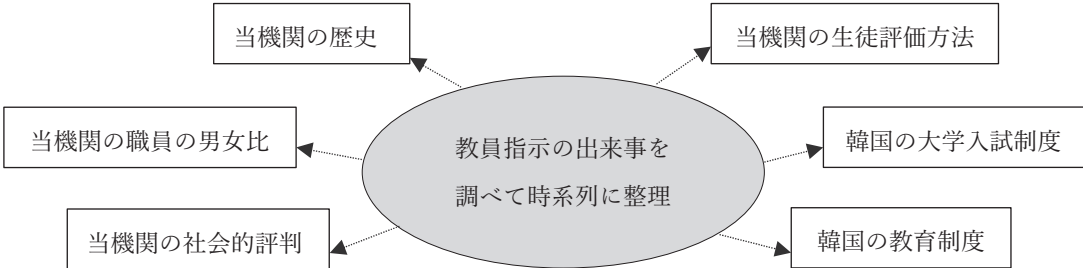
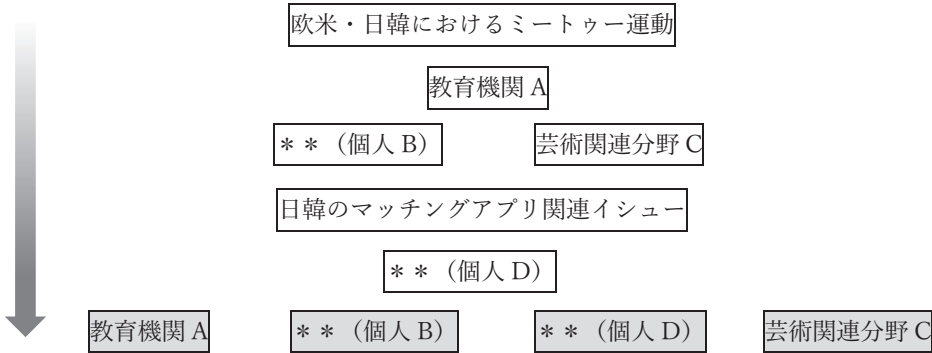


図 1 学生による調査項目の追加

この振り返りレポートを資料として分析を行い、当授業の学習効果について考察していく。

4. 授業効果

「演習 A」の授業効果は、PBL 型授業として、そして韓国の社会と文化を理解する授業として、という 2 つの側面から検証されなければならない。本稿では、PBL 型授業を手段として＜韓国の社会と文化を学ぶ＞授業の学習効果を論じており、後者を主眼とする。そのため、PBL 型授業の授業デザインや活動マネジメント、評価方法といった運営面は本稿の考察範囲を超える内容であるため、本稿では取り上げない。

分析に入る前に、「演習 A」の授業目標から、習得が期待される能力を改めて整理しておく。

- ・現代韓国の社会と文化に関する理解を深める＜知識＞
- ・日韓の社会と文化を客観的な観点¹⁰⁾から述べるができる＜観点＞＜態度＞
- ・能動的に調査を行い、協調することができる＜主体的な学び＞
- ・韓国関連の情報収集におけるスキルを身につける＜情報収集力＞

「演習 A」では、韓国の社会と文化に関する知識を得るだけでなく、それに対する自分なりの＜観点＞や＜態度＞を獲得することに意義を置いてい

る。この＜観点＞や＜態度＞はその後の継続学習において有効に働くことで検証できる素養である上、その獲得を判断する客観的な基準も設定しにくい。評価方法における工夫や改善は継続して追求していく必要がある。このような限界を認めつつ、本稿では、学生たちの振り返りレポートからその記述内容と語り方に現れる＜観点＞と＜態度＞を読み取っていく方法を取った。以降、回答例とともに分析していく。

(1) 資料と分析方法

分析資料は「演習 A」の振り返りレポートである。振り返りレポートは、最終授業日の授業内で、教員が設定した 8 つの質問に対して自由に記述する形式で行った。設問の形式については表現や項目数など改善の余地があり、他の課題とともに次章で改めて触れる。設問内容は次の通りである。

設問 1 から 4 は「演習 A」で行ったプロジェクトに対する理解度を測るための設問である。設問 6 は学んだ知識をどのように説明するか確認する目的で、設問 8 は日韓対照する際に触れられる内容や表現を通して、韓国文化に対する＜観点＞と＜態度＞を読み取る目的で、それぞれ設定した。

まず、全体的な傾向を把握するために、記述形式の回答から共通するキーワードを取り出す作業を行った。キーワード化しにくい場合は、中心内容を読み取って名詞（句）化している。その結果を次節の表 7 に整理しているが、一人の回答の中に複数のキーワード等が含まれることがあるため、一つの設問に対するキーワードの合計が受講

表 6 振り返りレポート用設問

1. 今期に行ったプロジェクトのテーマは_____である
2. プロジェクトは_____といった内容の授業、または活動から始まった
3. プロジェクトは_____といった内容の授業、または活動で完成した
4. プロジェクトのスタートから完成の間は、どのように展開されたのか、記憶している授業または活動の流れを順にまとめてください
5. プロジェクトを通して、韓国社会（文化）に対して新たな知識を得ましたか
6. 5 番で「はい」と答えた人は、どのような知識を得たのか、説明してください
7. 5 番で「いいえ」と答えた人は、すでに知っていた知識を複数取り上げてください
8. プロジェクトを通して感じた、日本と韓国の社会（文化）に共通する部分と異なる部分は何か、できる限り詳しく説明してください

者数（10名）を超える場合もある。以降、2）節で設問1から設問4の回答について、3）節で設問5から設問8の回答についてそれぞれ取り上げ、分析していく。

(2) 設問1～設問4：プロジェクトに対する理解

設問1から設問3では、プロジェクトのテーマや開始・完成について記述するようにした。その回答から、プロジェクト活動の目的がどのように理解されているか確認することができる。設問4は、学生たちがそれまでの活動の流れをどのような関係性の中で説明するかを確認するためのもので、設問2と設問3の回答を補足する参考資料として活用しており、表7には含めていない。

「演習A」のテーマを問う設問1の回答から見ていく。前述の通り、当授業のテーマは＜現代韓国社会と女性＞と設定されている。学生の回答からは、記述の中に＜社会の中の女性＞に触れているもの（2名）も確認できたが、それより＜me too＞＜ジェンダー＞などを言及する回答が多かった。プロジェクトの題材としていた映画内容に影響された結果と思われる。また、設問に使われたテーマといった表現が抽象的で、より分かりやすい表現が望ましい。今後の授業運営において改善すべき課題となった。

ここからは、表7から読み取れる学習効果について触れていきたい。

まず、設問1の回答を見ると、＜me too＞＜ジェンダー（感受性）＞＜男女差別＞＜社会の中の女性＞などのキーワードが見られる。特に、回答の上位を占めている＜me too＞＜ジェンダー＞などは、用語使用においても「演習A」の開始時には理解されていなかったもので、学生たちが主体的に選んだ調査項目を通して得られた知識であることに注目したい。

また、活動の開始について聞いた設問2に対しては、＜ジェンダー＞＜me too＞＜性差別＞といった事象を理解することから始まったことに、活動の完成を聞いた設問3に対しては、＜成果物作成＞＜プレゼンテーション＞などの形式に触れた回答が多かった。このような傾向は、プロジェクトの展開を記述する設問4に対する回答にも表れている。

回答例（1）設問4：受講生a

最初はジェンダーなどの言葉は聞いたことがあってもどのようなことがジェンダーなのか知らなかったもので、それを調べるところから始まり…（中略）などについて調べてプレゼンテーションを作った。

表7 設問1～設問3：プロジェクトに対する理解

	キーワード（表現）	回答例*
設問1 テーマ	me too（4名） ジェンダー（4名） 社会の中の女性（2名） 男女差別（2名） 性被害（1名）	・韓国の me too 運動 ・ジェンダー感受性について ・全ての職種、組織の中での女性の立場の現状とあり方
設問2 開始	ジェンダー（7名） me too（3名） 性差別（3名） セクハラ（2名）	・女性やジェンダーについて考えるところから始まった ・韓国の me too 運動から始まり、その発端や活動について
設問3 完成	成果物作成（4名） プレゼンテーション（3名） me too（3名） 継続学習（1名）	・映画の内容についてより詳しい背景について調べて、発表・これから自分たちにできることを一人一人考える ・教育機関Aをきっかけに他の職種や立場ではどのような事件、me too 活動が行われていて全ての結末に何に関連しているのかを考えた上でまとめあげた

*回答例は固有名以外の部分は修正していない。不自然な文章もあるが、今後の課題として検討したい部分であるため、そのまま提示する。

半数以上の学生（7名）がこのように「〇〇を
考える（調べる）」ことから活動が始まり、調査・
発表を経て、プレゼンテーションで活動が完成し
たと記述している。15回にわたって展開された授
業の最終日に、開始から完成までの活動の関係性
を想起している点、また成果物の完成のために基
礎概念の理解が必要だったことに触れている点な
どから、学びの流れとその目的が理解できている
ように見られる。

(3) 設問 6、設問 8：知識と観点

表 8 に、設問 6 と設問 8 に対する回答をまとめ
た。「新たな知識を得ましたか」を聞いた設問 5 の
場合、全員が「はい」を選んだので、結果的に設
問 7 の回答はない。「新たな知識の習得がない」場
合でも憚らずに記述できることが望ましいが、そ
のためには設問の表現や構成に特段の工夫が必要
であったと反省する。また、知識獲得の有無では
なく「知識の量や深度」に関して質問することで
今後の授業に役立つ情報が得られた可能性もある
ので、設問項目に関しても他の課題と合わせて改
善していきたい。

「プロジェクトを通して得られた韓国の社会と
文化に関連した知識は何か」を記述する設問 6 で

は、＜ me too ＞＜性的被害の問題＞＜男性・女性
に対する偏見＞＜韓国の教育事情＞などが満遍な
く言及されていた。

傾向として、性的不平等に関する側面が多く指
摘されているので、韓国社会に対するマイナス評
価がなされているような印象を受ける。しかし、該
当する記述を読んでいくと、ほとんどの回答から
は、言及している対象に対して何かの評価を下す
という態度は見られない。例えば、次の回答例 (2)
の記述には、韓国社会の否定的な面と肯定的な面
を複合的に捉えようとする態度が現れている（下
線部）。

回答例 (2) 設問 6：受講生 b

韓国社会では女性という立場が弱者であるこ
と、その他に立場のせいで最悪な選択肢に追いや
られてしまう現状もあることを知ったが、現在、間
違っていることを間違っていると考えることがで
きる、発言することができる社会になっていつて
いることも分かりました

一方で、新たに得た知識として＜韓国の教育事
情＞を取り上げている回答も多い（3名）が、こ
れについては先の図 1 で確認したように、学生た

表 8 設問 6、設問 8：知識と観点

	キーワード（表現）	回答例
設問 6 得た 知識	me too（4名） 性的被害の問題（4名） 男性・女性に対する偏見（3名） 韓国の教育事情（3名） ジェンダー意識（1名）	・ me too 運動、そもそもこの言葉は**（当授業）を受けなかつたら知らないままでした ・ 日本と同じように韓国でも性的被害を受けたけど、被害者が公表しにくい社会であること ・ 学歴重視のためいい大学に行きたいという思いから子どもが声を上げることができない ・ 逆に男性も性的被害を受けたという事件も…（省略）男性と女性にはたくさんの偏見があると思った。
設問 8 日韓 対照 （共通）	被害者に対する社会の圧力（4名） 男女の社会的立場の違い（3名） 男・女のステレオタイプ（1名） 外見至上主義（1名） 社会問題に対する無関心（1名） セクハラ加害者の無自覚（1名）	・ セクハラ被害者たちが告発することに対して恐怖を感じる理由が周りの目を気にしてという理由が多く、それは日本でも問題に挙げられていたので、共通点を感じました ・ 女性の社会的、政治的地位が男性に比べて低いのではないかと考えた
設問 8 日韓 対照 （相違）	me too 運動の広がり（3名） 韓国の教育事情（3名） 女性の社会運動参加（1名） セクハラと社会の注意度（1名）	・ me too 運動が広がっており性被害を受けた方が声を上げやすい ・ 「学生時代は勉強が第一である」という考えが日本よりも強い

ちが自ら疑問に思った項目を調べた結果であることに注目したい。能動的な知識の獲得という側面から評価できる。

設問 8 は韓国の社会や文化を日本と対照し、その共通点と相違点を記述するものである。知り得た韓国社会の姿または文化を日本と比較し、浮かび上がったイメージを言語化しなければならない。この設問は回答する作業を通して相対的に見る〈観点〉を習得することを期待して設定したものである。

表 8 には、日韓の共通点として〈社会に対する無関心〉が取り上げられ、また一方では〈女性の社会運動参加〉が相違点として挙げられている。いずれも「社会参加」という行動に注目しているが、異なる部分について述べている。

回答例 (3) 設問 8 : 受講生 c

共通する部分としては、社会問題についてまだ皆が知識もなく、わからない人が多い。その問題について自分の問題のように思えていないので、共通して知っていく・学んでいく必要がある

回答例 (4) 設問 8 : 受講生 b

韓国の女性が社会を変えていくために活動をしたり、キャリアを捨ててでも公の場で発言することに対してすごいなという言葉が最初に出てきて、一方で、それは他人事として考えているな、と感じました。現在、日本の若者は、問題に対して変えていこうという活動は頻繁には起こりませんが、… (省略)

これらは日本と韓国双方の社会に実在する事象で、その正誤や真偽を判断するのは無意味である。また、このような違った観点からの解釈こそ重要であると考えられる。ここで注目したいのは、学生たちが日本と韓国の社会・文化を相対的に述べているだけでなく、自身の態度や反応を内省しながら語っている (下線部) ことである。内省は相対的なものの見方の獲得に繋がる思考の働きであり、設問 6 の回答に見られた「評価を下さない」述

べ方に共通する態度であると考えられる。

その他にも、共通点として〈被害者に対する社会的圧力〉と〈男女の社会的立場の違い〉を挙げた回答もある。

回答例 (5) 設問 8 : 受講生 d

韓国は女性の社会的、政治的地位が男性に比べて低いのではないかと思った。これは日本に関しても言えることだと思う

回答例 (5) の事象も本人の疑問に基づいた補足調査で得た知識であり、その点を評価したい。事案の検証がなされない状態で感想を述べている部分については指導すべき課題とするが、回答例 (3)、(4) と同様、概ね正誤判断の対象ではないと思われる。

以上、本章ではプロジェクト活動の振り返りレポートを読み解きながら、韓国の社会と文化を学ぶ PBL 型授業の学習効果を確認してきた。その結果、一部の回答から次のような評価点を見出すことができた。

- ・プロジェクト活動内容を明確に理解している
- ・活動を通して新たに得た知識を適切に説明している
- ・韓国社会の特定事象の背景を理解した上で説明している
- ・自文化への内省に基づいて韓国の社会と文化を捉えている

以上、筆者が担当した PBL 型授業の実践報告を通して、韓国の社会・文化関連授業の学習効果について考察した。

山田 [2010:133] は、韓国社会や文化の理解を目的とする授業の実践報告で、学生の感想が「教師が授業中に話した内容を反映したもの」であったことを反省すべき部分としている。異なる観点から積極的に意見を提示して欲しいという趣旨の指摘であると考えられるが、「演習 A」においても、教員の考えを学生に移植するのではなく、主体的

な調査活動とグループでの話し合いを通して、自身の〈観点〉を獲得することを目指している。

PBL 授業を試みた第一歩として、まだ教員の関与や誘導が占める割合が多いが、学生たちの振り返りレポートからは、授業テーマに関する理解、主体的な取り組み、相対的なものの見方を意識した内容が見られた。特に、主体的な取り組みは PBL 型授業を円滑にするために必要であるとともに、目標としている自己主導型学習につながる重要な態度である。

(4) 主体的に取り組む姿勢について

振り返りレポートの設問方法が回答の自由度を狭めている側面があり、それだけでは学生たちが主体的に取り組む姿勢を身につけていると断定しにくい。設問の仕方について今後改善の余地があると思われる。一方、今回のプロジェクトの振り返りレポートとは直接関連しない形で学生たちの学習姿勢を確認できたので、補足資料として提示する。

「演習 A」の終了後「もう一度映画館でのプレゼンテーションの機会があるなら、参加したいですか」という自由回答で調査を行った。結果は、ゼミ生 10 名中 7 名が参加を希望すると答えるなど予想より希望者が多かったうえに、希望する・しないだけでなく、積極的にその理由を述べる文章が続いたことが印象的であった。

回答例 (5) 受講生 b

ぜひ参加させていただきたいです。私は他国の文化にとっても興味があり今回の活動に対して調べてまとめていくうえで面白いと思ったので… (省略)

回答例 (6) 受講生 e

前回の発表で達成感があり良かったと思うので、… (省略) 忙しくても参加したいです

回答例 (7) 受講生 f

プレゼンを行った時にみんなで頑張って作り上げた物をあの場で発表できた事にとっても達成感が

あり、… (省略) 何かの目標があり課題に取り組んだ方がやり甲斐が出るのではないかと思います

これらの回答からは、「演習 A」で行ったプロジェクトの経験を通して、学生が主体的に学習に取り組むことに前向きになっている様子が見られる。中井 [2015] には、学生たちがアクティブラーニングという学習方法を評価する一方で、自分自身の学習としては後ろ向きであることが示されている [中井 2015:13]。このような現状からも、「演習 A」が学生の主体的な姿勢の体得に影響した可能性が考えられる。

なお、上掲のような学生の回答には、プレゼンテーションが学外の場所 (映画館) で、一般の聴衆向けに行われたという点も影響していると思われる。社会の中で何かの役割を果たす存在として自らを認識できる公の場を提供することも、PBL 型授業の学習効果を高める主要な条件になるものと思われる。

5. 課題

振り返りレポートの分析の過程では、今後の授業改善と継続研究に向けて課題を見つけることができた。

本稿で実践報告した PBL 型授業はその授業効果が確認できた部分もあるが、検証方法においていくつかの問題点が浮き彫りになった。本研究は少人数を対象としたケース報告であるが、質的研究として分析できる資料を十分に確保できていない。客観性を得るためには、綿密な設問設計と記述資料の量的確保が必要であると考えられる。本研究では、学生の振り返りレポートなどを対象に、記述内容とその表現を分析する方法を試みているが、振り返りレポートの中には、十分な長さを持たないものや箇条書きのものも見られる。質と量を伴った資料を得られる有効な設問方法を考案する必要がある。なお、これに関連してはフォローアップインタビューの必要性も感じている。授業

内では様々な意見を発言できる一方で、文字を通した言語化を苦手とする学生も一定数存在するので、インタビューの文字化資料など、分析データの量・質的な確保を模索している。

その他、授業運営において、授業テーマの位置付けやその提示をより明確にする必要があると見られる。振り返りの段階において再び授業のテーマについて話し合うことで、改善していきたい。

以上のような課題を抱えてはいるが、韓国の社会や文化をテーマとした PBL 型授業の実践報告や関連する研究資料が少ない中、本研究ノートが実践報告の一資料として活用されることを期待する。

注

- 1) 「他からの影響・強制などではなく、自己の内部の原因によって行われること」の意味として用いている [足立他 2015:160]。
- 2) 高等教育局大学振興課大学改革推進室の調査資料を調べた結果から 2007 年から 2020 年までを示す(抜けている年度は、該当する調査結果の掲載なし) [高等教育局大学振興課大学改革推進室 2008～2023]。

	韓国語	フランス語	ドイツ語	スペイン語	中国語
2007 年	430	541	543	236	607
2008 年	429	531	528	241	610
2009 年	450	536	525	240	621
2011 年	451	517	506	237	620
2012 年	468	518	506	233	631
2013 年	474	505	498	230	633
2014 年	474	496	479	230	624
2016 年	469	479	462	228	608
2020 年	466	453	437	234	602

- 3) Collaborative Online International Learning. オンラインを活用し、自国にいながら海外の大学と合同形式で受講できる方式。
- 4) 受講生の特定を防ぐため、具体的な授業名の代わりに「演習 A」とするが、本文中に授業の形態と授業目標を示している。
- 5) ここでいう体験的な学習は溝口 [2014] の「一方的な知識伝達型講義を聴くという(受動的)学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセス

スの外化を伴う」という広い意味でのアクティブラーニングを意味する。

- 6) 「演習 A」は女子大学の学生を対象とした授業である。
- 7) 当映画は広く知られた作品とはいえないため、作品保護の理由からタイトルと内容を明示しないことにする。筆者は「演習 A」を計画する段階で映画館と協力しながら館のイベントとしてプレゼンテーションを行うことになった。
- 8) このような働きかけの効果は、学生の「ただ貼り付けるだけでなく、ちゃんと理解して発表したいと思って調べるようになった」といった発言からも確認することができた。
- 9) 教員の問いと学生のコメントをまとめたものの一例を簡略に示す。なお、例示する問いは、多様な見方に対する受け止め方を考えてもらう意図の質問である。集まったコメントを振り分け、教員がタイトル等を書き足して(ゴシック体部分)学生と共有している。

<配布資料の例>

※実際の配布資料は省略なしで全文掲載

「日常で感じるジェンダー不平等のエピソード」を一つずつ書いてもらい、それに対して数十人の学生に共感できるものを3つ、順番に選んでもらった。その結果、ある程度多く取り上げられているエピソードもあるが、全体的に人によって優先順位や選ばれたエピソードがバラバラだった。このような結果をどのように解釈できるか。

2つの解釈がある

●全てが共感できる日常的な事柄である

3つ選ぶ際にみなさんの意見全部に対して確かに、と共感しました。ジェンダーという問題は難しく、(省略)

今まで気づかなかったけど前回の発表を通して気づいた問題が多かった、ということだと思います。その時は意識していなくても、後々よく考えてみたら (省略)

●個人の感性がそれぞれ異なる

一人一人考え方や偏見や固定概念の差、視点が異なるから人によって優先順位が異なる… (省略)

それぞれの意見やその問題に対する見方、考え方の違いからだと思います。ジェンダーの不平等となるとさまざまな事があるので… (省略)。

(省略) …不平等であると考える人もいれば、思わないわけではないが明らかな不平等ではないと考える人もいて… (省略)

- 10) 「演習 A」では、自文化のフィルターに影響された

見方（主観的観点）を脱却するという意味合いで「客観的な観点の獲得」という表現を用いている。一方、『多文化共生のためのシティズンシップ教育実践ハンドブック』には「多文化共生のためのシティズンシップ教育ルーブリック」が詳細に示されているが、そこに「文化相対主義的なものの見方ができる」という項目が設けられている[多文化共生のための市民性教育研究会編 2020: pp.22-23]。例えば、到達目標の程度に「文化相対主義の定義を説明することができる」段階から「文化相対主義的なものの見方で、自文化や異文化それぞれを捉えることができる」段階を経て「文化相対主義的なものの見方で、自文化や異文化を捉えることができ、自文化の枠組みによる安易な評価に気づきそれを指摘することができる」段階までが設定されている。「演習 A」も異文化理解という文脈の中で行われていることから、上記の「相対的なものの見方」という表現がより適切な用語であると考え、今後見直していく予定である。

参考文献

- 足立晋平・中尾憲司・山村彩・伊吹勇亮（2015）「PBL 型授業において主体性が経験学習に与える影響」『高等教育フォーラム』5、p.160
- 石井雅章・陣内雄次・勝浦信幸・長岡素彦（2018）「PBL 実践における学修成果の可視化手法に関する実践と考察」『関係性の教育学』17（1）、関係性の教育学会、pp.15-27
- 任炫樹（2016）「映像資料を用いた異文化理解（韓国）のための授業実践報告」『帝塚山学院大学研究論集 リベラルアーツ学部』51、pp.19-30
- 生越直樹（2019）「韓国語学習と韓国に対するイメージ形成の関係－日本の大学生学習者へのアンケート調査を通して見た現状と変化－」『言語・情報・テキスト：東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻紀要』26、pp.29-31
- 金井秀介・カッティング美紀・秦喜美恵・筒井久美子・平井達也（2015）「グローバル教育におけるアクティブラーニングの実践と課題」『リメディアル教育研究』10（2）、日本リメディアル教育学会、p.56
- 金菊姫（2020）「韓国内の韓国語教育としての文化教育の研究動向と日本の大学における韓国語教育の現状について－松山大学の初習言語「韓国語」の事例を中心に－」『松山大学言語文化研究』40（1）、pp.104-109
- 金珉秀・村上治美（2019）「学習言語を相互に利用した

- 異文化理解授業－韓国語教育の視点から見た授業の実践－」『朝鮮語教育－理論と実践－』14、朝鮮語教育学会、pp.109-129
- 高等教育局大学振興課大学改革推進室「大学における教育内容等の改革内容について」（2008 年～2023 年資料）、文部科学省
- 国際文化フォーラム（2005）「日本の学校における韓国朝鮮語教育：大学等と高等学校の現状と課題」財団法人国際文化フォーラム、p.29
- 多文化共生のための市民性教育研究会 編『多文化共生のためのシティズンシップ教育実践ハンドブック』明石書店、pp.22-23
- 全美順（2004）「韓国文化教育における文化項目選定と授業の事例」『新潟国際情報大学 情報文化学部紀要』7、pp.17-33
- 中井俊樹（2015）『アクティブラーニング』玉川大学出版部、p.13
- 永田祥子（2019）「PBL における学生の主体的な学び：グローバル人材育成を目指した授業実践」『関西大学高等教育研究』10、p.51
- 朴珍希（2016）「日本における韓国語教育に関する研究－大学の韓国語学習者調査にみる現状と課題－」『岡山県立大学教育研究紀要』1（1）、p.21
- 広石英記（2017）「PBL 型総合学習における「学習としての評価」に関する研究」『東京電機大学総合文化研究』15、pp.13-20
- 溝口慎一（2014）『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂、p.7
- 文吉英・朱炫妹（2022）「異文化学習を取り入れた韓国語の翻訳授業の実践とその効果－日本人韓国語学習者の韓日翻訳活動を通して－」『阪南論集 人文・自然科学編』57（2）、pp.93-107
- ベジュンソプ（2023）「ポストコロナ時代における日韓異文化理解授業の模索－フィールドワークの成果を手掛かりに－」『ノートルダム清心女子大学紀要』47（1）、pp.86-97
- 山田佳子（2010）「文学作品を用いた韓国文化の授業」『国際地域研究論集』1、国際地域研究学会、p.133
- 강승혜・김성희・박성태・임형재・최주열・황인교（2010）『한국문화교육론』형설출판사、pp.75-85、pp.218-226
- 이성희（2015）『한국문화 어떻게 가르칠 것인가 - 이론과 실제 -』박이정、pp.252-310
- 임경순（2015）『외국어로써의 한국어교육을 위한 한국문화교육론』역락、pp.46-56

研究ノート

北京朝鮮族コミュニティの朝鮮族高齢者への福祉的機能

南玉瓊

【要旨】

1978 年以後、中国朝鮮族は伝統的居住地域である東北三省から中国の沿岸都市や大都市に移動を行った。中国には戸籍制度があり、移動する人が移動先の社会福祉を全部享受できるとは限らない。国家でも家庭でもない第三の福祉の重要性については唱えられて久しい。朝鮮族は移動先でエスニック・コミュニティを形成しており、移動した高齢者に対する援助や「敬老活動」が見られる。このような状況を踏まえ、本研究においては、北京における中国朝鮮族コミュニティが移動した高齢者に対してどのような福祉機能を果たしているかを明らかにすることを目的にする。研究方法は文献調査法を用いた質的調査法である。研究の結果、北京朝鮮族コミュニティは老人協会に経済的支援を行うだけでなく、朝鮮族の伝統的な儀式でイベントを企画し、文化伝承をしつつ高齢者の福祉を支えていることが明らかになった。また、高齢者も受け身的な姿勢ではなく主体的に各所に働きかけていることが分かった。

【Abstract】

Since 1978, Korean-Chinese have migrated from their traditional residential areas in the three northeastern provinces to coastal cities and large cities in China. China has a household registration system, and those who move do not always enjoy all the social welfare in the destination cities. The importance of a third type of welfare, neither state nor family, has long been advocated. Korean-Chinese have formed ethnic communities in their

migratory destinations, and assistance and "respect-for-the-older people" activities for the older people who have migrated can be seen. In light of this situation, the purpose of this study is to determine how Korean-Chinese community in Beijing fulfill their welfare functions for the older people who have moved. The research method is a qualitative research method using the literature review method. The study revealed that the Beijing Korean-Chinese community not only provides financial support to the older people's association, but also supports the welfare of the elderly by organizing events in traditional Korean-Chinese ceremonies and passing on culture. It was also found that the elderly are not passive but proactive in reaching out to various organizations.

キーワード：北京, 中国朝鮮族, コミュニティ, 高齢者, 福祉

Keywords: Beijing, Korean-Chinese, community, older people, welfare

1. はじめに

1978 年以後、多くの中国朝鮮族¹⁾は中国の沿岸都市や大都市に移動を行った。中国には戸籍制度があり、移動する人々が移動先の社会福祉を享受できるとは限らない。都市部に移動した朝鮮族は二重や多重のマイノリティである可能性が高い。

すなわち、現地の戸籍がないゆえに社会福祉を享受できない人や、社会的ネットワークがなく孤立した人などが生み出されることが考えられる。

本稿が北京に移動した朝鮮族高齢者に注目する理由は次のとおりである。北京高齢化協会によると、2022年の時点で常住人口²⁾のうち60歳以上人口の割合が20%以上を占める省級地域は、遼寧(25.7%)、吉林(23.8%)、上海(23.4%)、黒龍江(23.2%)、江蘇(22.2%)、四川(21.7%)、重慶(21.7%)、天津(21.7%)、山東(21.2%)、湖北(21.0%)、内蒙古(20.3%)、河北(20.2%)、北京(20.2%)である。北京の60歳以上人口率が初めて20%以上を突破したのは2021年で、同じ時期に、北京の65歳以上の人口比率も14%を超え、高齢社会に突入した。また、北京市16区のうち、60歳以上の常住人口が最も多いのは朝陽区、海淀区、豊台区で、それぞれ72.8万人、60.9万人、49.6万人であった[임지연 2022、北京市老齡工作委员会弁公室他 2021]。北京で韓国人と朝鮮族が多く居住している望京コリアンタウンは朝陽区にある。北京の戸籍を持つ人口だけを見ると、2021年の時点で60歳以上人口の比率は既に27.5%で、65歳以上人口の比率は19.8%である[北京市老齡工作委员会弁公室他 2021]。北京の戸籍を持つ人々の高齢化率がより高いのは、外部からの流入人口に若者が含まれていることが要因であろうが、朝鮮族が集住している地域が北京でも高齢人口が最も多い地域の一つであることは、北京に移動した朝鮮族にも高齢化が起こっていることの一端を示していると考えられる。

伝統的居住地域³⁾を離れた朝鮮族高齢者の経済的な問題や孤独の問題は、大きな社会問題として浮上している。2017年現在、北京には2万人に達する朝鮮族高齢者がいる。このうち大半の高齢者は子女を追って東北の農村から北京に移動した人々で、彼(女)らには養老年金がない。北京に居住しているが、北京戸籍がないため、北京市政府からの高齢者手当を受けにくく、元の居住地を離れたため、元の居住地の地方政府からの高齢者手当も受けにくい。また、長年住んでいた故郷を

離れ、社会的ネットワークがほぼない地域で孫の面倒をみるため、孤独を我慢しなければならない。このような心の問題に対応し、発足したのが北京市朝鮮族老人協会(以下、老人協会)である。

個人化が進む時代ではあるが、朝鮮族は移動先で朝鮮族コミュニティを形成している。第三の福祉の重要性については唱えられて久しい。公共部門でもなく、世帯・家族でもなく、市場部門でもない第三セクターとしての団体(アソシエーション)が、一部の福祉機能を担っていることが言われている[ビクター・A. ペストフ 2000]が、朝鮮族コミュニティにおいてはどうか。どのような機能を果たしているだろうか。

このような問題意識のもと、以下では朝鮮族の国内移動や、移動先で形成されたコミュニティの実践に関する近年の先行研究について概観する。

南玉瓊[2018]は、ハルビン市、深圳市、青島市、北京市郊外の燕郊鎮を事例に、非伝統的居住地域における朝鮮族コミュニティの形成原因とプロセスについて研究した。その結果、「国内外社会的資源・経済的資源の相互依存モデル」を提起し、非伝統的居住地域の朝鮮族コミュニティの形成と維持の要因にはナショナルな側面以外に、エスニックな側面とグローバルな側面の影響が大きいことを明らかにした。

権香淑ら[2020]では、朝鮮族の日本への移住過程は、「新華僑」に類似していることを明らかにした。他方で、朝鮮族ならではの特徴も指摘された。その特徴とは、人的資本、文化資本を備えており、それらが日本への移動や適応において重要な機能を果たしていること、日中韓の社会関係資本が発達し、華僑ネットワークとコリアン・ネットワークへ参加が可能であることなどである。また、在日朝鮮族に見られるのは、ある場所に対する永続的な定着というよりは、「拠点形成としての定住化」である、と主張した。

林梅[2020]は、中国朝鮮族の老親扶養に焦点を当て、トランスナショナルな移動がもたらした家族観の変容を明らかにした。具体的には、トランスナショナルな移動によって、朝鮮族の老親扶

養システムは変容し、長男への財産継承や親への経済的支援が減少し、娘が身体的な介護を担当するケースが増えている。また、孝行の思想が衰退しているものの、家族のつながりが老親の支えとなっている。監督装置が弱まりつつあるが、対面的コミュニティや知人ネットワークが一定の監督機能を果たしている。老親扶養システムと道徳規範、監督装置は曖昧で不確実な状態で、移動はこの変容を進行させていると指摘した。

李蓮花・張継元〔2022〕は、中国の人口政策の変遷を歴史的に振り返ったうえで、出産・育児をめぐる最新の政策動向および議論を整理し、日本や韓国など東アジアの「少子化先発国」の経験と比較しながら現時点の中国の少子化対策の特徴を考察した。その結果、中国の少子化対策の特徴と問題点について、①明確な担当省庁の不在、②現

金給付や保育サービスの拡充よりも産休、育休など時間支援のための規制が先行している点、③産休・育休などの時間支援の恩恵を受けられるのは多くの場合、公的機関や国有企業、大企業に勤めている労働者で、中小零細企業や自営業者、非正規労働者はほとんど利用できない点、④現在の制度・政策には、女性への雇用差別や、女性だけが不平等に家庭内のことに責任を負っているという問題など、ジェンダーの視点が非常に弱いことを指摘した。

これらの先行研究は、移動する朝鮮族のコミュニティやネットワークの形成プロセス、次世代の養育や老親扶養問題にアプローチした面で非常に重要である。しかし、非伝統的居住地域における朝鮮族コミュニティや団体と、移動した朝鮮族高齢者との関係についての検討はまだ十分とはいえ

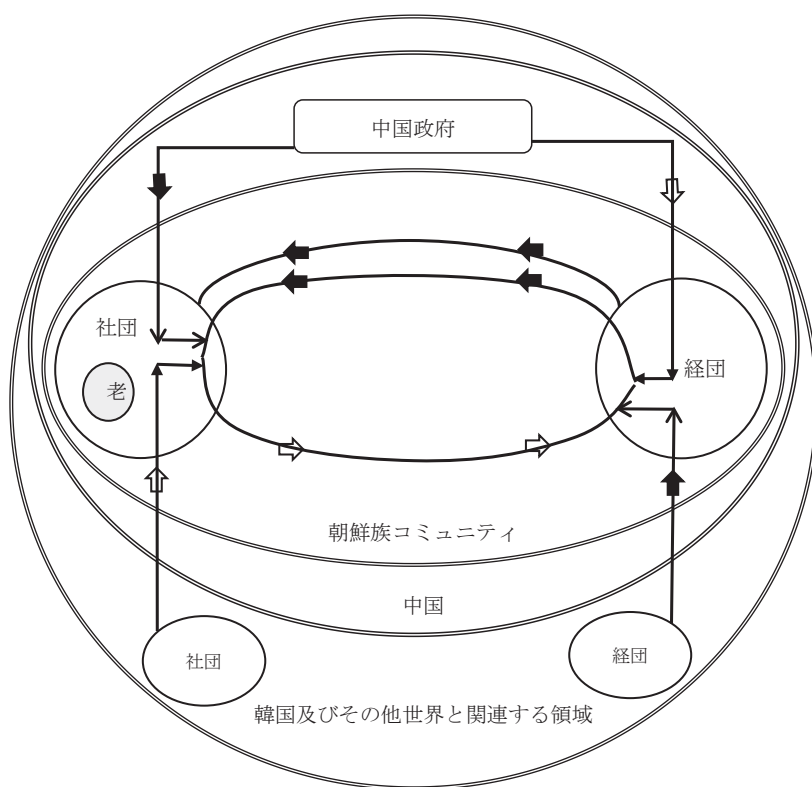


図1 本稿の枠組——国内外社会的資源・経済的資源の相互依存モデル

出処：南〔2018〕に基づき一部修正。

注：

■→経済的資源の移動；□→社会的資源の移動
経団＝経済的団体；社団＝社会的団体；老＝老人協会

ない。本稿においては、北京市を事例に、朝鮮族コミュニティの高齢者に対する福祉的な機能と実践を明らかにすることを目的にする。本研究の分析枠組（図1）は、以上の先行研究の視点に習って修正を加えたものである。

まずは、最も小さい二重線による楕円内には、朝鮮族コミュニティがあり、その内部で働くメカニズムを説明する。社会的団体から社会的資源が経済的団体に流れると、経済的団体はその資源を主に自らの経済活動の活性化のために使うようになる。つまり企業家協会が人脈や韓国語といった社会的資源を自らのビジネスに活用するのである。企業家は自らの経済目的を達成させるために、「朝鮮族」という同じ民族的出自に基づく朝鮮族の団体を作り、時には朝鮮族運動会を開催するなどをして人脈づくりをする。そうすることでビジネス情報の共有が行われる。そうした人脈は新たなビジネスチャンスを生み出すので、経済目的の達成につながる。しかし、その一方で経済的資源が経済的団体から社会的団体に移行することについては、「投資」という理由だけでは説明が不十分で、「民族言語文化の喪失の危機感」といった原初的愛着面の理由も存在する。すなわち、経済的資源の移動には二種類のものがある。一つは投資的なもので、もう一つは寄付的なものである。社会的団体、経済的団体のいずれも経済的資源・社会的資源を有する。

本研究では老人協会が主な分析対象の一つになるため、元の図に老人協会を加え、その位置づけを行った。老人協会は朝鮮族コミュニティの社会的団体の一つである。老人協会以外の朝鮮族の社会的団体についても、後述で触れることとする。

次に、二重線による楕円で二番に大きい楕円は朝鮮族コミュニティに対する中国政府及び政策・制度である。すなわち、中国固有の戸籍制度や中国の政府機関に属する人々が、朝鮮族コミュニティや都市に移動した朝鮮族高齢者に与える影響を、外部要因の一つとして考察する。その際に、政府や政府機関の社会的・経済的資源が朝鮮族コミュニティの資源循環システムに組み込まれる過

程も当然、検討課題になる。

第三に、最も大きな二重線による円では、トランスナショナルな側面からの朝鮮族コミュニティに対する影響を、社会的団体と経済的団体に焦点を絞って検討する。すなわち、海外の社会的・経済的団体や中国にある外国人団体などの社会的・経済的資源が朝鮮族コミュニティの資源循環システムに組み込まれ、朝鮮族高齢者にもたらす影響を検討する。

本研究は以上の分析枠組みによって朝鮮族コミュニティの福祉機能を分析する。研究方法は、新聞記事（朝鮮族の活動について朝鮮語や中国語で書かれた新聞記事）や統計資料（中国の公的な統計調査資料）を用いた文献調査方法である。本研究の意義は、移動する朝鮮族高齢者の福祉問題をめぐって、高齢者の心身の健康、とりわけ孤独問題、政策的欠如、福祉市場へアクセスが困難であるという問題（経済難など）があり、朝鮮族コミュニティと高齢者の自助グループとしての団体が如何に連携し、問題に対応しようとしているかを見ることができる点にある。本研究で得られた知見は、日本において、地方から都市に移住した若者が老親を都市に呼び寄せた後に生じる老親の孤独と引きこもり問題を検討する際に、貢献しう点があると思われる。また、第三セクターが移動した高齢者の福祉面においてどのような役割を果たしうかを明らかにすると同時に、高齢者の主体的な取り組みはいかにして可能かという問題にも一定の端緒を示すことができよう。

本論文の構成は以下の通りである。「はじめに」と「おわりに」を除けば3章構成になっている。第2章では北京における朝鮮族の社会的位置について概観し、第3章では北京朝鮮族コミュニティの形成と老人協会の取り組みについて述べる。第4章では北京朝鮮族コミュニティの高齢者に対する福祉の実践を紹介する。

2. 北京における朝鮮族の社会的位置

(1) 中国の戸籍制度と年金制度

中国国内の移動について考察する際に戸籍制度を抜きにして語れない。1958年1月に制定された「中華人民共和国戸口登記条例」によって、都市と農村の居住区が明確に区分され、「農村戸籍」と「都市戸籍」の2種類の戸籍が設けられた。戸籍制度は単なる戸籍の登記・管理のみならず、就業、教育・医療、年金などと深く関連付けられている。改革開放以後、農村から都市への移動が大学に行われ、戸籍制度の修訂も続いている。たとえば、2019年に中国の国家発展改革委員会は「人口が100万～300万人のⅡ型大都市では、居住制限を完全に撤廃する。人口300万～500万人のⅠ型大都市では、居住条件を緩和し、重点人口（大学卒業生や大学新卒者など）の居住制限を完全に撤廃する。超大特大都市では、ポイント制度を調整し、居住規模を大幅に拡大し、ポイント項目を簡素化し、社会保障の納付期間と居住期間の得点が主要な割合を占めることを確保する」と各種規模の都市に提案した〔蘭小敏 2021〕。

北京在住朝鮮族高齢者、特に高齢者になってから北京に移動した人の場合、北京戸籍を取得することは極めて難しい。そのため、経済的な面で困難を経験しているほか、孫の世話をするために農村から移動したケースも多いため、ほとんどの場合家族と過ごす時間が圧倒的に多く、社会的ネットワークが形成しにくく、孤独の問題を抱えやすい。また、彼（女）らの介護問題は言うまでもなく大きな社会問題であることが予想される。

続いて、年金制度について見る。中国の人力資源と社会保障部が2010年に公布した「城镇企業及び従業員の基礎年金保険関係の移転及び継続に関する暫定弁法（城镇企业职工基本养老保险关系转移接续暂行办法）」によると、年金加入者の基礎年金保険関係が戸籍所在地にない場合、基礎年金保険関係がある場所で通算10年間保険料を納付していれば、退職後基礎年金保険関係がある場所で

基礎年金保険待遇を受けることができる。しかし、「北京基礎年金保険規定（北京市基本养老保险規定）」によると、非北京戸籍の被保険者が法定退職年齢に達した後、年金保険料を15年間積み立て、そのうち少なくとも10年間は北京で保険料を納付していれば、北京で退職を申請し年金を受け取ることができる〔李子君 2013〕。ところが、退職後東三省から北京に移動した高齢者の場合、もしくは農村から北京に移動した高齢者の場合、このような条件を満たせる人は非常に少ない。

年金の問題や老人の孤独といった問題は中国高齢者に広くみられる課題であるが、非伝統的居住地域における朝鮮族高齢者は言語や生活習慣などの面で特殊性を持っており、マジョリティのネットワークに参入することにおいても言語や文化面の壁の存在が考えられる。

(2) 北京における朝鮮族の社会的位置

2020年の時点で、北京戸籍を持つ朝鮮族は約33,000人で、北京に居住しているが北京戸籍を持たない朝鮮族は約18,000人である。ジェンダー別に見ると、いずれも女性の方が男性より20ポイント以上多い。続いて、北京における彼らの居住地域を見てみると、いずれの場合でも一番多く居住している地域は朝陽区である。また、いずれの場合でも、次に多く居住する4つの地域は海淀区、通州区、順義区、昌平区であるが、順番が少し異なる。

それぞれの地域の特徴を見ると、海淀区は中国の教育の中心地域となっていて、北京大学や清華大学など数十の有名な大学が集まっている地域である。そのため、北京戸籍を持つ朝鮮族が北京戸籍を持たない朝鮮族より海淀区における居住率が高いのは、大学入学に伴う戸籍の北京市への移動が考えられる。朝陽区には韓国系企業や国際学校が多く、コリアタウンも形成されているため、就職と生活に便利であることが考えられ、北京戸籍の有無にかかわらず朝鮮族の居住率が比較的に高い。昌平区、通州区、順義区は朝陽区や海淀区に隣接しているが、消費支出は海淀区や朝陽区ほど

表 1 北京における朝鮮族の人口分布

(単位：人)

北京戸籍を持つ朝鮮族				北京戸籍を持たない朝鮮族			
地区	男性	女性	計	地区	男性	女性	計
朝陽区	3,742	4,973	8,715	朝陽区	2,006	2,683	4,689
海淀区	2,142	3,038	5,180	通州区	1,267	1,460	2,727
通州区	1,697	1,992	3,689	順義区	1,169	1,321	2,490
順義区	1,531	1,687	3,218	昌平区	906	1,054	1,960
昌平区	1,383	1,644	3,027	海淀区	631	956	1,587
大興区	940	1,111	2,051	大興区	619	728	1,347
豊台区	848	1,113	1,961	豊台区	362	506	868
西城区	570	690	1,260	房山区	258	297	555
房山区	459	518	977	密雲区	158	156	314
東城区	333	469	802	西城区	113	167	280
石景山区	287	367	654	平谷区	118	132	250
密雲区	216	238	454	石景山区	68	135	203
平谷区	145	174	319	東城区	73	127	200
懷柔区	129	136	265	懷柔区	86	90	176
門頭溝区	109	150	259	門頭溝区	51	79	130
延慶区	68	85	153	延慶区	47	54	101
合計	14,599	18,385	32,984	合計	7,932	9,945	17,877

出処：北京市第七次全国人口普查領導小組弁公室、北京市統計局編（2020）「1-6 各地区分性別、民族の人口；1-7 各地区分性別、民族の外省来京人員」『北京市人口普查年鑑 上冊』中国統計出版社

表 2 北京市各地区における一人当たりの収支情況

	一人当たりの可処分所得（元）	一人当たりの消費支出（元）
西城区	90,286	51,466
海淀区	86,742	51,198
東城区	83,501	46,190
朝陽区	78,721	44,682
石景山区	78,656	40,096
北京市の平均	69,434	38,903
豊台区	66,799	38,472
門頭溝区	55,102	31,889
昌平区	51,587	34,962
大興区	49,206	30,123
通州区	45,845	29,697
房山区	44,078	25,307
順義区	41,803	25,743
懷柔区	41,779	27,247
平谷区	40,274	24,310
密雲区	39,282	24,264
延慶区	37,385	24,770

出処：北京市統計局、国家統計局北京調査総隊編「3-3 常住人口と常住人口密度、3-10 地区生産総値、3-40 居民収支情況」『北京区域統計年鑑 2022』中国統計出版社、北京数通電子出版社

北京市行政区域界线基础地理底图(全市)

出処：北京市民政局 [https://mzj.beijing.gov.cn/col/col7288/index.html] (2023 年 12 月 2 日アクセス) に基づき筆者加筆。

北京戸籍を持つ朝鮮族の年齢分布を見ると、20歳未満の人口比率は約22%、20代と30代の人口比率は約37%、40代と50代の人口比率は27%、60代と70代が約11%、80歳以上が約2%である。また、全年齢層の内、人口が最も多いのは30代である。20代と30代の人口が最も多いのは、北京の大学に通う朝鮮族の学生と卒業後北京に残って就職をした人口が考えられる。しかし、40代や50

続いて、北京戸籍を持つ朝鮮族の業種について見る。北京戸籍を持つ朝鮮族の中で、20歳以上60歳未満の人口は2万人弱であるが、表4には1445人のみのデータが示されているため、ある程度の

表 3 北京朝鮮族の年齢分布

年齢	北京市の全人口		北京朝鮮族	
	人口（人）	比率（％）	人口（人）	比率（％）
0-4 歳	1,016,250	4.64	2,091	6.34
5-9 歳	932,953	4.26	2,268	6.88
10-14 歳	642,304	2.93	1,657	5.02
15-19 歳	633,557	2.89	1,323	4.01
20-24 歳	1,350,502	6.17	1,970	5.97
25-29 歳	1,904,688	8.70	2,572	7.80
30-34 歳	2,503,029	11.43	3,817	11.57
35-39 歳	2,143,185	9.79	3,976	12.05
40-44 歳	1,602,133	7.32	2,988	9.06
45-49 歳	1,618,574	7.39	2,578	7.82
50-54 歳	1,619,791	7.40	1,800	5.46
55-59 歳	1,627,539	7.43	1,540	4.67
60-64 歳	1,386,530	6.33	1,335	4.05
65-69 歳	1,194,671	5.46	1,267	3.84
70-74 歳	668,541	3.05	637	1.93
75-79 歳	415,173	1.90	432	1.31
80-84 歳	348,786	1.59	450	1.36
85-89 歳	201,947	0.92	217	0.66
90-94 歳	66,260	0.30	60	0.18
95-99 歳	13,889	0.06	5	0.02
100 歳以上	2,793	0.01	1	0.00
合計	21,893,095	100.00	32,984	100.00

出処：北京市第七次全国人口普查領導小組弁公室、北京市統計局編（2020）「2-2 全市各民族分年齢、性別の人口」『北京市人口普查年鑑 中冊』中国統計出版社

偏りの可能性を認めつつ参考にしたい。業種分布に関する合計人数が少ない理由としては、就学中の人口、留学人口や他地域・他国居住の人口、未就労人口、失業人口、未回答などのケースが考えられる。

業種は人口の多い順に、「卸売業および小売業」、「製造業」、「情報伝送、ソフトウェアおよび情報技術サービス業」、「リース業・ビジネスサービス業」、「科学研究および技術サービス産業」、「教育」などがある。

最後に、北京戸籍を持つ朝鮮族の主な収入源について見る。北京戸籍を持つ 15 歳以上の朝鮮族人口は約 26,000 人であるため、表 5 はそのうちの 1 割に当たる人口についての調査データになる。被調査者の内、約 6 割は労働収入が、2 割弱は退職

年金・養老年金が主な収入源となっており、これらの人口は生活するのに特に困らないことが予想される。一方で、家族のサポートで生活する人が 2 割弱を占め、また、最低生活保障金によって生活を営んでいる人口もいることも見逃してはならない。

3. 北京朝鮮族コミュニティと老人協会

（1）朝鮮族の北京市への移住とコミュニティの形成

1920 年代初から北京市に朝鮮人がいたが、主に朝鮮の独立運動のために来た学生や知識人、そして運動家であり、1923 年には約 900 人に上っていた。1945 年に北京市にいた朝鮮人は 50 人ぐら

表 4 北京朝鮮族の業種分布

業 種	人口 (人)	比率 (%)
卸売業および小売業	219	15.16
製造業	197	13.63
情報伝送、ソフトウェアおよび情報技術サービス業	194	13.43
リース業・ビジネスサービス業	170	11.76
科学研究および技術サービス産業	116	8.03
教育	103	7.13
文化・スポーツ・エンターテインメント産業	75	5.19
金融業	70	4.84
住宅サービス、修理およびその他のサービス	46	3.18
宿泊・飲食業	41	2.84
衛生と社会福祉	41	2.84
行政、社会保障、社会団体	40	2.77
運輸、倉庫、郵便サービス	38	2.63
建設業	37	2.56
不動産業	34	2.35
水利・環境・公共施設管理業	11	0.76
電気、ガス、水の製造・供給業	7	0.48
鉱業	4	0.28
農林水産業	1	0.07
国際機関	1	0.07
合計	1,445	100.00

出処：北京市第七次全国人口普查領導小組弁公室、北京市統計局編（2020）「2-1 全市各民族分性別、行業の人口」『北京市人口普查年鑑 中冊』中国統計出版社

の規模であった。1949 年の中華人民共和国成立以後、人民解放軍に参加した一部の朝鮮族が北京市に配置されたほか、少数民族事務・民族文化関連の国家機関が設置され、他の少数民族同様朝鮮族のエリートが選抜され、このような機関で勤務するようになった。1953 年には約 280 人の朝鮮族が北京市にいた。1977 年に統一大学受験制度(高考)が復活することにより、「教育移住」が可能になり、大学を卒業して北京市に配置される朝鮮族が急増した。彼らは国から配分される住宅政策により、大部分は漢族と一緒に生活しており、特に民族別な住み分けではなく、階層による住み分けが計画経済時期の都市空間の特徴を成していた。北京市における朝鮮族エリート達は北京市の知識人が集まった海淀区に集住しており、1978 年には約 2,800 人の規模まで増大した。1978 年から改革開放政策が実施され、1980 年代前半になると、朝鮮族農民

のキムチなど朝鮮漬けの小規模の商売から始まった地域移動が生じた。ただしその規模はあまり大きくはなかったが、それでも北京市の朝鮮族人口は増加し、1985 年の時点で約 4,000 人になった。1980 年代後半から朝鮮族の北京市への移動は活発化する。エスニック料理店、旅行社、カラオケ、サウナなどのサービス系と外資系企業（主に韓国系企業）、大学が朝鮮族の受け皿となった。20、30 代の若者の移動者が多く、単身移動が主流であった。1990 年には 7,689 人の朝鮮族が北京市にいたと言われる。このように、1992 年ごろまで、朝鮮族が北京市に移住した主要因は改革開放と産業化、都市化の拡散であった。

1992 年の中韓国交樹立後は、韓国企業、観光客、留学生が北京市に居住するようになり、その波及効果で朝鮮族の移住がより大規模なものとなった。

表 5 北京朝鮮族の主な収入源

		北京の全人口		朝鮮族	
		人口（人）	比率（％）	人口（人）	比率（％）
労働収入	計	1,017,992	54.97	1,458	57.02
	男	589,865	31.85	712	27.85
	女	428,127	23.12	746	29.17
家族のサポート	計	273,730	14.78	496	19.40
	男	102,156	5.52	165	6.45
	女	171,574	9.26	331	12.94
退職年金・養老年金	計	458,083	24.73	462	18.07
	男	189,907	10.25	159	6.22
	女	268,176	14.48	303	11.85
資産性所得	計	15,507	0.84	31	1.21
	男	8,589	0.46	13	0.51
	女	6,918	0.37	18	0.70
最低生活保障金	計	11,908	0.64	4	0.16
	男	6,257	0.34	2	0.08
	女	5,651	0.31	2	0.08
失業保険金	計	1,613	0.09	-	-
	男	1,041	0.06	-	-
	女	572	0.03	-	-
その他	計	73,169	3.95	106	4.15
	男	38,914	2.10	40	1.56
	女	34,255	1.85	66	2.58
15 歳以上の人口	合計	1,852,002	100.00	2,557	100.00
	男	936,729	50.58	1,091	42.67
	女	915,273	49.42	1,466	57.33

出処：北京市第七次全国人口普查領導小組弁公室、北京市統計局編（2020）「2-3 全市各民族分性別、主要生活来源的 15 歳及以上人口」『北京市人口普查年鑑 中冊』中国統計出版社

1990 年代前半に、韓国人留学生が五道口の北京市語言大学を中心にコリアンタウンを形成し、また韓国人商人の北京市進出で、北京市にはコリアンの文化社会経済環境がある程度整った。韓国人駐在員は中国生活に適応するため、朝鮮族家政婦を雇用することが多かった。家政婦という職は、北京市戸籍は得られないものの、安定的で比較的高い賃金が得られるため、朝鮮族労働者の北京市への移住が進んだ。また、韓国企業の進出により、東北朝鮮族社会には「下海（商売に手を染める、経済活動に転身するという意味である）」ブームが起こり、公務員が元の職を辞めて韓国企業や旅行会社に転職したりした。また、多くの朝鮮族大学生

も卒業後韓国系企業に就職することとなった。このような動きで 2000 年には約 60,000 人の朝鮮族が北京市に滞在することになった。さらに、2000 年代前半になると、韓国人の階層と職業の多様化により、朝鮮族も一層北京市に移住するようになった。また、中国国内移動の自由化により、北京市の朝鮮族人口が急増の一途をたどり、2009 年には約 15 万人に達したといわれていた。そこには、1980 年代や 1990 年代生まれの朝鮮族が北京市の大学に入学して北京市に残ったり、中国各地から海外に留学してから北京市に再び戻ったりした背景がある。

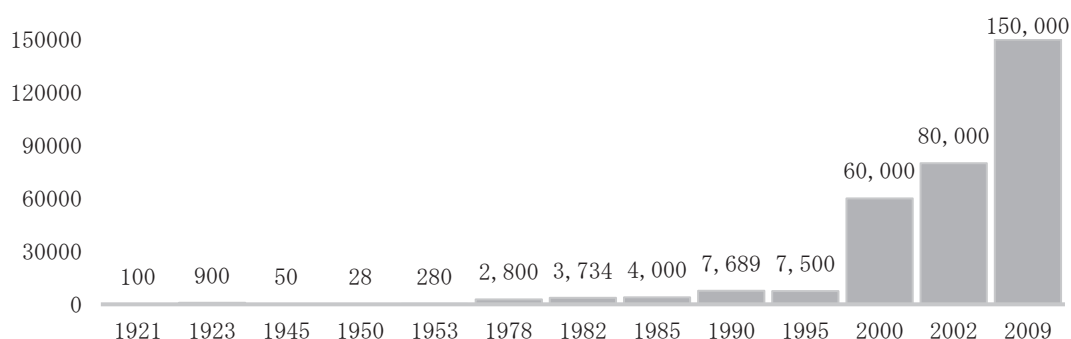


図3 北京における朝鮮族の推計人数の変化

出処：南 [2018：118]

(2) 北京朝鮮族コミュニティと関連団体

以上、北京朝鮮族コミュニティの形成を概観したが、以下では北京朝鮮族老人協会と連携のある団体について紹介する。

まず、北京の朝鮮族老人協会と連携のある団体や学校には主に以下通りのものがある。経済的団体としては、北京朝鮮族企業家協会、北京朝鮮族老人協会敬老後援理事会、北京朝鮮族愛心奨学会などがある。社会的団体としては、北京望京正音ウリマル学校、中国朝鮮民族史学会、中国朝鮮族科学技術者協会、北京朝鮮族老人協会、延辺大学同窓会、北京愛心女性ネットワーク⁴⁾、朝鮮族バドミントン連合会、北京朝鮮族ゴルフ協会などがある。

次に、北京朝鮮族コミュニティの活動に関連する中国の政府機関や大学、メディアについて紹介する。経済的機関としては、中国アジア経済発展協会、中国アジア経済発展協会の朝鮮族企業発展委員会がある。社会的機関、団体、メディアとしては、中央統一戦線部、北京市民族聯誼会、民族出版社、民族翻訳局、中国社会科学院、中央人民放送局、中国民族雑誌、民族画報、人民網⁵⁾、中央民族大学などがある。

第三に、北京朝鮮族コミュニティの活動に関連する韓国の政府機関や団体について見る。経済的団体としては、北京韓国中小企業協会、世界韓人貿易協会（OKTA）などがある。社会的機関、団体としては、駐中国韓国大使館、在外同胞財団、北

京韓国人会、民主平和統一諮問会議北京協議会、北京韓国人バドミントン連合会などがある。

(3) 老人協会

1982年に延辺の龍井市で初の朝鮮族老人協会が設立され、2009年12月には全国朝鮮族老人協会親睦会が設立された。2019年現在、延辺朝鮮族自治州老人協会は延辺人民出版社と合同し、「老年世界」という朝鮮族高齢者向けの月刊誌を出版しており、年間1万3千部余り発行している [박철원 2019]。

中国の改革開放以降、北京には朝鮮族人口が急増し、それに伴い朝鮮族の高齢者も大幅に増加した。当初、北京の朝鮮族高齢者は自らが居住する地域で小規模な活動を企画したりしていたが、北京朝鮮族老人協会というものはなく、制度化されていない状況であった。たとえば、海淀区中関村、東城区華平嘉園、朝陽区望京地域で朝鮮族高齢者による単発的な活動があった。彼（女）らは普段から集まって体を鍛えるがてら、歌や踊りを学んで練習し、時には地域社会を代表してイベントに参加することもあった。高齢者の活動企画に経験のある李成順氏（中華老人文化交流促進会の副秘書長）は、中華老人文化交流促進会を軸に、北京市の各地域における朝鮮族高齢者の活動団体を会員として受け入れて結束させ、相互交流の場を設けただけでなく、活動の舞台を国内外に広げた。中華老人文化交流促進会は、様々な文化活動を定期的に企画している。たとえば2001年には、韓国と

日本の高齢者を北京に招き、「新世紀日中韓老人北京大聯歓」というイベントを開催した。李氏は、北京の朝鮮族高齢者活動を積極的に企画する一方、北京以外の地域の朝鮮族老人協会とも連携し、国際老人活動にもつなげた [김수철 2006]。

東北3省から子連れで見知らぬ北京にきた朝鮮族を中心に、より楽しい老後を過ごすために2003年に12人の会員で始まった北京朝鮮族高齢者の集まりは、2007年に北京アリラン朝鮮族老人文化交流協会を設立し、2012年には北京市民族連誼会の公式認定団体の許可を受け、協会名を「北京朝鮮族老人協会」に改名した。元北京アリラン朝鮮族老人文化交流協会の李成順会長が老人協会の会長を務めるようになった [임영화 2017]。2015年に老人協会は、傘下に11の支部を持ち、会員数は300余人を数えるようになり、同協会は北京市朝鮮族老人活動の中心的な役割を果たすようになった。しかし、毎年、新年会を開催するにも、北京朝鮮族各界から支援される経費と、篤志家から一時的な後援を受けるなど、困難な運営を維持していた。このような老人協会の活動を支援するため、2015年に世界韓人貿易協会 (World-OKTA) のリ・クァンソク副会長を会長に、十数名からなる後援会が立ち上がった。2016年に第一期会長の辞任と共に、第2期後援会が成立した。その成立会議への参加者は、「高齢者への孝行は朝鮮族社会の知識人、リーダーにとって後回しにできない道義的義務と責任である」と述べ、老人協会の後援者として道義的義務と責任を果たすことを表明した [김홍화 2017]。2017年の時点で、北京には約2万人の朝鮮族高齢者が居住しており、このうち300人余りが老人協会の会員で、そのうち、80歳から90歳までの高齢者が50人余り、90歳以上の高齢者が5人いる [김용 2017]。

北京朝鮮族老人協会が主催したり関わったりしている活動は以下の通りである。まず、老人協会はおおよそ毎年、新年会を主催している [박복선 2013]。また、2018年には「第16回北京朝鮮族運動会兼第3回可喜安カップ民俗祝祭」に参加すると同時に文芸公演を行い [이나연 2018]、2023年

には北京順義正音ウリマル学校 (朝鮮族週末学校) の修了式に招待され公演を行った [유경봉 2023]。その他、中国で全国的な老人文芸コンクールに出場し、金賞や銀賞を数十回受賞し、中国の中央テレビに出演して朝鮮族の舞踊を披露し、北京オリンピック開会式で祝賀公演を行い、老人文化祭、老年ファッションショーなど全国的な朝鮮族の老年イベントを主催した [김홍화 2017]。

このように、北京朝鮮族老人協会は朝鮮族の民族舞踊を披露することをメインに、都市における朝鮮族の児童に文化伝承の面において積極的に役割を果たしている。

4. 北京朝鮮族コミュニティの高齢者に対する福祉的实践

(1) 後援会

北京朝鮮族高齢者の多様な活動と老人協会の活動空間の賃貸問題を解決するために、北京朝鮮族企業家からなる後援会が2015年8月15日に設立された。老人協会が主催し、後援会の発足式は老人協会の会議室で行われた。後援会は、会長1名、副会長3名、理事5名からなる [김동파 2015]。

2017年1月に会長交替が行われ、後援会では32万元 (約670万円) の募金を集め、老人協会に寄付した。第2期老人協会後援会の公式発足を告げるイベントで、老人協会会長は、北京市朝鮮族老人基本状況と朝鮮族老人協会の活動状況を紹介し、各界のリーダーが老人事業を支援する善行に積極的に参加するよう呼びかけた [김홍화 2017]。同年4月、「敬老功德牌、敬老捐助証書授与式及敬老行善文化座談会」が北京望京で開催された。老人協会と後援会が共同主催したこのイベントには、老人協会会員と後援会会員、人民網、中央人民放送局、中国国際放送局などのメディアの記者を含む約50人が参加した。そこで、後援会の第2期会長は「百善の中で孝行が一番であり、老人に孝行し、子どもを愛することは我が民族の美德であり、北京朝鮮族社会の代表的な団体に属する後

援会は老人協会が長く維持されるように力を合わせる」と述べた。老人協会会長は謝辞を述べ、朝鮮族の後世に民族の伝統を継がせていきたいと述べた [김웅 2017]。

その後、新型コロナウイルス感染症の影響で企業や後援会も困難を迎えたが、2019年から2020年までの間に第2回後援金募集活動を行った結果、40万円（約835万円）余りの後援金が集まり、老人協会に寄付した。老人協会では運営資金として使用し、後援会による第3回募金活動開始まで5万円（約104万円）余りが残っていた。2022年から2023年にかけて第三回募金活動を行い、100万円（約2100万円）の老人会後援資金が集まり、老人協会に寄付した。

(2) 後援会の敬老行事

北京朝鮮族企業家協会を中心とした支援と協賛で、2016年から北京朝鮮族孝文化祭が開催された [김은화 2017]。以下では、2017年に行われた第2回文化祭を例に内容を見る。

2017年9月10日、北京市朝陽区の宴会場で、第2回朝鮮族孝文化祭及び北京朝鮮族老人協会成立10周年行事が開かれた [현혜경 2017]。今回のイベントは可喜安医療機器有限公司（後援会理事の一名が当該会社の社長を務める）の全面的な後援で開かれた [임영화 2017]。宴会場には「舞台」とフロアがあり、この日舞台は公演の場所としてだけでなく、孝文化祭の儀式的な主な開催場所でもあった。具体的には、平均年齢が82歳の老人協会の会員10名が「舞台」の座席に座り、フロアには老人協会のその他の会員やスタッフ、来客が集まった [임영화 2017、서창술 2017]（図4、5参照）。

孝文化祭は以下の流れで開催された。①北京市民族連誼会⁶⁾の関係者が祝辞を伝え、②後援会の関係者が祝辞とクンジョル⁷⁾をし、③老人協会の高齢者代表が発言し、④老人協会会長があいさつとクンジョルをし、⑤各界代表が壇上の高齢者にお酒を注ぎ、クンジョルをする流れであった。文化祭の言語は主に朝鮮語が使用され、たまに中国

語が使用された [서창술 2017]。以下、この流れをもう少し詳しく見ていく。

①北京市民族連誼会の連絡部部長は、「北京朝鮮族老年協会は設立以来、北京市民族連誼会の各種行事に積極的に参加し、首都の民族事業に貢献してきた」と述べ、「今日の行事は中華民族の優れた伝統である孝文化を広める意義深い行事であり、また、朝鮮族特有の孝文化を垣間見ることができそうで、とても楽しみにしている」と中国語で祝辞を述べた [김은화 2017]。②後援会の関係者については、まず、企業家協会名誉会長兼後援会会長が祝辞を伝え、壇上の高齢者にクンジョルを行った後、フロアの老人協会会員向けにもクンジョルを行った。次に、企業家協会の顧問である李成日氏が祝辞を伝えた。李氏の母親もこの文化祭にいて、氏は子女の代表として発言をしていた後、壇上とフロア向けに2回クンジョルを行った。③老人協会の高齢者代表として、壇上にいた10名の高齢者の内の1名が挨拶をした。80歳の代表者は現在、老人協会の楽団で太鼓を叩いている。④老人協会会長が来賓にあいさつを行った後、同じく壇上とフロア向けにクンジョルを2回行った。⑤北京朝鮮族の各団体の代表など数十名が壇上の高齢者にお酒を注ぎ、クンジョルをした。中には、北京正音ウリマル学校の学生10名もいて、壇上の高齢者向けにクンジョルをし、高齢者からお小遣いをもらった。

この行事について、人民網朝鮮語サイトでは、「北京正音ウリマル学校の子供たち10人もこの日のイベントに参加し、高齢者にクンジョルをすることで、都市で育った子どもたちが孝文化を体で学ぶことができ、これは私たちの伝統文化の継承において大きな意義がある」と書かれている。また、「昔からわが民族は老人を敬い、子どもを愛することを伝統的な美德とし、孝を人倫の最も優れた徳目とみなしてきた。都市化により多くの朝鮮族が大都市に移住し、新しい居住形態が形成された。これに伴い、伝統文化が次第に消えていく現状で、今回のイベントの開催は、多くの都市部の朝鮮族に私たちの文化を再認識させ、高齢者の生



図 4

出処：임영화 [2017]、김은화 [2017]



図 5

活に関心を持たせ、孝を実践する学びの場を提供した」とまとめている [임영화 2017]。

2023 年の端午節を数日控えた 6 月 18 日に、後援会、社会各界の寄付者、そして老人協会の会員が一堂に会し、「敬老・感謝・恩返し之夜」と題した敬老祝賀会を開催した。今回の行事を主催した後援会理事長は歓迎の挨拶で、「我が民族は古くから老人を尊敬し、子どもを愛する美風良俗を持っているが、我が民族のこのような敬老文化を社会に広く知らせ、この伝統を代々受け継いでいこうという趣旨で、今日、老人協会の会員と共にこの行事を開催することになった」と述べた。また、「今年 21 周年を迎える北京朝鮮族老人協会は、在北京朝鮮族老人たちの交流と親睦を図り、我が民族の文化、芸術、風俗習慣などを社会と大衆、さらには海外にまで広く知らせることに多くの貢献をしてきた」と話した。さらに、「現在、短期間に在北京朝鮮族老人に対する政府レベルの財政支援を引き出すのが難しい状況で、私たちの民族内部から先に支援の手を差し伸べるのが非常に必要な実情であり、事実上、コロナ禍以降景気が厳しくなり後援活動に困難があったが、(略) 多くの企業人たちの積極的な参加で、イベント前までに 100 万元（約 2100 万円）を集めることができ、今後、より多くの人々がこの後援活動に積極的に参加し、150 万元（約 3100 万円）の後援金目標を達成できることを願っている」と述べた。

老人協会からはこのイベントで後援会や各界の寄付者に感謝状を渡したほか、開幕式の公演など

を準備した [이동렬 2023]。

2019 年 1 月に、北京朝鮮族企業家協会の名誉会長であり、後援会の第 2 期会長は韓国大統領賞を受賞することになった [석화 2019]。そのニュースは全世界の朝鮮族社会にインターネットを通じて広がり、同年 3 月には在日本朝鮮族によって東京に招待され座談会を開催するなど、ネットワークがさらに広がり [배상봉 2019]、経済的・社会的影響力の強化が考えられる。

以上、後援会の敬老行事について見てきたが、後援会理事長はなぜ敬老行事が文化伝承に貢献することを強調したのだろうか（もしくは、そうせざるを得なかったのだろうか）。

これまでは後援会活動について紹介してきたが、朝鮮族高齢者の活動に対する朝鮮族社会の見方は一枚岩ではなく、批判の声もある。たとえば、「なぜ高齢者協会后援しなければならないのか」、「なぜその方々の子女たちは手を差し伸べないのか」、「家で孫の世話をすればいいのに、なぜ高齢者まで企業家協会などに手を差し伸べるのか」などがある [김홍화 2017]。このような背景もあり、後援会のメンバーも老人協会も高齢者の文化伝承面における貢献についてアピールをしているであろう。

すなわち、上記の批判の声には、「家庭が高齢者の扶養を全面的に、もしくはそのほとんどを担うこと」、「高齢者は社会活動をするというよりは家庭内で過ごすこと」などの考え方がベースにある。これらの考え方はこれまでの朝鮮族社会では実は

主流の考え方や社会的通念ともいえよう。しかし、少子高齢化する社会において、家庭からも国家からも高齢者への支援は難しくなっている。その結果として第三セクターである朝鮮族の団体が一部の高齢者への支援を担っている。そのような支援活動は非伝統的居住地域に移動した朝鮮族高齢者に舞踊を学ぶ・披露するなどの機会を提供し、それは体を動かすことで身体の健康を促進させるだけではなく、高齢者の社会的ネットワークの構築に寄与し、高齢者の孤独の問題に一つの解決策を提供している。さらに、「朝鮮族の文化伝承面」における役割についての自他認識は、高齢者の自己肯定感へとつながるであろう。

5. おわりに

ここでは北京朝鮮族コミュニティの福祉的機能を国内外社会的資源・経済的資源の相互依存モデルに照らして考察し、本研究をまとめる。北京朝鮮族コミュニティを見ると、後援会を中心とした経済的団体から多くの経済的資源が老人協会などの社会的団体に移動したことが確認できた。また、社会的団体の内部でも、経済的資源や社会的資源の流動が見られた。たとえば、同じく社会的団体に属する愛心女性ネットワークから老人協会への援助や、老人協会の会員が孝文化祭または朝鮮族の週末学校に訪問して伝統舞踊などを披露して文化伝承に繋げようとするなどがあげられる。一方で、経済的団体から社会的団体への慈善活動は、経済的団体の社会的・経済的影響力を強化させることも確認できた。

中国で農村から都市に移動した高齢者はナショナルな側面の援助が足りず、市場のサービスを利用するにも金銭的な問題が出てくる。家族においては、中国の少子高齢化の背景のもと、ちょうど一人っ子世代が老親の扶養と育児（二児三児の出産が提唱されている）を負担していく現在という時代背景があり、難しいことが考えられる。その中で、第三セクターとしての団体（上記の企業家

協会や後援会など）がこれらの欠如を補う役割を担うことになった。彼らはそれを民族文化の伝承の一つとして、また、道義として自らの行動を位置づけている。ただ上述のように、我々はその背後にある構造にも目を向けるべきであろう。

最後に、本研究の本来の目的ではなかったが、老人協会の活動から見えてきたものがあった。それは、老人協会の会員は決して受け身的な姿勢ではなく、積極的に自らの活動を主催したり、経済的団体に働きかけたり、さらには都市における文化伝承という役割を自ら担おうとする主体性であったので、今後の課題にしたい。また、今後老人協会や後援会のメンバー、北京に移住した朝鮮族の高齢者にインタビューをすることを通じて、朝鮮族高齢者は自身の活動をどのように捉えて意味づけているか、経済的な困難、家族との葛藤、社会の通念との戦いをどのように捉えているかなどについて考察していきたい。さらに、老人協会と北京市の政府や大学との関係やトランスナショナルなネットワークについては、考察が足りなかったため、こちらも今後の課題にしたい。

注

- 1) 中国朝鮮族は、主に19世紀以降に朝鮮半島から数次にわたって中国へ移住した朝鮮人およびその子孫で、現在では中国の少数民族の一員として中国国籍を有し、戸籍に「朝鮮族」と登録されている人々を指す[趙2016:14]。
- 2) 常住人口とは、ある地域に6ヶ月以上、実際に定期的に居住している人口と定義される。主に以下通りの3種類の人口が含まれる。第一に、当該地域に居住しており、戸籍が該当地域にある、または戸籍が未定の者。第二に、該当地域に居住していて、元の戸籍所在地から半年以上離れている者。第三に、戸籍が該当地域にあり、該当地域から離れ不在期間が半年未満の者、または海外で就労・就学している者。
- 3) 朝鮮族の伝統的居住地域とは、中国において、1978年以前に朝鮮族が多く居住しエスニック・コミュニティを形成していた地域のこと、主に黒竜江省、吉林省、遼寧省と内モンゴル自治区における、朝鮮族が集住していた自治州、市、区、県、自治県、鎮、民族郷、郷、村を指す。朝鮮族の非伝統的居住地域とは、1978年以前には朝鮮族の居住人

口も少なく朝鮮族コミュニティはなかったが、1978年以後には朝鮮族人口が増えて徐々に朝鮮族コミュニティが形成されるようになった地域を指す〔南 2018:9-10〕。本稿の研究対象地域となっている北京市は非伝統的居住地域に含まれる。

- 4) このネットワークは2007年5月、朝鮮族女性たちが結成した朝鮮族公益団体である。李リョン会長は北京師範大学舞踊学科教授出身で、中国で韓国舞踊の第一人者として知られている。姉の李ラン元会長(翻訳家)が北京愛心創設時から関わり、李リョン会長は2018年から会長を務めている。
- 5) 人民網は、中国共産党中央委員会の機関紙である「人民日報」のインターネット版サイトである。
- 6) 北京市民族連誼会は、1991年8月31日、北京市人民代表大会の一部の代議員および北京市政治協商會議の委員の提案により、同市党委員会常務委員会の承認を得て、社団法人として設立され、北京市社会团体管理局に登録された。
- 7) クンジョル(큰 절)はひざまずいて頭を深々と下げるスタイルのお辞儀で、最も丁寧なお辞儀である。形は土下座に似ているが、謝罪の気持ちだけでなく、相手を敬う意思の表れでもある。そのため、先祖の命日に祭壇の前でなされる先祖崇拜の伝統儀式チェサなどで「クンジョル」を行ったり、還暦や70歳の誕生日会などで高齢者の長寿を願って行ったりする。

参考文献

日本語

権香淑、金雪、呉泰成(2020)「日本における朝鮮族コミュニティの変遷と定住化——2015年調査を中心に」『中国朝鮮族の移動と東アジア』彩流社, pp.196-240.

趙貴花(2016)『移動する人びとの教育と言語——中国朝鮮族に関するエスノグラフィー』三元社.

南玉瓊(2018)『第2のコリアン・ディアスポラ——中国朝鮮族の国内移動とコミュニティ形成』創土社.
ビクター・A. ペストフ(藤田暁男、石塚秀雄、的場信樹、川口清史、北島健一)(2000)『福祉社会と市民民主主義——協同組合と社会的企業の役割』日本経済評論社

李蓮花・張繼元(2022)「中国の少子化対策——日韓との比較を踏まえて——」『社会保障研究』, Vol.6, No.4, pp.439-453.

林梅(2020)「トランスナショナルな移動と家族観の変容」『朝鮮族研究学会誌』No.10, pp.65-84.

中国語

北京市第七次全国人口普查領導小組弁公室、北京市統計局編(2020)『北京市人口普查年鑑』中国統計出

版社

北京市統計局、国家統計局北京調査総隊編(2022)『北京区域統計年鑑 2022』中国統計出版社、北京数通電子出版社

北京市老齡工作委員會弁公室、北京市老齡協會、北京師範大学中国公益研究院(2021)『北京市老齡事業發展報告』北京市老齡工作委員會.

蘭小歆(2021)『置身事内』上海人民出版社.

参考 URL

韓国語

김동과「민족기업인들 노인공경에 후원의 손길」『黑竜江新聞』2015年8月27日

<https://news.moyiza.kr/354312/%EB%AF%BC%EC%A1%B1%EA%B8%B0%EC%97%85%EC%9D%B8%EB%93%A4%20%EB%85%B8%EC%9D%B8%EA%B3%B5%EA%B2%BD%EC%97%90%20%ED%9B%84%EC%9B%90%EC%9D%98%20%EC%86%90%EA%B8%B8> (2023年10月2日アクセス)

김수철「북경시 조선족로년협회의 선출군」『ZOGLO』2006年8月9日

http://www.zoglo.net/board/read/m_renwu/66191/0/3110/1 (2023年9月28日アクセス)

김웅「베이징 조선족노인들, "기업인과 애심인사들 고맙습니다!"」『CRI online』2017年4月11日

<https://korean.cri.cn/chinanews/20170411/4e49fdb2-998f-4e70-a3bc-3806d03edc7e.html> (2023年10月2日アクセス)

김은화「"지금 하는 일 130 살까지 할겁니다" ... 북경조선족효도문화제 감동이었습니다」『黑竜江新聞』2017年9月12日

<https://onl.sc/YcrrRst> (2023年10月1日アクセス)

김홍화「경로효행은 조선족지성인과 기업인의 도의적인 의무이다」『ZOGLO』2017年1月16日

http://zoglo.net/board/read/m_renwu/303566/0/550/1 (2023年10月1日アクセス)

박복선「베이징조선족노인협회, 새해맞이 행사 마련」『黑竜江新聞』2013年2月6日

<http://news.moyiza.kr/116244> (2023年12月3日アクセス)

박철원「중국 조선족 노인들의 성회」『CRI online』2019年9月12日

<https://korean.cri.cn/20190912/dc6d3a26-6db3-4813-4029-86c5c61d4ebf.html> (2023年10月2日アクセス)

배상봉「김의진씨 (조선족기업가) 동경좌담회 필기」『SHIMTO Media』2019年3月25日

<https://shimto.net/jinyizhen-tokyo-seminar-20190321/> (2023年12月3日アクセス)

서창술「[TV] 베이징시 조선족효도문화축제」『新華

網』2017年9月15日
http://kr.xinhuanet.com/2017-09/15/c_136611330.htm
 (2023年10月2日アクセス)
 석화「한국 대통령상 받은 조선족 기업가 김의진」『우리문화신문』2019年1月27日
<https://koya-culture.com/mobile/article.html?no=116738> (2023年12月3日アクセス)
 유경봉「북경순의정음우리말학교, 봄학기 수료식 성황리에」『吉林新聞』2023年7月3日
http://www.jlcnwb.com.cn/edu/content/2023-07/03/content_318398.htm (2023年12月3日アクセス)
 이나연「베이징서 제16회 조선족운동회 겸 제3회 커시아컵 민속축제 개최」『在外同胞新聞』2018年6月18日
<http://www.dongponews.net/news/articleView.html?idxno=37147> (2023年12月3日アクセス)
 이동렬「中 100 만 위안의 북경조선족로인협회 후원금 모 집 ... ‘ 경로 · 감사 · 답례 의 밤 ’ 행사 개최」『DBANEWS』2023年6月21日
<http://www.dbanews.com/news/articleView.html?idxno=45657> (2023年10月1日アクセス)
 임영화「수도에서도 꽃 피어나는 우리의 전통문화—효」『人民網』2017年9月11日
<http://korean.people.com.cn/78529/15681176.html>

(2023年10月2日アクセス)
 임지연「늘어가는 중국, 인구 1/4 이 노령 인구…베이징도 고령 문제 못 피했다」『now news』2022年9月4日
<https://nownews.seoul.co.kr/news/newsView.php?id=20220904601009> (2023年10月1日アクセス)
 현혜경「북경조선족노인협회, 중국한국인회에 감사패 전해」『world Korean』2017年9月14日
<https://www.worldkorean.net/news/articleView.html?idxno=26150> (2023年10月1日アクセス)

中国語

李希如、李睿「常住人口和流动人口如何区分」『国家统计局』2023年1月1日 http://www.stats.gov.cn/zs/tjws/tjbz/202301/t20230101_1903796.html (2023年10月1日アクセス)
 李子君「外地人在京可领养老金 需满足三条件」『人民網』2013年3月1日 <http://finance.people.com.cn/insurance/n/2013/0301/c59941-20642090.html> (2023年9月27日アクセス)
 北京市民政局ホームページ
<https://mzj.beijing.gov.cn/col/col7288/index.html> (2023年12月2日アクセス)

資料紹介

サハリン朝鮮人とソヴィエト社会(1945 - 1991 年) (上)

ユリア・ディン著 宋恵媛 (大阪公立大学)、天野尚樹 (山形大学) 訳

・ キーワード

Sakhalin Koreans サハリン朝鮮人

Korean Diaspora コリアンディアスポラ

Soviet Society ソヴィエト社会

Post-War Soviet 戦後ソヴィエト

* () は原著者、[] は訳者による補足説明

1. サハリン朝鮮人ディアスポラの政治、 経済的成長

1945 年から 1991 年までは、サハリン朝鮮人ディアスポラがソヴィエトの規範、法律、文化に適応する期間だった。結果的には朝鮮人はソヴィエト社会にうまく統合されたが、それには半世紀かかった。それは次の三つの要因によるものだ。

一番目の要因は、サハリン朝鮮人が長い間、歴史的故郷への帰還を期待していたという点である。超大国であるソ連の政策はかれらの帰還および大韓民国（以下、韓国）とのあらゆる接触において障害となったが、それでもサハリン朝鮮人たちは帰還運動を展開した。当局の過酷な抑圧にもかかわらず運動が弱まることはなかった。そしてそれは、朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）に送還された悲劇的事件を 1977 年に引き起こした。

二番目の要因はソヴィエトの少数民族政策である。この政策は民族文化の保護を支援するものだった。そのためソ連当局は、戦後初期には朝鮮

人学校と図書館を設立し、朝鮮語の新聞、ラジオ、演劇を開始し、朝鮮語図書を出版した¹⁾。だがこのような政策によって閉鎖的な朝鮮人コミュニティが形成されることになり、そのメンバーたちが朝鮮語や朝鮮文化を維持すればするほど、ロシア語やロシア文化の習得は困難になった。サハリンでは、ロシア語を知らなければソヴィエト高等教育機関で最高の教育を受けられないし、幅広い経済活動も不可能だった。1963 年以後になってようやく、青年たちは農業や未熟練労働でなく、専門的、学術的、あるいは政治的経歴を積むことができるようになった。朝鮮人のソヴィエト社会への統合が早まったのは、ソ連当局が朝鮮人学校を閉鎖し（全てではない）多くの朝鮮文化団体を縮小させた後のことである。

三つ目の要因は、1948 年に形成された二つの朝



写真 1. 5 月祭での朝鮮人の若者たちの隊列、
ホルムスク市 1959 年

出所：ГИАСО. Ф. 1252. Оп. 2. Ед. хр. 43.

鮮の存在である。南北間の衝突や両国とソ連の関係も、ソ連のサハリン朝鮮人政策に影響を与えた。またサハリン朝鮮人自身も、北朝鮮とはソ連当局の許可を得て公式的に、韓国とは日本を介した手紙のやりとりで秘密裏に、それぞれ積極的な相互関係を築いていた。ここで言及しておきたいのは、サハリン朝鮮人の脳裏には南朝鮮が、自分たちの歴史的故郷としてしかと存在しており、それがかれらの行動と決定に影響を与えていたことである。

この三番目の要因をより詳しく探求してみたい。ロシアの歴史学界では、二つの朝鮮とソ連邦との関係を四段階に分けている。

韓国が理想的に敵対する陣営に属しているという事実は、ソ韓関係に重要な影響を与えた。1945-1970年の第一段階では、1950-1953年の朝鮮戦争をめぐるもっとも否定的な関係以外には、両国間の関係はまったく存在しなかった。1971-1983年の第二段階では、非公式的でごく制限された接触とスポーツ交流があった。第三段階は1983年9月1日の大韓航空ボーイング747機墜落事件から1986年までである²⁾。この段階の特徴は、ソ連と韓国間の全ての接触がふたたび中断されたことである。最後の第四段階は両国関係が徐々に温まっていた1987年からはじまり、結果的に1990年の公式の外交関係樹立と経済的、政治的関係の始まりへとつながった。この時期区分からみられるように、1987-1991年の期間を除けばソ連と韓国の間は実質的に外交的対話が断絶された状態だった。

ソ連と北朝鮮との関係はずっと積極的なものだったが、困難がついてまわった。第一段階である1945-1956年のあいだソ連は、政治経済機構の再建、場合によっては新たな創設を支援し、朝鮮半島北部を完全に支配した。1957-1970年の第二段階では、北朝鮮指導部はソ連邦共産党第20回党大会の決定とスターリン批判に悩まされ、ソ連邦と距離をおいた。1971-1988年の第三段階では、北朝鮮指導部が対外政策で主体思想（自身の力に頼ること）を具現し、ソヴィエト指導部はこれを批判的にみたため北・ソ連関係は冷却した。1989-1991年の第四段階では、ソ連邦と韓国の公式的な接触

により北朝鮮は親中国という対外政策路線を選択した³⁾。

このような状況にもかかわらず、北朝鮮-ソ連間の外交と政治的関係は、かなりの長期間にわたって北朝鮮指導部がサハリン朝鮮人ディアスポラに影響を及ぼすものとなった。1950年には沿海州のナホトカに北朝鮮総領事館が開設された。北朝鮮の外交官たちは積極的な扇動により共和国国籍を取得して北朝鮮に永久移住するよう促し、サハリン朝鮮人にその生活の素晴らしさを宣伝した。

かれらは目標を達成するため積極的な理念的論法を使った。とりわけ、近いうちに朝鮮が統一されるという噂をどんどん流し、特に制約なく北朝鮮の旅券を発給してやり、青年たちには無償の最高の教育を約束した。一部のサハリン朝鮮人はこのような宣伝を信じ、家族とともにサハリンを後にした。ある証言者はこれについて次のように回想している。

ウグレゴルスクに私の舅の兄弟が住んでいました。子どもが十一人いました。かれらは絶対に北朝鮮に行く決め、北朝鮮の公民証を取得しました。そう、60年代には北朝鮮はサハリン朝鮮人全員を移住させたがっていました。しかし、もちろん多くの人々は行きませんでした。私の母もそのときこう言いました。「私の故郷は韓国なのに、北朝鮮に行けというの？」テリノフスクに大陸〔中央アジア〕から来た先生が一人いたでしょう？その方はソ連の身分証を持っていて、当然ですが自分たちの側につくように扇動しはじめました。舅は私の夫に聞きました。「お前は韓国に行きたいのか？」と。夫は「私が何か韓国に残してきたものなどありますか。私は学校で勉強したし、友達も全員ここにいるのに」。

その後、夫はソ連軍に入隊しました。舅は子どもを残して北に行けないでしょう？結局、ソ連国籍を取得しました。ウグレゴルスクで、私の夫と舅の間でそのような葛藤が

あったということを舅の兄が知ったとき、その方は声を荒らげて机を叩いて〔……〕「お前はなぜ私と相談しなかったんだ。私はお前より年上じゃないか！」と言いました。その方は1961年に家族と北へ行きました。自分の息子、つまり私の夫のいとこは北朝鮮に行きたがらなかったのです。彼は母からお金を盗み、誰かからソ連の身分証を入手して、ソ連本土に逃げてしまいました。そこで半年ほど時間を過ごせば、その間に父が行ってしまっているだろうと考えたんでしょう。でも、父親は彼が戻ってくるまで待っていました。ほんとうに気の荒い人で。息子をがっしりつかまえて家族全員で出ていきました。船いっぱい荷物をつんでいきました。ソフホーズ〔国营農場〕で働いていてとても裕福だったのです。ですが北朝鮮に行った後、本人は死に、生き延びるために荷物は全て処分したと聞きました。結局、かれらはみな死んでしまい、三人だけ残りました。極貧で、人々は恐怖のなかで生きたといいます⁴⁾。

ラーサ・ザブロフスカヤは当時の朝鮮民主主義人民共和国のサハリン朝鮮人政策を次のように描写する。「国家の樹立以後、北朝鮮領事たちはサハリン朝鮮人コミュニティをしばしば訪問するようになり、北朝鮮の国籍を取って北朝鮮に行こうと人々を扇動した。これに応じて1958-1959年には6,346人が国籍を取得し、そのうち5,096人が北朝鮮に向かった」⁵⁾。ザブロフスカヤはこの資料の出所を明らかにしていない。かれらは、〔戦後に来島した〕北朝鮮労働者と一緒にサハリンを去り朝鮮に渡ったので、そのうち樺太時代からの朝鮮人の内訳を正確に算出することは現時点では不可能と思われる。

このような北朝鮮の努力もむなしく、サハリン朝鮮人の北朝鮮に対する興味はすぐに萎えはじめた。外交官たちが参加するよう迫った集会やサークルを通して行われた積極的な扇動と宣伝、領事館の職員たちが用いたやり方は人々を幻滅させ

た。かれらは催しや会合、プライベートな空間での秘密の接触などを通じて、北朝鮮当局が関心を持つ無国籍者の朝鮮人の数についての情報などを収集して本国に伝達した。また、北朝鮮での社会主義の成果を執拗に宣伝してはっきりとした目的もなしに定期的に募金をした。かれらは大規模な社会政治行事に参加しないよう言い、裕福になったサハリン朝鮮人が「ブルジョア化」して愛国心を喪失したと非難した⁶⁾。

さまざまな集会や会合では、ソ連企業が導入している最新の生産機器に関する情報を北朝鮮に提供せよとしつこく迫られた。このような要求のせいでサハリン朝鮮人たちは、そのような行動をよく思うはずがなかった当局の「その筋」〔KGBのこと〕から圧力を受けるようになった。サハリン朝鮮人住民全てが移住できるような特別朝鮮人区域を設立しようと北朝鮮は提案したが、まさにそれが危機を引き起こした。北朝鮮はこの「朝鮮人ゲッター」を利用してサハリン朝鮮人を北朝鮮に迅速に帰還させようとしたのである。この計画は、第二次世界大戦当時、ナチスが設置したユダヤ人ゲッターを連想させる何やら怪しげなものだった。ソヴィエト当局はこの計画に同意しなかったが、サハリン朝鮮人は恐怖に慄えた⁷⁾。

こればかりでなく、かれらのそこでの生活がきわめて不幸なものだったことは、さまざまな経路から伝わった消息が裏づけていた。ある証言者は以下のように記憶している。

父の友人が北朝鮮に行きました。二人は出発前によく口論をしました。父は自分が聞いたそのひどい事情について話し、彼に行かないよう警告しました。その後、その友だちが父に手紙を送ったのですが、「書信の検閲があって直接的には話せないが、おまえが私に言ったことは全て事実だった。もっと言うなら、それよりもひどかった」⁸⁾。

北朝鮮に行った人は多くなく、ごく一部だけでした。私はそこで2年暮らして戻ってき

ました。戻れたのは運が良かったのです。なかには捕まって、放してもらえない人たちもいました。国境を越えようとした人たちもい



写真2 ユジノサハリンスク市にある
第三中学校の歴史教師
出所：『新高麗新聞』所蔵。Iu. A. ボルヒン撮影。

ました。国境はボシエト、ザルビノ方面にあって、水量の多い大きな川です⁹⁾。ソ連へ戻ろうと冬に川を渡ると、北朝鮮の方から銃撃されました。ソ連の側からも狙撃されたはずだ、そんな風に聞いています。それでも一部の人はサハリンに戻ることができました¹⁰⁾。

数々のこうした出来事のせいで、サハリン朝鮮人の間でも 1960 年代末から 1970 年代初めまでに北朝鮮に対する態度は変化した。北朝鮮国籍の取得と北朝鮮への渡航にはより慎重に用心するようになった。

北朝鮮の政策に幻滅を感じたとしても、現実的には韓国についての情報を全く持っていなかったサハリン朝鮮人たちの多くは、ソヴィエト社会での生活に適応しなければならないという事実を悟るようになった。若い世代のサハリン社会への統合、ソヴィエトの国家政策、そして長い間の故郷



写真3 ソ連企業で働くサハリン朝鮮人、1960～1970年代
出所：『新高麗新聞』所蔵。Iu. A. ボルヒン撮影。

表 1. 1959 ～ 1989 年人口調査資料にみるサハリン州の民族構成

民族構成	1959		1970		1979		1989	
	人	%	人	%	人	%	人	%
ロシア人	504,665	77.71	495,18	80.43	540,57	81.68	579,887	81.65
ウクライナ人	48,073	7.4	38,611	6.27	40,600	6.13	46,216	6.51
朝鮮人	42,337	6.52	35,396	5.75	34,978	5.29	35,191	4.95
その他の民族	54,330	8.37	46,465	7.55	45,630	6.9	48,948	6.89
総住民数	649,405	100	615,652	100	661,778	100	710,242	100

出所：Сахалинская область на рубеже XXI в. Статистический ежегодник. Южно-Сахалинск: Госкомстат России, Сахалинский областной комитет государственной статистики, 2001.

への帰還可能性についての期待が失望に変わってしまうような歴史的状況などが、そのような悟りに至らせる要因となった。

朝鮮人のほとんどは人夫や補助労働者といった非熟練労働に従事しました。たとえば私の父は伐木工として仕事をされました。学歴のなかった父に他の仕事なんてできますか。月給は少ないし、子どもたちは多いし、食べさせないとならないし。だから一軒家を買って菜園を始めました¹¹⁾。

このように、戦後まもなくの時期にはサハリンでの生活に適応することは簡単なことではなかった。朝鮮人はソヴィエトの教育を受けることができず（高等教育は全く受けられなかった）、ロシア語もよく分からないまま慣れないソヴィエトの社会規範にやっとのことで適応しながら、ソヴィエト産業体での低熟練労働やサハリンの厳しい気候条件の中で農業を行う運命におかれた。

1970年代にはサハリン朝鮮人の経済的状況が全般的に向上した。個人で育てた作物の売買が非公式に許可され、勤勉な朝鮮人はロシア人住民よりも高い生活水準に達した者も多かった¹²⁾。サハリン朝鮮人は物質的な豊かさ（朝鮮人学校の廃校にともなう）教育水準の向上により、徐々にソヴィエト社会に統合されるようになったのである。

国立サハリン州歴史文書館（ГИАСО）には、1988年にソ連邦科学アカデミーがサハリン朝鮮人を対

象に行った社会調査の結果が所蔵されている¹³⁾。インタビューが行なわれたのは、ソ連の自由化とグラスノスチ〔情報公開〕とペレストロイカの時期だった。国家による検閲についての恐怖がすでに相当に弱まっていた時期だったため、その調査の結果はある程度客観的なものだと考えてよいと思われる。

この研究で明らかになったことは、サハリン朝鮮人が朝鮮に関するものなら何であれ相応の関心を持ち、朝鮮文化と朝鮮語がサハリンから徐々に消えていくことを心配しているにもかかわらず、この時までにもうかれらはサハリンの定住者になっていたということである。大部分のインタビューは、自分の故郷はサハリンでありソ連だと答えた。技術職の50パーセント、学生の90パーセントがロシア語を母語だと答えた。インタビューの圧倒的多数が他民族出身の友人を持っており、朝鮮人のうち76パーセントが友達関係において相手の出身民族は問わないと答えた。同一民族間の結婚についての朝鮮人の伝統的な選好傾向が崩壊した過程がみられる。青年の85%は結婚において民族は関係ないと答えた。全般的にみると、当時の朝鮮人たちがサハリンでの生活条件に完全に適応したことを社会学的な研究結果は証明しているといえる。

1989年頃までにサハリン州の朝鮮人定住者数はある程度固定した。上の表1にみられるように、ソヴィエト期のサハリン朝鮮人の数はサハリン州全体の住民の約5～6%を占めた。この比率は現在

でも変わっていない。

ソ連でのペレストロイカ以後、韓国を含む資本主義国家との国際関係において「和解」の時代が1985年に始まった。サハリン朝鮮人は韓国にいる親戚に会えるようになった。1990年に、ソ連と韓国の国交が樹立されたことにより公式の接触が拡大し、歴史的故郷を直接訪問することも可能になった。1991年にソ連が解体し、二つの敵対的陣営に分かれていた世界が消え、サハリン朝鮮人は自らの国籍と民族アイデンティティという問題に再び悩むようになった。

2. ソヴィエト期サハリン朝鮮人の社会組織

社会組織——学校教育システムやマスメディアなど——はディアスポラの社会適応において重要な役割を果たす。人は学校、教育機関、ラジオ、新聞、図書などを通じて自分の住む国を理解し、その国の慣習、行動規範、法に対して忠実になるのである。移住者のうちの圧倒的多数は、ホスト社会の支配的言語を習得しつつその社会に適応しはじめる。たとえば英語学校は、農場で働くためハワイに移住した日本人の子どもたちの多くが農場を出て、米国社会の中で別の地位を見つける可能性を提供した。反対に、日本語学校に通った子どもたちの多くの就業可能性はごく限られたものになった¹⁴⁾。

日常的な感覚において言語は、民族文化のもっとも重要な構成要素だと意識されることが多い。異民族に囲まれて暮らし、異民族の言語に乗り換えた民族集団で、民族意識を長く維持できている民族はごく稀なケースにすぎない（たとえば、サカルトヴェロ（ジョージア）のアルメニア人、日本の朝鮮人、ポーランドのタタール人、トルコのチェルケス人など）¹⁵⁾。

1905～1945年の日本領樺太では朝鮮人のための社会組織は実質的に存在しなかった。朝鮮人の移住は労働徴用と動員という性格を持っていたため、滞在は一時的なものと考えられ、長期的な社

会組織が必要だとは想定されなかった。1937年に始まる朝鮮人の日本化政策も社会組織の設立を妨げた。日中戦争¹⁶⁾勃発後、国家機関の中での朝鮮語使用禁止令が制定され、1938年からは学校での使用も禁止された。1940年には創氏改名がはじまり、二大朝鮮語紙だった『朝鮮日報』と『東亜日報』が廃刊された¹⁷⁾。このような条件下では、朝鮮人住民のための社会組織を樺太に創設するのは困難で、樺太庁による直接の許可がなければ不可能だった。

樺太庁の政策は過酷だった。樺太には朝鮮人学校は一つもなかった。朝鮮人の子どもたちは日本の学校に進学せねばならず、日本の子どもとともに授業を受けた。学校での授業は日本語のみで行われ、朝鮮人教師はいなかった（ただ一人の例外は、恵須取工業学校の数学教師だった）。樺太庁長官の命令により、豊原市の樺太師範学校には朝鮮人の入学は許可されなかった。町村役場の学務担当に朝鮮人職員は一人もいなかった¹⁸⁾。朝鮮人によるマスメディアも存在しなかった。

公的な承認を得た樺太唯一の朝鮮人社会組織は、政治団体の「協和会」だった。会員は多くなく、主に朝鮮人と中国人が加入した。協和会の活動は日本当局によって統制・規制され、帝国の強化に奉仕した。「協和会」は、「大東亜共栄圏」の建設理念を積極的に宣伝し、社会秩序の維持にも協力した。とくに秩序維持は、日本の憲兵と警察との緊密な連携によって行われた。「協和会」を統轄したのは樺太庁長官であり日本の降伏の日まで存続した¹⁹⁾。

南サハリンとクリル諸島にソヴィエト政権が樹立された後、新たな政治、国家体制は旧樺太の朝鮮人の生活にその方針を強要するようになった。

これを理解するためには、ソヴィエトの民族政策を詳しくみる必要がある。1917年の十月革命以後、少数民族との相互関係は新生ソヴィエト国家にとって最重要事案の一つだった。「民族自決権」²⁰⁾は、権力の座についたボリシェヴィキが掲げた〔社会主義革命と並ぶ〕二つのスローガンのうちの一つだった。このスローガンは、ボリシェ

表 2. サハリン州朝鮮人学校ネットワークの発展

年	1945	1946	1947	1949	1950	1955	1958	1963
初等学校	27	28	28	55	57	32	17	10
短期中学校	-	8	11	13	15	22	13	11
中学校	-	-	-	-	-	-	11	11
総学校数	27	36	39	68	72	54	41	32
総学生数	2,300	3,000	3,137	4,692	5,308	5,950	7,214	7,239

出所: Костанов, Подлубная. Корейские школы на Сахалине. С. 8.

まで運営された。

1945-1946 年には 7 学年制の朝鮮人学校が以下の都市に設立された。本斗（ネヴェリスク）に 1 校（学生数 151 人）²³⁾、豊原（ユジノサハリンスク）に 1 校（年度初めの学生数 183 人、年度末に 196 人）、落合（ドーリンスク）に 2 校（年度初め 390 人、年度末 280 人）、知取（マカロフ）に 2 校（年度初め 465 人、年度末 376 人、次学年に 348 人進学、28 人留年）²⁴⁾。敷香（ポロナイスク）に 4 校（年度初め 56 人、年度末 104 人）²⁵⁾。レソゴルスク地区には朝鮮人学校が 4 校あり、年度初めに 296 人、年度末には 288 人が在籍した²⁶⁾。初期にはこれらの学校は日本の学制にしたがって運営された。

1948-1949 年に朝鮮人初等学校は 62 校、7 年制学校は 12 校あった²⁷⁾。以後、朝鮮人学校は拡張、発展をつづけ、1950 年には最大 87 校（初等学校 50 校、7 年制学校 37 校）、学生数は 7000 人になった²⁸⁾。

コスタノフとポドルブナヤは、朝鮮人学校の数と生徒数に関して次のような資料（表 12）を引用している。

朝鮮人学校の教育体系は 1947 年 1 月から日本式からソヴィエト式に変わりはじめた。ロシア語教育が 1-3 年生で週あたり 12 時間、7-8 年生で毎日 2、3 時間ずつ行われた。依然として学校は不足しており、110 人の子どもたちが教育の機会を奪われた。授業は何部かに分かれて行われた。学業成就度が 80% に達しなかったため 7-8 年生全員が留年し、6 人中 1 人は学業を放棄して学校に通わな

かった²⁹⁾。

最初の頃は、過去に日本の学校で教育を受けた、熟練度が低くソヴィエトの教育システムに慣れていなかった人々が教師に任命された。これらの教師の多くを交代し、朝鮮人学校のネットワークを拡大するため、ソ連共産党州委員会はウズベキスタンとカザフスタンからソヴィエト高麗人コリョサラムを招聘した³⁰⁾。朝鮮人学校では必修の教科書と教師用参考書が不足しており、またかつて日本学校で使われていた古い建物に配置されるなど、多くの問題があった³¹⁾。

1958 年、文部省はサハリン州朝鮮人学校でのロシア語授業の実施状況を点検した。その結果、教科書と教師用参考書がひどく不足しており、教育プログラムも充分に開発されていなかったことが明らかになった³²⁾。

サハリンの行政当局は、教科書、熟練した教師、適当な建物の不足という喫緊の課題に加え、思想的・政治的に教育をどう制御するかということにも深刻に頭を悩ませていた。学校は子どもたちに知識を提供するのはもちろん、かれらを価値あるソヴィエト的人間に変え、その当時のソ連で公式に認められた価値観と認識を教え込まねばならないと考えられていた。教育のイデオロギー的内容に特別な注意を払ったのは党機関だった。1952 年、ソ連共産党中央委員会書記ゲオルギー・マレンコフに宛ててサハリン州党委員会は、朝鮮人学校の督学官増員を要請した。その措置の必要性は、「必要な教育的・政治的訓練を受けていない教師が大量に」存在するからであると説明された³³⁾。

多くの困難にもかかわらず、朝鮮人学校はサハリン朝鮮人たちの啓蒙とソヴィエト社会への適応に重要な役割を果たした。州人民教育部は1962年、サハリン州朝鮮人学校での教育をロシア語で行うという提案書をロシア共和国文部省に提出した。同省は現地で解決せよと勧告した。サハリン州執行委員会の1963年5月13日付決定No.169により、朝鮮人中学校はソヴィエトで一般的な8年制学校に再組織された。朝鮮人8年制学校と初等学校は全てロシア語で教育を行った。2校あった朝鮮人青年労働者夜間学校もロシア人学校に統合された³⁴⁾。

1963年の朝鮮人学校廃校の原因は、教師の資格不足、教科書と教師用参考書と朝鮮語教材の不足、朝鮮人学校を卒業してもソヴィエト高等教育機関に進学ができなかったこと、ロシア語が未熟なため高級、中級の特殊教育が履修できなかったことなどだった³⁵⁾。

これに関連して、ある証言者はつぎのように回想する。

私は教師でしたが、1963年の学校廃校に100%賛成しました〔.....〕学校を終えた学生たちが大学に進学することができなかったからです。ロシア語をまともに駆使できず、試験で大目に見てやっても、学生たちはまともに書けず、話しことばで作文を書きました。結局、進学したのはたったの5%でした。朝鮮人学校が閉校されて70年代に入ってから、どれだけ大勢が進学したでしょうか！もし朝鮮人学校が残っていたら、こんな結果にはならなかったでしょう³⁶⁾。

朝鮮人学校を卒業しても、よい就職先を得たり大学に進学したりすることはできませんでした。だからその後、多くの人々が北朝鮮に行ったのです³⁷⁾。

このような状況は、ディアスポラにとってはごく典型的なものだった。たとえば、1920-1921年の

セルブ＝クロアート＝スロヴェーン王国³⁸⁾とチェコスロヴァキアでも同様の過程が発生した。両国には、ロシアでの内戦終結後に大量のロシア人亡命者が流入したのである。両国政府は、難民社会の整備に多様な支援をするために少なからぬ予算を配分した。士官学校、ギムナジウム、(ロシア南部から撤収して新しい場所で運営を続けた)女性学校の他にも、ロシア人学校が設立された。政府委員会はこれらの学校に実質的に完全な自治権を付与した。この教育機関内部での生活は、帝政期ロシアの教育機関に特徴的な原則にしたがって行われた。それぞれの学校では民族的特性、ロシア人の慣習や伝統を維持していた。だが1930年代初めになると、移住者たちの子どもの中で現地の学校に進学するケースがより多くなった。これは口

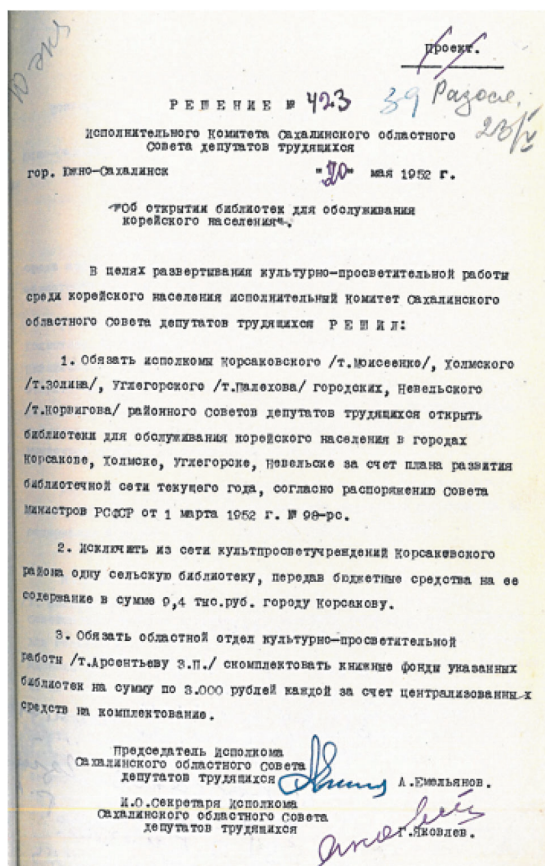


写真6. 朝鮮人図書館開館に関するサハリン州党委員会の1952年5月20日付の決議No.123
出所：ГИАССО. Ф. 53. Оп. 25. Д. 478. Л. 39.



写真 7. 朝鮮人巡回劇団による演劇「明日はわれわれのものだ」の一場面、1950 年代

出所：ГИАССО. Ф. Фотодокументы. Оп. 1. Ед. хр. 43

シア人移住者たちの状況の変化、国家による補助の縮小、そしてもっとも重要なものとして子どもたちが外国という環境でよりうまく適応してほしいという父母の願いなどによるものだった³⁹⁾。これは 1960 年代のサハリンでの状況と類似していた。

ソヴィエト行政当局は、朝鮮人成人の識字教育にも少なからぬ努力を傾けた。1958 年のサハリン州住民の識字率調査では、合計 6,016 人が非識字で、そのうち朝鮮人が 1,469 人を占めた。朝鮮人の非識字者のうち約 70% が女性だった。また、5,147 人が非識字に近く、そのうち朝鮮人は 573 人を占めた⁴⁰⁾。

非識字者の教育のために教師、党、コムソモール活動家 960 人以上が動員された。朝鮮人の教育するために特別な教材が朝鮮語で作成されもした⁴¹⁾。非識字者とそれに近い人々のうち 6,538 人がこのとき学んだ。文書館資料によると、ホルムスク市、ルイブノフスク地区、トマリ地区、レソゴルスク地区、シロコパド地区の非識字者のほぼ全員が読み書きを習得した。教育を受けるよう説得する作業が大規模に進められたが、330 人が健康、視力薄弱、聴力などの身体的理由から教育を受けることを拒否した⁴²⁾。

朝鮮人たちの余暇活動も、ソヴィエト行政部の民族政策の重要な要素の一つだった。1947 年には、州フィルハーモニー付属朝鮮人歌舞団と

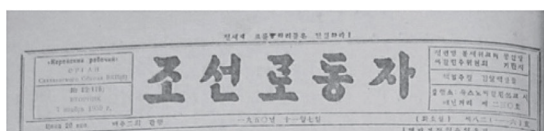


写真 8. 1950、1966、1991 年にサハリンで
発刊された朝鮮人新聞の名称

演劇班が創設された。1948 年 5 月、サハリン州執行委員会文化部はこれら 2 つの組織をもとに、朝鮮人巡回劇団創設の決議を採択した。1949 年 11 月には、ユジノサハリンスク市のハバロフスク通りとクリューコフ通りの交差点にあった旧日本映画館の建物が巡回劇団に譲渡された⁴³⁾。検閲機関によって厳格な検閲を受けていた劇場の公演目録には、朝鮮古典文学作品とソヴィエト作家の脚本が組み込まれた⁴⁴⁾。

この時期、サハリン朝鮮人のための民族劇団が創設され、運営されたという事実自体が注目すべきことである。サハリン朝鮮人よりも何倍も人数が多かったウズベキスタン共和国内でさえ、その当時民族劇団は存在しなかった⁴⁵⁾。ソヴィエトの指導者たちは当時、ウズベキスタンとカザフスタンに居住する朝鮮人は、民族文化の最高段階を超えて、超民族体「ソヴィエト人民」への同化に成功したと考えていた。

1958 年には、サハリン州執行委員会文化部も「劇団が毎月演目を更新できる状況にないため、相当な休館期間が必要」なことを認めざるをえなかった⁴⁶⁾。活動施設も居住域も増えるどころかむしろ、(主に北朝鮮出身の労働契約でサハリンに入島した)朝鮮人の出国にともない減少していた。朝鮮人劇団が出演したのは 16 箇所あったが、上演期間は 1 年に 1 か月を少し越えるだけだった⁴⁷⁾。劇

団を観に来るのは朝鮮人ではなく主にロシア人あり、また赤字の額も莫大だったことを考慮して、劇団指導部は州執行委員会に対し、「財政計画の履行、新たな演目の準備、朝鮮人住民の芸術交流と朝鮮人住民への奉仕のために」、ウズベク共和国朝鮮人劇団の出張公演を要請した⁴⁸⁾。

サハリン州執行委員会はこのような条件にかんがみ、1959年7月1日から朝鮮人劇団を朝鮮人歌舞団に再組織する決定を下した。8月1日から朝鮮人ホールの建物に「朝鮮人文化の家」が開館され、そこで芸術家サークルが活動した。だが、朝鮮人歌舞団の存続期間もごく短かった。歌舞団もその前身である朝鮮人劇団も、不必要で収益性が悪いという理由でまもなく閉鎖された⁴⁹⁾。

マスメディアの問題も、当然ソヴィエト当局の関心事だった。1949年6月1日からハバロフスク市で新聞『朝鮮労働者』が週3回、7,000部の発行を始めた⁵⁰⁾。同紙の編集部は1950年にユジノサハリンスクに移転した⁵¹⁾。発行部数は10,000部に増え、後に週5刊となり、さらに12,000部にまで増えた⁵²⁾。1961年からこの新聞は『レーニンの道へ』と改称され、1991年に『新高麗新聞』とふたたび変更された。ソヴィエト時期の全ての新聞がそうだったように、この新聞もまた厳格な検閲を受け、ソヴィエト体制の理念と政治を宣伝するのに終始した。

サハリンの朝鮮人新聞は、種々の困難にもかかわらず朝鮮人学校や朝鮮人劇団より長く生き残った。ソ連邦の解体とその後に訪れた社会生活のあらゆる領域での民主化という条件の中で、この新聞は新たな環境に適応しながら生き残ることができた。1995年からはロシア語の記事が掲載されるようになった。『新高麗新聞』は朝鮮語と朝鮮人文化の保存、発展、復興のための主な手段として現在までも残っており、朝鮮人ディアスポラに関する重要な問題や事件に光を当てている。

1956年にはサハリンで朝鮮人ラジオ放送が開始された。週6回、毎回30分ずつ、ソ連国内の状況についてのタス通信のニュース、地域の事件、プロパガンダ放送、北朝鮮とソ連の音楽といった情

報を朝鮮語で提供した。1963年にラジオ編成部員たちはユジノサハリンスク市のコムソモールスカヤ通りに特別に新築されたラジオ放送社の建物に移転し、現在に至る⁵³⁾。

1952年、ソ連共産党サハリン州党委員会は、サハリン朝鮮人との協働に関する追加的措置を講じた。1951年10月1日からは農業協同組合と集団漁業場で朝鮮人を採用しはじめ、多くの産業体で朝鮮人労働者のミーティングが開催された。政治サークル、識字学習サークルなどの設立作業が積極的に進められ、朝鮮人を対象にした情報機関の活動も強化された。サハリン州の党、各種ソヴィエト、労働組合、コムソモール機関と農業組織などにそれまで未解決のままだった諸問題を解決するよう指示が出された。たとえば、『ソ連共産党（ボリシェヴィキ）歴史小教程』やレーニンとスターリンの伝記の学習会を組織すること、労働者の技術習得・生産性向上のための場を組織すること、地域労働組合常任委員会の業務に優れた朝鮮人生産者を加えること、〔労働生産性を競う〕社会主義競争への参加を奨励すること、個人菜園用の土地を勤労者に与えることなどである⁵⁴⁾。

サハリン州委員会はまた、朝鮮人の労働環境を改善するため、労働組合、慈善団体、スポーツクラブへの朝鮮人の加盟、体力検定基準合格証および労働可能体力基準合格証の交付、朝鮮人学校内でのピオネール創設、朝鮮人によるソ連国債の購



写真9.『レーニンの道へ』紙のスタッフ、1967年
出所：『新高麗新聞』所蔵。

入を許可するようソ連共産党中央委員会に要請した。とはいえ、より過酷な統制方法も当局が併用したことを忘れてはならない。サハリン州国家保安部は連邦国家保安部に、朝鮮人エージェント6人と、ベテランのエージェント4～5人をサハリンに派遣し、地元保安部組織を指揮してほしいと要請したのである⁵⁵⁾。

1952年には、ポロナISK市ヴォストーチナヤ通り37番地の古い日本の建物⁵⁶⁾を利用したソ連軍41089部隊所有の兵舎に、ロシア人と朝鮮人の二つの分科を持つ師範学校が設立された。朝鮮人分科には2組63人（うち女性23人）の学生を受け入れた⁵⁷⁾。

ポロナISK師範学校は1955年にウーゴリナヤ通り54番地に移転し⁵⁸⁾、そこで1年生30人、2年生37人、3年生47人、4年生31人（合計145人、うち女性62人）が教育を受けた⁵⁹⁾。

1956年、ソ連邦閣僚会議の命令No.173に基づき、ソ連国籍を保有していない朝鮮人青年たちも高等教育機関および中等専門教育機関に進学する権利を獲得した⁶⁰⁾。朝鮮人分科は1958年にユジノサハリンスク市にあるユジノサハリンスク師範学校に移転された⁶¹⁾。

だが、このような措置にもかかわらず、1956年サハリン当局はつぎのような内容の報告書をソ連

共産党中央委員会に提出した。「実行された措置のおかげで、これまでに朝鮮人の政治、文化水準は確然と高まりました。サハリン州内に居住する朝鮮人の政治的雰囲気は全体的に健全です。しかし一方で政治、文化的水準がまだ低い者も多く、中には後進的傾向をあらわにし、古い生活習慣を改善しない者も少なくありません。とりわけ女性の政治的・文化的水準は低いままです。女性の多くが家庭内で不公平な状況におかれ、社会とかけ離れた生活をしています。未成年の朝鮮人女子を金銭と引き換えに結婚させる例も散見されます。これは、朝鮮人女性の数が男性よりはるかに少なく、男性が家庭を築くことがきわめて困難であることも大きな理由です」⁶²⁾。

1958年のソ連邦共産党サハリン州党委員会の報告書には、次のような憂慮が混じっている。「サハリン朝鮮人社会には、まだ過去の残滓が強く残っています。シャーマン〔ムーダン〕やまじない師になりすました数々の怪しげな者たちが暗躍し、判断力の欠けた朝鮮人とりわけ女性たちの無学につけこみ労働者の金を巻き上げているのです。父母が金と引き換えに娘を嫁にやることもあります。モルヒネ中毒、アヘン吸入、無謀な賭博などは朝鮮人社会で目に余るほど拡散しており〔……〕朝鮮人労働者に対する党機関の教育事業の不足は深刻です。この現状は、極東でラジオを通じて朝鮮語と日本語で反ソヴィエト宣伝が強化され、多くの朝鮮人がその敵対的な放送をずっと聴いていることが明らかになった最近になって、とくに目につきます」⁶³⁾。

ソヴィエト当局の立場からすれば好ましくないこの過去の残滓を根絶するため、サハリン州行政府は朝鮮人たちが多く住む地域に計7つの朝鮮人図書館を開設し、朝鮮人住民の大多数がこれを利用した。朝鮮語図書の上も増えた。政治・学術普及協会は講義形式でプロパガンダの普及に努めた。ソ連邦閣僚会議の決定に基づいて、子沢山の母親やシングルマザー1,400人に国から補助金が支給された⁶⁴⁾。朝鮮人の青年男女をコムソモール組織により積極的に参加させ、かれらに対する政



写真10. 集団農場「太平洋の星」でリ・ジョンリムが農場員たちとともに1956年6月総会の結果を議論している、1956年

出所：『新高麗新聞』所蔵。

治的作業を強化し、若者たちの力で大人たちにみられる否定的現象と闘う、という決定も下された。これによって朝鮮人たちの生産力、政治活動が高まり、ソ連国籍取得が大いに進むものと予想された⁶⁵⁾。

ソヴィエト政府が朝鮮人の教育水準、生活・労働条件の改善のためにサハリンで実行したこれら膨大な業務は十分評価しなければならない。ここで私たちは、国家機関の直接的な許可なしには当時いかなる社会組織も存在できなかったのであり、国の少数民族政策に沿ったかたちでしか活動できなかったという事実を想起する必要がある。自由な意思表示や自発的な結社は、公式のイデオロギーや既存の体制に挑戦するつもりなどなくとも歓迎されなかったし、直に弾圧されることもあった。

たとえば朴亨柱は著書『サハリンからのレポート現地報告』で、1950年に朝鮮人活動分子によってマカロフ、ゴルノザヴォーツク、ユジノサハリンスク、ネヴェリスキに設立された地下共産党に言及している。この組織は反ソヴィエト活動ではなく、朝鮮人の帰還を果すことのみを目的としていた。この「朝鮮共産党」は自らの計画、目的、課題、原則を持っていた（より詳しくは4節を参照）。だが、すでに1950年8月から内務機関によって党活動分子たちは逮捕され始めていた。かれらは収容所10年刑に処され、党は解体された⁶⁶⁾。

主導権を掌握し、当局の統制を受けない社会組織を設立しようとした朝鮮人たちの努力は行政機関に少なからぬ動揺を引き起こした。たとえばサハリン州委員会は1952年にモスクワに次のように報告した。「サハリン州内の企業および機関に21,000人以上の朝鮮人が勤務しており〔……〕、かれらの中には積極的な社会生活を望む者もいるが、ソヴィエトの多様な社会組織に進出できる権利がなく、労働組合の共済基金にすら加入できません。このような状況のせいで、多くの朝鮮人が独自の組織、集団、会合、「互助支援親睦会」などを作ろうとします。朝鮮人労働者たちを社会政治生活へと誘引し、さらに積極的な生産活動に

参加させ、勝手な民族組織を作ることがないようにかれらを労働組合員として受け入れることへの許可を望みます」⁶⁷⁾。

1958年にユジノサハリンスクで、朝鮮人の若者たちが音頭をとって（そのうちのひとりが、1976年に歴史学博士候補の学位を取得したり・ビョンジュ）は余暇を活用するため朝鮮人クラブ結成の許可を地元当局に申請した⁶⁸⁾。しかし、朝鮮人は「ロシア人と同じ生産現場、同じ機関で働き、ロシア人と同等の権利で労働者サークル、映画館、州立劇場を利用することができる」という理由でこの申請は棄却された⁶⁹⁾。

ソ連末期にベレストロイカが始まってからようやく政治的統制が弱まった。1989年6月には、冷戦によって生き別れた親族探しと再会を第一目的

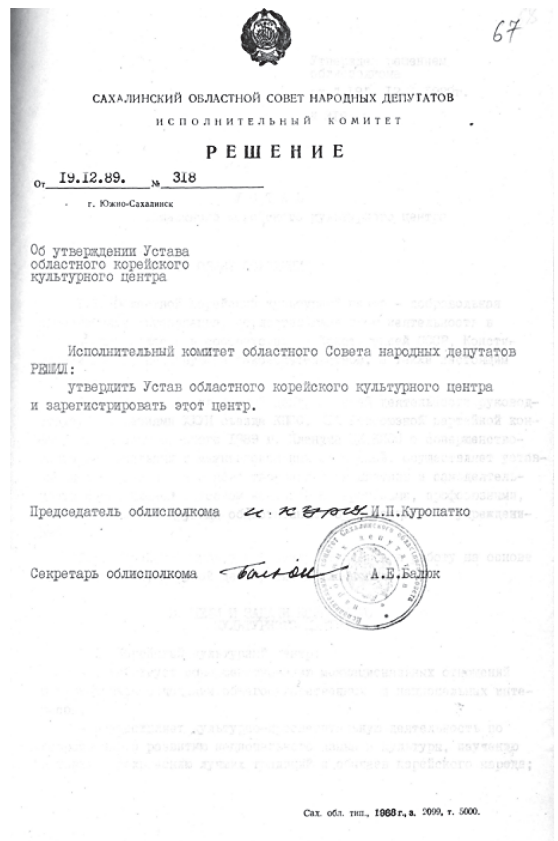


写真 11. サハリン州朝鮮人文化センターの定款承認
に関するサハリン州執行委員会の1989年12月
19日付決定 No.318
出所：ГИАССО. Ф. 53. Оп. 1. Д. 2921. Л. 67.



写真 12. ユジノサハリンスクーソウルーユジノサハリンスク路線を運航したチャーター便、1990 年
出所：『新高麗新聞』所蔵。

に掲げた最初の「サハリン州地域朝鮮人離散家族協会」が団体登録された⁷⁰⁾。アニワ、コルサコフ、ドーリンスク、ポロナイスク、ウグレゴリスクなど州内各地区に支部が組織され、日本と韓国の関係組織と接触をはじめた⁷¹⁾。

1989 年、サハリン州地域朝鮮人離散家族協会は日本と韓国にいる親戚たちとの再会に関する協約書を締結した。そして早くも 1990 年 2 月 8 日に協会はソウルを発ち、ユジノサハリンスク行きチャーター便の運航に合意した。大韓航空のボーイング 727 機便で、サハリン朝鮮人一世たち 120 人が親戚に会うために出国した。サハリン州地域朝鮮人離散家族協会の協力のもと、5 年にわたる積極的な活動で 4,914 人の老人たちが歴史的故郷を訪問した⁷²⁾。

1990 年 3 月の会議開催後には、「サハリン朝鮮人協会」（キム・ミウン会長）という新たな組織が設立された。これは、かつての各市・地区ソヴィエト朝鮮人担当部門を統合してできたものである。協会の主要な活動目的は、民族的自意識の構築と発展を通して、幅広い階層のサハリン朝鮮人たちを民主化の過程に参加させることだった⁷³⁾。

第二次世界大戦直後、ソヴィエト当局が朝鮮人住民たちのために多くの仕事をしたことは確かである。その結果、朝鮮人ディアスポラには民族学校、新聞、ラジオ、サークルなど多様な社会組織



写真 13. サハリン朝鮮人問題に対する発起人団の会合、ユジノサハリンスク市 1989 年
出所：『新高麗新聞』所蔵。

が立ち上がり、人々に大きな影響を与えるようになった。むろんこれらは全てソヴィエト当局の厳格な統制下で設立され、運用されたものである。ソ連末期には、社会運動に対する統制は目に見えて弱まり、自らの権利のために闘い、文化を守りたいというサハリン朝鮮人の願いは、社会組織の設立、歴史的故郷との緊密な関係の形成、サハリンでの朝鮮文化の復興に反映されていった。

〔次回に続く〕

【訳者解説】

ここに訳出するユリア・ディン「サハリン朝鮮人とソヴィエト社会（1945-1991）」は、サハリン朝鮮人たちがソヴィエト社会に統合されるまでの歴史を論じたものである。

サハリン島は北海道の北 43 キロに位置し、面積は北海道よりやや小さい、世界で 23 番目の大きさの島である（北海道は 22 番目）。1905 年～1945 年までの 40 年間、この島の北緯 50 度線上に国境線が引かれ、北半分がロシア・ソ連領、南半分が日本領となり樺太と呼ばれた。1941 年時点で 40 万 6557 人が暮らした日本領樺太で、日本人に次ぐエスニック集団だったのが朝鮮人である。1920 年代に増えはじめた樺太への朝鮮人移住者は 1941 年時点で 1 万 9768 人を数えた。ここから 45 年の敗戦までの樺太朝鮮人の人口動態は変動が激しく正

確な捕捉が難しい。1944年8月、樺太北部の炭鉱労働者は常磐・九州の炭鉱への転出を命じられた。「急速転換」と呼ばれるこの措置で樺太を後にした朝鮮人は少なくない。一方、1939年以降の徴用、いわゆる強制連行によって朝鮮半島から樺太に移送された労働者は1万6000人を超えるといわれている。日本の敗戦でソ連統治下に移行した時点でサハリン島南部にいた朝鮮人は2万5000人前後とみられる。ディンが研究対象とするのは彼/彼女たちとその子孫の二世、三世であり、その総称が「サハリン朝鮮人」である。

今回訳出したのは、ユリア・ディンの単著『サハリンの朝鮮人ディアスポラ：帰還と、ソ連・ロシア社会への統合の問題』の第4章「サハリン朝鮮人とソヴィエト社会（1945-1991）」である。2015年刊のロシア語版（Корейская диаспора на Сахалине: проблема репатриации и интеграция в советское и российское общество. Южно-Сахалинск: Сахалинская областная типография）と、2020年に韓国で出版された朝鮮語版（진 울리야 이바노브나 / 김종현 옮김 『사할린의 한인 디아스포라: 본국 귀환 문제 그리고 소비에트와 러시아사회로의 통합』、선인）の両方を底本とした。本書は、日本領樺太時代からソ連統治時代を経て現在にいたるサハリン朝鮮人の歴史的経験の通史である。サハリン朝鮮人3世である原著者のディンは、サハリン州郷土博物館（ユジノサハリンスク市）学術編集部長を勤めるサハリン朝鮮人史研究の第一人者である。歴史学博士候補（Ph.D. に当たる。ロシアでは国家資格）の学位に加え、留学先の高麗大学で修士号も取得している。

本稿の訳出にあたっては、ロシア語版での誤りの修正や情報のアップデートがおこなわれている朝鮮語版も合わせて参照してほしいというディン氏からの依頼があり、ロシア語使用者の天野と、朝鮮語使用者の宋がそれぞれのテキストから訳文を作り、両者をすり合わせて決定稿を作成するというプロセスをとった。すでに訳者たちは、本書の第5章（宋恵媛、天野尚樹訳「ソ連崩壊後のサハリン朝鮮人」『コリアンスタディーズ』11号、2023

年6月）および最終章である第6章（天野尚樹、宋恵媛訳「21世紀のサハリン朝鮮人：適応過程の完了」『山形大学歴史・地理・人類学論集』23号、2022年3月 https://yamagata.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=4227&item_no=1&page_id=13&block_id=29#:~:text=%C2%A0%20hgca%2D23%2D00010020%20%C2%A0%20）を訳出している。上記では、それぞれ1990年代と2000年代以降が扱われている。また、同書の第1章「資料と研究史」がヴェニアミン・テンと中山大将によって訳出されている（ヴェニアミン・テン訳、中山大將監修「サハリン朝鮮人研究の資料と研究：露日韓英各国語の研究状況」（『境界研究』No.13、2023年3月 <https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/90304/1/09.pdf>）。

ソ連時代の約45年間（1945～91年）を扱った本稿は、内容的にも分量的にも原著の中で最も充実した章である。その分析と叙述は資料的にも、分析視角においても、分析対象においてもきわめて独自性が高い。

ソ連時代のサハリン朝鮮人史研究として日本ではもっともよく知られているアナトーリー・クージンの著書、および日本での数少ない研究である半谷史郎、天野尚樹の研究はいずれもソ連の政策決定過程に重きを置いた政治史研究である¹⁶³）。クージンと天野はもっぱらサハリンの公文書館文書を利用し、半谷はモスクワの公文書館資料を駆使している。

これらの先行研究に対しディンは、サハリンとモスクワの公文書館を幅広く渉猟し、さらに豊富なインタビュー調査もおこなっている。文書資料とオーラル資料のバランスがとれた叙述は客観性と臨場感を兼ね備えたものと評価できよう。そうした資料群が可能にしたのは本稿の社会史的視角である。現実の住民の姿がみえない政治史研究とは異なり、ディンの叙述からは、ソ連の政治体制下で、望郷の念と民族意識と現実の生活とのあいだで葛藤する朝鮮人の姿が生き生きと描き出されている。とりわけ、国籍の選択で揺れる姿は真に

迫る。また、これまでで不十分な形でしか紹介されてこなかった朝鮮共産党の実態を掘り起こした点も高く評価に値しよう。

本稿はもともと4節からなるが、分量の関係上、今回は第1、2節のみを掲載した。第3節「サハリン朝鮮人の国籍問題」および第4節「サハリン朝鮮人の本国帰還運動とソ連、日本、南北朝鮮の政策（1950-1990年）」は、次の機会に掲載したい。

【註】

- 1) サハリンにあった社会組織について詳細な内容は2節を参照。
- 2) ニューヨーク - ソ連路線を運行中だった大韓航空ボーイング747機は経路を離脱し、1983年9月1日にサハリン駐屯のソ連空軍により撃墜された。この事故で246人の乗客と乗務員23人が死亡した。ソ連政府はこれにより世界各国政府の強い批判を浴びた。РГАНИ(Российский государственный архив новейшей истории). Ф. 89. Оп. 35. Д. 40. 37 л.
- 3) *Забровская Л.В.* Россия и Республика Корея: от конфронтации к сотрудничеству (1970–1990-е гг.). Владивосток, 1996. С. 10.
- 4) Rさん、女性、1945年生まれ、ユジノサハリンスク市2008年12月28日聞き取り。
- 5) *Забровская Л.В.* Российские корейцы и их связи с родиной предков (1990–2003 гг.) // Проблемы Дальнего Востока. 2003. № 5. С. 43.
- 6) *Кузин А.Т.* Послевоенная вербовка северокорейских рабочих на промышленные предприятия Сахалинской области (1946–1960-е гг.) // Россия и АТР. 2010. № 3. С. 155.
- 7) Там же. С. 155
- 8) Iさん、男性、1985年生まれ、ユジノサハリンスク市2010年8月10日聞き取り。
- 9) ソ連と朝鮮民主主義人民共和国の国境の豆満江のこと。
- 10) Tさん、男性、1933年生まれ、ユジノサハリンスク市2009年3月9日聞き取り。
- 11) Aさん、男性、1951年生まれ、ウグレザヴォーツク町2009年2月1日聞き取り。
- 12) ГИАСО (Государственный исторический архив Сахалинской области). Ф. П-4. Оп. 159. Д. 86. Л. 4.
- 13) 次を参照。ГИАСО. Ф. П-4. Оп. 159. Д. 86. 38 л.
- 14) Tamura Eileen, *Americanization, Acculturation, and Ethnic Identity: The Nisei Generation in Hawaii* (Urbana: University of Illinois Press, 1994), pp. 201-202.
- 15) *Арутюнов С.А.* Роль и место языка в этнокультурном развитии общества // Этнические процессы в современном мире / отв. ред. Ю.В. Бромлей. М.: Наука, 1987. С. 44.
- 16) 日中戦争(1937年7月7日-1945年9月9日)。第二次世界大戦の一部としてみなされる軍事的衝突。日中戦争は、日本政府が数十年間にわたり推進した中国内の軍事的、政治的支配政策方針の結果だった。
- 17) *Курбанов С.О.* История Кореи: с древности до начала XXI в. СПб.: изд-во СПб. ун-та, 2009. С. 263–264.
- 18) *Ли Бен Дю.* Южный Сахалин и Курильские острова в годы японского господства: дис. канд. ист. наук. М., 1976. С. 123–124.
- 19) ГИАСО. Ф. 171. Оп. 3. Д. 4. Л. 8.
- 20) *Сталин И.В.* Марксизм и национальный вопрос // Сочинения. Т. 2. [https://www.marxists.org/russkij/stalin/t2/marxism_nationalism.htm] (2023年9月1日最終閲覧)
- 21) *Мартин Т.* Империя положительной деятельности: Советский Союз как высшая форма империализма // Государство наций: Империя и национальное строительство в эпоху Ленина и Сталина. М.: Российская политическая энциклопедия (РОССПЭН); Фонд «Президентский центр Б.Н. Ельцина», 2011. С. 88.
- 22) Там же. С. 92.
- 23) ГИАСО. Ф. 143. Оп. 1. Д. 3. Л. 48–48об.
- 24) Там же. Л. 50–50об., 51–51об., 54–54об.
- 25) Там же. Л. 60–60об.
- 26) Там же. Л. 57–57об.
- 27) ГАРФ (Государственный архив Российской Федерации). Ф. А-2306. Оп. 71. Д. 1568.
- 28) ГИАСО. Ф. П-4. Оп. 1. Д. 639. Л. 41.
- 29) *Кузин А.Т.* Просвещение сахалинского корейского населения: исторический опыт и современность // Вестник Красноярского государственного университета им. В.П. Астафьева. 2011. № 2. С. 253.
- 30) ГИАСО. Ф. П-4. Оп. 1. Д. 639. Л. 41.
- 31) *Костанов А.И., Подлубная И.Ф.* Корейские школы на Сахалине: исторический опыт и современность. Южно-Сахалинск: Архивный отдел администрации Сахалинской области, Сахалинский центр документации новейшей истории, 1994. С. 9-10.
- 32) ГИАСО. Ф. 143. Оп. 1. Д. 218. Л. 1–3.
- 33) ГАРФ. Ф. Р-5446. Оп. 86а. Д. 10325. Л. 9.
- 34) *Костанов, Подлубная.* Корейские школы на Сахалине. С. 18.
- 35) *Кузин А.Т.* Исторические судьбы сахалинских корейцев. Кн. 2. Интеграция и ассимиляция (1945–

- 1990 年). Южно-Сахалинск: Сахалинское книжное издательство, 2010. С. 183-184
- 36) Тさん、男性、1930 年生まれ、ユジノサハリンスク市 2009 年 8 月 3 日聞き取り。
 - 37) Аさん、1951 年生まれ、ウグレザヴォーツク町 2009 年 2 月 1 日聞き取り。
 - 38) 1918 年から 1929 年までのユーゴスラビアの名称。
 - 39) *Степанов Н.Ю.* Русские школы в Югославии и Чехословакии. К вопросу об адаптации российской диаспоры // Национальные диаспоры в России и за рубежом в XIX–XX вв.: сборник статей / сост. Г.Я. Тарле. М.: ИРИ РАН, 2001. С. 149–159.
 - 40) ГИАСО. Ф. П-4. Оп. 63. Д. 2. Л. 21–22.
 - 41) ГИАСО. Ф. П-4. Оп. 63. Д. 2. Л. 21–22.
 - 42) Там же. Л. 232.
 - 43) *Цупенкова И.А.* Забытый театр (Из истории Сахалинского корейского драматического театра. 1948–1959 гг.) // Вестник Сахалинского музея. 1997. № 4. С. 208–209.
 - 44) ГИАСО. Ф. 131. Оп. 1. Д. 4. Л. 94.
 - 45) ГИАСО. Ф. 53. Оп. 25. Д. 1666. Л. 16.
 - 46) ГИАСО. Ф. 53. Оп. 25. Д. 1666. Л. 14–15.
 - 47) Там же. Л. 14–15.
 - 48) Там же. Л. 16.
 - 49) *Цупенкова.* Забытый театр. С. 212.
 - 50) Постановление бюро Хабаровского крайкома ВКП(б) о газете «Корейский рабочий» // *Кузин А.Т.* Сахалинские корейцы: история и современность (Документы и материалы, 1880–2005). Южно-Сахалинск: Сахалинское областное книжное издательство, 2006. С. 307.
 - 51) ГИАСО. Ф. 53. Оп. 25. Д. 1666. Л. 7.
 - 52) ГАРФ. Ф. Р-5446. Оп. 86а. Д. 10325. Л. 2.
 - 53) *Кузин.* Исторические судьбы сахалинских корейцев. Кн. 2. С. 197.
 - 54) ГАРФ. Ф. Р-5446. Оп. 86а. Д. 10325. Л. 6–7.
 - 55) Там же. Л. 1–5.
 - 56) ГИАСО. Ф. 143. Оп. 1. Д. 198. Л. 15.
 - 57) ГИАСО. Ф. 143. Оп. 1. Д. 72. Л. 182, 201.
 - 58) ГИАСО. Ф. 143. Оп. 1. Д. 111. Л. 68.
 - 59) Там же. Л. 65.
 - 60) *Кузин.* Исторические судьбы сахалинских корейцев. Кн. 2. С. 178.
 - 61) Сахарин州委員会の州師範学校設立に関する決定 №94 によるもの。 *Кузин.* Сахалинские корейцы: история и современность. С.195.
 - 62) РГАНИ. Ф. 5. Оп. 32. Д. 52. Л. 19.
 - 63) ГИАСО. Ф. П-4. Оп. 63. Д. 2. Л. 41–43.
 - 64) Там же. Л. 41–43.
 - 65) РГАНИ. Ф. 5. Оп. 32. Д. 78. Л. 2–4.
 - 66) *Пак Хен Чжу.* Репортаж с Сахалина. Южно-Сахалинск: ЗАО «Файн Дизайн», 2004. С. 43–44. [日本語版: 朴亨柱著、民涛社編『サハリンからのレポート: 棄てられた朝鮮人の歴史と証言』御茶の水書房、1990 年]
 - 67) ГАРФ. Ф. Р-5446. Оп. 86а. Д. 10325. Л. 4–5.
 - 68) ГИАСО. Ф. 53. Оп. 25. Д. 1666. Л. 10.
 - 69) Там же. Л. 8.
 - 70) 1989 年に公式に登録されたサハリン朝鮮人たちの最初の合法的社会組織は、実際には一年前の 1988 年から活動をはじめた。当初は「サハリン朝鮮人地域社会組織」という名称だったが、その後「サハリン州地域朝鮮人離散家族協会 (РООПССК)」と改称した。
 - 71) その後、多様な形態の朝鮮人組織が増えていった。2010 年 1 月 1 日の時点で、サハリン州だけで 26 の朝鮮人社会組織が活動中だが、この組織の基礎は 1998 年から活動している地域社会組織「サハリン朝鮮人」(РООСК)だった。 *Кузин А.Т.* Исторические судьбы сахалинских корейцев. Кн. 3. Этническая консолидация на рубеже XX–XXI вв. Южно-Сахалинск: издательство «Лукоморье», 2010. С. 95.
 - 72) *Бок Зи Коу.* Корейцы на Сахалине. Южно-Сахалинск: Южно-Сахалинский государственный педагогический институт, Сахалинский центр документации новейшей истории, 1993. С. 117–121.
 - 73) *Кузин.* Исторические судьбы сахалинских корейцев. Кн. 3. С. 93–94.

歴史認識の壁は厚く —植民地主義とヘイト・スピーチの根絶—

文光喜

1、はじめに

今年 100 年を迎えた関東大震災でジェノサイドにより殺された、数多い朝鮮人や中国人の冤死の魂は未だに彷徨っている。

日本は関東大震災を「人災」の側面から一度たりとも公的な調査を行わず、隠蔽し続け未だにジェノサイド条約に加盟していないのは植民地主義的な差別意識が根底にあると思われる。

日本の植民地支配は 1945 年にポツダム宣言を受諾したことで事実上終わったはずであるが、真に清算されたのであろうか。植民地を失った現在も日本国内には旧植民地出身者やニューカマーが入管体制に組み込み「同心円状の支配秩序が健在」であり、「植民地なき植民地支配」が続いているという [吉澤 2010:2]。

植民地に関する研究は多数存在するが、その歴史的背景から日本の植民地支配の事後責任に関する視点まで踏み込みその問題点を明確にしているのは多くない。

本稿は植民地主義が戦後処理において残った歴史的背景を探り、その根底にある韓国併合の植民地化の不当性と不法性を 1 次資料などで論理的に証明することにより、複雑に絡んでいる歴史認識問題を根本的に解決する糸口と捉え、その事後責任回避が「現在の問題」として残した面の根絶に繋がる道を探ってみる。

2、韓国の植民地は合法か不法か

(1) 韓国の植民地化は高宗皇帝の強制退位から

明治日本は「主権線－利益線」論から対外膨張で征韓論を公然と唱え、日清戦争を誘発し、それを確保するために日露戦争を招き、それらの戦争の帰結が韓国の植民地支配の確立であった [山田 2023:151-153]。

戦争は植民地支配を生み、植民地支配は抑圧を生むことから、1919 年には 3・1 独立運動が全国的に起こり、日本では反日「暴動」として報道され、差別的な恐怖心を日本人に植え付けた。

4 年後の 1923 年に起きた関東大震災の際に、「朝鮮人が井戸に毒を入れた」という根拠のない流言飛語によって 6,660 人の朝鮮人が虐殺されたのは、日本人の恐怖感とその背景にあったものと思われる [山田 2023:154]。植民地における抑圧は歪んだ恐怖心を植え付け、その支配は植民地の人々に強い屈辱感を抱かせ、支配国の人々には理由のない優越感と民族差別意識を持たせ、治安対象として在日外国人を扱う思想があったと思われる。 [田中 2020:283]

それは「万世一系」の天皇が統治し、「一視同仁」の同化政策で極めて特異な形態で、植民地政策、民族抹殺、皇民化政策が行われたのである [朴俊相 2003:80-81]。

中塚 [2007] によれば、1894 年 7 月陸奥宗光外相の指示の下、在朝鮮日本公使館大島旅団長の兵

士8千名は「極秘」で23日王宮に侵入し「不意の戦闘」で国王を虜にして、実父大院君を担ぎ出し三浦公使らが閔妃を惨殺し、遺体を焼いた乙未事変を起した。全琫準の指導の下、東学農民軍の激しい抗日闘争が巻き起こるが、日本は武力で5万人以上の朝鮮人を虐殺したという。日清戦争により台湾を獲得しした日本は朝鮮を「独立」させ、日露戦争の段階では「保護国」を謳い、国際法の立場から協約を「追認し法的に正当化」することに努めた。米国は1898年にフィリピン、ハワイを併合し、1901年にキューバを保護領化、パナマ運河を手に入れ、1905年には「タフト＝桂協定」を結び、フィリピンを確保した。1902年日英同盟により列強国になった日本は05年の日英同盟協約で韓国の利益を「承認」させ、07年の日仏協商でインドシナ支配を追認する代わりにその地位を承認させた。

日本は韓国の国権を奪取するため1904年「議定書」と「第1次日韓協約」、1905年「第2次日韓協約」と1907年「第3次日韓協約」等を順次強制し、最終的に1910年8月「併合条約」で国権委譲を強要した。その手法は常に威嚇、恐喝、誘惑などで、皇帝の御璽を強制奪取し、皇帝の詔勅文を伊藤が捏造したことは真に脅迫・威嚇行為であった[康成銀 2008:183]。

高宗は最後まで御璽を押すことを拒絶し、ハーグ万国平和会議に提出した「抗告詞」によって伊藤の逆鱗に触れ強制退位されたのである。日韓協約の推進において、高宗の強制退位は日本の韓国国権奪取の過程で起こった最大の脅迫威嚇であった[李泰鎮 2008:133]。

(2) 併合に至る5条約はすべて偽造

このように5条約は全て手続きと形式要件において不備であり、武力威嚇によって所定の法的手続きを完全に無視してなされた欠格事由であった。[南 2023:166]。

それは「乙巳五条約」の日本側公式基本資料である「韓国特派大使伊藤博文復命書」等の資料が偽造、隠蔽され、「5大臣上疏文」歪曲が1次資料

から明らかにされている。

当時の駐日オーストリア・ハンガリー帝国公使館フランチは本国に送った報告書に「条約の署名に対する個々の韓国人官吏たちの抵抗があまりにも強かったため、…日本人たちが玉璽を奪い条約文書に捺印したため、この条約は全的に無効である」と疑問を呈したのである。これは条約が強要されたものであることを高宗の言葉で裏付けられている。高宗は1906年9ヵ国の元首にあてた親書で「…調印されたものは、真に正当なものではなく、脅迫を受けて強制的に行われたもので、朕は調印を許可したことがなく、国法に依拠せずに会議を開き強制監禁して調印させた」もので、**「公法に反するため、当然無効」**だとした[康 2008:182]。

高宗の後継者、純宗も「併合条約」の詔勅に署名をしなかった。[李泰鎮 2006:165-172] 純宗は「過去の併合認准は強隣が逆臣の群れと合わさり、勝手にいき勝手に宣布したものであり、全て朕が行ったものではない」と述べている。純宗は1926年4月26日崩御する直前に、宮内大臣趙鼎九に遺詔を残した事実が確認された[南基正 2023:166][李泰鎮 2006:195-201]。日本は「不当」だが、当時の国際法は「強者の法」であったため、法的認識として「合法」であると主張している。彼らは「歴史認識と法的論議」は別個の問題であると前提しているが、「不当・合法論」は「正当化」機能を持っているので、「不当・合法（有効）論」は論理矛盾に陥っている。

(3) 民衆の意に反した併合

併合は極少数の賛同者はいたが、圧倒的多数の国民は反対したのである。

日本による韓国軍の解散で、義兵運動は国民的規模で全国的に展開され、「義兵戦争」の様子を呈した[森山 1992:113-120, 202-204]。高宗は1905年、崔益鉉に密命を出し、反日義兵闘争を展開することを訴え、それに応え閔宗植らが全国各地で義兵を起し、義兵長は伊藤博文に宣戦布告し日本が国際公法に違反する戦争犯罪なることを国際

社会に訴えた。洪範図をはじめとする反日義兵闘争は1909年末までに、全国300ヵ所、240郡のほぼすべてを含み、挙族的な反日抗争として独立戦争へ転換していた〔姜徳相 1984:81〕。

戦争の熾烈さは以下の統計が物語っている〔李泰鎮 2008:344〕。

年度	義兵戦闘回数	参加義兵数
1907 (8-12 月)	324 回	41,116 名
1907-08 (1-12)	1451 回	69,832 名
1909 (1-12)	898 回	25,763 名
1910 (1-12)	147 回	1,891 名

韓国鎮圧はゲリラ戦的様相もあるが、1906年から1911年5年の間に17,779人の死者、捕虜2,139人、負傷者3,706人の数字は明らかに植民地化戦争であった。安重根は大韓義軍の義兵参謀中將として、1909年10月26日伊藤博文狙撃で逮捕された時、交戦者＝義軍中將の資格のある捕虜として、公判でも伊藤の罪状13項をあげ、戦争行為として、義兵として戦ったのだから、「国際公法、万国公法によって審判を受けるべき」と述べた〔姜徳相 1984:72-73〕。安重根の義拳は朝鮮民族に勇氣と希望を与え、独立の機運を高揚させた植民地戦争であった〔慎蒼宇 2022:4-5〕。

それは条約無効を主張した当時の各階層の朝鮮人民の無効化闘争の意思の表れから見る事が出来る。『高宗実録』に収録された、元老・官吏・儒生による条約批判の上疎文は1905年11月から翌年6月まで73件に上り、1919年3月1日朝鮮半島全体を蔽いつくした独立万歳運動に見られるように、植民地支配は「不当でありかつ違法である」ことが明白になっている〔金昌祿 2023:24-25〕。

条約不法の歴史性を知るには、韓国保護条約の違法性を丁寧に掘り起こし現在と結びつけ、現在に繋がる国際法の歴史を描きだすことである。それは「不当だが合法」とする日本の支配的言説に対して、「不当でありかつ違法である」とするもう一つの言説を明確に対置させることによって、過去の清算がほかならぬ法の問題でもあることから法秩序を規律するものになるとしている〔康

2023:48〕。朝鮮は国交交渉において、日朝間諸条約の「不法で無効」の要求をしたうえで補償問題は「交戦国間の賠償形態」に基づいて行うべきとして、「植民地戦争、植民地民族解放戦争」の観点から先駆的な見解を述べている〔板垣 2008:262〕。

3. 日本の国際法はダブルスタンダード

(1) 植民地主義は法的な介入を阻む障壁

21世紀は国際法が植民地支配を正当化するのではなく市民や被抑圧者の声が反響し人間中心の見方が受容され、問い直す潮流が勢いを増している。

阿部〔2023〕によると、障壁は第一に、法は過去に遡及して適用されないという時際法の壁、第二に、過去に遡っての証拠収集は困難であるとする時効（除斥）の壁、第三に平和条約など一括処理条約の存在、そして第四に救済の困難さを指摘した。

2001年の反人種主義・差別撤廃世界会議で採択されたダーバン宣言には「植民地主義によって苦痛がもたされ、植民地主義が起きたところはどこであれ、いつであれ、非難され、その再発は防止されねばならないことを確認する。この制度と慣行の影響と存続が、今日の世界各地における社会的経済的不平等を続けさせる要因であることは遺憾である」とした。

行為時の法に照らして違法である場合には時際法の壁を除去できるようになっている。それはアフリカや米国における先住人民の強引な編入、1879年の琉球併合なども正当化し難い事情が諳らかにされてきている。1905年第2次日韓協約も皇帝に対する強制と韓国法上重大な瑕疵ある条約締結手続きに依っている事から、その有効性に根本的疑念を投げかけられ、米国によるハワイ王国の併合は1993年に米国議会が自決権侵害・違法行為への謝罪を行うまでになっている。植民地支配についても、欧米中心性が希薄化する中で、複線的な歴史叙述の可能性が押し広げられている。

また現行法を脱植民地主義的に解釈することで

時効の壁を越え出る可能性が高められている。英国植民地ケニアにおける独立運動弾圧下で施行された拷問等に対する損害賠償事件（マウマウ裁判）では英国が2013年に遺憾の意を表し、1990万ポンド（約30億円）の支払いを約束した。それにインドネシア独立戦争期のオランダ軍による虐殺事件の裁判でも、オランダ政府が法的責任を認め、謝罪と損害賠償を行うことになった。2021年ソウル中央地方裁判所が慰安婦問題への主権免除の適用を排除した判決も脱植民地主義の法の適用と言える。世界的に脱植民地化の規範的潮流はダイナミックな広がりを見せているのである〔阿部2023:190-198〕。

（2）日本は植民地支配を認めるのか

日本は韓国との国交正常化交渉の過程において、朝鮮半島の支配は正当かつ合法という立場を崩さなかったが、90年代に入ると国際趨勢を考慮してか、認める見解を公にした。1993年、細川護熙首相は「侵略戦争で間違った戦争」で「我が国の侵略行為や植民地支配などが多くの人々に耐えがたい苦しみと悲しみをもたらした」と反省の意を口にした。95年村山首相も植民地支配と侵略を認め、98年日韓共同宣言では小渕首相が「植民地支配により多大の損害と苦痛を与えたという歴史的事実を謙虚に受け止め、これに対し、痛切な反省と心からのお詫び」を述べた。しかし、15年の安倍晋三首相による70周年談話により、希釈され、その後の岸田首相の発言も歴代内閣の立場を引き継ぐことにとどまっている。

植民地主義を否定する日本の歴史修正主義は韓国の反日感情や被害者感情を土台とするナショナリズムを刺激し、それがまた日本のナショナリズムを強化するという「共犯関係」が繋がっている〔倉橋2018:114-120〕。韓国の尹錫悦大統領の出現は、「不法な植民地支配」問題を曖昧にして、清算を棚上げにし、安全保障協力を進める「歴史－安全保障交換の構造」が復活し、「日本の安全のための朝鮮」という「極東1905年体制」の古い考え方が当然の帰結のように展開されているのが現実で

ある〔千々和2022:240〕。

このような政治状況を打開し、植民地責任論の展望を開くには、被害者に対する救済の実現が最優先事項であるが、歴史資料及びすべての資料の公開を通じて日本に「開かれた情報社会」を実現させる必要がある。

ダーバン会議は2009年にフォローアップする会合が開かれ、旧宗主国に対し植民地主義を打ち破ろうとしているのが世界の流れでもある〔浅田2018:252-255〕。日本の植民地支配の責任を問う運動は、世界各地における過去の不正義の問い直しと克服を目指す様々な運動と重なり合い、過去と現在の不正義を明らかにし、またその作業を通じて歴史認識を問い直すことを求めている。

戦前の強制労働者問題も現代の外国人労働者の導入・活用、処遇とも類似性を持つものである。それは労働力不足を背景にホスト社会のマジョリティが忌避する職場で就労させるために動員し、導入された点では同じである。今日は少子化、戦時下は軍事動員という事情の違いはあるが共通していると思われる。

（3）ヘイト・スピーチは根絶できるのか

在日朝鮮人は、解放後、奪われた民族の言葉と歴史、文化を取戻すため民族教育を行い、子どもたちにアイデンティティを育む朝鮮学校を自助努力によって作りあげた。祖国を持つ公民として度重なる弾圧、困難を乗り越え、差別や偏見に打ち克ち脱植民地化の歴史を切り開いてきた〔呉永鎭2019:365-368〕。

民族教育は日本国民と同様に納税の義務は課されながら、参政権も公職雇用権もなく、高校無償化適用からも除外されるなど民族的諸権利は保障されていない。二一世紀には「在特会（在日特権を許さない市民の会）」によるヘイト活動が全国各地で行われ、差別街宣、差別報道など枚挙にいとまがない差別と排外主義は2013年にピークで流行語にまでなった。下からのヘイトと、日本政府による上からのヘイトが呼応し合って、差別と排除、暴力と抑圧の日常が作り出されているのであ

る〔前田 2018:8-9〕。日本で初めての反人種差別法である「ヘイト・スピーチ解消法（本邦外出身者に対する不当な差別的言動の解消に向けた取組の推進に関する法律）」が 2016 年に制定されたが、人種差別を規制する法令は何一つないのである。

日本は 1995 年村山政権時に人種差別撤廃条約に加盟し、国連から差別禁止法の制定を再度勧告されているのに、歴史的構造的な植民地主義的な差別政策を転換していない。解消法の法律が出来たので、露骨なヘイトデモ・街宣は禁止する仮処分により止めることができるようになり、裁判で差別と認定されやすくなったが、根本の国籍・民族差別の根絶までは至っていない。川崎市や愛知県など地方自治体などで人種差別に取り組む条例制定が広がっていることはよい流れだと思うが、処罰法がないと根絶にまで至るのは無理ではないだろうか。

国連では人権差別撤廃委員会だけでなく、社会権規約委員会、子どもの権利に関する委員会、様々な人権保障監視機関が日本政府に対し、朝鮮学校に「無償化」制度を適用するよう繰り返し勧告しても、「拉致問題に進展がない」ことなどを理由に拒み続けているのは理不尽といえるであろう。若し、平等法という差別禁止法があるイギリスで「朝鮮学校の無償化裁判」があれば、「無償化」制度から除外することはあり得ないかもしれないのである。また地方自治体に対して朝鮮学校への補助金の見直しを促す文科省通知が出されたため、補助金を出す自治体が減り、日本学校では当り前のように適用される保護者補助金も朝鮮学校は対象外となることによって、運営は益々困難を極め、発展の芽を摘んでいるのが現実である。朝鮮籍や韓国籍の外国人も日本の住民であるのにも関わらず、諸権利を認めないのは明らかに差別といわざるを得ないのである。日本政府は毎年 12 億円の予算を注ぎ込みながら、2004 年以来拉致被害者は一人も戻らず何ら拉致問題の進展はなく緊張感だけ煽り、常に「最重要課題」だけ言い続けているのである〔和田 2010:85〕。

ゆえに植民地支配の「落とし子」である在日朝

鮮人の永住権の保証や民族教育の様々な規制等の人権保障問題は米国の反共政策と日本の他民族排除意識が結びついた果実といえるであろう。在日朝鮮人は、日本の市民社会から切り離され、いまなお「包摂（日本人化）」と「排除（無権利化）」の二重差別の狭間に立たされ、二流市民として日本市民社会に限られた形でしか参画出来ない多文化社会を構築しているのである。

しかし、ポスト植民地問題である在日朝鮮人問題の解決なしには日本の植民地主義は終結したとは言えないであろう。

6、おわりに

2002 年、日本は平壤宣言で朝鮮の植民地支配に対し、「痛切な反省と心からのお詫びの気持ち」を表した。日本の植民地問題は戦後最大の歴史的責務であり、「拉致問題」も接触すらできなければ解決する目途が立たない。本稿では、在日朝鮮人の諸権利の侵害が植民地支配の違法性を曖昧にしているところに起因し、その解決は日朝問題打開の糸口があることを明らかにした。

日本は米国の属国ではなく、「唯一の戦争被爆国」として核兵器禁止条約に調印し、核兵器の製造使用を禁止すれば、「平和緩衝地帯」になることが可能になり、第二次朝鮮戦争は遠ざかり、東アジアでの脱植民地主義は実現するのではないだろうか。

2023 年 10 月 25 日

参考文献

- ・浅田進史「植民地責任論」日本植民地研究会編『日本植民地研究の論点』岩波書店 2018 年、252-255 頁。
- ・阿部浩己「徴用工問題と国際法」『世界』2023 年 7 月 190 - 198 頁。
- ・板垣竜太「何がお問われているのか—脱冷戦と植民地支配責任の追及」（金富子
- ・中野敏男編著『歴史と責任—「慰安婦」問題と 1990 年代』青弓社、2008 年）
- ・呉永鎬『朝鮮学校の教育史脱植民地化への闘争と創

- 造』明石書店 2019 年、365-368 頁。
- ・康成銀「一次資料から見た乙巳五條約強制調印過程」
笹川紀勝編著『国際共同研究韓国併合と現代—歴史と国際法からの再検討』明石書店 2008 年 173-182 頁。
 - ・康成銀「中国・日本・朝鮮の近代化路線を考える—ウエスタン・インパクトにどのように対応したか？近代東アジア三国の分岐の原因、歴史における選択肢＝未知の可能性」活動家集団思想運動『国際主義』Vol.7, 2023 年 46-47 頁
 - ・姜徳相『朝鮮独立運動の群像』青木書店 1984 年 81－82 頁。
 - ・金昌祿『韓国大法院強制動員判決、核心は「不法強占」だ』2023 年、24-25 頁、
<http://justice.skr.jp/documents/nocciolo.pdf>、
 - ・倉橋耕平「官製歴史修正主義」青弓社ライブラリー 2018 年、114-120 頁
 - ・慎蒼宇「植民地「戦争」の視座から見た近代日本の「戦争」大原社会問題研究所 2022、1-5 頁。
 - ・田中正敬「近年の関東大震災史研究の動向と課題—現在までの十年間を対象に」関東大震災 80 周年記念行事実行委員会編『世界史としての関東大震災』日本経済評論社 2020 年 283 頁。
 - ・千々和泰明『戦後日本の安全保障』中公新書 2022 年、南前掲書 167 頁。
 - ・中塚明『現代日本の歴史認識』高文研、2007 年、182-224 頁。
 - ・朴俊相『天皇制国家形成と朝鮮植民地支配』人間の科学社、2003 年 80-81。姜在彦『日帝下 40 年』ドンニョツ出版 1984 年 144 頁。車基壁「日帝の韓国植民統治」車基壁編『日本帝国主義植民政略の形成背景とその展開過程』正音社、1985 年、27 頁。
 - ・前田朗「私たちはなぜ植民地主義者になったのか」、木村朗・前田朗『ヘイト・クライムと植民地主義』三一書房 2018 年、8-9 頁
 - ・南基正「封印された歴史」『世界』2023 年 8 月号 161-167 頁。
 - ・森山茂徳『日韓併合』吉川弘文館 1992 年 113-120、202-204 頁。
 - ・山田朗『昭和天皇の戦争認識』新日本出版社 2023 年 151-154 頁。
 - ・吉澤文寿「日本における植民地主義の現在—外国人参政権問題を中心に」現代韓国朝鮮研究第 10 号、2010 年 2 頁。
 - ・李泰鎮『東大生に語った韓国史—韓国植民地支配の合法性を問う』明石書店 2006 年 160-184 頁。
 - ・李泰鎮「19 世紀韓国の国際法受容と中国の伝統的関係清算のための闘争」笹川紀勝編著『国際共同研究韓国併合と現代—歴史と国際法からの再検討』明石書店 2008 年 124 頁。
 - ・和田春樹「韓国併合 100 年と日本人の課題」『韓国併合 100 年の現在』東方出版 2010 年 85 頁。

書評

中戸祐夫・森類臣編著『北朝鮮の対外関係』

(晃洋書房、2022 年)

三村光弘 (新潟県立大学北東アジア研究所)

本書は日本と大韓民国（以下、韓国とする）の 9 名（序章を入れると 10 名）の主として若手、中堅研究者の、朝鮮民主主義人民共和国（以下、朝鮮とする）の対外関係についての論攷を集めたものである。「まえがき」によれば、前著の『北朝鮮研究の新地平——理論的地域研究の模索——』と本書は一つのプロジェクトとして出発したが、前著は主として政治学を中心とするディシプリンを重視し、本書は地域研究の課題を追求することになったとしている。

本書は中戸祐夫による「序章 北朝鮮の対外関係をどう研究するか」に続き、第Ⅰ部「対外政策と国際認識」に第 1 章として金泰敬「1950 年代の北朝鮮における「平和共存」言説——ソ連の「平和共存」路線の受容と軍縮の努力——」、第 2 章として曹燦鉉「文在寅—金正恩時代の南北関係——短かった雪解け、再び凍結——」、第 3 章として張瑛周「ウラン濃縮を巡る北朝鮮の対米核交渉—宣言—証明—合意—」、第 4 章として李敬和「国際社会の人権圧力に対する北朝鮮の外交」、第 5 章として宮塚寿美子「北朝鮮と台湾の関係——海外派遣労働者を巡る問題を中心に——」が収録されている。また、第Ⅱ部「文化外交・ソフトパワー」に第 6 章として許在喆「メディアを活用した中朝関係研究」、第 7 章として宋基榮「北朝鮮における体制維持のためのスポーツ活用の特徴について——金日成・金正日・金正恩体制を中心に——」、第 8 章として長澤裕子「金日成唯一支配体制期の学術定期刊行物と「1965 年体制」批判」、第 9 章とし

て森類臣「万寿台芸術団の対日文化外交——芸術と宣伝扇動の相克——」が収録されている。

序章は朝鮮の対外関係をどのような方法論で研究するかについて論じている。筆者の中戸は国際関係理論を主たるディシプリンとし、朝鮮とも韓国とも幅広く交流している朝鮮半島問題の碩学であるが、朝鮮の対外関係を分析するための方法論について現在進行形で悩みつつ、研究を進めていることが吐露されている。また、韓国での「北韓研究」の方法論の特徴を紹介しつつ、同じ事象を複眼的に見て記述することの重要性についても指摘している。

朝鮮研究、特に社会科学分野においては、資料的制約から他地域の同様の研究との比較可能性を有する、一定のディシプリンにもとづいた研究を行うことができる分野は多くない。それが研究成果を出しづらい結果を生み出し、この分野に研究者が新規参入をためらう原因となっている。多くの若手研究者を叱咤激励しつつ、ともに歩んできた中戸が、この問題を深刻にとらえるのは、朝鮮半島研究、特に朝鮮研究を一つの学問分野として確立させようとする努力がゆえに他ならない。

第 1 章、第 8 章は朝鮮労働党機関紙『労働新聞』や学術研究機関の刊行物を丹念に調査し、問題に迫ろうとしている。前者は 1950 年代の社会主義圏「平和共存」言説、後者は 1950 年代後半から 60 年代中盤の「1965 年体制」批判を取り扱ったものであるが、当時の朝鮮国内で出版された書籍や公文書館の資料を豊富に利用できない制約のた

め、報道や学術刊行物の内容から当時の議論を推測するものとなっている。仮説の設定に至るまでにどれだけの時間がかかったのか、その苦労が忍ばれる。前者については、ソ連の「平和共存」路線の受容が、1955年2月の南日外相の日本に対する貿易や文化交流を通じた友好関係の確立の呼びかけにもつながっており、日朝関係を研究する研究者が学ぶことも多い。朝鮮戦争後の「廃墟からの復活」がこの時代の朝鮮の人々の心にどのような影響を与えていたのかも含めて、この時代の雰囲気を立て的に知ることができる。今後の研究の発展に期待したい。

第2章、第3章、第4章は比較的最近の問題を取り扱った論攷である。

第2章は、文在寅政権期の南北関係をつぶさに検討したものとなっており、特に韓国がおかれた苦しい立場とそれが朝鮮にどのような印象を与え、朝鮮の対南姿勢を変化させるのかについて分析している。第2章の立場からすれば、2023年12月に開かれた朝鮮労働党中央委員会第8期第9回総会拡大会議や24年1月に開かれた最高人民会議第14期第10回会議での対南関係の全面的見直しは、必然的なものであったということになろう。

第3章は2002年の第1回日朝首脳会談直後の米国のケリー国務次官補の訪朝以降表面化した、ウラン濃縮をめぐる朝鮮の対米核交渉の「技法」について史料を丁寧に分析し、それが「宣言→証明→合意」であり、米国を交渉のテーブルに着け、自国の主張を認めさせようとするところにあるとしている。そしてこれはこの時だけにとどまらず、朝鮮の核を巡る対米交渉のスタイルであるとしている。この知見が今後の米朝交渉を見るときにどのように役立つのか、知りたいことが次々と出てくる良著である。

第4章は、国際社会の人権圧力が朝鮮の外交にどのような影響を与えたのかについて朝鮮の人権概念の成立過程や変化、2013年の朝鮮に対する人権に関する国連調査委員会（COI）の成立と14年2月のCOI報告書の発刊以降の国際社会の強い圧力下での変化について分析を行っている。そして、

人権問題に対して強硬と融和の外交的対応を混在させているとし、その理由について2つの仮説を提示している。現在、ガザのパレスチナ人に対するイスラエルの人道を無視した戦争遂行を米英欧が支持することによって、西側社会の人権に対する二重基準が露呈し、人権外交自体の基礎が崩壊の危機にあるが、朝鮮はこのような変化に対してどのような対応を見せるのか、続編を期待したい。

第5章は、これまであまり注目されてこなかった朝鮮と台湾の関係を、派遣労働者問題を切り口に論じている。台湾での関係者へのインタビューや韓国でのいわゆる「脱北者」とのインタビューなどを通じて問題を明らかにしていく手法は活動的で、読んでいて非常に楽しい。問題点としては、事実を証明する証拠が若干弱いことと、表記に誤りが散見されることである。もし本文や図5-5の内容の校正について、もう少し細部にわたった注意を行っていれば、より読みやすく、信頼性のおける作品となったであろう。

第6章は主に中国メディアや中国のインターネット空間、中朝両国のニュースメディア、その他のメディアについて、先行研究の方法論を踏まえながらテキストマイニングなどの分析を試みたものである。中国のインターネット空間は、突然一定の表現が削除されることがあるなど、流動的な要素が多い。このようなインターネット空間をどのように取り扱うかについては今後もさまざまな試みが行われていくであろうし、テキストマイニングについては朝鮮メディアもインターネットでの公開が増えている。さらに方法を洗練させていくことによって、分析を行う上での重要なツールとなることを予感させた。

第7章と第9章は、スポーツ活動や芸術が、対内的あるいは対外的宣伝においてどのように用いられているかを分析したものである。社会主義国家における宣伝は、体制を維持、強化するための重要な政策手段としてとらえられており、これらについての研究は、朝鮮の対内、対外政策を分析する上で必須のものである。対内政策一般、外交一般ではなく、個別分野に立ち入った研究が増え

てきていることは、朝鮮研究の幅を拡げ、他の国や地域の研究との比較可能性を高める上でも重要な研究である。

第7章はスポーツ活動が体制宣伝や外交にどのように利用されてきたのかを金日成政権期から金正日政権期、そして金正恩政権期を通じて分析している。朝鮮のスポーツ活用の国際的側面を清国末期の「中体西用論」に類似した「朝体西用論」であるとしているのは、2024年に入ってサッカー試合を巡る往来が国境閉鎖終了を予感させる一種の「信号」となっていることを鑑みると、本質を突いた情勢認識であると感じられた。

第9章は、1973年8月～9月の万寿台芸術団の日本公演を題材とし、これを朝鮮の公共外交（パブリック・ディプロマシー）のいわば嚆矢であるとしつつ、この日本公演がもつ朝鮮の対日文化外交上の意味を明らかにしようとしたものである。万寿台芸術団の日本公演の映像は、朝鮮国内において今でも繰り返し用いられ、その意味で、朝鮮国内でも公共外交の成功例として捉えられている可能性が高い。この公演の準備段階から公演終了までの一部始終を史料を活用して明らかにし、その上で結論的に4つの知見を披露している。史料の内容と結論の間には齟齬はなく、周到かつ無難な分析であるが、筆者は一次資料の不足を繰り返し指摘している。

評者は元々、朝鮮の海外直接投資受け入れに関する法規を中心に、外国法、比較法研究から朝鮮研究を志したが、最初に就職した職場が主として経済を研究する研究所だったため、朝鮮経済も一緒に研究することになった。朝鮮は1960年代中盤以降、基礎的な統計数値の発表を止めてしまい（木村、1998:2）、一般的な経済学的手法を使うことが非常に難しい。朝鮮が時系列データを公開していない以上、推計値を利用した分析の信憑性がどこ

まで保証されているのかという問題が常に問われることになる。韓国には計量経済学的手法を活用する研究が増えてきているが（이석 편, 2022）、これらも貿易などある程度客観的な数値が入手可能な分野では説得力が高いものの、そうでない分野ではどうしてもデータの信憑性を問われてしまう。したがって、評者も地域研究をベースとした朝鮮経済研究を行っており、同業者との交流は容易であるが、中国、東南アジア、南アジア、中東、アフリカ、ラテンアメリカなど他地域を研究する研究者との研究成果の共有が難しいという問題点に直面している。

本書は各章の内容もさることながら、前著の『北朝鮮研究の新地平——理論的地域研究の模索——』と合わせて検討したとき、朝鮮研究の方法論をどのように確定、発展させていくのか、という大きな問いに答えようとするあまり、パンドラの箱を開いてしまったベテランと中堅のふたりの編者の試行錯誤のナイーブさと、その中で機会を得て、自らの研究をしぶとく発展させていく若手が8人もいる事実が対照的であった。評者としては、大変面白くもあり、心強く感じもした。2020年代中盤の日本と韓国における朝鮮研究の幅の拡がりを知るために、ぜひ一読をお勧めする。また、後進の指導のためにも各大学の図書館にはぜひ備えていただきたいと思う。

参考文献

木村光彦（1998）「北朝鮮経済の分析方法：文献と統計」
一橋大学経済研究所 Discussion Paper No. 97-15
（オンライン版は https://www.ier.hit-u.ac.jp/COE/Japanese/discussionpapers/DP97.15/97_15.html から入手可能）

이석 편 [イ・ソク編]（2022）『새로운 대북정책과 남북
경제협력의 모색 [新たな対北政策と南北経協の模索]』
서울：한국개발연구원 [ソウル：韓国開発研究院]

朴一『在日という病——生きづらさの当事者研究』

〔明石書店、2023 年〕

金友子（立命館大学）

「在日という病」とは、いかなる病なのか。誰にどのような症状を引き起こす（影響を及ぼす）病なのか。最初に本書を手にした時に、少々ドキっとした。「在日」の存在自体が（日本社会の）病であるかのようなタイトルだからである。この世で起こる悪いことは全てザイニチやチョーセンのせいだとか、「在日認定」などというコトバが溢れる今の日本社会で、このタイトルは刺激的である。

本書の著者、朴一さんといえば、言わずと知れた在日エンターテイナー、いや、経済学者である。アジア経済論、国際労働移動、朝鮮半島地域研究を専門としつつ、在日朝鮮人や日韓・日朝関係に関しても多くの本を著している。とりわけ在日朝鮮人に関しては『〈在日〉という生き方』（講談社選書メチエ、1999 年）をはじめとして『「在日コリアン」ってなんでんねん?』（講談社+α新書、2005 年）、『僕たちのヒーローはみんな在日だった』（講談社、2011 年、後に講談社+α文庫）、『在日マネー戦争』（講談社+α新書、2017 年）がある。これまでは在日朝鮮人という集団について、あるいは特定の人物について書いてきた著者が、自らの人生を題材に書いたのが本書である。

書評と言えば詳しい内容紹介が付きものであると思われるが、「ユーモアを交え、ウィットに富んだ」朴一さんの語りはテレビやラジオだけでなく本書でも発揮されており、評者が内容のまとめをするとその輝きが失われてしまう。したがって、内容については概要を記すにとどめて、評者が興味深く感じたことと、疑問に思ったことを書くこと

で書評に代えたい。なお、以下では「在日朝鮮人」という用語とともに朴一さんの使用する用語に合わせて、「在日コリアン」ないし「在日韓国人」と表記する。

「プロローグ——本書の問題意識と分析の枠組み」では、外国人労働者の受け入れを推進していくであろう日本の現状を考える際の参照項として在日コリアンの経験の重要性が述べられる。また、記述の際の理論的枠組みとしてライフヒストリー研究と当事者研究を用いると説明される。この二つのアプローチのうち、当事者研究については少々疑問を感じたので後述する。

第1章から第10章まで、朴一さんの人生が、その出生から語られている。軸となるのは在日コリアン全体が被ってきたといえる差別と排除、そしてアイデンティティをめぐる問題である。少年時代に感知した在日韓国人に対する周囲の「あまりよくない感情」、国際結婚（日本人との結婚）、就職差別、指紋押捺、国籍条項、参政権問題は、いわゆる「在日朝鮮人問題」のなかでも典型的な差別・排除の事例である（このうち国際結婚については朴一さんはおそらく経験していないので、聞きした他者の経験である）。名前と本名宣言、母国である韓国滞在で感じる「日本人でもなければ韓国人でもない、在日」としての自己についての語りは、アイデンティティ問題が語られる際の定型的な語り口であるようにも思われる。ここで言いたいのは、典型的だから良くないとか、定型的だからつまらないとかいうことではない。状況を

生きてきた在日朝鮮人一人一人の具体的な経験は、やはり重要である。個々の「問題」「病」というタイトルに合わせて「症状」というべきか？）に対して、その人がどのように処してきたのか——葛藤し、落胆し、努力し、闘い、乗り越えてきたのか——は、それが個人の努力であれ集団的な行動であれ、また、勝ち取られた成果が個人的なものであったとしても、そうして切り開かれた道は同じような境遇を生きる他者にも開かれることになる。たとえば評者は朴一さんよりも後に生まれた在日朝鮮人三世であるが、私が指紋押捺をしなくて済んだのは先人たちの闘いのおかげである。「特別永住者」という安定した在留資格をもって日本で暮らせていることもまたしかりである。言葉にすると陳腐だが、こうして道を切り開いてきた人びとがいるからこそ、在日朝鮮人の（あるいは私自身の）現在があるのだと思うと、尊敬の念を抱かざるを得ない。

本書の良いところは、朴一さんの経験もそうであるが、他にも幾人かの登場人物がいて、どれも一人の人間の経験として書かれている点である。ライフヒストリーの聞き書きや在日朝鮮人問題の解説書はもちろんこれまでに多数出版されているが、本書はその両方が合わせて書かれている。経験が述べられた後に、その経験が生み出された、あるいはその経験を強いた歴史的背景や社会状況が記述されているので、制度的・構造的差別が個人に具体的にどう振りかかるのかがよく分かる。だからこそ、本書に書かれたことは朴一さん個人の経験ではあるが、同じような青春を過ごしたであろう幾多の在日朝鮮人の姿が浮かび上がるのである。その意味で、在日朝鮮人や在日朝鮮人「問題」について学べる好書である。また、ですます調の平易な文章なので取っつきやすく、特に学生に勧めたい一冊である。もちろん、朴一さんがどんな人なのかを知りたいという人にはうってつけの本である。評者は本書から、朴一さんが物凄い努力の人であることを（改めて）知った。

他方、いくつか引っかかりを覚えた部分もある。

第一に、当事者研究というアプローチである。結

論から言うと、当事者研究という枠組みが活かされていないように思われた。強い表現になるが、寡奪・消費してしまっているのではないか、とも感じられたのである。

本書の導入部分で朴一さんは、当事者研究について、べてるの家（精神障害を抱えた人々の地域活動・生活拠点）の事例に言及しつつ「このアプローチは一人一人が自分自身の困り事や生きづらさについて研究者になり、周囲の仲間と語り合うことで、問題への理解を深めるとともに、問題解決の方法を探求していくという研究アプローチ」であると述べる（10頁）。そして「この本は、こうした「当事者研究」やライフヒストリー論の手法を取り入れながら、在日の当事者である私がこの六五年間に、在日コリアン三世として、日本や母国で感じた「困り事」や「生きづらさ」、あるいは私が日本で体験したエスニック・コンフリクトを赤裸々に記録したものです」（11頁）と述べる。また、「あとがき」では、大学で経済学を講義しながら民族問題についても教えるという「二足の草鞋を履くことを余儀なくされる過酷な研究・教育条件を突き付けられ、ずいぶん悩んだが、「当事者研究」という魔法の言葉に私は負けてしまった。北海道の精神障害者施設「べてるの家」で「当事者研究」に出会ってから、「当事者研究」の可能性を感じたこともあったが、何よりも、「在日コリアンの問題について当事者が研究しなくて誰がする」という気持ちが私を突き動かした」（191-192頁）とも述べている。

べてるの人々は自らの精神疾患や症状に名をつけ（＝外在化し）、自分を困らせているのは幻聴さん（本書では「難聴さん」になっているが間違いではないだろうか）の仕業であるから、幻聴さんとの付き合い方を考えることで、問題の「解決」を図ろうとする。「研究」の対象とすることで語りにくいことも語りやすくし、他の人びとと話し合うことでつながりを回復するという意義と、専門知を否定はしないが専門家に知を専有させずに自分たちが研究者となって課題の「解決」を目指すという意味がある。この「解決」は、必ずしも幻聴

さんがなくなることを目指さず、自分からそう簡単に引きはがせないがゆえに、付き合い方を考えたり、むしろそれと付き合っ^てあげたりする、そうした折り合いのつけ方を学び、周囲と共有することを指す。つまり、「問題」と付き合い続けるという点と、他者と共におこなう共同研究という点が当事者研究のエッセンスである。

本書がこのような当事者研究のかたちをとるのであれば、著者が本書を記述してそれを読者が読むことは「語り合う」こと、すなわち「共同研究」が生まれる余地は出てくるかもしれない。では、困り事や生きづらさといった「問題」の「解決の方法を探求」する作業はどうなるのだろうか。そして、在日コリアンの困り事や生きづらさの外在化を今改めてする意味は何だろうか。朴一さんが経験した生きづらさは差別と排除であり、それらはそもそも法や制度、構造的・私的差別によってつくられる。もちろん、差別の内面化という側面がないわけではないし、朴一さんも言及しているように、「在日コリアンという出自や国籍の違いをめぐる葛藤」は在日朝鮮人一人一人の生に大きな影響を与えてきた。しかしこれもまた、基本的には社会が引き起こす問題として提起されてきたと思う。本書が示唆するように、この病は、いつまで経っても異質な（異質と看做した）存在を受け入れようとし^{ない}「日本」が患う病なのだから。とすると、在日朝鮮人に困り事を引き起こす何か・誰かを名付けたとして、何さんになるのだろうか。日本帝国主義さん？ 植民地主義さん？ 自民族中心主義さん？ 同化主義さん？ それでは、この「問題」の解決方法はどのようなものだろうか。これと今後も付き合っていきたいか？ すぐさま消えてなくなるわけではなさそうなので、付き合い^{ねば}ならないのは確かであるが、付き合い続けたいかと言われれば「否」である。

当事者研究という枠組み／方法（論）は、「困りごと」がゆえに社会から切り離され疎外されてきた人びとが編み出した方法であるだけに、それを簡単に使うことは消費や寡奪にならないだろうか。記述のスタイルや「問題」の質的差異のため

ではあるだろう。在日コリアンである朴一さんが書いたという点で当事者が当事者について語っているし、そこに解釈や分析も付されてはいるが、朴一さんが当事者研究に感じた熱い思いに比して、物足りなさを感じざるをえなかった。

第二に、少々驚いたのは、在日朝鮮人を「移民労働者」という用語で説明している部分である。「現在、日本の外国人労働者の受け入れ先は、中国、ベトナム、フィリピン、インドネシアなどのアジア諸国が圧倒的な割合を占めていますが、日本がアジアから労働者を大幅に受け入れたのは、今回が初めてではありません。一九一〇年から四五年度の三六六年間にわたって、日本は当時の植民地であった朝鮮半島から二〇〇万人近い移民労働者を受け入れた経験があります。」（9頁、傍点は評者）

この部分について、在日朝鮮人は強制連行によって連れてこられた人々とその子孫なのだから、「移民」と書くのは不適切だ、と言いたいわけではないし、植民地主義・帝国主義の状況下での人間の移動の全てが「強制」であったと言いたいわけでもない。自発性を多分に含みそうな「移民」という言葉は、在日朝鮮人の歴史を語るときに避けられてきた。それがサラッと使われていることに驚いたのである。現在の外国人労働者との接点を強調するためにこの用語を使っ^たように見受けられるが、あるいは、実質的には移民だったのだからそろそろ認めようということなのか。著者に聞いてみたい部分でもある。

第三は、朴一さんの出自にかかわることで、触れてよいのか不安な部分でもある。朴一さんは自分を生んだ母は日本人だったと本書で告白している。それも「愛人だった」ときちんと言っている。言うのにと^{ても}勇気が要ったと思うし、母の痕跡を残すにはこれで精一杯だったかもしれない。しかし、「韓国」（父の側）にしかアイデンティファイしなかったのはなぜですか、と素朴に問うてみたい。ナニジンとして育てられるかを幼少期に選ぶことができないのは誰もがそうであるが、父の血を引いたという自己認識なのか、周りがそのように（子どもは父のもの）と扱ったからだろうか。

当時の国籍の父系血統主義のせいだろうか。それとも愛人という立場がゆえに母親（あるいは母の血筋）は家族や一族のなかで消去されたのだろうか。父と母のどちらかが日本人である在日コリアンのアイデンティティについて、そう簡単なことは言えないし、評者は言える立場にない。ただ、消去されているのが女性（の側）であるがゆえに、余計に気になってしまったのである。こうして女は消されていくのかもしれない、と。ないものねだりではあるが、ここには在日朝鮮人コミュニティ内部の「病」が潜んでいるのではないかと思うし、

この種の「病」にも迫って欲しかった。

以上、批判めいたことばかり述べてきたが、本書が在日朝鮮人の身に降りかかる困難を記述した書籍として良書であることに変わりはない。人生の重要な瞬間に「あなたはこの国の、この社会のメンバーではない」と告げられてきた在日朝鮮人の経験は、すでにその後に来た人びとに繰り返されている。これから来る人びとが、さらに繰り返し生きづらさを抱えないで済むように、ぜひとも読まれるべき一冊である。

国際高麗学会日本支部

2023 年度

学会活動

●第 17 回 理事会

日 時：2023 年 6 月 9 日（金）18:00 ～ 19:00

会 場：オンライン

●国際高麗学会日本支部 第 27 回学術大会

日 時：2023 年 6 月 10 日（土）10:00 ～ 17:00

会 場：大阪公立大学梅田サテライト+オンライン

【第一部】10:00 ～ 11:30

◎自由論題発表 第 1 部会

1. 加藤恵美（帝京大学）「地域の視点から民闘連運動を捉えなおす：創成期に焦点を合わせて」
2. 鄭栄鎭（大阪公立大学）「地域の視点から民闘連運動を捉えなおす：一地域の視点から」
3. Chris H. Park（Hitotsubashi University）「1970 年代アジア反経済成長運動と在日朝鮮人の第三世界主義」

◎自由論題発表 第 2 部会

1. 荻部真也（東京大学総合文化研究科地域文化研究専攻）「植民地支配期以降の朝鮮半島からの「密航」研究の展望」
2. 孫長熙（大阪大学）「1968 年前後のフォーク・ソングの「民衆」における朝鮮の欠落と排除」
3. 韓光勲（大阪公立大学大学院文学研究科、日本学術振興会特別研究員）「関東大震災時の朝鮮人虐殺の記憶はなぜ継承されたか—1980 年代の日本における市民運動を中心に」
4. 文光喜（愛知朝鮮学園）「徴用工裁判から見えるもの—歴史認識の壁は乗り越えられるか」

◎自由論題発表 第 3 部会

1. 李鉉淑（コリア国際学園）「学習者の多様な言語・文化を可視化する試み」
2. 金希妍（東京大学大学院総合文化研究科）「文化横断研究の観点からみる文化と民族の関係性について：日本の剣道を修行する在日朝鮮人の事例からの考察」
3. 劉賢国（筑波技術大学）「朝鮮王朝版 明朝体活字の誕生（1684-1884）」

◎第 27 回 総会 12:30 ～ 13:00

【第二部】13:00 ～ 17:00

シンポジウム「アーカイブの中の『在日』」

〔パネリスト報告〕

李成市（在日韓人歴史資料館館長、早稲田大学前教授）「在日韓人歴史資料館」

伊地知紀子（大阪コリアタウン歴史資料館副館長、大阪公立大学）「場所の記憶が未来の光源となる—大阪コリアタウン歴史資料館の試み—」

金哲秀（朝鮮大学校朝鮮問題研究センター長、教授）「朝鮮大学校朝鮮問題研究センター付属在日朝鮮人関係資料室の所蔵資料について」

全ウンフィ（ウトロ平和祈念館展示運営部会、大阪公立大学）・孫片田晶（ウトロ平和祈念館展示運営部会、立命館大学）「出会いの場を残し、発信する—ウトロ平和祈念館」

〔討論〕

金仁徳（韓国 青巖大學校在日コリアン研究所所長、教授）

朴一（大阪市立大学名誉教授）

司会：金友子（立命館大学）

●人文社会研究部会

第 103 回人文社会研究部会・済州の墓土問題研究会・大阪コリアタウン歴史資料館合同研究会

日 時：12 月 16 日（日）18:00

会 場：大阪コリアタウン歴史資料館

タイトル「墓を通じた在日済州人と故郷とのつながり」

講 師：高村竜平（秋田大学）

第 104 回人文社会研究部会

日 時：2024 年 2 月 29 日（日）15:00 ～

会 場：キャンパスプラザ京都+オンライン

タイトル：韓国における 8 月 15 日の文化的記憶—1990 年代から 2000 年代半ばにかけての国家記念事業と保守陣営内の歴史認識の変遷を中心に—

講 師：パトリック・フィアターラ（京都大学大学院文学研究科博士後期課程）

●科学技術研究部会

第 85 回科学技術研究部会

日 時：2024 年 2 月 17 日（土）16:00 ～

会 場：オンライン

報告者：任翔堧

タイトル：「博士が民間企業で活躍するには」

●その他

勝村誠教授・鄭雅英教授 退任記念講演会

日 時：2023 年 4 月 15 日（土）14：00～17：00

会 場：立命館大学いばらきキャンパス

講 演：勝村誠（立命館大学）「一国史を越える政治外交史の模索」

鄭雅英（立命館大学）「私の中途半端な履歴書」

1. 投稿資格

国際高麗学会日本支部は、学会誌『コリアン・スタディーズ』を年1回発行する。掲載される原稿は、朝鮮半島および朝鮮民族に関するあらゆる分野の学術的な論文、研究ノート、書評論文、キルチャビ、書評である。論文、研究ノートについては、国際高麗学会日本支部会員は自由に投稿できる。投稿については、寄稿規定並びに執筆規定を熟読すること。ただし、当該年度までの会費納入を要する。投稿論文は常時受け付ける。また、編集委員会で企画する特集については、非会員にも寄稿を依頼することがある。

2. 各論文の種別

- a. 論考：編集委員会で決定した特集テーマにより、編集委員会からの依頼によって執筆されたもの。
- b. 投稿論文：研究の対象・方法あるいは結果に独創性や新規性を有し、既存の研究・学術知に対し新たな知見を示し、「コリア学」の発展に期するもの。掲載にあたっては査読を要する。なお、査読の結果、「研究ノート」としての掲載を求めることがある。
- c. 研究ノート：研究の中間報告の水準であるもの。あるいは、独自の学術研究、調査、事例などをまとめたもの。掲載にあたっては査読を要する。
- d. キルチャビ：独自の学術研究、調査、事例などをまとめ、独創性、有用性などから会員が広く関心を持つと思われるもの。
- e. 寄稿：上記に含まれないが、編集委員会が掲載を認めたもの。

3. 投稿条件

投稿される原稿は、未発表の書き下ろし原稿のみとする。同一原稿を『コリアン・スタディーズ』以外に同時に投稿することはできない。

4. 審査

寄稿された原稿を掲載するか否かは、別途定める査読規定に基づいて編集委員会で審査の上決定する。

5. 使用言語

本文は日本語のみとし、注および参考文献に限り外国語を使用できる。要旨およびキーワードは日本語および英語とする。

6. 枚数

原稿枚数は400字詰め原稿用紙換算で50枚以内とし、本文（タイトル、氏名含む）、注、参考文献、図表を含めたものとする。論文には、日本語要旨、英語要旨およびキーワード（日本語および英語）を付けることとする。ただし、いずれも枚数には含まない。枚数を超過した場合、審査対象としないこともあるので、下記を確認すること。

論文	50枚以内＋日本語要旨（400～800字）、英語要旨（800～1000語）＋キーワード（日本語および英語）
研究ノート	50枚以内
キルチャビ	20枚以内
書評	5～15枚

7. 投稿形式

投稿は原則として電子文書とし、マイクロソフト・ワード形式かリッチテキスト形式で作成したものを投稿規定10にある提出先のE-mailアドレスに送付すること。図表や写真は可能な限り本文中に挿入すること。マイクロソフト・ワード形式かリッチテキスト形式以外での提出については、投稿規定10にある問い合わせ先に連絡すること。必要に応じて印刷された原稿の郵送を求めることがある。

8. 校正

校正は原則として著者校正のみで、内容のみならず、投稿規定および執筆規定に則った形式に訂正することも校正作業に含まれる。審査により採用決定となった後に行われる初校段階での誤植以外の修正は原則として認めない。なお、再校は初校段階の訂正を確認するだけの作業となる。

9. 原稿の保管

投稿原稿の保管や取り扱いについては編集委員会が責任を負う。

10. 提出先および問い合わせ

投稿原稿の提出および問い合わせ先は以下のとおり。

国際高麗学会 日本支部事務局 E-mail isksj@isks.org

また、執筆申込書、執筆規定等は以下に掲載する。

『コリアン・スタディーズ』Web サイト：<https://isks.org/japan/koreanstudies>

11. 著作権

投稿された原稿の著作権は国際高麗学会日本支部に所属するが、原著者が『コリアン・スタディーズ』に掲載された当該論文を自著作の単行本や論文集に再掲載することは妨げない。

12. オンラインでの公開について

『コリアンスタディーズ』は、学会ホームページ (<https://isks.org/japan/koreanstudies>) 上でオープンアクセスにて公開する。執筆者は、そのことを承諾のうえで投稿すること。

(2022 年 6 月 2 日)

国際高麗学会日本支部学会誌『コリアン・スタディーズ』 執筆規定

2020 年 6 月 19 日一部改訂

1. 本文

(1) 基本用語

- 原稿は日本語、横書きとする。図表や図版は原稿本文に組み込み、紙幅の制限内に含める。
- 朝鮮、中国に関わる人名・地名は漢字（日本の現代漢字も可）で表記し、漢字不明の場合はカタカナ表記とする。欧米由来の度量衡はカタカナ表記とする。

(2) 数字

- 数字はアラビア表記を原則とし、場合に応じて漢数詞を用いる。
- 年号は西暦を用い、国家・地域固有の年号を使用する際は西暦を（ ）で付記する。

(3) 見出し

- 章はアラビア数字で 1. 2. 3…と表す。「はじめに」と「おわりに」（あるいはそれ等に該当する見出し）にも数字を振る。「はじめに」は 1 とする。
- 章以下の節は (1)、(2)、(3) の順で表す。
- 節以下の項は a、b、c の順で表す。

(例)

第 1 章⇒ 1、第 1 節⇒ (1)、第 1 項⇒ a

2. キーワード

論文、研究ノートには日英 5 語以内でキーワードを付けること。キーワード間は読点ではなくコンマを入れること。

3. 文献引用

- (1) 本文や注、図表で文献を表記する際は、編著者の姓（刊行年：ページ）のみ表記し、文献の詳細は参照文献リストに表示する。朝鮮人の名は姓名とも表記する。編著者名が付いていない刊行物の場合は、発行機関名を表記する。

(例) 文献全体を示す場合

鈴木 [2005], 朴統一 [2011] によれば・・・

文献の一部を示す場合

…投票率は低かったとされる [キムハヌル 2012: 11-13]。

- (2) 2 度目以降の引用でも前掲書・前掲論文、同上書・同上論文などの用語は使用せず、上記 (1) のように表記する。
- (3) 新聞・雑誌記事や社説の場合は本文・注・図表に新聞・雑誌名、発行年月日を記した上で、参考文献リストに新聞・雑誌名を入れる。

(例)

…保守言論による歪曲は深刻である [『月刊朝中東』 2001 年 1 月]。

…と指導者は発言している [『労働新聞』 2012 年 4 月 16 日]。

4. 注

- (1) 注は、本文の内容について文脈上の解説や言及をする必要がある場合に用いる。
- (2) すべて文末注とし、片カッコ付アラビア数字で表示する。

(例)

1)、2)、3)・・・

5. 図表

- (1) 図表のタイトルは、図の場合は図の下に、表の場合は表の上に付ける。
- (2) 刷り上がり 1/2 ページ大の場合は 500 字分、刷り上がり 1/4 ページ大の場合は 250 字分として換算する。

6. 参考文献

- (1) 本文、注記、図表で用いたすべての文献を「参考文献」として本文の最後に一括して表示する。参考文献とは、本文中または注において引用した文献を指す。
- (2) 文献リストは言語ごとに分け、日本語文献は著者名の 50 音順、韓国・朝鮮語文献は著者名のカナダラ順などに並べる。
- (3) 参考文献については、著者名・(刊行年)・書名・号数（発行年月日を入れてもよい）・発行所・頁等で示す。筆者名のある新聞・雑誌記事は雑誌論文と同様に表記し、発行年月日も記入する。
- (4) 英文文献の場合、書名はイタリックで表記する。論文名は単行本所収か雑誌所収かに関わらず一律クォーテーション・マークで括る。

(例)

単行本の場合

・ 朴一 (2005) 『朝鮮半島を見る眼－「親日と反日」「親米と反米」の構図』藤原書店、pp.123-125

・ 이광우 (2004) 『신경과학』 범문사, pp.153.

・ Kim, L. (1997). *Imitation to Innovation: The Dynamics of Korea's Technological Learning*. Boston: Harvard Business School Press.

論文の場合

・ 文京洙 (2005) 「戦後 60 年と在日朝鮮人“国民”の呪縛を超えて」『思想』 No.980、岩波書店、pp.8-9

・ 김신일 (1991) 「교육자치의 당위성과 현실」『교육학연구』 Vol21, 교육출판, pp. 11-18.

- ・ Min, Pyong Gap. (2001). "Koreans in New York: An 'Institutionally Complete' Community." *New Immigrants in New York*, edited by Nancy Foner, New York: Columbia University Press, pp.173-200.
- ・ Koh, Y.S. (2008). "Financial and Corporate Reform in Korea: Survival Strategies of the Korean "Chaebols"", *Asian Studies*, 54 (2), pp.71-88.

7. 論文タイトル

日本語および英語でつけること。

編集後記

今号の特集は、第27回学術大会「アーカイブの中の「在日」」をもとにしたものです。100年以上の間、日本各地で在日の生の営みが繰り返されてきました。資料として残ったものもあれば残っていないものもあり、それらも含めて次代に継承していくことは、いまを生きる者の大きな課題です。かくいう私も、所属する団体の劣化していく資料をどう保存し、活用すべきかなどで頭を悩ませています。今号の特集に寄せられた各地の取り組みは、在日の歴史を次代へと継承していく手がかりになるものです。原稿をお寄せいただいたみなさんにここであらためてお礼を申し上げます。

次号13号の投稿しめきりは9月末日の予定です。
多くの投稿をお待ちしております。 (鄭栄鎮)

『コリアン・スタディーズ』編集委員

鄭栄鎮 (編集委員長)

文京洙

高正子

朴一

鄭雅英

蔡徳七

裴光雄

伊地知紀子

森類臣

全ウンフィ

洪ジョンウン

岡崎享子

金友子

孫片田晶

コリアン・スタディーズ

第 12 号

Korean Studies No.12

頒価 1,000 円

2024 年 6 月 1 日 発行

編集・発行団体 国際高麗学会日本支部

〒 530-0047

大阪市北区西天満 4 丁目 5-5

マーキス梅田 506 号

TEL 06-6314-3775

FAX 06-7660-7980

E-mail isksj@isks.org

発行者 国際高麗学会日本支部会長 伊地知紀子

編集代表者 鄭栄鎮

装丁 金文男

制作 株式会社 田中プリント

Korean Studies
Vol.12 2024

Feature Articles : "Zainichi" in the Archive

- Toward the Succession of History, Memory, Culture and Story..... Noriko IJICHI
"The History Museum of J-Koreans" as Archive: Past, Present, Future LEE Sungsi
Local Memories Illuminates Our Future—Experimente by Osaka Korea Town Museum
..... Noriko IJICHI
Regarding the Reference Room on Korean Residents in Japan in affiliation with Korea
..... KIM CHOL SU
Inheriting Utoro's Movement: Utoro Peace Museum, "Where We Meet"
..... JEON Eunhwee & Aki Sohn-Katada

Articles

- A Reading of Lee Yang-ji "Certified copy of Closed Family Register (除籍謄本)"
— "Bonyari" (absent-mindedness) that makes the 'I' slip — Moon HeeChul
The Location of "Ethnicity" Seen in Joseon Dances in Japan:
"Traditional" Elements in the "Sword Dance" (Gongmu)
of "The Basics of Joseon Folk Dances" (1958) Park, Kyoung-ran

Notes on Research

- A Study on the Learning Effectiveness of Courses Related to Korean Culture
-Through a Report on the Practice of PBL Classes at a University- Kim Ji-yoeng
Welfare Functions for older people in the Beijing Korean-Chinese Community Yuqiong NAN

Document Introduction

- The Sakhalin Koreans and the Soviet Society (1945-1991) (1) Hyewon Song & Amano Naoki

Kilchabi (Compass)

- The wall of historical recognition is thick -colonialism and hate speech- Moon Kwanghee

Book Review

Published by the Japan Branch of International Society for Korean Studies
4-5-5-506, Nishitenma, Kita-ku, Osaka, Japan